

明治学院百年史資料集

第3集

明治学院百年史委員会

目次

資料

『福音新報』明治学院關係記事…………… 解題 工藤 英一…………… (一)

明治二十四年…………… (三)

明治二十五年…………… (一〇)

明治二十六年…………… (二六)

明治二十七年…………… (五)

明治二十八年…………… (五〇)

明治二十九年…………… (五)

明治三十年…………… (六一)

明治三十一年…………… (六)

明治三十二年…………… (七)

明治三十三年…………… (八一)

明治三十四年…………… (八三)

明治三十五年…………… (九五)

目次

明治三十六年	(一〇)
明治三十七年	(一四)
明治三十八年	(一三)
明治三十九年	(一五)
明治四十年	(一四)
明治四十一年	(一五)
明治学院理事會記錄	(一七)
自大正七年二月 至大正八年十一月	(一九)
編集 秋山 繁雄	

『福音新報』明治学院関係記事

——自明治二十四年 至明治四十一年——

〔解題〕

『資料集第二集』に、『七一雑報』『基督教新聞』『福音週報』掲載の明治学院関係記事を収録したが、ここに明治二十四年三月二十日第一号発行の『福音新報』について同様の記事を収録した。『福音週報』が発行禁止となったことについては、第二集解題に述べたが、その跡をついで復刊されたのが、この『福音新報』である。

『福音新報』第一号の巻頭には、「福音週報」と題して、次のような社説がある。福音週報を葬り去られた後の、編集者の気概を読みとることができる文章である。

一 福音週報

福音週報は艱難、攻撃の間に生れ、不如意と反対との間に成長し、号を重ねるもの五十一に達したり。二月の末に至り、測らずも条例に触れて、忽ち廢滅の悲運に遭遇せり。其の寿命一年に満たざるもの一号のみ。彼生れて未だ一年を越えずして没す。亦天せりと謂はずんばあらず。吾輩は多少の遺恨を以て、之を

『福音新報』明治学院関係記事

葬り了りぬ。筆頭の過失は浅慮なる吾輩の免れ難き所なり。五十一の福音週報を編輯するの間、多少の過失なきを保する能はず、野人礼節に熟せず、言辞其の当を失して、人の感覚を傷ひしこともあらん。人の福音週報に対するの処置批評また其当を過まりて、吾輩の感覚を害したることなきに非ず。筆硯の業、屢々紛々たる俗気に取り囲れんとす。有耶無耶の議論、吾輩最も之を厭ふ。凡そ真理の消長に關せず、正義の伸縮に係り無き一切の事柄は旧福音週報の塚中に埋め去り、有らゆる悪感覚を断じて棄んと欲す。

同じ第一号の社説として、一ページから二ページにわたって、『福音新報』と題する文章がある。いわば発刊ないしは復刊の辞にあたるものであるが、編集方針や執筆陣について触れているので、左に掲げる。

一 福音新報

吾輩此の吉辰を以て福音新報を発刊す。其趣意とする所、福音の基督教の真理を弁明し之を實際の生況に応用し、基督の意旨

『福音新報』治学院関係記事

を万般の事項に拡充せんことを期するに在り。

福音新報は日本の基督教徒に其の意志所見を開陳交換するの機關を供し内外諸名士の卓説を掲げ福音進歩の形勢を報じ疑義を啓き惑を弁じて未信の人を導き凡そ基督教徒の徳を建て知識を進むるに有益なることを務めて怠らざるを期す余輩また社会の事物風俗の利弊に注目し経世済民の精神を以て世間万般の事項を論究せんことを期す。

今や国の内外を問はず、神学の議論紛々たり、擾々たり。吾輩の曾て福音週報に従事するや敢て此事に注意を怠りしに非ずといへども、止み難き事情のために、十分此に力を致すこと能はざりき。今般福音新報を発行するに当り、社友協議して、爾後大いに神学を論究せんと欲す。読者刮目して知名の諸士が論じ出す所あるを待て。

植村正久氏の社務に従事せらるるは今更言ふ迄も無し、押川方義氏、巖本善治氏、松村介石氏の如き、ノックス、イムブリー、アメルマン氏の如き、其他内外の諸名士、時々文章を寄せらるべし。其の読者を益するや、少小に非るべし。週報の読者には已に旧相識なる戸川残花氏は、今後相交らず、当新報に於て、シオンの歌を謳はる可く。久保田富治郎氏は、其の周到なる觀察眼を以て、社会的の事を論述し、大石北山の二氏は、其の得意の筆鋒を磨して、神学を講じ、又教会の時事を論ぜんとす。三宅氏、田中氏、須藤氏、北山氏また各々其長技を以て、新報の紙上に光彩を放たんとす。吾が福音新報亦人に富たりと謂は

ずんばあらざるなり。」

右の文章からも察知しうるように、当時外国ミッシヨンからの補助と協力とをえながら福音新報は運営されていた。この点は、週報時代から一貫していたことである。しかし、明治二十七年の夏から、ミッシヨンとの不和が生じ、両者の関係特に経済関係は杜絶した。このことは、明治二十七年十二月二十八日の一九八号にある植村正久の「明治二十七年最終の刊行に題す」という文章からも明らかである。（『植村正久と其の時代』第三巻、四四二―四四五ページ参照）

『福音新報』はその後、明治二十八年五月九日の二二〇号をもつて「発行禁止」となっている。しかし、二ヶ月足らずを経た同年七月五日新たに第一号を発刊し復刊している。復刊の辞を左に掲げるが、発行禁止の理由については触れられていない。

「再び本紙の第一号を

発刊するに付きて

吾等同志相謀りて福音週報なるものを刊行せしは実に明治二十三年三月十四日にして号を重ねること五十一回、読者の愛顧漸やく深きを加へつつありしにも拘らず、明治二十四年四月官命に由りて廃刊することとはなりぬ。

吾等同志のもの基督教の文学に於て負へる所の責任は斯る小挫折のために廢むべからざるなり。同一なる主義の頭影を継続し、神国の拡張に対して軽微ながら敢て合力寄附する所あらんがため、更に福音新報なる名称の下に読者諸君に見ゆることとはな

りにき。福音新報の第一号は明治二十四年三月二十日を以て発刊せられたり。其ののち歳を更むること五回、二百二十号に至るまで読者の同情日々に加はり、ともに志を合せて本紙の天職とする所に従事せんと欲するの社交次第に増し、本社基礎漸くに堅固なり。同労の人相慶し、益奮発して、素志を成就せんことを榮み居りしに、豈に計んや、去月六日発行を遏むるとの命令書は突然内務大臣より下れり。吾等の失望甚しかりしは今更言ふを俟たざるなり。たとひ暫くなりとも読者諸君の愛遇に応ずることを得ざる心苦しき、遺憾千万なりと謂はざるべからず。

罪なくして配所に月をながむるの想をなしつつ千秋の如き一月を経過して此に再び福音新報の第一号を発刊す。前福音新報の号を逐はざるも、其の素志は猶ほ旧の如く継承して愈之を伸張せんと欲するなり。希はくは吾等の筆一々神の指導に従はん。吾等の是非褒貶する所みな至上監督者の聖覽に洩れざるを冀むの精神常に胸中に絶ること勿れ。吾等は感謝とともに福音新報を主耶蘇基督の御前に献ぐ。吾等は敬愛する基督教新聞及び護教を首め多くの同主義雑誌と相伍して再び従前の事業に復するを得るを喜ぶ。乞ふ諸君とともに斯道を發揚するに与る所あらん。」

ここに収録した明治学院関係記事とは、必らずしも学院について直接触れた記事のみではない。学院と何らかのかかわりのある記事や、当時のキリスト教界や教育界の動向を知るために重要と

考えられるものや、さらに日本プロテスタント史上主要な人物や事件についての記事なども収録の対象とした。

今回明治四十一年までで打ち切ったのは、ページ数の都合からであって、以下継続的に終刊号までの記事を逐次本資料集に収録する予定である。なお、収録記事につけた番号のうち、最初の四は、福音新報を意味し、その下のMは明治を示す。従ってM、25とあれば、明治二十五年の意味である。さらにその下の番号は、同年記事のなかの一連番号である。第二集収録記事の番号の1は七一雑報、二は基督教新聞、三は福音週報を意味することを、おくらばせながらここに記しておく。

福音新報から、学院関係記事を抜き出して収録するという作業は、当初きわめて簡単なことと考えていたが、資料集に掲載する形にまで原稿としてまとめるには、意外の時日と労力を要した。本学経済学部学生・窪田一夫・山岸周一ならびに社会学部学生・藤田信子・清水愛子の諸君の協力がなかったならば比較的短時日にこれをまとめることは不可能であらう。ここに記して感謝の意を表したい。

(工藤英一)

明治二十四年

(四—M24—1) 明治学院教会解散

○明治学院教会 は此程總會を開き各自討議の末愈同教会を解散

『福音新報』明治学院関係記事

するに決したる由(十三号・明治二四年六月十三日)

(四—M24—2) 卒業式—島崎春樹—

○明治学院卒業式 六月廿四日午後四時より明治学院講堂に於て之れを開く執行の順序は

奏 楽

稲垣 信

祈祷

奏 楽

演説 愛国心(英語)

富岡 徹

演説 独逸文学の開路者

岡本敏行

奏 楽

演説 自殺

馬場勝弥

演説 クリスチャン
ミスチズム

多田 素

奏 楽

卒業証書授与

博士へボン

卒業生へ勧告

同

賞金授与

祝福

監督ヘイヤ

奏 楽

なり卒業生の演説は何れも感嘆の外なく殊に富岡徹氏の愛国心、多田素氏のクリスチャン、ミスチズム杯来会者の耳を聳てしめたる様に覺へたり唯岡本敏行氏がその演題上止むを得ざることな

れども余り多くの独逸人の名を列挙したるは少しく厭嫌を生ぜしめたるが如く多田氏の演説は長きに過ぎざりしか此式終りて後ち芝公園三緑亭にアルムニ会を開く席上ノックス氏の不平の時代と題する英語演説ありしが方今不平の気社会何れの階級にも充滿し人々何れもその希望を有せざるが如き憂ふべき有様なり此時に當りて能く之れが救済の任に當らんものは基督教徒なりと論決せられぬ氏が当日の演説は殊に雄弁に感ぜられ又頗る有益なりし次にワイコップ、和知牧太等諸氏の演説あり石本三十郎氏は卒業生に對し明治学院維持法に就て協議する所ありたり又アルムニ会の役員を改撰し会長には植村正久、山本秀煌の両氏當選し杉森此馬氏書記に挙げられたり卒業生の姓名左の如し

英語神学部

普通学部第五年撰科

多田 素 京都

富岡 徹 東京

普通学部(姓名エビシ順)

赤田 開太	東京	馬場 勝弥	東京
花島 鞆吉	静岡	星野 元治	群馬
石川 国風	東京	子安千代松	東京
松原 茂雄	石川	松浦 和平	群馬
小倉 銳喜	高知	岡本 敏行	滋賀
小城徳太郎	長崎	奥野武之助	東京
島崎 春樹	長野	高崎 四郎	鹿児島
戸川 明三	東京	富永 兵弥	群馬
友野与四郎	神奈川	和知 牧太	山口

(一六号・明治二四年七月三日)

明治学院神学部

(四—M 24—3) 長崎、スチール学校、東山学院と改称
○長崎通信 当リフアルムド伝道会社に属するスチール学校の校長ビーク氏は去る二八日満期にて米国へ帰途に就かれたり同校は此度東山学院と改められ学課も更に改正せられ又来学期よりはビーク氏の後任として大儀見元一郎氏校長となられたれば後來益々盛大に赴くことならん去る二六日には普通科第三回卒業式を同校講堂に於て挙げられたり卒業生は左の四名なりし

城 貫一 (福岡) 執行経蔵 (長崎)

横田幸二郎 (佐賀) 平山喜八 (鹿児島)

又邦語神学部にも坂文一氏一名卒業せらる氏の以後の伝道地は未だ確定せざるやに聞く 本年夏期休業中同校神学生の伝道地は左の如し

中山 国三 (山口舟木) 高井太 (山口宮市)

原田武者榎 (山口小郡) 吉武五右衛門 (広島三次)

森山角二郎 (日向志布志) 上村笑一 (長崎島原)

吉和 (肥前唐津) 今村秀夫 (筑後久留米)

稻垣 角馬 (薩摩川辺) 広津 藤吉 (豊後日出)

此外神学生にして帰国したる者も四五名あり

(一八号・明治二四年七月一七日)

(四—M 24—4) 神学部入試広告

『福音新報』明治学院関係記事

は甲科二年乙科二年都合四年にて業終るの仕組なり乙科二年間は神学に兼ねて英語科学哲学歴史等を学ばしむ甲科二年間は専ら神学を修めしむ英語科学哲学歴史等の受業を要せざる程の学力ある者は三年にして全科を卒業するを得べし入学志願者は履歴書相添へ来る九月二〇日迄に申込まれたし
試験は同二三日午前一〇時より執行すべし 甲乙二科を全修せんと欲する入学志願者は左の試験を受くるを要す

入学試験

一 英語 歴史及び論文の類訳解

一 漢学 史記漢書八大家文の類訓点

一 文章 仮名交り論文

明治学院若しくは之と対等なる学科の卒業証書を所持する者及び試験の上其学力相当と認むる者は三年にして全科を卒業す

地方試験

遠隔の地に居住する入学志願者は履歴書相添へ来る九月一〇日迄に申込まる時は其近傍の便宜の地に於て地方試験を受くることを得

東京市芝区今里町

明治学院神学部

(一七号・明治二四年七月一七日)

(四—M 24—5) フルベッキに特許状

○フルベッキ氏の喜び 日本伝道の奇辛 フルベッキ氏は和蘭の

人なり年少米国に行きぬ元来和蘭にはその国に在住せざること五年以上に及ぶものは之れを戸籍面より取り除くの規程ありフルベツキ氏は此の規程によりて遂に和蘭人たるの権利を失へり又米国の法律によるに在住三年にして帰化の願ひをなす時は五年目に之れを許さるべしフルベツキ氏米国に在ること八年別に政治上の運動をなさん心掛あるにあらねば此の手續をなすに及ばざりきされば氏は今和蘭人にもあらず米人にもあらず全く無籍の一人とはなれり氏偶々日本に伝道の志を立つるや差し当り不便を感じ旨を外務卿シーワードに通じ日本駐在米国公使ハリス氏に宛てたる書翰を乞ひ受け即ち僅かに此の不便を充し殆んど三十年の日月を経過せしが本年三月氏は青木外務大臣に宛て帝國政府の保護の下にありたき由を請願せられたりしに此の頃に至り左の書面を得られし由

貴下には和蘭の原籍を失し又亜米利加合衆國に於ても未だ帰化の権利を得られず遂に無籍と相成候に付我帝國政府保護の下に被居候様御希望の旨本年三月中前任外務大臣へ御申越の趣致承知候仰も貴下には数十年間我帝國に在留被成我帝國の爲め尽され候事実に鮮とせず恒に我臣民の愛慕する所に有之候間欣然御需に応じ乃ち別紙特許状差遣候間御落手相成度尤も特許状は本日より一年間効力を有するものに候間年々書換候事と御承知有之度候敬具

明治二十四年七月四日

外務大臣子爵 榎本 武揚

ギドウ、フリドリッ、フルベツキ貴下
その別紙と称するものは左の如し

特許状

無籍外国人

殿三等ギドウ、フリドリッ、フルベツキ

以下夫人并に五男二女の名略す

右は帝国内に於て帝國臣民同様帝國の法律規則を遵守する義務あるものにして明治二十四年七月四日より明治二十五年七月三日に至る迄帝國臣民同様帝国内自由に旅行し各地に滞在住居することを准許す

外務省

日本在留の宣教師にして地方に伝道をなさんとするものはその旅行免状を得るに或は療養と称し或は名を學術研究に藉ることにして宣教師諸氏の日頃快しとせざる所なり今フルベツキ氏は独り前条の特許を得られ不自由なる桎梏を脱せられしこと實に氏の幸のみならず伝道の盛衰に心を艱ますもの等しく喜ぶ所なり余輩はフルベツキ氏に対して殆んど外人の感なしされど今此の佳報に接しては今更の様に寛へて嬉し外務大臣の書翰何ぞその慇懃なるや余輩彼を思ひ此を思ふて殆んど感激に勝へざるなり

(十九号・明治二十四年七月二十四日)

(四一M24-6) 自管館の設立

自管館設立の旨意

社会悲むべきこと多し、憐むべきこと多し同情同感を表すべきこと

と多し然れども志気穀々たる有為の青年にして学海に航するの術なく、其志望をして空しく怨恨の裡に埋葬せしめ、多望の前途を瞶詰して自殺を招かしむること程気の毒千萬なるはあらざるべし夫れ唯気の毒なりとて傍觀せむか、之れ吾人の性として決して忍ぶべからざることなり然らば則ち之が救援の道を講せしめ絶望の溪谷に沈淪せんとする彼等を支へて希望赫々の原野に誘導するは將に後進者に対する吾人の厚情にあらずして何ぞや

涙ある者にあらずんば人の涙を知り難く、刻苦を嘗めたる者にあらずれば人の辛苦亦味ひ難し、吾人の味方として末頼母しく念ひたる、清俊剛直なる青年諸氏にして、破れて立たず、万斛の怨恨を飲んで花都を背後に見貧逼て学資を得る途なく憤涙を含んで空しく故郷に帰らざるを得ざる者あり、吾人は彼等が涙を拭ふて告別の辞を發するを聞くや端なく百感交々胸中に湧き出で、忽ち十有余年前の余を想起し、破帽短褐、寒窓粗食、辛くも猛濤激浪中を漕り出で、漸く今日に致りたるに鑑み、余も亦彼等と同一なる境遇に陥り、彼等と同一なる経験を履み、彼等の如く感じ、彼等の如く考へ、彼等の如く失望したれば、之を聞くにつけ之を見るにつけ愛憐の情緒は余をして殆ど無言に至らしめ念はず涙潸然たるを覺えしめたり

如何にもして之が救済の途なきかとの觀念は恰も影の如く余に附纏ひ、人に遇へば之を談じ、朝夕之が為めに天帝に懇願したるの結果は遂に二三慈善家の知る所となり、紅塵万丈を脱する花都の一屋を建築し土地を借り之を耕作し其生作物を販売し慈善家の寄

附金を合し漸く八名の学生を養ひ、明治学院に通学せしむるに到りたり

吾人の思惟する処を以てせば、維新以前の学生は、一に学に熱して、生活の点に到ては左程意とせざりしが如く見ゆ、宜なり彼等は身襤褸を纏ひ月洩る賤の荒屋に住み、社会人情の外を濶歩したり、之をして今日に比すれば其差果して如何、其食物と言ひ、其衣服と言ひ、其家屋と言ひ、其学問の目的と言ひ、実に雲泥の差あるを見る、見よ一は精神的の快樂を食るが為に、世の人情に悖り、一は生活的の学問なるが故に自ら驕侈を招き、未だ修業中なるに早くも紳士を気取り高帽を戴き、シガールを爇らし、意气揚然たり、之を推すに今日の学生は將に活氣を失んとす、軟弱惰眠を愛せんとする精神漸く發生せんとす、豈之れ驚愕戰慄せざるを得んや、世の文明なるに伴れ貧富の懸隔愈甚だしく其余波は遂に学界にまで及ぼせり、吾人の陳述したるが如く今日の学生は俄紳士なるが故に、其口其身軀は維新前後と大に異りたるが故に世人の之に対する感情も其趣を異にしたるが故に辛じて学費を得る者の為には殊に貧書生の為には大に困難を極むるに致れり、夫れ然り身貧窮なるが故に怨めしくも学界を退きたる者が、自ら食すること能はざるも労働工人となるの勇なく失望の程何のなす所もなく亦何の目的もなく最も不平に最も憂鬱に天下泰平のときに事あるを望み自ら事を起さんと謀り其機に乗じて万一の僥倖を頼み餓えて死するよりも寧ろ最後の戦争を試んとし遂に此世を絶ち一時の快を貪り偽英雄を飾り放歌乱醉檀に惰眠を貪り漸々悪に化して

遂に毒を社会に流すに致る、其扱て起る所以を論窮せば彼等身窮して適當の業を得るの途なく半学人半業人の口を求めつつある間に知らず知らず斯くは墮落しつるなり

「貧すれば鈍す」との譬喩は独り通常一般の人民に適用するのみならず賢人君子と雖も恐くは此譬喩には洩れざるべし、四百四病の病数よりも猶恐ろしきは貧の病なりとは亦以て貧は病の苦痛を知るに足る吾人と雖も貧病を病むの一人なり、然ども彼等貧窮学生の境遇を思へば、忽ち己を忘れて之が救援の方法を講ぜしむ、如何せん斯の如き事業は決して一個人の力に扱て成立者にあらず、普く天下の慈善家に訴へ其力を藉り其救助を求めて年来の宿志を達すべきなり、吾人が彼等を救助し就学せしむるの目的は悉く伝道者とならしむる者にあらず業卒り社会に立てば政党に加入するも可なり農工商に従事するも可なり、唯希ふ所は我日本全国に青年らしき青年起り筋骨強剛にして精神烈火の如く燃へ鉄腸にして水火を蹈み世の腐敗を止むるの塩となり山上の奴となり燭台の燈となり若し夫れ吾国に事あるに際しては正を蹈むで懼ることなく驚風乱濤の中に擁護して其針路を誤らしめざるものは即ち吾が自営館より産れたる人たるを期す、鍬を肩にし聖書を手にする者は自営館学生にして其タイプは即ち国家を耕作し人心を教養すべき者たるを期せざるを得ず

吾人は其場処より論ずるも、其学科より推すも明治学院は我学生を通学せしむるの最も便利にして、亦最も適當なるを信するが故に同学院に乞ひ総て我館の学生は無束脩無月謝の約を結びたり、

吾人に対する同学院の恩恵は実に吾人の目的を達せしむべき第一歩たり、吾人は前にも述べたる如く八名の学生は既に住むべき家あり、食すべきの食あり救ふべき慈善家ありて之を支へ得べきも、吾人は此八名を以て満足すべきにあらず、着々歩を進め三十人となし、五十人となし遂に百人となさんとす、吾人は米国にある友人に書を送り事業の拡張を計り其宿望を達せしめんことを乞へり、差当り吾人は今日我國の慈善家に訴へて切に其扶助を乞はんと欲することは、更に十二名の学生をして住はしむべきの家屋を建て土地を贖ひ之を耕作して西洋野菜を植付け、牛を求めて其乳を搾り運動の爲め学生をして之を配達せしめ其売上金を以てせば今や少くなくとも五六千余円の金額を要す、殊に其土地の如きは最も適當なる売物あるが故に吾人は殆ど狂気の如くに之を得んと欲す

吾人の事業をして今日まで世に發表せざりしは竊に心に期したることありてなり、吾人の最も恐るる処は妄りに口に稱へて行爲に表はさざるにあり、言行一致を欠くは、我が国人の癖なり、吾人は其希圖したる成功の幾分を示し其経営苦心したるを告ぐるに到りたるは決して吾人の力に藉るにあらず、一に天父の恩恵に拠れり、嗚呼失望落胆に彷徨する、可憐の青年学生をして就学せしむる者は抑も誰ぞや希くは満天下の貴女神士彼の不幸なる青年学生の爲めに幸に一滴の涙を濺げよ

明治二十四年下辭

(二十号・明治二十四年七月三十一日)

(四—M24—7) 入試広告

入学試験広告

明治学院ハ從來ノ諸学科ノ外ニ本科三年及ビ四年級ニ於テ商業科ヲ設ケ卒業ノ後実業ニ従事セント欲スル者ニ便セント欲ス又予科二年ヲ本科ノ前ニ置キ探科第五年ヲ本科ノ後ニ加フ来ル九月十四日午前八時半ヨリ各級入学試験ヲ執行ス志望者ハ前日迄ニ申込ミアレ規則書ハ郵券二銭ヲ要ス

入学試験課目(要書ノ著者書名ヲ問ハス適応ノ学力ヲ要ス)

予科一年級 十八史略講読、第三リードルノ類音読訳読、数学初步○同二年十八史略講読、第四リードルノ類音読訳読、英作文、万国地理、算術○本科一年 文章軌範、第五リードルノ類訳読、英文法(スウキントン小ノ類)、会話、英文章、万国地理、政治地理、算術、代数初步○同二年 史記、日本文法、英詩文訳読、英文法、会話、英文章、政治地理、代数多元一次迄、幾何比例迄、人身生理大意、顕花植物大意、○同三年 東萊博議、日本文法、土佐日記、論文詩文類訳読、英文法、会話、英文章、日本歴史、万国古代史、生理、地文、植物、代数、幾何、○同四年 八家文、日本文法、枕草紙、論文詩文類訳読、英文法、修辭、英文章、政治地理、地文、動物、植物、物理、日本歴史、代数、幾何、○撰科第五年 歴史、經濟、英文学、心理、論理、(本級入学試験合格者ノ内優等二名ヲ撰ビ甲奨学金五拾円ヲ乙同ク三拾円ヲ規則書ニ記ルス法ニヨリ与フ)

明治二十四年八月

『福音新報』明治学院関係記事

東京芝白金今里町 私立 明治学院

(二十号・明治二十四年七月三十一日)

(四—M24—8) 井深婦朝予告

○井深梶之助氏の婦朝近きにあり 本月九日バンクローバー解纜のエンブレックス、ヲブ、ジャパン号に搭せられしと聞けば下旬には必ず婦朝せらるべし家族並びに親友諸氏の喜び察するに余りあり余輩は我国家宗教界の爲めに之れを祝せんと欲するなり

(二十六号・明治二十四年九月十一日)

(四—M24—9) 井深の婦朝

○井深梶之助氏婦朝す 去る二十三日横浜に着せらるフルベッキ氏令嬢ミッス、エンマ、フルベッキも同船にて

(二十八号・明治二十四年九月二十五日)

(四—M24—10) 神学部親睦会

○明治学院神学校親睦会 は去る九日講堂に於て開き席上井深植村両氏の演説、夏期伝道報告、新入生の演説杯ありなかなか愉快なる会合なりしと(三十一号・明治二十四年十月十六日)

(四—M24—11) 総理の更迭

○明治学院総理の更迭 ヘボン氏は此度総理を辞せられたるに付き井深梶之助氏その後任に挙げられたり

(三十二号・明治二十四年十月二十四日)

(四—M24—12) 天長節の集會

○天長節の諸集會 明治学院生徒諸氏はチャペルに於て天長節を祝し後ち同校構内に於て普通学部両部合併運動會を催ふせし由

(三十四号・明治二十四年十一月六日)

(四—M24—13) 總理就任式

○明治学院總理就任式 過ぐる六日の午後二時明治学院サンダム館礼拝堂に集まれるもの三百余人右はヘボン氏に代りて新たに總理となりし井深梶之助氏の就任式のために來集したるものなり長崎の瀬川浅氏祈禱をなし東京の小川義綏氏聖書を朗讀し次に前總理ヘボン氏は実に優美にして且つ十分に誠実大度謙遜の情を現はせる演説を以て井深氏に總理任命の決議書を交付し併せて之を來賓に紹介せり。井深梶之助氏總理として其の主義方針とも見るべき數ヶ条を演説しパンにあらで寧ろ カクテニル 修養、忠君愛國にのみ偏せずして上帝を敬畏するを以て知恵の本と為すべき由を開陳せられたり之に次で博士フルベッキ氏は諧謔交りの祝詞を以て大に喝采を博せられ牧師稲垣信氏は懐旧の說話をせられて新總理の就職を祝せられ教授ワイコッフ氏は明治学院普通科の代表者として最と眞実熱心なる演説をせられたり其れより神学部総代として植村正久氏の演説、服部章蔵氏の祈禱、博士カクラン氏の祝詞を以て目出度閉會せるは午後四時過ぎにてありき來賓中には基督教主義諸

学校の代表者として本多庸一押川方義平岩楯保巖本善治等の諸氏を見受けたり(三十五号・明治二十四年十一月十二日)

明治二十五年

(四—M25—1) 第一回神学部学生説教會

○明治学院神学部学生諸氏は今一月より四月まで毎月二回宛各所の教會にて説教會を開き大に府下の伝道に従事し基督教大演説會に力を添ゆることに決し一月は第二土曜日の夜第一回を開かるるよしにて其演説者は志場邦雄、大谷虞、小倉修吉、井深梶之助の四氏なる由(四十二号・明治二十五年一月一日)

(四—M25—2) 第二回神学部学生説教會

○明治学院神学部の人々の催されし説教會 其の第二回は去る十六日を以て数寄屋橋會堂に催されたるが笹倉弥吉(耶蘇基督) 入江祝衛(基督に關する三大要理) 青木澄十郎(信仰) 荻野又吉(眞理の研究) の諸氏出席熱心に弁ぜらるる所ありき聴衆僅々二十九人に過ぎざりしは遺憾のことといふべし

(四十五号・明治二十五年一月二十二日)

(四—M25—3) 第三回神学部学生説教會予告

○第三回明治学院神学部諸氏演説會 は來月第二土曜日を以て新栄教會に開かるべく出席者はフルベッキ、村上経造、中島久米吉、

小倉銳喜の四氏なりといふ(四十六号・明治二十五年一月二十九日)

(四—M25—4) アメルマンの帰来

アメルマン氏米國に帰る

去ぬる八日風雨甚だ猛烈なりしにも拘らず、数多の内外人芝白金明治学院の神学科講堂に参集す。此は同学院の教授博士アメルマン氏病のために止むを得ず米國に帰り、恐らくは復び日本に來らること期すべからずと聞き、門人旧故相集り氏を迎へて告別の會を催ふせるなり。會するもの既に坐に滿ちぬ。二時少しく過ぎたる頃、會長井深梶之助氏先づ立ちて、アメルマン氏に対し、旧門人連署の告別文を朗誦す。次に山本秀煌氏と余とはアメルマン氏が麴町下谷の二教会に於ける縁故淺からざるものあるを以て右二教会を代表して告別の辞を述べらる、斯くて博士イムブリー氏は外国宣教師を代表して懇切なる演説を為られたり。此の時アメルマン氏右の告別文演説等に対し感謝し併せて今日まで自家の精神主義となせし所を略説し、終りに臨みて曰く、余の神学上の教育は三の原則を以て支配せられたり。(一)余は人類の罪あることを信す。(二)余は神聖なる基督の實に人類を救ふ大主たるを認識す。(三)余は日本國民の一日も早く此の救ひに入り、其の慈愛ある神の民たらんことを渴望せりと。言論痛切、氏が平素の信仰、言外に溢れたるを覚えたり。茶菓の饗応ありし間に博士フルベッキ、奥野昌綱、博士カクラン諸氏の演説あり。而して會

の散したるは日將さに暮なんとする頃にてありし。

横浜の山手二百十一番館は米國の人故博士ブラウン氏の居宅にてありき。家の背後に芙蓉を望むべき一小室あり。ブラウン氏の書架に群籍を列ねたる前に六七の長椅子に坐して、日々業を受けつゝありしもの数人。今の日本基督教會に屬する知名の士にして、此の家塾より出でしもの最も多きに居る。一千八百七十六年の夏ジェイ、エル、アメルマン氏「グッチ、リフォルムド」教會より差遣せられて日本に來り、居を横浜にトせらる。氏また此の家塾に一臂の援助を与へられ、数学歴史グリシャ語能弁術神学等を教授せられたり。其の教授するや懇篤を主とし、生徒の利益を圖らんがためには、毫も其の勞を吝まざりき。此れ其の門人等の心に銘して、記憶する所なり。アメルマン氏は此の家塾に在りて業を授けられしのみならず、横浜居留外人の設立せるユニオン教會の牧師となり、其の安息日学校の校長となりて大いに功を奏したるもの如し、氏はまた毎週一回内外の有志十数名を己れの家に集めて曠の歴史を講述せり。其の事務に執筆して、倦まざること常に斯の如にてありき。一千八百七十七年プレスビテリアン派の宣教師等と協議して、此の家塾を東京に移し、合併して一の神学校を組織す。数年間一致神学校の名を以て知られたるもの即は是れなり。アメルマン氏もまた東京に移住して、其の神学教授を担任し、實際は校長の地位に立ちて大いに尽力せられたり。一千八百七十七年(明治十年)十月より以來アメルマン教授は十年一日の如く此の學校のために勤勞せられたるなり。日々講堂に

立ちて神学を講じ、教会の歴史を口授せらるると同時に、氏の筆は敏活に運転して、数部の有益なる著書を世に出だせり。其の新約聖書神学は日本に於ける此の類の研究を前驅したるものなり。

其の有神論、天地創造論、救拯学等其他数部の系統神学に関する書籍は氏の最も頭脳を勞せし所ならん、此の外教会政治を論ずる一小冊子の如きもの尚は数種あり。同氏が斯の如く教授に於て、また著書に於て、勞する所甚だ多かりしことは、其の事務の多忙なりし割合に比するときは実に著しきものと謂ざるべからず。蓋しアメルマン氏は単に文章口才の人たるのみに非りしなり。氏が一個の好事務家たることは采朝ののち間も無く其の友人の認識する所となりぬ。亜細亞協會は氏を以て其の会長となし、理事となし、伝道会社は之を會計に任じたり。「ミッション」に属する工事あれば、人先づ氏を推して、之を監督せしめたり。其他氏の關係せる理事會委員会の如きは枚挙に遑あらざるなり日本に設立せられたる米國雜書會社支部の如きは全く同氏の創意に出でたりと云ふ。事務を執ること斯の如くに多く、書を著はすこと斯の如くに多く、人を教授するに斯の如くに務めたるもの幾人かある。ああアメルマン氏の如きは勤勞の模範に非ずや。

近年の事は余輩の熟知する所に非ず。明治十年より十四五年の交に至るまで、氏は日曜日朝麴町の會堂に至たり、其の窮窟たる畳の一隅に坐して、其の進歩に心を用ひ、午後は下谷練屏町十四番地なる矮屋の十畳ばかりの坐敷に講義所を設けたるに參会し、夏も冬も膝折り敷きて、椽の傍ら柱の辺りに坐して、或る年少労働

者の勞を援助したるが如き、平素は之を忘却すべきも、今其の歸國の別を告ぐるに當り、豈懷旧の念に堪ふべけんや。下谷教會の人にして氏が懇情を辱けなふし、今已に世を去し兄弟姉妹も少からず、其のうちには此の文を草する余の父母も加はり居るなり。

聴衆僅かに四五輩に過ぎざりし頃より十数名の信徒漸やく結合して一教會を成すに至れるまで、病を勵まして、氏の傍らに坐し、日曜の講席に列なりたる余が母は疾くに世に亡き人の數に入りたり。當時の年少者今漸やく老んとす。ああ天地は逆旅なり。吾人は其の行客のみ。分合離聚何ぞ常あるを期せん。余輩懷旧の涙を以て、氏が往時の勤勞を憶ひ、景慕の情を以て其の離別を惜まざるを得んや、イムブリー氏が告別の演説に曰く、余は故國に在りしとき親しくアメルマン氏と交はりしこと無し。然れども余はアメルマン氏を知りたり。教師會に於て之を見たることあり。氏がニウアークに於て牧師たりし教會は随分立派なるものにてありき。氏は米國に在りて前途多望の宣教師なりしが、一朝志を立て外國の日本に來り、易を棄て、難（難）を取りて、此の事業を負担せり。：：余が郷に在りしとき、知人某々等相語りて曰く、アメルマン氏病ひ篤しと。其ののち數日を経て人の語を聞くに曰く、アメルマン氏暫らくの間舟行に由りて、其の病を養ひしが、今其の氣力旧に倍し、甚だ健やかなる有様にて歸家せりと。余は望む、アメルマン氏今病のために帰るといへども太平洋の舟行氏を健康に復し、之をして復び日本に歸り來らしめんことをと。余輩はイムブリー氏とともに氏のために同一の希望を属せんと欲す

明治二十五年二月十二日

植村 正久

十名許りありきとぞ(四十九号・明治二十五年二月十九日)

博士アメルマン氏は昨十一日午前十時エムプレッス、オフ、チャイナ号に乗込みて帰国の途に就かれたり(四十八号、明治二十五年二月十二日)

(四一M25-5) 長崎・東山学院近況

○長崎通信(前略) ◎当地東山学院は主の御恵みにて追々盛大に赴き去秋よりは神学生も増加し此度は青山彦太郎氏を教師として雇ひ入れたり又生徒中相計り同窓会なる者を組織し毎月第二四の土曜日を定日となし追々盛大に赴く勢なり其目的は専ら智識を練り弁論を慣すにありて手段として討論、演説、文章を順次隔会に執行し居れり又当校神学部よりの伝道地として大村諫早の両地を撰び高井太氏大村を負担し吉和道正氏諫早主任として毎月兩回出張す大村は近來余程好景氣にて現に九名の伝道者起り各々熱心に聖書を研究する且此の人々は重もに実業家にして其地に居を定め居ることなれば此人々が受洗の上は益々好都合に赴くことなるべし◎活水女学校にては此度農學士清水由松を雇ひ入れたり(後略)(四八号・明治二十五年二月十二日)

(四一M25-6) 第三回神学部学生説教会

○明治学院神学生第三回説教会 は去る十三日築地新米教会に於て催され北野高弥、村木経造、中嶋余吉諸氏に次ぎフルベッキ氏登壇せらるべき筈差支ありてワデル氏之れに代られたり聴衆は五

(四一M25-7) ランジスの子の死

○明治学院教授ランヂス氏嫡子の死去 ランヂス氏嫡子フロツツは脳膜炎に罹りて幼き身もて父母に先きだち天国の旅路に赴けり依て十九日午後自宅に於て葬儀を執行し井深樞之助氏、ノックス氏等の説教あり翌日午前十時青山墓地に葬る(五十号・明治二十五年二月二十六日)

(四一M25-8) 第四回神学部学生説教会予告

○明治学院神学生第四回演説会 は明二十七日午後第七時より平河町麴町教会に於て催され井上織夫、吉川逸之助、赤須広、奥平浩の四氏演説せらるる由(五十号・明治二十五年二月二十六日)

(四一M25-9) 服部綾雄を理事に選出

○服部綾雄氏 は此度明治学院の理事員に選挙せられたり(五十一号・明治二十五年三月四日)

(四一M25-10) 第四回神学部学生説教会

○第四回明治学院神学生説教会 は去る二十七日午後七時より麴町教会に於て予ての広告通り説教ありしが折節寒氣の烈しかりし為めにや來会者僅かに二十人許りなりしといふ(五十一号・明治二十五年三月四日)

(四—M25—11) 勅語奉読式

○明治学院勅語奉読式 は去る二十六日午前同学院講堂に於て執行せられ井深梶之助氏勅語を奉読せられ終りて同氏並びに杉森此馬氏の演説ありき(五十一号・明治二十五年三月四日)

(四—M25—12) 第八回同盟文学会

○同盟文学会 は創設の当初に在りては明治学院、東洋英和学校、東京英和学校、立教大学の四校より成り立ち蘭菊美を闘はしてなかなかの壯觀なりしが逐年立教学校退き東洋英和学校脱し今は只東京英和学校と明治学院二校の同盟となり甚だ寂寥の感なき能はざることなれど二校の熱心なる学生等は容易に怯むことなく去る二十六日には明治学院講堂に於て其の第八回を催ふせり祈禱音楽法の如くありて先陣に青山の毛利氏国家の隆盛てふ英語演説をなし続て白金の桜井氏文学上の聯想と題する邦語演説をなす之を一段落となして第三席に白金の細川氏虚無的思想の起源を英語にて弁じ青山の藤林氏歳寒の土を邦語にて演説す夫れより余興に移り薩摩琵琶、唱歌、シーザルの劇など何れも非常の喝采を得たりとぞ来会者は凡そ三百人なりしと聞き及ぶ(五十一号・明治二十五年三月四日)

(四—M25—13) 第五回神学部学生説教会

○明治学院神学部学生第五回演説会 は去る十二日午後七時芝区台町教会に於て開会せられ佐藤詮蔵、小林道太郎、有馬純清、松村介

石の四氏演説せられたり聴衆八九十名(五十三号・明治二十五年三月十八日)

(四—M25—14) 第七回神学部学生説教会

○明治学院神学部学生第七回演説会 は去る十六日牛込教会に開かれ浅田宗七(なくてはならぬもの)毛利官次(敬虔なる生活)泉弥六(心の眼)フルベッキ(実体論)の四氏出席聴衆四十五六名ありて終始嚴肅なる集りなりし(五十八号・明治二十五年四月二十二日)

(四—M25—15) 第八回神学部学生説教会

◎明治学院神学部学生演説会

は本年一月以来開かれたる夫の府下基督教大演説会の拳を賛して産れ出でたるものなり爾來毎月二回宛府下の諸教会に於て開会し來り去る七日本郷の日本基督教教会堂にて第八回即ち最終の会を催ふし大石城築(道德の模範)浜田珍重(十字架の教)今田強(羲の太陽)の三氏各熱心に論弁せられ聴衆六七十名頗る謹聴し実に有益の会なりしといふ又教会の長老の懇切に聴衆のために斡旋せられたるは学生諸氏の大に喜びたる所なりしよし願ふに本会が八回共に相当の聴衆を得無事に素望を達したるは感謝の至りに堪えずと該委員の申されぬ、願くは彼の大演説会といひ此の会といひ共に天の祝福により善良堅牢なる萌芽のもえ出でんことを吾儕は切望す更に諸教会みな内に顧みて深く養ひ益勇氣を揮て突進し縦横無尽に敵陣を蹂躪するの日近く迫り來らんことをアーメン(六

十二号・明治二十五年五月二十日)

(四—M25—16) 田村直臣、伝道学校長辞任

○田村直臣氏は此度愈々理事員の決議により伝道学校々長の任を辞したり、後任は石原保太郎なり(六十二号・明治二十五年五月二十日)

(四—M25—17) 田村直臣の伝道学校新設

○田村直臣氏の伝道学校 田村直臣氏は此度別に伝道学校を起したるが旧伝道学校生徒にして此の新校に転入せしもの数名あり且つ同氏は近々渡米の上いよいよ同校の爲めに二万円許の資本金を募集せらるる由(六十三号・明治二十五年五月二十七日)

(四—M25—18) 東京伝道学校第二回卒業式

◎東京伝道学校

第二回の卒業式を去る十四日築地新栄教会堂にて挙行せられ井深棍之助氏司会貴山幸次郎氏祈禱せられ卒業生河井浅八郎氏(基督教と愛国心)と題する文章を朗読せられ、同鈴木喜太郎氏は(今は恵みの時救ひの日なり)てふ演説ありフルベッキ氏は仮校長石原保太郎に代り卒業証書を授与し且つ奨励の辞を述べられたり終りに在横浜のゼームス・バラ氏の祈禱にて閉会す来会者四十余名(六十六号・明治二十五年六月十七日)

(四—M25—19) 卒業式予告

◎明治学院卒業式

来る二十六日午後七時半より卒業生のために井深棍之助氏の説教あり、二十七日午後七時半より三年生競技演説あり、二十八日同時より全校の文学会大会を催ふし、二十九日午後二時より卒業証書授与式を挙行し卒業生に対し工學博士真野文二氏の演説あり又米國リフォード伝道局主事ドクトル、ゴップも演説せらるるといふ、今回の卒業生は神学部四名普通学部十七名合計廿一名其氏名は

神学部卒業生 四名

星野 又吉 小川 豊吉 中島久米吉

泉 弥六

普通学部 十七名

浜島 福次 弘松 宜枝 原 杖太郎
原田 章吉 細川 享吉 池田藤四郎
金沢 鶴吉 児島 碩邦 木村虎四郎
河田繁太郎 桜井彦一郎 笹尾桑太郎
柴山幾久松 玉置 琢夫 戸田 一男
吉川広太郎 平山 喜八

(六十七号・明治二十五年六月二十四日)

(四—M25—20) 教授・学生懇親会

◎明治学院師生会

『福音新報』明治学院関係記事

女学子が日頃嫌嘆するが如く今や教師ありて先生なし教ゆる者は其技をひさぎ学ぶ者は其芸を購ふ共に冷々として秋風の中に坐するが如し安んぞ時雨の化に沾^{うる}ふを得んや然るに幸ひなるかな我が校は平和清快の間に在りて各其分を守り多年経過し来りしが更に猶ほ其交情をして暖且溼からしめんとして教授諸君は去る十二日御殿山観桜館に生徒を招じ懇談会を催ふせられたり三時過ぎドクトル・フルベッキ歓迎の辞を述べられ次でノックス、タムソン両博士及び卒業生泉弥六氏の談話(以上英語)大石城築氏の談話あり余亦一片の謝辞を陳し茶菓の饗応ありて和風習々の間に時を移し六時散会す是日の会合戯譚滑稽に流ることなく却てよく歓笑懇親の情款を尽し得たるは流石神学生の会合に耻ぢざるべきか、会する者四十三名、因に記す、席上神学校規則を配布せられたるを見るに大に完美に近づけり(明治学院神学生 YH報)

(六十八号・明治二十五年七月一日)

(四—M25—21) 夏期伝道任地

◎明治学院夏期伝道

信州松本	小川 豊吉	同坂下	入江 祝衛
同北佐久	毛利 官治	越後高田	好川 二一
直江津	小林道太郎	同長岡	川崎巳之太郎
伊豆地方	中村鉄太郎	銚子	浅田 宗七
千葉県北条	高橋祐太郎	九十九里	小倉 鋭喜
千葉	大谷 虞	八王子	千屋 和

野州鹿沼 吉川逸之助 梁田館林 谷口 直吉
熊谷 岩淵謙之助 浦 和 北野 高彰

(六十八号・明治二十五年七月一日)

(四—M25—22) 井深総理の入試巡回

◎井深梶之助氏

亦本月中旬名古屋、京都、大坂、高知、金沢等を巡回せらるべしといふ、明治神学部に入学せんとするの士は右の地にて入学試験を受くることを得べきよし(六十九号・明治二十五年七月八日)

(四—M25—23) 東山学院第四回卒業式

長崎東山学院卒業式 同学院は昨年以來大儀見元一郎氏校長の任に就かれ漸次改良の途に就き益々隆運に向へり本年は既に第四回卒業式をなすに至り去る六月二十四日を卜して挙行せられたり此の挙や実に同院のためには歴史上未曾有の盛事にして広く内外の紳士淑女を招請したり洋々たる音楽をもて開会し、来賓歓迎の辞大儀見氏、祈祷エ、オールトマンズ氏、英語演説文明の進歩上村笑一氏、邦語演説吾人の覚悟今村秀夫氏、英文朗誦三宅弓彦氏、教会歴史を読み感あり中山国三氏、卒業証書授与大儀見校長前後唱歌教数あり終りに瀬川浅氏の作東山学院の歌をもて閉会す式後茶菓の饗応あり本年の卒業生

英語神学科 上村笑一 鹿兒島
邦語神学科 中山国三 広島

高等普通科 今村秀夫 三宅弓彦 共福岡

(六十九号・明治二十五年七月八日)

(四—M25—24) 東山学院同窓会

六月二十四日午後七時半より挙行せられたり司会者今村秀夫氏、開会の趣旨會長本間啓太郎氏、同窓会の沿革及び目的今村秀夫氏、秋暮の歎(文章) 渡辺恭助氏、養元論栗屋正助氏、文章木塚常三氏、道徳振興策広津藤吉氏、アンリネス(英語演説) 大儀見元一郎氏、静なる勢力エ、フルトマン氏右終て茶菓を饗す(不明)今東村報(六十九号・明治二十五年七月八日)

(四—M25—25) 卒業週間

明治学院卒業週記事

◎普通学部

六月二十六日 卒業説教

井深総理

明治学院卒業週は例年の如く六月終末の日曜日即二十六日を以て始まりたり此日午後七時半より普通学部講堂サンダム館チャペルにて卒業説教あり讚美歌を以て初め聖書朗読(馬太伝第六章)博士マッコレー氏の祈祷あり井深総理は旧約聖書約書亜記第三章四節に在る「汝等は未だ此道を経しことなかりき」といへるを題とし卒業生が向後とるべき方針二点を挙げて勧められたり此会総理の祈祷を以て終る聴衆二百人余

二十七日三年生競技英語演説

「福音新報」明治学院関係記事

午後七時半よりサンダム館にて開かれたりシエームスバラ氏の祈祷を以て始めフェリス女学校卒業生二名のピアノ双弾あり児島才太郎氏「自愛と幸福」(Selflove and Happiness)を弁じ久野成太郎氏は「平和は国民の名誉也」(Peace—a Nation's Honor)を述べ学院生徒の妙なる唱歌を挟て宮本東三郎氏は「時ならぬ花」(Flowers out of Season)加藤鷹太郎氏は殖民論(On Colonization)を演じ榎部信一氏の瀏亮たる独吟ありて小山陽吉氏日本文学の将来(The Future of Japanese Literature)なる演説をなしフェリス女学校卒業生の「ラルガン」独奏井深総理の祈祷にて閉会す会する者二百人許此日の演説は何れも流暢にして巧なる英語を以て弁せられたれば誰れ桂を折るものなるか知り難く会衆は批評者チング、ブース服部綾雄氏の批判の定まるを待望みたり

二十八日文学会第九回年会

午後六時半よりサンダム館にて開かれたり石本教授の祈祷會長原杖太郎氏の歓迎之辭女子学院生徒の唱歌北村重昌氏の英語暗誦(The Indian Chief to the white settler)政田辰治氏の邦語演説(思想の世界)学院生徒の唱歌玉置塚夫氏の英語演説(Influence of wealth upon social Morality)藤井竹藏氏の邦文朗読(国魂)女子学院生徒の唱歌川井連吉氏の英語暗誦(The Return of Miles standish)浜島福寿氏の英語演説(Foolishness of Man)明治学院生徒の唱歌平山喜八氏の英文朗誦(The Ground of Ethical motives)柴山幾久松氏の邦語演説(不平均の結果)女

『福音新報』明治学院関係記事

子学院生徒の唱歌等ありて井深総理の祝禱にて閉会、夫より菓子
の饗応あり且余興としては学院生徒之計画に成れる茶番狂言雷獸
鉦、和洋手品、英語狂言ツイゾルダム、エントツイゾルデー、皿
まはし等ありて大に興を添へたり又本年度普通学部卒業生の告別
唱歌ありたり此日会するもの三百人

附言 明治学院文学会は普通学部本科生の組織するものにして其
創立は明治十四年明治学院の未だ築地居留地にて一致英和学校と
称せし頃に在り其頃は英和文学会なる名を有せしが学院白金に移
転してよりは今の名に改められたりこの会は毎週金曜日に例会を
開き英語演説英語暗誦英文朗読邦語演説邦文朗読邦語討論をなし
教授の出席を請ひてその批評を仰げり又毎年一回年会を開き明治
学院生徒が学校生涯中尤も愉快を覚へ積日の労と鬱を散ずる所の
ものなり蓋し文学年会によりて味ふ愉快は他学校生徒の知らざる
ものならん年会を開くことは今回にて既に九回会毎には天の晴雨
を問はず常に盛会を見ざることなし文学会の明治学院に存するは
学院の大に傲るに足る所にして又大に勢力を加ふる者なりといふ
も不可なかるべし

二十九日卒業証書授与式

午後三時よりサンダム館に於て市中音楽隊の奏樂を以て開会し熊
野雄七氏の聖書朗読（詩篇第十九篇）博士コップ氏の祈祷ありて
工学博士真野文二氏は登壇し生徒は宜しく独立心を養ひ経験し蘊
蓄すべきことを数多の適例を引きて勧告せられ終りて総理は卒業
生一同に対し二三のいふ所ありて卒業証書を授与せられ普通学部

卒業生総代桜井彦一郎氏神学部卒業生総代星野又吉氏は総理教授
に向ひ多年薫陶の勞を謝し総理の勧告に答ふる所ありて後総理は
三年生競技英語演説優等者小山陽吉氏に一等賞金拾円を加藤鷹太
郎氏に二等賞金五円を二年生奨学金第一等をば松本泰吉氏に二等
賞をば藤井竹藏氏に何れも金五十円づつを与へ又博士コップ氏を
紹介し博士は病氣の爲演説をなすこと能はずとて僅かに二三言を
述べて明治学院の爲神の祝福を求められたり祝禱はナックス博士に
よりて捧げられ楽隊の進行歌の音につれて散会せり会衆二百五十
人余此日卒業証書を受けたるものは普通学部にては

- | | |
|-----------|-----------|
| 濱嶋 福次 静 岡 | 原 杖太郎 和歌山 |
| 原田 章吉 山口 | 平山 喜八 鹿児島 |
| 弘松 宣枝 高 知 | 細川 亨吉 高 知 |
| 池田藤四郎 千葉 | 金沢 鶴吉 兵 庫 |
| 河田繁太郎 高 知 | 木村虎四郎 群 馬 |
| 児嶋 碩邦 神奈川 | 桜井彦一郎 愛 媛 |
| 笹尾糸太郎 山口 | 柴山幾久松 石 川 |
| 玉置 琢夫 東 京 | 吉川広太郎 東 京 |
| 戸田 一男 埼 玉 | |
- 式終りて恒例の如く芝三縁亭に於て「アロムニ」会の会食を催さ
れたり会する者凡そ五十名今回の卒業式は元東京一致英和学校と
称して始めて卒業生を出してより第十年に相当するを以て其卒業
生の一人なる服部綾雄氏は十年前と現今とを比較して所感を述べ
られたり其他博士ノックス氏教授ワイコップ氏卒業生児嶋碩邦

氏等の演説あり愉快に会を終り夫より再び樓上の談話室に帰り学院の前途に關して種々協議する所あり而して遂に 天皇陛下及び明治学院万歳々歳を唱して散会したる十一時過る頃なりき

◎神学部

卒業説教Ⅱ二十六日午後七時半讚美祈禱を以て会を開く井深総理端然として壇に上り約書垂記三章四節「汝等未だ此道を経しことなかりき」を以て題詞となし卒業生諸氏を顧みて曰く「諸氏今苦学の功を畢へ將に世に出でて為す所あらんとす其途や未だ曾て経ざる所の者にして恰もイスラエル人がカナンの地に入らんとするが如し故に苟くも其事業の成功せんことを欲すれば須らくイスラエル人が嚴肅なる精神を以て約櫃の後に従ひし如く確固たる目的と不拔なる忍耐とを有して事に茲に従はざる可からず」と其風采の端嚴なる其辭氣の凱切なる恰も慈母が子女の門出に訓誡するが如く自から來聽せる数百の青年男女をして意はず襟を正さしむ越えて二日

卒業証書授与式Ⅱを挙行す式場の模様素にして野ならず雅にして奢らず繁簡其宜きに適し雅俗其當を得たり殊に市中音楽会員の奏樂と馥郁たる花瓶の粧飾とは和樂且湛の影を浮べて自から來賓の耳目を悦ばしむ午後三時に至り井深総理司會者となり熊野雄七氏聖詩第十九篇を朗読し博士コップ氏の祈禱了りて工科大学教授眞野博士の日本學風に關する有益なる演説あり其大要に言ふ「教育の成功を図らんには教師と學生と共に協働せざるべからず然るに我邦の學校にては教師の甚だ親切なる學生に遺すに自修の余地を

以てせず爲めに原造の才能を挫ぐるの嫌なき能はず」とて英独諸國の學風を引用し叮嚀反覆學生をして自修の念に富ましむべき所以を痛論せり次で井深総理証書を授与し且つ論ず所あり卒業生總代として星野又吉氏の答辭あり次で博士コップ氏の簡單なる英語演説あり終りて後教授ナックス氏の祝禱を以て閉會す是日來會する者内外の教師牧師を始として男女の學生生徒に至る迄無慮数百名亦た盛會なりと謂ふ可し

卒業生Ⅱ此日卒業証書を得たる者四名曰く泉弥六氏曰く星野又吉氏曰く小川豊吉氏曰く中島榮吉氏はなり今年の卒業生が此の如く僅少なる所以は明治二十二年に於て邦語科の生徒を募集せざりしが故なり明年に及べば當に二十有余名の卒業生あるべし

沿革Ⅱ抑も我が學院たる其由りて來る所甚だ旧し其間亦從て多少の変遷なくんばあらず初め米國「プレスビテリアン」教会同「ダッチ、リフフォーム」教会及蘇國「ユナイテッド、プレスビテリアン」教会の「ミッション」は明治十年九月を以て東京府下築地明石町七番地に一の神學校を設立し名けて東京一致神學校と云ふ蓋し日本基督教會と日本長老教會の合同一致の結果として誕生したる者なれば也其後明石町十七番地に講堂を新築して之に移転せしが同十九年六月に至り一致英和學校及び英和予備校と合して明治學院を設立す而して一致神學校は現今の神學校となり一致英和學校は普通學部となり英和予備校は其予科となる同二十二年九月築地明石町十七番地より芝区白金明治學院構内に移転し仮りにハリス館を以て講堂に充つ同二十三年六月神學部講堂落成し同月二

十四日を以て捧堂の式を執行せり而して其

位置にたる東京の西南隅に在り品川停車場を去ること僅に十数町にして新橋銀座又は横浜等に来往するには汽車の便利あり芝公園三田通辺には徒歩するも僅に数十分にして達すべし如此出入の便ありと雖ども市街の熱鬧に遠かり構内広濶(一万坪)土地高燥遠近の景色頗る佳にして勉学保健の点に於て最も屈竟の地と謂ふべし

教授に左の諸氏なり

教会歴史、教義史 マストル・オフ・アーツ 井深梶之助氏
新約書註解、教会政治 神学博士

組織神学、心理学、哲学、神学博士
ウィルリヤム・インブリー氏

旧約歴史、福音史 ジョージ・ウィルリヤム・ナックス氏
植村 正久氏
英学、万国史 石本三三郎氏

旧約書註解、説教学 神学博士
ギド・エフ・フルベッキ氏

但し明年は植村教授の文学上の講談あるべし

学課に修業年限を四年となす其課程左の如し

第老年 一漢学、講義、作文(一週三時間) 一英学及万国史、訳読(同五時間) 一英学、会話、文法(同一時間) 一倫理学(同一時間) 一心理学(同一時間) 一旧約歴史(同一時間) ……計一週十七時間

第二年 一漢学、輪講、作文(一週二時間) 一英学、文集類訳読(同一時間) 一哲学(同一時間) 一福音史、基督伝(同一時間)

一旧約各書緒論(同一時間) 一教会歴史、初代基督教史(同一時間) 一組織神学(同一時間) ……計一週十七時間

撰科 一希伯来語、又希臘語(同一時間) ……合計二十時間

第三年 一旧約書註解、歴史類(一週三時間) 一新約各書緒論(同一時間) 一新約書註解、書簡類(同一時間) 一教会歴史、中古基督教史(同一時間) 一組織神学(同一時間) 一説教学、講義及演習(同一時間) 一教会政治及憲法(同一時間) ……計一週十六時間

撰科 一希伯来語、及希臘語(一週三時間) ……合計十九時間

第四年 一旧約書註解、預言書、詩篇(一週二時間) 一新約書註解、書簡類(同一時間) 一教会歴史、近世基督教史、教理史(同一時間) 一組織神学(同一時間) 一牧会学(同一時間) 一説教学、演習(同一時間) ……計一週十五時間

撰科 一希伯来語又ハ希臘語、一週三時間 ……合計一週十八時間

右課目の外に物理学、基督教倫理学、社会学、比較宗教学等に就きて臨時に講筵を開くことあるべし

図書に学院所蔵の図書は六千余巻あり神学上に関しては恐くは日本第一の図書館ならん学生は規則に従ひ之を縦覧借用するの便宜あり

奨学金に奨学の為め第四年生中學術優等の者をして懸賞論文を作らしめ其中最も優等なる者に賞金を与ふるの方法も設けありとい

ふ (六十九号・明治二十五年七月八日)

(四—M 25—26) 卒業生任地と神学生夏期伝道任地

◎明治学院卒業生任地

今年卒業せられたる諸氏は其任地既に左の如くに定まれりと云ふ
泉弥六氏は千葉県千葉町星野又吉氏は東京両国教会、中島久米吉
氏は西京、小川豊吉氏は(当分)越後新潟其他神学生の暑中伝道
地は前号に報じたるが如し

茨城県石岡	大石	城築	岐阜県	井上	織夫
岐阜県	村木	経蔵	同	奥平	浩
伊勢津	鈴木	直丸	鹿児島	有馬	純清
金沢	松原	茂雄	東京麻布	北郷	保守
赤坂教会	小倉	修吉	本所教会	今田	強
深川教会	志場	邦雄			

(六十九号・明治二十五年七月八日)

(四—M 25—27) 東山学院懇親会

◎長崎東山学院(中山氏報)

客月二十七日午後七時より院長大儀見、教授瀬川、青山三氏の催
ふしにて今回の卒業生及び夏期伝道に派遣せらるる神学生を松の
茶屋に招き懇篤なる勧告奨励を与へ且茶菓の饗応ありて送別兼懇
親会を開かれ師弟互に胸襟を開きて相睦み和气霽々のうちに時間
を移したり各は或は別れを惜み或は前途を祝し或は黙禱し兄弟の

愛自ら席上に頭はれ実に感謝の念に堪えざりきは是れ畢竟神の恩恵
なりと雖も亦院長及び教授の諸君懇切なるに由ずんばあらず願く
は師弟の間常に斯こそありたけれ(七十一号・明治二十五年七月
二二日)

(四—M 25—28) 田村直臣等による伝道学校の新設

◎新伝道学校

田村直臣、和田秀豊の両氏及び其他二氏の名義を以て、芝区白金
三光町に新たに伝道学校を設立するに付き寄附金をなしてくれたき
旨の回文を諸教会に發送せられたり(八十一号・明治二十五年九
月三〇日)

(四—M 25—29) 東山学院の新入生

◎長崎の東山学院

東山学院は追々上都合にて在来の生徒は二三を除くのはか悉く帰
院せり。普通科には二十名の新入生を獲たり。神学科には十二名
の新入生あり。そのうち三名は高知より来る。(八十一号・明治
二十五年九月三十日)

(四—M 25—30) ヘボン帰国の予報

◎博士ヘボン帰養せんとす

氏は来る二十一日の便船に搭じて長く我日本より相別るべし我日
本の信徒は氏の如き有功者に対して適當なる感謝を表するの用心

なかるべからず（八十一号・明治二十五年九月三十日）

（四—M25—31）へボン帰国にあつたての社説

へボン博士其の故国に帰らんとす

博士は日本在留外国宣教師の宿老なり。其の来るや日本開国の日尚ほ浅く、国勢あたかも鼎の沸くが如く頗る困難を極めたる時に於てせり。爾来三十有余年、終始一日の如く、主事に執掌して、

倦まず。今や医学大いに開けて、刀圭の術日に進み月に歩みて其の程度漸やく西洋諸国と比肩せんとするに至れり。而して今人は次第に旧時の長袖者流の医者之の存在せしを忘れんとす。然れども試みに思へへボン博士の始めて日本に來朝せられたるは、今日の如く、医学の開けたる時に非ず、草根木皮の煎薬のみ流行して、街頭には本道外科の看板をのみ見懸くる頃にてありしなり。此の時に当り博士は医を兼ねる宣教師として吾が国に渡來せられしなり。博士が神奈川横浜等に於て多くの患者を治療し、数人の医師を薰陶したる功績は蓋し洪大なものありしなり。而して世人は漸やく之を忘却せんとするに至れり。少しく當時の事情に通ずるものといへども彼の有名なる俳優沢村田の助の足を切断し、其の腐骨瘡を療し、名を海内に轟かせて西洋の大国と稱へられし人は、

今のへボン先生其の人なりしを容易に記憶すること能はざらんを恐るる也。へボン先生が日本に於ける医学上の功德は誠に大いなりといへども、岸田吟香が精錡水の瓶に平文先生直伝なる名のみ僅かに止めんとするは遺憾の至りなり因みに（曰く彼の売薬

は博士の本意に非ず吟香の私せし所なり）。是は日本の医術大いに開くるに随ひ、自から刀圭に従事するの必要薄らぎて、伝道及び宗教文学の事業日に切迫せるを以て、其の病院を閉して全く医業を廢し、近き数年間は只だ辞書の著者、耶穌の宣教師として世に知られつつありしを以てなり。故に我輩は此に特書して医学博士たるへボン先生の功績を表出し聯か其の恵の大なりしを謝せんと欲す。

万国交通するの今日に至り、各国の方言を学び外人をして日本語を知らしむの便利を興すの大切なるは皆人の熟知せる所なり。へボン博士早くより此に見る所あり、勤勉勵精刻苦して、和英大辞書を著述せり。其の天涯をして比隣の如くならしめたるの功偉なりと謂はざるべからず。吾が邦の外交文書、貿易の音信、宣教師の伝道、及び学生の修業の如きは皆へボン博士の辞書に負債する所少なからざるべし。其の再三補益して浩瀚なる辞書を著述したるの功また大ならずや。

吾輩の日夜用うる所の旧新兩約の聖書は素より一人の労働に成りしものに非ず。内外の人其の翻訳の大成に与かりしものなり。然れども、尤も多くの時間と労力を之に費せしものはへボン博士に非ずして誰ぞや。へボン博士はまた大部なる聖書字典をも編纂せられたり。此の書が吾邦の宗教家を利益すること淺少に非るべし。斯の如く博士が文学上の功を算へ來れば尚ほ外にも挙ぐべきもの多かるべしと信するなり。

横浜の指路教会の成立より、巍然たる会堂の尾上町に屹立するの

に至るまで博士の尽力一と方ならず明治学院の如きも博士が数年間、その総理として力を添られし所なり。明治学院なる五層の寄宿舎を名けて、ヘボン館といふ。博士が自ら資を出して建築したるものなり。此れ先生が彼の学院の為にせる心尽しの幾分を代表するに足れり。

博士は忍耐謙遜にして、事物に励精尽力し能く静かに働くの人人なり。而して其の吾が帝国の爲めに為したるの事業斯くの如くに其れ大いなり。豪傑者流の人士、磊落を以て自ら居るの少年、壯圖を事とし、痛快を旨として、花々しく生涯を送らんとする輩はヘボン博士に鑒みて可なり。

ヘボン先生は日本基督教会の恩人なり、日本国基督教徒全体の恩人なり。否な、実に日本の恩人なり。此の人にして永く吾が邦を去りて、遠く其の故国に帰らんとす。豈感慨に堪ふべけんや。豈感謝の情を述べざるべけんや。其の雪白の頭顱は経に見ゆる如く栄光の冠冕なり。斯の如き生涯を送りたる老人は祝福すべきなり。

(八十二号、明治二十五年十月七日)

(四—M25—32) 神学生夏期伝道報告会

◎明治学院神学生徒夏期伝道報告会

前号に報道せし如く同会は去る二十六日午後二時より明治学院に於て開かれ、入江、井上、谷口、北野、大谷、河崎、鈴木、大石諸氏の伝道報告あり北山初太郎氏の祈祷を以て閉会せり(八十二号・明治二十五年十月九日)

(四—M25—33) 神学生新入生歓迎親睦会

◎明治学院神学生親睦会

去る三十日午後七時より同院神学部読書室に開かれたる同会は新入の生徒十有余名と懇親を結ぶの趣意に出づ来会者四十五名大石小林石本陶山諸氏の感話あり終て茶菓を喫し歓を尽して散ぜしは九時半の頃なり(八十二号・明治二十五年十月九日)

(四—M25—34) ヘボン送別会予告

ヘボン氏の送別会 前号の社説欄にも記したる如く博士ヘボン氏帰国せらるるにつき、石原保太郎、貴山幸次郎の両氏委員となり、来る十七日午後二時より芝区白金明治学院に於て送別会を催はざる筈にて諸教会に通知書を發せられたり、其の要領を挙げれば、会費は一人前金十錢、贈物をなさんと欲する有志者は金二十錢以上を出金すべきこと、贈物は連名を以てすること等なり、同氏の名を聞ける諸兄弟は成るべく出席せられたきものなり(八十三号・明治二十五年十月十四日)

(四—M25—35) ヘボン送別会の模様

◎明治学院に於て催されし平文氏の送別会

は殆んど三百名の来会者あり平文氏夫婦が演壇に着席せらるるや讚美歌を以て会を開きフルベッキ氏は同学院の神学校マコウレイ氏は其の普通学校を代表して懇切なる送別の辞を述べられたり次に普通科生徒某の英語演説ありたるのち石原保太郎氏は府下に在

る日本基督教会の教役者及び有志者に代りて博士夫妻の功勞を称賛し併はせて叮嚀なる送別の挨拶をせらる此の時井深堀之助は明治学院より贈たる二冊の書に簡單なる辭を添へて之を博士に交付さる右了りて平文氏立ちて此の会に於ける厚遇を謝し深く感じたる面色にて余は尋常普通の才力を有したるのみ唯だ忠実に己が義務を尽さんと心懸けしなり……日本に於ける余が生活は神の恵に由りて喜はしきものなりき……余等夫婦の残年僅少かなるべしといへども永く日本を忘るること無かるべしと涙とともに述べられしときは満場寂として声無く感涙に袂を湿せるもの少からず小川義綏氏の祈禱をせられし間に声を発つて泣きたる人々もありき又他の教会を代表しては原田助氏の演説もありたり。(八十四号・明治二十五年十月二十一日)

(四—M25—36) ヘボン博士の演説

◎博士平文の演説 湖幡辰之助速記

(こは前号に約せし石本氏の口訳に係る英語演説なり)

私は外国の朋友に向て、私が日本へ参りました始めの事を申し上げます。

私は今横浜に居る西洋人の中では一番老人でござります。唯一人しかないのでござります。丁度日本へ来ましてから三十三年に成る、日本に妻を携へて到来致したのは、千八百五十九年十月十八日日本と……北米合衆国と通商和親の条約を結んだのは、千八百五十九年七月四日のことござります、日本が丁度鎖国攘夷

の主義を廢めて、外国と交通をすると云ふことに国是が変り、二月月立ったばかりの時日本へ来たのでござります。始めて日本へ足を踏入れました時には、日本に於てドウ云ふやうに待遇するであらふか、ドウいふ風にするであらふかといふことを、考へて居りました、日本の国はキリスト教の反対でござりまして、キリスト教の信者とあれば、殺すといふことを知って居った、夫だからしてドウで有らふかといふことを思ひましたけれどもし唯心を静かにして深く考へ、父の御心に任せて、キリスト教を弘める道を開くやうにしたいとの一念を抱きながら神奈川駐劄の領事の所に往きました、所が此領事の言ひますには、あなたは一種異なる種類の人で有る、元來は日本との条約は商業の為に約束を結んだ者なるが、基督教を宣ることに付ては、条約のケ条にかいてない、乍併先づ出来る丈けのことはして保護をして取計ふやうに致しませう、開港場の頭に相談を致すから二日程待て呉れと申しました、そこで毎日々々領事館に往きました所が、開港場の頭も承知したといふことござりました、就いては自分はドウに居つてよいかといふに神奈川に三つの寺院が有る其一つを撰めばよいといふこととで、其中の一つの寺を撰んで其処に住居しましたのでござります。

今日横浜の人口は十五万を以て数へる、私が日本へ来た時には横浜はドウで有ったかといふに、僅かの漁師百姓たちが居た計りでござりました、条約を結んだ時から段々外国の人が参りましたけれども、領事のボーイ、商人等でござりまして、建物は今の様な

のではない、見すばらしい粗末な建物であった、其時分の区域は今の弁天の所から、谷戸橋の河の所迄が、横浜の区域で有ったのでござります。広さ即ち奥行はドウで有ったか、三百ヤードあるかなしで有った、夫で又其地面は商業適當の地ではなかった、居留地の区域は弁天の所から、今の前田橋の有る所までが居留地の区域でござりました、其他の所は水を以て蓋ひ舟を浮べて釣をして居たのでござります、さうでない所は、沼にて草が萌て居った、今日は十五万の人口あって大きな市を成して居りますが、其時分は小さい所でござりました、其時分イギリス、オランダ、アメリカの領事の頼みに依り、間縄を打ち寸法を取り測量をしました、其役を勤めまして夫から又横浜を保護する為めに、区域を附けなければならぬといふてコッチの河が出来ました、夫で区域といふ風になりました、丁度居留地を島にしてしまひ出島（長崎）のやうにしてしまひました、其時分には根岸から谷戸橋に伝はる堀割はなかった、其後出来まして横浜の居留地のやうに、横浜の山手居留地も一つの島になったのでござります、

私は前に申した通り日本に住する西洋人の中で一番古い者と思ひましたから、是丈の昔話しをいたします、此神奈川横浜に居りました外国人のうちに殺されたものがありました、日本刀を以て殺された人や傷を受けた人がござりました、十三人殺された人がござりました、私自身危難に出逢ひましたことがござりました、一人の者は私の所へ暗殺に來ましたけれども、国に害を為す者でないこと云ことが分つて暗殺を止めて帰ったことがござりました、是

丈けのこと外国から近頃來られた朋友に、昔の事知らぬ方に申したのでござります、（以上英語）私は数日してお別れを致します、私は誠に此三十三年の間、此国に駐まつて、日本の人を助ける力を尽しましたることを神に感謝します、嗚呼私は本国へ帰ります、私の仕事は終りました、本国に少しの間休みまして天にある親たちの国へ参ります。（八十六号・明治二十五年十一月四日）

（四—M25—37）高知伝道者への錢の言葉

高知伝道者に錢す

T、T

某々君八氏、日本基督教会大坂大会の決議に基づき、前後相踵で京地を發し、高知に向ふ、壮快羨むべし、一言なくして止むべからず。

余不肖、伝道の経験もなく、信仰もまた甚だ熟せず、豈敢て諸君に告ぐべきものありといはんや。然れども、余が伝道の希望及び熱心に至りては、又決して人後に立つものにあらず。我日本に於ける基督教の大勢が、南風競はざるの狀態あるを見ては、杞憂措くこと能はざるものなり。振興の策を建つる人、伝道の法を講ずるの士、東西に輩出して此の潮流の遂に挽回し易からざるを嘆ずるを見ては、同感の情自ら禁ぜざるものなり。時なる哉、高知の蒼生、挙つて慈雨の至るを待つ佳報に接し、諸君今や手を連ねて之れに応ぜんとす、胸中の雲霧すべて拭ふが如し。

此行日本基督教会が神の命を受け、諸君を経て高知に伝道せしむる者なりとは、諸君か一日片時も忘るべからざる金箴なるべし、

その四十五名なりき。(九十四号・明治二十五年十二月三十日)

此間一点の私心あるべからず、此間絶えて宗派心あるべからず、諸君願くは信仰に信仰を重ね、最も忠実、最も謹慎を旨とし、常に祈禱を以て事に従はれんことを望む、夫れ今回の事たる、党派熱の最も熾なる地に、狂熱的の傾向あり易き道を伝ふるものなり、

明治二十六年

(四—M 26—1) 明治学院共励会の初週祈禱会

◎初週祈禱会

(中略)

◎明治学院共励会

万一にも彼れ一瀉千里の勢を以て風靡せざることあらば、虞られざる反動、思はざる困難必ず生ぜん、諸君之れに応ずるの心案なかるべからず。諸君若し斯る盛業の前途を語まることあらば、豈啻に諸君の過ちにして止まんや、日本基督教会の耻辱なり、否々、基督教の耻辱なり、その結果は神の旨を空ふして、将来の伝道に大蹉跌を与へずんばならず。諸君の任また重からずや。

毎日午前祈禱会を聞きしが、会員中目下休業の為め帰郷の者多かりしを以て、会衆は十人許りにすぎざりしも、余程活勢を帯びたりしとぞ(九十六号・明治二十六年一月十三日)

余不肖、希くは造次に諸君の成功を祈り、顛沛に諸君の佳報を待たん。今や天寒く、風烈く、諸君希くは自重せよ。(九十四号・明治二十五年十二月三十日)

(四—M 26—2) 神学生と貧民学校

◎貧民学校里園

(四—M 25—38) 高知伝道者の送別会

◎高知伝道者送別会(通信)

二十日午後六時より明治学院より高知に派遣せられたる人々のために神学部読書室に於て送別会を開き鈴木木司会し、讚美、祈禱、聖書朗読のありたる後ち司會者送別の辞を述べ次に総理井深氏を始め渡辺、山中、笹倉、井上の諸氏、交々立ちて送別辞を述べ、

麻布谷町にありて、小倉修吉氏等の發起になり、有志者の寄附金によりて成立するものにて目下生徒の數四十余名あり、明治学院の青木澄十郎、農科大学の新島、長谷川の諸氏専ら尽力せらる、谷町は随分貧民の多き場所にて、其の多くは児童を就学せしむるの力なきものなれば、頗る喜び居るといふ。(九十六号・明治二十六年一月十三日)

終りて大石城築、大谷廣、小倉修吉三氏の答辞あり、茶菓を喫し、

(四—M 26—3) 同盟文学会開催

散会せしは九時なりき、唯遺憾なりしは至急の催ふしのことです、植村の両教授が来会なかりしこと之れなり。来会者は凡

◎第十回同盟文学会

創立の頃は立教学校、東京英和学校、東洋英和学校、明治学院四校の同盟なりしが今は東京・明治両学校の同盟となりたる同盟文学生会は去る二四日夜明治学院に於て第十回の会合を開けり、浅田氏（東京）の英文朗誦、中山敬一氏（明治）の邦語演説、宮本氏（明治）の英語演説、大立目文弥（東京）の邦語演説、渡辺氏（東京）の英語演説、河村算蔵氏（明治）の邦語論文などありて後ち余興に口上茶番（向島の雪）、笛、松林伯知の講談（楠公遺聞）などありたりといふ。（一〇三号・明治二十六年三月三日号）

（四—M 26—4） 明治学院理事員の交替

○明治学院理事員の変更

明治学院理事員植村正久、石本三十郎の両氏は此度辞任せられたるに付き、理事員会は巖本善治、真野文二の両氏を挙げてその後任となしたる由。（一〇三号・明治二十六年三月三日）

（四—M 26—5） 熊野雄七の明治学院就任

◎横浜通信

二百十二番公立女学校監事兼教授なる熊野雄七氏は、今回東京明治学院へ転任せらるる由にて、其後任は山本秀煌氏なりとか、然し同校の生徒一同は、久しく同氏の薰陶を受けたる事として、目下非常に失望し居らるる由。

○熊野雄七氏と海岸教会 同氏は海岸教会長老として働かると共に実に久しく、為めに同氏の計画したる事業少からねば同氏の去

りたる後は同教会に一変革あるべしと云ふ。

○三月第一土曜日海岸教会日曜学校職員一同は、親睦会を兼ねて熊野氏の送別会を催せり、鶴野市太郎氏職員惣代として挨拶をなし。熊野氏の答辞ありしが、席上の人々は皆今日迄同氏と袂を連ねて日曜学校に尽力せられたる者なれば非常に同氏の去るを惜まれて、中には一運動なさんと迄に云ひたる人もありたりとか。（一〇五号・明治二十六年三月十七日）

（四—M 26—6） 明治学院における牧会学講演

◎明治学院に於ける牧会学講演

明治学院神学部に於ては、先頃より毎金曜日に東京及び横浜なる諸牧師を招聘して、特に牧会上に關する講筵を開かれたり、第一の演説者は横浜海岸教会の牧師稲垣信氏にて、氏は多年の経験に徴して、牧師たる者は人情を知り人を思ひ遣るの必要あることを懇切に説かれたり。第二の演説者は横浜指路教会の牧師山本秀煌氏なりき。氏は現今牧会上の要務と云ふ題にて、特別に教会内に自治の精神を開発せしむべき事と、キリストの愛てふことを明白に教ふるの必要に就き、種々の実例を挙げて説かれたり、第三は東京英和学校長本多庸一氏にて、氏は牧会者実務要訣と云ふ題にて、新伝道者の心得となるべき事共数ヶ条を挙げて最と懇切に説かれたり、第四は番町組合教会牧師原田助氏なりき、氏の題は牧師役者と読書と云ふ事にて、之を三段に分ちて説かれたり、即ち牧師は何故に読書すべきか、如何にして読むべきか、何を讀むべき

『福音新報』明治学院関係記事

かと云ふことに付き、有名なる牧師の例を挙げ、又自家の経験に徴して説かれたり、第五は東洋英和学校長平岩愼保氏にて、氏は教職召命の確信と云ふ題にて、苟も己の本心に於て神の召の声を聞かざる者は決して牧師伝道師たる可らずと論ぜられたり。(一〇八号・明治二十六年四月七日)

(四—M26—7) 明治学院英語倶楽部の活動

◎明治学院英語倶楽部

同会は明治学院普通学部卒業生の組織より成り、同部内外教員在學生、其他校外有志者の入会を許し英語使用の練習を目的とする者なり、数日前其第二回を開き二十名余の出席者あり、談話は凡て英語を用ひ、又二三の演説者ありて頗る盛会なりしと云ふ、世は条約改正の浮沈によりて英語の価格を左右するも其真価は常に變することなく、英學者には語学の練習固より有益なる者にして、此会の如きも之を処理する如何によりては補益少なからざるべし、例会は隔月一回にして次回は五月下旬に催さるべしと云ふ。(二〇九号・明治二十六年四月七日号)

(四—M26—8) イムブリー博士送別会

◎博士イムブリー氏送別会

は前号にも記せし如く去る二十一日風月堂に於て開かれ、京浜の教役者凡そ二十名許來会して、和田、石原、稲垣諸氏の卓上演説あり、終りて井深氏京浜教役者連名にて、氏が日本に再帰せられん

ことを乞ふの書一篇を朗読せられたるに、イムブリー氏はその好意を謝し、更にいはるる様、必ずしも歸來せずといはず、又日本流の「サヨナラ」は何となく宿命説の臭味あるが故に此席には矢張西洋流の「グッドバイ」を以て別れを告げ、諸君が神と共に在さんことを祈り参らす由、述べられき、イムブリー氏は日本にあること十八年神学校のこと、伝道のことに就ては、日本の信者が氏に負ふところ尠からず、余輩も亦氏が萬障を排して再び此地に來られんことを望むものなり、因みにいふ氏は明日横浜を出発せらるべし。(一一一号・明治二十六年四月二十八日)

(四—M26—9) 新任明治学院理事員

◎明治学院新任理事員

戸川安宅氏が新任せられたり。(一一四号・明治二十六年五月十日)

(四—M26—10) 基督教主義教育会

基督教主義教育会は去る土曜日午後明治学院に集會し、凡そ三十人程の來会者あり、席上青山英和学校の和田正幾氏基督教主義学校男子部普通科の科程を尋常中学に更改するの私議といふことに就き演説あり右終りて各員の意見を討論せしが、大抵は和田氏の意見に反対の傾きを顯したりといふ、何にせよ、基督教主義教育者の丁寧に考ふべき一問題ならん、(一一五号・明治二十六年五月二十六日)

(四—M 26—11) 宣教師ノックス婦人

アメルマン氏婦り、イムブリー氏婦り、今またノックス氏は本国の家事に意外の事情起りて此夏日本を去らんとす。明治学院の爲め、日本基督教会の爲め、日本伝道の爲め、誠に悲しむべし(一六号・明治二十六年六月二日)

(四—M 26—12) 小倉修吉の死去と追悼会

◎小倉修吉氏逝く

高知県大挙伝道に付きその一員として高知県本山に在りし同氏は前週日曜日吉野川に於て溺死せられしとの電報あり、此稿を認むるまでは尚ほ詳報の達せざれば今は此地に何事の報知をも与ふるに由なければ何分意外といふの外なく、その大なる損失たるは、素よりいふまでもなし、明治学院に於ては去る火曜日之が爲め追悼会を催せり。(一一六号・明治二十六年六月二日)

◎小倉修吉氏の死去に就き

先月二十七日のことなりき、朝采氏は微恙ありて床にありしが、日頃小倉氏に懐き居る男女三人の幼児訪ひ来り、吉野川に舟浮へて遊ばせよといふに、此時氏も左まで心地悪しからねば、打ち連れて河原に赴きつ、見れば連日の雨天に水量増さりたれど、素人目には夫れとも心付かず、自ら棹取りて彼方の岸に漕ぎ着き、頓て此方へ漕ぎ返さんとしたれど、如何にすればとて動かばこそ眼も暈くばかりの急湍近き処にあれど、中々一人の力にては進退とも及び難きに、その気も疲れはてて又手瞑目したる儘水のまに

『福音新報』明治学院関係記事

まに三人の幼児とともに彼急湍の底に葬られぬ。此時即ち五時頃にて、兩岸には人の隻影もなく、只遠き山の上より一人の草苧男が右を目撃しての話なり。氏は彼時多分死を決して祈りを捧げられしなるべく、三人の子供の泣き叫ぶを見ては如何ばかり心苦しかりけん。聞くもあはれなることもなり。氏の死骸は今に見当らず、但し三人の幼児の内、一人の女子のは辛ふじて見出したるに、いとも安らかなる容貌して恰かも眠れるが如くなりきといふ。此の女子死ぬる前一日或人に語りていふ。基督我が傍にましませば我れは何時死ぬるとも恐ろしがらずと。計らずも此言不祥の讖をなせり子を失ひし親達、何れにおろかはなかるべけれど、此の不幸の中にも基督信者の勇気を鼓舞せられんことこそ望ましかれ。之れより受くべき教もあるべきに。(一一七号・明治二十六年六月九日)

◎小倉修吉氏の追悼会

赤坂教会は小倉氏が高知に赴かれざりし前に自ら任じて伝道せられし教会のこととて、氏の訃音に対して殊に痛惜の意を表し、去る十七日会堂に追悼会を開けり、会は殆んど二時間に涉りしも、終始頗る厳肅なりき上総望陀郡中川村に於ても同夜同様の催ふしありたる由、同地の秋葉氏が氏の永眠を悼む発句一首あり、云くありありと胡蝶ひとつの行くえ哉 (一一九号・明治二十六年六月二十三日)

(四—M 29—13) 明治学院神学部の状況

『福音新報』明治学院関係記事

○明治学院神学部

○卒業生送別会 去る五日卒業生諸氏を送らんとて高輪亭に送別会を開き、神学生諸氏三十余名来会し、たのしく談笑せり。
○閉校式前週金曜日を以て本学年の終りとなし同日閉校式を挙行せり。

○ノックス氏の後任 教授ノックス氏が止むを得ず帰国せらるるに付き、その後任は大坂のアレキサンドル氏と定まり、又普通科教授ランデス氏も神学部教授を兼ねて、心理、哲学等を担当せらるべし。(一一八号・明治二十六年六月十六日)

(四—M26—14) 明治学院卒業諸行事予告

○明治学院卒業週

○卒業説教 は来る二十五日(日曜日)午後七時半より明治学院サンダム館礼拝堂に於てす。説教者は神学部教授ナックス氏なり。
○卒業証書授与式は 二十八日(水曜日)午後三時より明治学院サンダム館礼拝堂に於て左の順序に従ひ執行し、文科大学教授中島力造氏及び今度日本伝道上取調の件ありて渡来せられたる米国美以教会の教授エ、ビ、レナルド氏の演説あるべし。

奏楽

一聖書朗読

一祈祷

奏楽

一演説

神学博士 エ、ビ、レナルド

奏楽

一卒業証書授与 総理 井深 梶之助
一卒業生総代答辞 普通学部 馬場 茂策
神学部 井上 織夫
一奨学及び賞金授与

一演説

奏楽

一祝祷

奏楽

○卒業者 は神学部にて十五名、同特別科にて五名、普通部にて七名なり
参会は何人にも自由なりといふ。(一一九号・明治二十六年六月二十三日)

(一一九号・明治二十六年六月二十三日)

(四—M26—15) ノックス、石本両教授送別会

○明治学院両教授の送別会(通信)

去十九日明治学院神学部講堂に於て博士ノックス氏の帰国と教授石本氏の遊学を送る為め神学生諸氏の催せし送別会の大略左の如し。司会者吉川逸之助氏起て迎辞を述べ、有馬純清氏神学生総代として博士ノックス氏に向つて我國民の為め、明治学院神学部の為、満腔の熱心を來て積年の勞に對する謝辞を呈し、再び來りて力を尽されんことを切に願ひ、教授石本氏に向つても同じく多年の勞を謝し、殊に此度の行を祝し、錦を衣て郷に歸らるる日待つ

といひ終るや博士ノックス氏起て

余は十六年前に日本に來りぬ初め國に在りて神學校を卒業するや、未だこれてふ事業を定めず、父は或教會の牧師なりしゆへ、矢張余をば牧師になさんとせり。かかるうちに不図したることより外國伝道を思ひ立ち、遂に日本に向ふこととなれり。當時自分の考へにては日本の事は一向分らず唯犠牲献身を思へるのみ。然るに當國に着せし以來大に案に違ひ主イエスの「己が爲めまた福音の爲に其生命を喪ふものは之を得べし」との約束の如く生命を捨てんとて却て福なる生命を得たり。余が日本に來りしは余の爲めに凡の事に於て益ありし。尤も本國に留まりしならば日本語を学ぶ間にも独逸語、希臘語、希伯來語などにて多くの書を読み、多くの研究を爲し得たりしならんも日本に來りて日本の語を習ひ、親しく日本人々と交り、我國の文明と日本の文明との赴きを異にせることなど數多有益なる教育を受けたり。元來余は二十三年の後には歸國すべかりし筈にして此度は誠に不意の出來事の爲め日本を辭せざるを得ざる運びとなりぬ。實は前陳の如く余は神學校を卒業したるままにて書生の經驗の外一物なかりし當時に日本に來りしことにて、友達とても多からず、父は先年彼の世の人となり。ホームは何処に在るか、歸りて何処に住むか定まらず（此時涙を流せるものあり）却て日本には十数年の間敬待せられ、今謝辭を与へられしほどの働は更にあるとは思はざれども、日本の多くの兄弟と親しくなり、多くの学生諸君と交りを辱ふしたり。故に歸國の願は更にあらざ

れども、また止むを得ざることなり（此時欲歇するものあり）且當時我國にては彼は信仰上の争ひあることなれば、尚々歸るに不適當の時と存ずれども、事情は如何ともし難し。余今謹で諸君が熱心に正直に學ばれしを謝す（此時背に汗せしものありしならん）余は日本に來る時、神の御意を信ぜし如く今亦神の御意に任じて歸るべし。神若し許し給はば復相見るの時あるべし。終りに一言を遣し置かん。固より普通の言なれども、熱く神を信じ、主基督によりて神に万事を任せよと語勢強く言ひ放ちて座に就かれたり。続いて石本氏起って本會を開かれし好意を謝し、併せて前途の希望を述べ、行く行く諸君と共に畢生の力を尽して教の爲め、神の國の建設の爲め、主の葡萄園に働かんと言簡に、意長く演述さる。夫れより茶菓の饗応あり、交々謝辭をのべ、送別文を読むなど、名残はなかなかに尽きざりき。時移りて夕陽西に春く頃、博士ノックス起ちて一人々々に手を与へ、無量の情愛をグードバイの辭に籠めて相別れぬ。

（一一九号・明治二十六年六月二十三日）

（四—M 26—16）神学部卒業生及び夏期伝道

◎明治学院神學校の卒業生

青木澄十郎 有馬 純清 伊達寛太郎
今田 強 井上 織夫 稲葉 曠三
岩淵謙之助 川崎巳之太郎 吉川逸之助
北郷 保守 毛利 管治 村木 経造

『福音新報』明治学院関係記事

谷口 直吉 佐藤 銈藏 中村鉄太郎

右のうち青木氏は高知県、有馬氏は福井、稲葉氏は東京下谷、井上氏は伊予大洲、北郷氏は東京麻布、毛利氏は石川県、谷口氏は阿波、佐藤氏は佐倉、岩淵氏は陸中岩沼、村木氏は相州横須賀に赴任せらる。自余の諸氏の分は未だ定かならず。

又同学院の神学生は例年の如く夫々夏期伝道に赴かる。鹿島英治郎氏は伊豆地方、竹林寅蔵氏は信州、千屋和氏は同じく諏訪、好川二一氏は直江津、赤須氏は村上、志場邦雄氏は上州玉村、小林道太郎氏は茨城、北野高弥氏は横浜、笹倉弥吉氏は名古屋、鈴木直丸氏は大坂、小倉銳喜、川田繁太郎、国沢篤実、山中直行の四氏は高知県、平沢莊四郎、松原茂雄二氏は石川県、川添萬寿得氏は東京に定りたる由(一一〇号・明治二十六年六月三十日)

(四—M26—17) 明治学院卒業説教

◎明治学院卒業説教

前号にも記せし通り、去る二十五日を以て明治学院講堂にノックス氏の説教ありたり。氏の説教は馬太伝四章の「人はパンのみにて生くるにあらず、神の道みちによる」といふ句を題として、物質的文明の頼むに足らざると、基督の名を括むるの必要あることに付き、日本国民に勧め、又卒業生に望むにありて、非常に力あり、非常に有益なりしとぞ。(一一〇号・明治二十六年六月三十日)

(四—M26—18) 明治学院生徒募集—無月謝の特典—

○明治学院生徒募集

九月十二日入学試験執行ス奨学ノ為ニ東京府及近傍十県ノ入学志願者ニシテ規定ノ点数ヲ得ル者各一名ニ一年間無月謝ノ特典ヲ与フ詳細ノ事ハ規則書ニ在リ規則書ハ二銭ノ郵券ヲ要ス

東京芝白金 私立 明治学院
(一二五号・明治二十六年八月四日)

(四—M26—19) 「日本の花嫁」事件社説

◎「日本の花嫁」

斯く題するものは、田村直臣氏が米國にて出版せられたる英文の小冊子なり。属文稍や穩当を欠くものなき非すと云へども、此は末節の事に属す。余輩は本書の文体につきて論ずるの閑日月を有せざるなり。

前日ジャンパンメール新聞此の書を批評せり。府下の或る日刊新聞は其の文を転載して、本書の國に忠ならざるを揚言せり、余輩は此に於て之を一読せんと意を起したり。何となれば著者は、基督教徒然かも其の宣教士なりと称して、世に知らるるの人に於て、其の言論或ひは日本基督教徒の面目に係るべきを以てなり。余輩便りを得て之を一読するに、著者が日本の習慣を写せるの結果、実を得たるもの少からざるを知れり、而して其の実なる所多くは吾が中以下の卑ひなる社会に的中するのみ。之を以て吾が習慣の全体を代表せらるるに至りては、國民のために迷惑せざるを得ず、若し日本國民の現状を憂ひ、其の罪惡を悲しみ、之を矯正

せんと欲するの赤心止む能はざるより、此の如き著述を為せしものとすれば、記事の過誤或ひは恕すべきに似たり。然れども田村直臣氏の日本の花嫁を読んで憂国の言を為せるものなるを保証すること能はず。読者多くは之を一場の戯談笑柄のために物せしに相違なしとするならん。余輩は国の恥辱を亮りて、外人の笑柄に供するもの往々にして之有るを悲しむ。若し真実なる記事ならんには恥辱も聯か忍ぶべしといへども虚実相半ばするものに至りては、余輩また痛嘆に堪へざるなり。

日本の花嫁は記して曰く、我らは（日本人）愛と禽獸的情欲とを同一視す。曰く、我人民は清潔なる愛を味ひ知らず。曰く、日本にては父親は無限独裁の君主なり。萬権之に属す。彼は制法者裁判官また王なり。曰く十八歳にして結婚し、以て父の業を継ぐは嚴重なる規則なり。斯くて医者の子は医者、……門番の子は門番たらざるべからず。曰く日本にては人の父たるものは常に其の女の年齢を二十歳以下なりと揚言す。設令三十年なるも。曰く親は兒女の婚嫁のみに熱心して、其の将来の幸福繁栄を慮ることなし、云々。此の類枚挙するに遑あらざるなり。此れ真実に日本の社会を写し出せるものに非ざるなり。博士ノックス新井白石の伝を著さんとす。其の目的は武士の教育を写して、日本の美を（批評とともに）外国に彰さんと欲するなり。今田村氏は上文の如き奇怪なる文字を弄して、同胞を外国に誹れり。余輩は氏のために深く之を愧ぢ、また之を悲しまずんばあらざるなり。よし真実なることにもせよ、自国の事は一々之を外国に告ぐるの必要なし。或

ひは之を隠蔽するの義務あり。况んや虚妄の記事を列ねて自国の恥辱を海外に風聴するをや。余輩は此の種類に属する著書の輕薄を爪弾きす。（一二七号・明治二十六年八月十八日）

（四—M 26—20） 神学部教授歓迎会その他

◎明治学院神学部教授歓迎会及親睦会

去二十九日午後六時神学校に於て開かる。会するもの殆ど四十名許。各級よりの代表者交々起て歓迎の辞を呈し、挨拶の辞を述べ、次に新任教授チー、チー、アレキサンドル氏、別科教師石原保太郎氏、予科英語教員柏井園氏の答詞あり、アレキサンドル氏の答詞には、新任以来日尚ほ浅しといへども諸君が学識才能を得るの傍、信仰に篤き傾向あるを見て喜ぶといひ、又学校は各別々の氣風を存し居るものなり、明治学院の氣風は如何なるにもせよ、余は一に基督の精神を以て精神とせられんことを望む等の語ありたり。終て茶菓の饗応あり、夏期伝道中の所感を述ぶるもありて、和楽洋々の中に会を閉づ。

◎明治学院及青山英和学校普通科入学生

明治学院は十七八人あり、青山英和学校は二十有余ありしといふ。

（一三四号・明治二十六年十月六日）

（四—M 26—21） 「日本の花嫁」事件と第一東京中会

◎第一中会と田村直臣氏

第一東京中会は其集会の第一日に田村直臣氏著日本の花嫁は中会

の議すべきものなりとの見込を付け之を調査して意見を具状すべき委員五名を挙げたり。委員として当撰せられたるは井深山本和田熊野マクネヤの五氏なりき。委員は翌日其の取り調べたる結果を報道して曰く（此には其の大意を記するのみ）此輕佻浮薄の精神を以て不精確なる事実を臚列し虚実を交へて妄りに国辱を暴露したるものなり。教職の面目に關することとなりと見做さざるを得ずと。委員の列挙したる証拠は諸新聞雜誌に見えたる隠れなき事実なれば此に記載する必要なし。第二日（即ち四日）中会の前にて委員が此の報道を為すや中会は之を審判に附すべきものと為し告訴委員三名（井深山本熊野）を撰挙して訴を呈出すべき旨を命ぜり。此日手続きのことに付き議論紛々たり。第三日（五日）告訴委員が田村直臣氏を訴へ出でたるの大意に曰く、日本の花嫁なる著書は記述の舛戾輕佻にして事実を混淆し妄りに同胞を外国に讒誣したるものなり。宜しく之を譴責して適當の正誤文を内外數種の新聞に載せしむべしと。而して委員長は証拠を挙て其の告訴の当然なるを維持せり此に於て中会は直ちに相方の弁論拳証を聴きて其の審判に取り懸ることならんと思ひしに案外にも田村直臣氏等は種々の故障がましき事を申し立てて大いに議事の進行を遅緩ならしめたり。中に就きて若し告訴して不当なりとの判決を受けなば、誰か其の責に任ずべきか。宣教士たる余を罪に陥るるの告訴をして虚妄ならしめんか之を不問に置くべきに非るなりと言ひしが如きは議事の紛雜を甚だしからしめたり。此の波瀾漸やく鎮りて田村直臣氏は勢ひ込んで議長の側ら一段小高き

壇上に立ち上り大声急言滿面朱を濺ぎて拳証弁論打ち混じたる反駁の演説を為しぬ、曰く余の反証には間接直接の區別あり。其の間接なるものに七つあり。其の大意に曰く余は十九年間基督教に従事せり。伝道牧会に忠勤するもの此に歳あり。豈に國を讒誣するものならんや此の書の著述は一朝一夕のことに非ず。此れ年來の思案に胚胎せるもの、妻とも計り、イムブリー、タムソン、唐沢造酒の諸氏等とも相談せり。此の如く苦心せる著書豈に告訴人の言ふが如き性質のものならん。イムブリー、タムソン唐沢諸氏の校閲せるもの豈に左る悪しきものならんや。米国の本書を出板せるハーパルス会社は名譽ある書店なり。如何なる書物にても精査の上に非れば之を發行せず。「日本の花嫁」豈に告訴人の揚言する如き者ならんや。日本の事を悪口せんと思はば、「日本の花嫁」よりも悪しきことを幾許と無く書くことを得べし。況んや「日本の花嫁」に日本を誉めたる所もなきに非るに於てをや。余が著書は告訴せらるべきものに非るなり。余も校閲者フキリツプス氏も本書発売の利益を自管館に寄付す。日本の花嫁は金儲け主義の著述に非るなり。其の目的已に慈善に出づ。告訴の不当なる以て知るべきに非ずや。「日本の花嫁」の目的は仏教の悪感化家庭の上に甚だしきものあるを示さんと欲するものなり。何を以て之を讒誣と言ふ可けんや。其の目的は伝道なり。此の立派なる目的ある著書を何故に告訴したるか。間接の拳証終りて直接の拳証に入る。其言牽強附会せる者の如くに聴き取られたり。唯だ日本にては親が女を嫁すること宛かも寝台食卓を与ふるが如しと

記載せる一段を弁護するに至り、言甚だ少しく理に似たるのみ。田村氏の演壇を下るや山本秀焯氏は田村氏の抗弁せし所を筆記すべきや否やの問を発せり。此に於て又復時間潰しの議論沸騰して、速記の筆記のと云ふ間に貴重なる議事の時は空費せられたり。第四日(六日)今朝こそは告許委員の弁論を聞くことならんと片唾を呑んで控へ居たるに又も不思議なる故障は出て来れり。告訴中に処分案を載せたるは不当なりとの説は前日来議事の進行を遅緩ならしむるの一勢力たりし横浜のバラ氏より出でたり。我も我もと発言して揉み合ひたる結果はバラ氏らの非難したる部分だけを抜き去ることとはなりぬ。斯くて井深氏は告訴委員長として其の告訴を維持し、田村氏の論弁を反駁せり。議論通暢明晰にして殆んど余蘊なしとの評あり。此の時田村直臣氏は立てり。何の爲めに立ちし乎。弁論のために立ちし乎。否な彼は議事を停止せしめんがためハーバース書店、校閲者フキリッブ、インブリの三名を米国より呼び寄せんことを請求せり。日本の花嫁なる著書に鮮明なるインキにて印せられて眼の前に在り。其の著書の性質を論断するに何れよりも証人を要することあらんと誰かは思ひ設くべき。況んや万里の波濤を越えて米国より之を招き来らんとは。左とも奇妙なる事もあるものかな。余りの事に証人の身軀を招くことは田村直臣氏も止めたり。左れど第五日(七日)に至り彼は三ヶ月の猶予を得て此ら三名の証言を取り寄せんことを求めたり。彼は泣きて之を求めたり。気の毒に思へる議員のうちには之に賛成したるものもありき。然れども採決に当り中会は其の請求を否決せ

り。彼は井深氏の言を破砕すべき材料を取集むることを拒絶せられたるが故に一切弁論は出来難しと言ひ放てり。中会は止を得ず告訴委員をして其の弁論を継続せしめたり。告訴委員熊野雄七氏の弁論殆んど一時間に亘れり。其趣意井深氏と大同にして小異。其の最も異なる所は氏が醇々として国家的精神を發揮し、愛國者として田村氏を攻撃したるの一事なり。其日午後に至り最早一言をも述べじと断言せる田村直臣は此の回は日本に在る証人を召喚するの猶予を与へられんことを請求せり。議場に於て田村氏の伴侶たる教寄屋橋教会代員原武士氏を首めとし、衆議は際限なきこととて其の請求を容れざりき。此に於て花嫁の著者は席を蹴立てて退席せり。告訴委員は対手の在らざる以上最早弁論は無益なりと云ひぬ。中会は告訴委員と傍聴人とを退席せしめ戸を鎖閉して審議を凝らしたり。席上無罪を主張するものなく、甲は之を讒誣なりと云ひ、乙は過失を以て之を罰すべしと云ひ、之を採決するに当り甲乙各七票なり。議長終に讒誣説に賛同して田村氏は同胞を外人に向ひて讒誣したるものと定りぬ。之を処分する方法に付きても種々の説ありしかど結局之を謹責し深く其の将来を誡しめ且つ委員の起草したる適當の正誤文を内外五種以上の新聞紙に広告せんことを勧告すべしとの議に纏りたり。其の夜七時過ぎ復び開議して其の判決を告訴委員及び田村直臣氏に宣告せしが、田村氏は新聞広告の入費等に付二三の質問を為したるの不服なるを以て大会に上告すべしと予告せり。左しも込み入りたる會議は此に於て閉会を告げたり。(一三五号・明治二十六年十月十三日)

『福音新報』明治学院関係記事

(四—M26—22) 第一回神学生講話会

◎第一回神学生講話会

十一月二十三日午後一時より築地三一会館に於て開かれり、明治学院小倉銳喜、三一神学校吉村大二郎、福音神学校石出精一三氏の外、招聘せし哲学博士淺田栄次氏は伝道師に向つて神の召なる、題にて演説せられ、後茶菓の饗応ありき、今回は忽卒のことにて準備も不十分なりしが、幸に七八十名来会せり、(一四二号・明治二十六年十二月一日)

(四—M26—23) 同志会運動の発足

◎同志会の運動

此程府下日本基督教教会派の青年教役者等相寄りて信仰の復興を計らんとして同志会なる者を組織し先づ運動の第一着歩として来一月五日午後二時より日本橋教会にて東京日本基督教会々員の聯合祈禱大会を開き次で第三月曜より月末まで府下八ヶ所の講義所及教会にて二夜つづ順次説教会を開くことを議決したる由又此旨を沿く地方の各教会へも通報して大に此類の運動を奨励すること及び来二月を期し近県伝道に助長する旨をも議決せりと云ふ、(一四五号・明治二十六年十二月二日)

(四—M26—24) 明治学院生徒募集

明治学院生徒募集

従来経験ある内外教員の外更に文学士大西祝法学士美濃部俊吉林

学士齋藤宇一郎の三氏を聘し益々懇切に教授す入学志願の向は来
年一月八日午前九時来院あれ規則入用の者二銭の郵券を送附すべ
し

明治二十六年十二月

芝区白金 明治学院

(一四六号・明治二十六年十二月二九日)

明治二十七年

(四—M27—1) 植村正久の高知伝道論

高知伝道の一小段落

植村正久

一昨年大仰に集會せし日本基督教会の大会は大いに高知県に伝道せんことを決議せり。之れがために撰挙せられたる委員は資本と伝道者とを獲るにつきて種々の困難に出で遭ひしかど、年末に至りて漸く其の計画も定まりにき。委員の面前に横はれる難題は随分解き去事六かしかりしにも拘らず此の運びに至るを得し其の本を尋ねるに一つには外国伝道会社より支出する金額のほかに日本人より二百円を出すの予算を呈出せしことと明治学院の小倉修吉大石城築大谷虞浜田珍重等の諸氏が大いに奮発して其の適当に受くべき俸給を減せんことを申し出されしに由れり。資本の乏しきがため此ら諸氏のみならず、引き続き松田順平田嶋賢蔵青木澄十郎等の諸氏も同様の厚意を表せられたり。此の一行とともに高知伝道のために特派せられたる巖本善治氏も厳冬に旅費を節約して此の企図を助けられたり。高知伝道は斯の如くして胚胎し斯

の如くに開始せられたり。東京より屢々有力なる援助を送りて伝道の氣勢を添べしとの当初の約束は資金なきと行と云へる人々の身に起れる故障とのために画餅とはなりぬ。殊に残念なりしは委員長片岡健吉氏が政治上の行き懸りより他府県に出でられたるため直接には其の有力なる助けを失ひしことなり。又最も哀むべく悼むべきは昨年の夏小倉修吉氏吉野川に溺没せし一事にぞある。折も折、場所も場所として此の誠忠なる主の僕の死は高知伝道に手痛き打撃を与へしに相違なし中には之がために失望したる者もありしならん。其の他伝道者の病氣伝道地の出来事等苦情百出せり。ああ高知伝道は斯の如くして続けられたり。此れらの事情に對して、幾分か吾人の意を強うせしものは多田素氏の高知に赴任せられしことなり。氏が米国行を見合せて伝道の一隊に加はりたるは高知伝道史の慶事にてありき。安芸の手塚新田島賢蔵後免の伊藤貫一山田の浜田珍重本山の小倉修吉村井正雄佐川の大谷虞浜田権三郎高岡の大石城築篠原方愛秋山の松田順平の諸氏高知の多田素氏其の後に赴任せせる青木澄十郎氏等或ひは死し、或ひは病み、或ひは休養し、或ひは任所を更めたるなど種々の変化ありしにも拘らず各々其の持場持場を固めて、忠勤を励まれ、千里懸軍重圍のうち在りて苦戦するもの此に一年。援助を俟ちて援助至らず。福音を説けども、人の心多くは頑として之に応ぜず。或るときは貧に攻められ、又或る時は他の苦みに侵されて憂悶失意の日を送りしこともありしならん。昨年巖本氏高知を去るの日伝道地に孤立する伝道者程苦しきもの有るべからずと云ひしは実に左る事な

り。然れども主は彼等が涙とともに勤勞せる耕地に恩慈を垂れ給ひぬ。其の已に収獲せしもの百七十五人の受洗者あり。其のまさに本年に入りて収獲を待ちつつあるもの之に教倍するならん。去年中聖書讀美歌其の他の基督書籍にして高知県下に販売せられたるもの夥多しく実に全帝国に冠たり。本山の如きは山間の僻地なりといへども優に福音の化を蒙り、小学にも、村童の風俗にも、基督教の勢力著明にして旧習の神祭俄かに衰へ殆んど全村を擧げて基督の降誕節を祝するの勢ひとはなりぬ。是れ土佐伝道將來の吉兆に非ずや。大会にて定めたる高知伝道は斯の如くに其の局を結べり。天に在りて此の結末を神に謝する所の小倉修吉氏重病の床に臥して主を讀むる村井正雄氏其の他各伝道者及び高知教会とともにまた主を愛する人々とともに此の事を喜びて教会の司牧大監督に祝謝せざるべからず。大会の事業は此に一ト先其の局了を告ぐるに至れり。然れども此は高知伝道のためには僅かに一小段落を告げたるのみ。聞く高知の基督信徒は大いに奮発して、此くの如く初められたる事業を大成せんことを期すと。其の益々主に忠誠謙遜にして救ひの道を擴張するに熱心せられんことは吾人の切に冀望する所なり。(一四八号・明治二十七年一月十二日)

(四—M27—2) 同志会連夜説教会広告

同志会 教勢 振興 連夜 大説教会 毎夕六時

千住講義所 千住一丁目 二十八番地

十五日 星野又吉(万国民の父) 北郷保守(人の元氣) 福田錠二(神の全能力) 十六日 小林格(基督教に對する心情) 秋葉省像(基督教の人生觀) 泉弥六(精神的眼光)

下谷教会 三丁目六十一番地

十七日 内田芳雄(基督教徒の愛国心) 川崎巳之太郎(彼得の危機) 貴山幸次郎(今は醒むべきの時) 十八日 北郷(理論と實際) 星野(基督教徒と自由) 吉田里美(ナザレの工匠)

本所教会 本所区 龜沢町

十九日 小林(不滿の世界) 泉(使徒保羅) 内田(我不為福音) 二十日 星野(人生之秘義) 川崎(信教とは何ぞ) 吉田(日本人と基督教)

日本橋教会 本白銀町 白幡橋際

二十一日 貴山(基督教の勝利) 北郷(機不可失) 吉田(人間の眞価) 二十二日 福田(欲火投人於地來) 小林(神の人摩西) 秋葉(基督の教し天国)

新栄教会 築地居留地 二十七番地

二十三日 内田(我党の覚悟) 川崎(基督教徒とは何ぞ) 北山巖(信) 二十四日 湯谷礎一郎(神の国) 北郷(得意の我と失意の我) 秋葉(基督の弟子)

麹町教会 麹町区平川町 三丁目

二十五日 星野(眞理とは何ぞ) 小林(社会と基督教) 福田(宗教界革新の時機) 二十六日 貴山(伝道の好時機) 湯谷(悔改の实談) 吉田(天啓と基督教)

赤坂教会 赤坂区新町 三丁目

二十七日 内田(救とは何ぞ) 北郷(如何にして生活すべきや) 北山(愛) 二十八日 川崎(人生の要聞) 秋葉(基督の効) 貴山(天国は近つて)

牛込教会 弘方町 二十四番地

二十九日 小林(基督の罪案) 湯谷(基督教と社会) 吉田(基督教と楽天主義) 三十日 星野(永遠の生命) 秋葉(宗教心の四要素) 福田(信移山)

市ヶ谷講義所 牛込区市ヶ谷 菜王寺前町

三十一日 内田(近時の宗教論) 福田(苦痛) 貴山(基督教の元氣) (一四八号・明治二十七年一月十二日)

(四一M27-3) プリンストンにおけるインブリー

プリンストンに於けるイムブリー博士

博士イムブリー氏帰国後、ローレンス、ウキルにトシ、幽邊閑雅の孤村に愛児の教育に余念なかりしが、流石氏の事として諸方より演説説教を依頼するもの多く、ために往る五月到着以來説教せざる安息日は殆ど稀なりといふ、氏は亦たプリンストン大学神学部生徒の撰挙に由り、当学年外国伝道演説の講師と為り、去る十二月五日より四回の演説をせられたり、今ま其の順序を書き置らねんに、

第一回境遇、第二回日本キリスト教会第一、第三回日本キリスト教会第二、第四回特別問題にして日本国外部の状況より立論し、

内部思想の変遷より日本キリスト教会に論及し、其設立より進歩を詳述し、最後に種々の問題に対し明確に答弁せられたり、氏は第二回に於て日本伝道の特徴を詳述し、其アフリカ、若くは支那と相連せる所以を説明し、後者においては教会なるもの設立したりと雖も只だ此れミッション附屬に過ぎず、其教会は只だミッションの補助によりて維持しあるのみ、左れば何程教会増加したればとて、之がためキリスト教の勢力其地に増加したりと思ふ可からず、然れども前者にありては、已に日本キリスト教会なるものあり、日本信徒によりて設立せられ、日本信徒によりて維持せらる、ミッショナリの此れに対する師にあらず、長にあらず、若し云ふを得べくは只だ其れ協力者たるのみ、新たに一個の旗色を該地伝道界に顯すは吾人の望にあらず吾人は此の已に建設せられし教会に共力し、此を發達せしむるにあるのみ、共力の業其主権の所在に關して或は明確を欠くの憂をいだくものあらん、然れども其の主は忠なり、其發達の迅速なる、余は此の外良策なきを信する也云々と断言せられ、次に氏は日本キリスト教会初代の歴史を陳述し、其共力主義着々効を奏せしを詳述し、畢竟日本伝道の他地方に比し奇跡的に進歩せしも、只だ此の共力主義に外ならず、共力主義の土着信徒をして独立の氣を發揮せしめ敢為の精神に富しむるを説明し、更に進で支那信徒と日本信徒を比較し、彼は責任をミッショナリに譲り、此は進で責任の衝に當らんとすると説

き、此れ日本信徒の特色なり又た日本伝道成効の秘訣なりと云はれたり、氏は又教会の一頓挫を來たせし理由として四箇の要点を

挙げられたり、(第一)政治の運動(第二)保守反動(第三)セルマン唯理派(第四)ブレマス、プレザレンの輸入此れ也、而して氏は昨年植村氏が大阪大会に於ける説教の一句を引きて吾人は実に神の教会を日本の地に立つるを以て畢世の目的とせざる可からず云々と揚言し此の演説を終はられたり、

第三回に於て氏は如何なる種類の方法が日本伝道に關し用ゐられしかを論じ、医療、出版、教育の三者を列挙し、医療の効初代にありては尤も著しかりしも日進月歩の勢は今日其必要を見ざるに至れり、此れ帝国大学の医学部の發達著しく欧米諸國に比して敢て恥づるなきにいたりたれば也、教書の翻訳、著述、青年の教導修養は今日畢生の力を要すと云ひ、ミッショナリの諸氏が此らの事業に従事しつつあるを述べ今日日本教会にありて重要な地位を占め居るもの多くは諸氏の門下に学びたものなるを語り、大に日本教役者の技倆を称揚し、其會議に於ける動作其講談に於ける弁論寧ろ米國の教役者にまさるも、敢て劣る事なきを云はれたり、次に氏は此等の諸氏の組織になれる日本キリスト教会の制度を説明し、移りて内國伝道局の組織方法を説明し、此等機關が如何に日本伝道界に活動しつつあるかを説明せんとし土佐に於る伝道の有様を述べ、其由來を語り、其有様を説明し如何に求道者がキリスト教に対して質問せしか、如何に内外の教役者が此れに対して忠実に働しかを述べ、幾度となく該地の伝道は外國伝道史上特筆大書すべき価値あるを絶叫し、終りに當り某宣教師も某長老が海辺散策の時、感極り情熱し互に白砂の上にひさまづきておおまよ、

はやく神の教会の土佐の山々に立つの日を来らせ給へと祈りし一句を引き此の演説を終られたり、

第四回の特別問題は氏最も勢力を込められし講説にや、論理の整然なる考証の正確なる前数回の演説に立ち優りたる心地せり、銀音朗々満堂に響ける一時間の後、教頭グリーン博士立ちて深くイムブリー氏に其勞を謝し、併せて講師の人擲其當を得たるを生徒に祝せられたり、博士は更に語を次ぎ、日本に於ける長老教会の所置に關しては他より聞き込みたる事ありて、多少配慮するものもありたれど、今まイムブリー氏の説明によりて其真相を知るを得、大に満足せり、余輩は氏が日本にありて其効勞の大なること記憶せざる可らず云々と云はれたり、

イムブリー氏は此の日特別問題と題し(第一)教会の合同、(第二)合議制の適用(第三)信仰の告白(第四)日本人とミッショナリの關係、(第五)援軍の五項に分ち順次説明せられたり、此等の問題は日本人たる吾人には当然の事と見ゆれども、米國長老派中の長老派たる人々には非常に感情を与へしと見へたり、加ふるに当年の春、某日本人あり諸方を遊説して信條の改正を非難し、在日本の宣教師諸氏を罵詈せしかば此れがため日本キリスト教会の位置を誤解せしもの間々ありたれば也、氏説明して曰けらく信條の改正は時勢の必要によりてなせる迄なり、他に理由あるにあらず、ニカヤ時代にはニカヤ信條を要し、使徒時代には使徒信條を要するは、理の当然、日本に於ける基督教は初代なり、此を二千年間幾多の歴史に關係せし米國の教会と同一視するは非なり云

々外国宣教師と日本人との關係に關して氏は説明して曰けらく、従前二箇の説ありて互に衝突せり其一はミッショナリを主とし日本人此れが命を奉ず可く、其他は日本人主としてミッショナリ此れに従ふべしと云ふ事也、然れども余を以て此を見るに兩者共に誤れり余が主義は「コーオペレーション」なり、互に長たる可らず、従たる可らず、同一の權力、同一の位置を専有して可なり、余は日本キリスト教会には已に此の主義實際に行れあるを見る、而して日本に於ける成功は此の主義より來れるを確信す云々、援軍に關しては氏説明して曰けらく或る日本人が往々日本には已にミッショナリの必要なしと云ふものある由なれど、此れ其一部少數の意見にして經驗なき青年の大言と見て可也、余が日本を發するの際、東京著名の信徒は余がため、送別会を開き、席上余に一個の手紙を与へたり、其意余に再度日本に來ることを望むにあれど亦た一般日本にはミッショナリの必要あり、日本キリスト教会の要素を代表するものなれば余は此の手紙の部分にして外国宣教師に關する部分を読て此の講説を終らん云々

斯くて拍手喝采の裡氏は四回に続きし、此の有益の講話を終られたり、要するに此の講説は遺憾なき迄に日本人の真相を發露し、日本人が希望する思想は凡て氏の口によりて、此の大西洋の浜岸に響けり、余が筆只だ其大要を記するに止る、委細は近日刊行せらるる氏の講義録によりて、其の全体を承知せられん事を望むプリンストン大学神学科には昨年来、新たに外国伝道の講義料を新設せられ、昨年は博士デニス氏其第一回を講じ、本年はイムブリー

11氏第二回を講ぜられたり、デニス氏はミリアのバールト滞在(2)の宣教師にして一般外国伝道を概論し、本年は其区分に入りしものにして、イムブリー氏は「日本に於るプレスビテリアン及びリフォームド教会の働き」と題せられたり

明治二十六年十二月二十五日認む 陶山斌二郎

(一五一号・明治二十七年二月二日)

(四—M27—4) 高知伝道慰勞会

◎明治学院に於ける高知伝道慰勞会

昨年中休業して高知県大挙伝道に従事せられたる大石城築、浜田珍重両氏、こたび復校せられたるに付、去二十六日教授及び同窓等その慰勞会を催ふせり。生徒総代として赤須広氏、教授総代として井深梶之助氏、何れも慰勞の辞を述べられ、二氏の答辞感話ありて中々盛なる集会なりし。

其翌二十七日山鹿氏来校、普通学部講堂に於て名古屋教会復興の景況を演べられたり。(一五一号・明治二十七年二月二日)

(四—M27—5) 同志会の趣旨説明

同志会に就き教友諸彦に白す 會員 MK生

後進の不当等が赤手相寄りて組み成し同志会の運動は端なくも教友諸彦の注目し給はること相成り殊に奨励申上げたる各地方の教会及講義所にては何れも応諾せられて去五日に新年祈禱会を開かせられたる旨統々御報知下され年頭勿々全国挙りて同時に天

父の前に熱禱を捧げ申すを得しは実に歡喜此上も無之き次第にて只管感謝致すの外無之候加之其後も引續きて同志会の模様等御問合せ被下候て御厚情の程感佩に堪えず候実は一々御回答申上べきの処なれども乍略儀新報紙上を借りて爰に申述候

同志会は東京に在る日本基督教会の後進役者が相寄りて組織したる者に御座候何れも白面黄物の徒に有之候て学なく才なく識なく智なく履歴もなく肩書もなく従て信用等も無之者に御座候乍併歎々たる一片の所信は乃ち有之不肖ながらも悠々たる前途に向て聯か抱負なるものを申し候然れども相寄り会を結ぶと申しても決して先輩排斥の運動位に力を致すために非らん況んやブリックスとかグリーンとか御幣を担ぎて謀叛評議に汲々たる程の豪膽等は有ち不申候但は今日の教勢に付きては聯か慨する処なき候はず先輩の諸彦中に於ては或は豊かすぎる経歴のために行動思はしからず些細なる事情のために互に疎隔し合ふ候の無きにも候はざるを見て窃に憤慨する所有之候従て我日本基督教会は本邦最古最大の派たるにも拘らず今日の实况は稍や歎すべきもの無きにも候はざるは是を思ひ彼を慮りて徐ろに警醒革新する所あらんと欲し期せずして後進輩だけ相集ひて爰に同志会を結びたる者に候不肖等為んと欲する所極めて多く有之候へ共資力の之に副はざるをば如何とも為し難く候故に当分の間は互に提携協合して種々の劃策をなさんかため毎月一回会合致し居るのみにて候去る十五日より晦日まで十七日間の連夜演説会は僅かに教勢振興運動の第一着として始めて見たるに過ぎ不申候向後益々奮て此種の運動を可致心算

『福音新報』明治学院關係記事

に候同時に各教会の長老執事及其他の有力なる諸彦を訪ふて不肖等の赤心を訴へんと致居候此は府下の運動に係りての事に候へ共同志会の望む所は更に地方伝道の振興にも有之候故に自ら奮ふて神奈川県下各地安房上総常陸野州群馬信州越後佐渡等へも追々に出張致し以てミッション及伝道局以外に立ち共に相助けて大に伝道致さんと存候て先つ初陣として信州群馬馬埜玉辺へ近々に出向くべく候夫れに付き各地方の教友諸彦に御相談を乞ひ贊助願上度事有之候府下の連夜演説会は思はしからざる所なきにしも候はねども新栄教会其他の如きは一方ならぬ盛況に有之候恐らく素志の幾分かは既に酬ひられたるべき歟尚ほ府下及地方の教友諸彦に本会の本色を会得せられたる上は応分に金なり力なりもて御贊助あらんことを翼上候篤志なる諸彦の御照会に對ひ略儀ながら紙上にて勿々申上くること此の如くに御坐候 一月二十九日

二白 仮事務所を京橋区築地二丁目三十九番地 貴山幸次郎方に設け候 (一五二一號・明治二十七年二月二日)

(四一M27-6) 神学部演説会

明治学院 神学部 基督教大演説会

(毎夜六時半開場)

○元大工町教会 (日本橋区元大工町九番地)

二月五日 (月曜) 神の国 (浜田珍重君) キリスト爾を照さん

(赤須広君) 我が宗教 (鹿島英次郎君)

○品川教会 (品川町百四十七番地)

二月六日 (火曜) 神の国は近づけり (笹倉弥吉君) 死 (山中直行君) イエス・キリスト (鶴野市太郎君)

○本所教会 (本所亀沢町二丁目二十六番地)

二月七日 (水曜) 基督の愛 (大石築城君) 祈祷の応驗 (竹林寅藏君) 基督教の神 (竹内平八君)

○明星教会 (下谷区竹町五番地)

二月八日 (木曜) 宇宙の大恩恵者 (松原茂雄君) 国民の道德

(白石喜之助君) 智識と信仰 (白土弥之助)

○两国教会 (日本橋区矢の倉町一番地)

二月九日 (金曜) 我儕何を為す可か (松永文雄君) 文学と基督教

(上野竜君) 生命 (八田三郎君)

○芝教会 (芝区田村町二丁目十五番)

二月十日 (土曜) 国家と基督教 (好川二一君) 心の改革 (国沢篤実君) 歴史の精神 (川添満寿衛君) (一五二一號・明治二十七年二月二日)

(四一M27-7) 明治学院の教勢

◎明治学院教勢

聖書講義は例の如く、日々之れあり、水曜日の朝は講堂にて総理、教理の講話をせられ、夜は祈祷会を開き、教授輪番に司会をなし、各自勧話祈祷し日曜日は各属する所或は望む所の教会に出席し夜は共励会の祈祷会あり、現今生徒中信徒三十七名にして、求道者も多少之れあり、以上は普通生科に關することとなるが、神学生の

方は近來信仰稍振興の模様あり、今回一週間の大運動の如き亦其一証なりといふ可きか。(一五三号・明治二十七年二月十六日)

(四—M27—8) 神学部演説会

◎明治学院神学部の演説会

既に予告ありしが如く、前週神学生諸氏は定めたる各教会に於いて順次開会せられたりき、(マ)毎月中之盛会なりし由、諸氏は尚ほ奮発し居られて、計画中のことありといふ、今回の演説会に於いては各教会にて、会吏大に斡旋せられたれば都合よかりしといふ、今其の模様を摘録すれば、初夜は元左衛門町教会にて開会せられ、聴衆五十余名、第二夜は品川教会にして聴衆満堂、諸氏帰校の途次国賊などと呼びし者ありしといふ、第三夜は本所教会にて開会せられ、竹内氏病氣なりしたために、鈴木氏代演せられたり、是日は一同朝より亀井戸の梅を觀、帰途参会せり、聴衆は学院生徒を合せて七十余名也、第四夜は明星教会にして、雨天なりしにも拘らず四十余名の来会者ありたり、第五夜は両国教会にして聴衆六十名ばかりありたり、第六夜は芝教会にて聴衆百名を超えたり、かくて首尾よく終りたれば一同十二日午後二時より、礼拝堂に集りて感謝会を開き、後学期の運動上相談ありたり、(一五三号・明治二十七年二月十六日)

(四—M27—9) 在京浜日本基督教会有志者の集會とその決議

◎日本橋會堂に於ける集會

本週月曜日の午後二時より日本橋會堂に於て、在京浜日本基督教会有志者の集會あり、俄かのことにて通知の行届かざりしたため、出席すべき人にて、出席せざりし人も少からざりしが、此頃滞京中なる仙台の押川氏を加へてその数は三十四人に及びたり、その姓名を挙ぐれば

藤生 金六	島 芳清	奥野 昌綱
窪庭 友吉	尾崎 宗隆	星野 又吉
小口久左衛門	戸川 安宅	貴志広之助
秋葉 省像	泉 弥六	湯谷礎一郎
石原保太郎	井深梶之助	植村 正久
押川 方義	北山 巖	熊野 雄七
星野 光多	吉田 里美	小林 格
吉田 孝治	山本 秀煌	北郷 保守
岡見千吉郎	九鬼市太郎	巖本 善治
服部 綾雄	藤田 文蔵	山東 直砥
北島 剛三	北島五郎右衛門	川崎巳之太郎
稲垣 信	貴山幸二郎	(旅行不参)
	福田 錠二郎	

先づ山本秀煌氏に乞ふて司會者の席に就かしめ、北山氏に乞ふて書記の勞を委ねし上、仙台の押川方義氏一場の演説をせられたり。その要は日本基督教会の成立及びその性質に於て、任命の重大なることを説き、目下の如く協力一致の精神乏しき時は、日本基督教会の精神を貫徹すること能はざるを憂へ、信条につき、内外の關係につきて、縷々述ぶる所ありたり、引續きて井深梶之助、石

原保太郎、服部綾雄、山東直砥、熊野雄七、植村正久、奥野昌綱、稲垣信、巖本善治、星野光多、戸川安宅、藤田文蔵その他諸氏各々意見を開陳せり。その言ふ所は大抵同一の精神を示したるものにて、満場一致遂に左の如き決議を為すに至れり。決議案の本文は一々之れを記し、その能はざれど今は暫らくその要を摘み、その意味を採りて之を記さん。

日本基督教会の現況を見るに、一致協力の精神に乏しく、為めにその天父に負へる所の大任を成就すること能はざらんを恐る。日本基督教会を愛し、その固有の精神に充さるるものは、奮って協力一致の実を挙げんことを努め、此の弊を矯めざるべからず。之に依て決議すること左の如し。

第一 今や在京の日本基督教会牧師伝道者の間には、信仰のこゝろなどに就きて種々の浮説を逞しうし、或は同志を以て見るべき人の間に、疑惑あるを恐る。又或は保守的の反動に乗じて我が公明正大なる歴史的正統の基督教を奉ずる所の信条を改正して、更に緻密なるものを設けんと企つる人あるに至れり。今日此席に集まるる人々は、他の有志者と共に尽力して、今の信条に示される福音の真理を遵奉するに於て忠実ならんことを期し、併せて之を維持することに尽力せんことを決議す。

第二 日本基督教会と外国諸伝道会社との關係に就きては、近來種々面白からざる事情ありて最早や全く相絶ちて運動するか、然らざれば互ひに誤解を釈き、疑念を去りて協力するかの二者その一を断然採らすべきの時機に切迫せり。日本基督教会は、前

年大会に於て議決せし如く、自給の精神を貴び日本の伝道は終に日本人にて負担し、日本の基督教会は日本にて發育すべきを以てその理想とするものなり。故に諸事此の精神理想に基きて処理すべきこと勿論なり、然れども、日本基督教会は、その起源に於て已に外国諸伝道会社と懇篤親密なる關係を有し、且つその企圖する所の事業は、外国諸伝道会社と相提携して運動するを要すべきもの尠からざるは、亦記憶すべき要点なりといはざるべからず。故に之を情誼の上より見るも、又事の利害の点より考ふるも、内外の關係今の儘にて過ぐるは宜しからず、正當になし得べき限り、事の宜しきを計り、内外協力して可成その關係を円滑ならしめんことを努むるは、当然のことなるべし。同志のものこの事に尽力せんことを決議す。

その日の議事は大略斯くの如きものなりしが、投票を以て事務委員五名を撰定して折悪しくその席に連らざりし人々とも打合せ、着々此の決議の主意を実行せしむることとなりたり。事務委員に撰挙せられたるは

井深槌之助 石原保太郎 山本 秀雄
植村 正久 熊野 雄七

の五氏なり。(一五四号・明治二十七年二月二十三日)

◎日本橋会堂に於ける有志会決議補遺
前号に載せたる日本橋教会に於ける有志会の決議の中に左の一項をも含めり。

前年引続きて帰国せられたるアメルマン、イムブリー、ノック

スの三氏は日本基督教会の建設に与かりて力ありし人々にて、深く本邦の事情に通じたれば内外提携の運動には、甚だ有用なる人々なり。斯くの如き宣教師を一人にても多く要する時なれば、長老教会及びリフォームト教会の伝道会社に三氏を送らんことを請求すること

此の一項は教報に載すべき筈なりしを、欄内余白なくして茲に之を編入せり。(一五五号・明治二十七年三月二日)

(四—M27—10) 神学部同窓への呼びかけ

明治学院神学部出身者諸君

同窓の学友の相互に気脈を通じて常に相提携せんことの必要は日を追ふて逼り来るに付き自今隔月に同窓通信とも名づくべき刷物を配布して大に相互の交情を厚くせんと欲す依て明治学院神学部にも多少の縁故を有せらるる諸君は本月中に左の項目に由りて動靜を通報せられんことを冀ふ

但し宛名は麻布区材木町六十五番地北郷保守と為し郵券二銭を添贈せられたし

卒業の年月 現在の住処 其他の教勢 従事する業

結婚の年月 所感等

四月十三日 東京ニ於テ(発起人)

秋葉 省像	村木 経造	星野 又吉	貴山幸次郎
大石 城築	稲葉 曠二	伊達寛太郎	小林 格
泉 弥六	川崎巳之太郎	大谷 虞	北郷 保守

内田 芳雄 中村 鉄太 浜田 珍重
(一六二号・明治二十七年四月二十日)

(四—M27—11) 明治学院近況

◎府下明治学院近況

去る十一日、支那内地宣教師スミス氏の演説ありたり、演題は『聖靈に満たさる』にて、聖靈に満たされる結果として、第一、謙遜の徳を得、次に、キリストの名の爲めに責めらるるを喜ぶに至るなど、聖書により、歴史に拠りて例証せられ、又た我等クリスチアンはキリストの証者なり、証者の中に世間の評判を聞きて証する者と、書物を読み証する者と、又身自ら見て証する者との三種あり、キリスト信徒は最終のキリストを見たる者、即ち実際にキリストを知り得たる証者ならざる可らずなど、有益なる勸話なりし、

春期休業中、日本橋、赤坂、台町三教会に開きし神学生演説会は何れも相当の聴衆ありて、好都合なりしといふ。(一六三号・明治二十七年四月二十七日)

(四—M27—12) 東山学院近況

◎長崎通信

○東山学院 春期休業中大儀見院長は佐世保に、瀬川氏は島原に、青山氏は中津、日出其他の地方にいつれも巡回せられたり、此際受洗せし者島原にて青年六名、佐世保、中津、日出にては婦人各

一名なり、
去る十四日の夕第二号寄宿舎焼失せしが、荷物は悉皆取り出だし
たり、又火災保険を有せし故に、損害とならざりしは不幸中の幸
なりし、

二十八日生徒一同硫黄島に舟遊を試みたり、是日波平かにして砥
の如く、四隻の小艇前後相望みて、往復共に愉快なりき、又島中
には俊寛の故蹟を歴訪し、或は灯台を一覧し、午餐後は撃劍、繩
引等の催はしありて、十二分の歡を得たり、

教師オルトマンズ氏は来八月六日米國を發し、来朝の途に上らる
る由、同氏の斯く来朝の期速かになりしは、ドクトル、スタウト
氏が其夫人の病氣のため一応帰國せらるるに由るといふ、然れど
も未だ確定せしにはあらず、(二六五号・明治二十七年五月十一日)

(四—M27—13) 小倉修吉追悼会

◎小倉修吉氏追悼会

去る二十七日赤坂教会に於て催ふされ、新島善直氏司合し、大石
城築、浜田珍重両氏の演説あり。又大谷廣氏は悼文を送られたり。
来会者は殆んど満堂なりき。(一六八号・明治二十七年六月一日)

◎高知本山の小倉修吉氏追悼会

去る二十七日同地に於て小倉氏及び同日に相果てたる小児等の為
め追悼会あり、手塚新氏が同会に送りし詩歌左の如しといふ、

往時茫茫呼不回、杜鵑啼血有余哀。想聽今日天城裏 聖主座前

譔聖哉

身はもろく行雲のきりとぎえしかど功は長くのこる君かな
なげかしと枯れしと見えし若草の天津み國にさかゆとおもへば

(一六九号・明治二十七年六月八日)

◎高知県本山の小倉修吉氏追悼会

前号にも報じ置きしが、詳報に接したれば再録せん。

鳥兎勿々妓に一週年とはなりぬ。吾人の記憶して長く忘るべから
ざる五月二十七日は来りぬ。嗚呼昨年の此日は如何なる日ぞや。

是れ即ち有為敬虔にして多望を担へる小倉修吉氏が可憐の三兒子
と共に吉野河底に溺没したるの日なりき。回顧すれば當時の光景
歴々として心目に再現し来り、坐るに懐旧の涙をして自ら禁ずる
能はざらしむるものあり。此日本山講義所に於て午後三時より之

が紀念の式を執行せり。会するもの凡そ六十余人、中には徳島県
巡廻中殊に本会に臨みたる大坂の大石氏及び高知教会の細川義昌、
長野源吉の両氏等ありて、田島氏の説教の外、諸氏の演説並に文
章の朗読あり。満場肅然として何れも仰視するものなく、中に就
きて日曜学校生徒が森下敏子が生前愛吟したる二百二十四番の讚
美歌を連唱したる時の如き、其慈父森下高茂氏の独愛娘を失へる
當時の心事を歴叙したる時の如きは、一人として獻歎せざるもの
なかりし。昨年は後來の伝道如何あらんかと人々殆んど失望した
るにも拘らず、却て此の出来事内は信者に真正なる宗教の生命を
与へ、外益々伝道の門戸をして開拔せしめたり。主の摂理只驚嘆
讚美の外なきことなり。(一七〇号・明治二十七年六月十五日)

(一七二号・明治二十七年六月二十二日)

(四—M27—14) 神学部卒業生送別会と親睦会

◎明治学院神学部卒業生及親睦会

去る十五日緑樹四方を取り巻き南風肌を洗ふ観覧館に於て開かる。教授アレキサンデル氏起て卒業生に奨励を与へられ、笹倉弥吉氏生徒総代として別辞を呈し、卒業生総代大石城築氏の答辞あり、それより親睦会にうつり茶の菓饗あり、博士フルベッキ氏巧みに面白き話をせられ、覚へず頷を解き、談笑時を移し日の傾く頃散会しぬ。(一七二号・明治二十七年六月二十二日)

(四—M27—15) 同窓会設立企図

◎明治学院同窓会設立の企図

京都の同志社に校友会あり、青山の英和学校に同窓会あり、明治学院にても此度同窓会設立の企図ありと云ふ、則ち来七月の大会に際し、同院関係者の多く来会するを機とし、此相談を纏めんがため、北山、貴山、井深、北郷の諸氏は既に左の通知書を同院神学部の出身者に配附したと云ふ、

拜啓明治学院神学部の同窓者は其数既に百有余名の多きに上り候処多事の世の中誠に疎遠に相成りがちに付来る七月東京に於て開かるる大会の開期中を機として右同窓者の大会を相開き一は以て従来の交情を温め一は以て将来の團結を計り尚ほ又同会継続の方法及び機関雑誌発刊の件等に付き篤と御相談仕度候に付き何卒奮て其際には御来会被下度此段予め御通報申上候

(四—M27—16) 神学生の夏期伝道と卒業生任地

◎明治学院神学校の夏期伝道

同校の諸氏中夏期休業の間、府下にて伝道せらるる人々は小倉銳喜、松原茂雄、笹倉弥吉、白井胤録、島田正七、和田三郎、川田繁太郎、赤須広、鈴木直丸、竹林寅造、池幸雄、山田幸三(以上神学本科)上野竜、八田金三郎、鶴野市太郎(以上別科)好川二一、松永文雄(高知)。国沢篤実(高田)。千屋和(信州松本)。白石喜之助(神奈川県横須賀)。山中直行(愛知県下)。山野友一郎(柿木)。千磐武雄(長野)。矢嶋宇吉(千葉)。長山萬二(水戸)。浜田珍重(宇都宮)。川添萬寿得(同)。長谷川峰吉(九十九里)。鹿嶋秀二郎(武州志木)。清水久次郎(佐倉)。河野政喜(春日)。四方田慶治(佐倉)。馬場茂作(軽井沢)尚ほ漏れたるもあるべけれど、今は聞き及べる丈を記し置くのみ。

◎明治学院神学校卒業生

本年の卒業生中小倉、松原、浜田の三氏が夏期中の任地は右に記せる如し。浜田氏は多分夏期後も引続き宇都宮に伝道せらるることとなるべく、亦大石城築氏は千葉講義所に聘せられ、爾来同所の伝道を受持たることとなれり。(一七二号・明治二十七年六月二十九日)

『福音新報』明治学院関係記事

(四—M27—17) 明治学院卒業式

○明治学院 六月二十七日卒業式を執行せらる。卒業生の中普通学部に於ては郡山源四郎氏・神学部に於ては大石城築氏の演説あり。次に巖本善治氏の演説あり、普通学部総代として早坂栄二氏神学部総代として浜田珍重氏答辞を述べらる。此日の来賓は凡そ二百五十名なりき。神学部卒業生の姓名は前号に掲げつ、今は普通学部の方を記す。

秦 庄吉 早坂 栄二 一色 虎児
伊藤栄次郎 北村 重昌 郡山源四郎
榎部 信一 松本 泰吉 村松米太郎
大井竹次郎 大窪 貫二

(一七三号・明治二七年七月六日)

(四—M27—18) 個人消息

個人杉森此馬氏は今回明治学院を辞し、福岡に赴かるる由
青木澄十郎氏は今回組合教会に転会し、尚ほ同志社神学校に入學せらるるといふ、
多田素氏は愈本日出発し、米国ニューヨークユニオン神学校に向はれたり

又松岡胤氏も同船にてポストンに向はる(一八三号・明治二十七月九月十四日)

(四—M27—19) 明治学院における戦勝祝会

○明治学院に於ける我軍勝利の祝会

去る二十四日午前九時普通学部講堂に於て開かれ、教員生徒交々祝詞をのぶ、(一八六号・明治二十七年十月五日)

(四—M27—20) 日本基督教大会伝道局広告

日本基督教会の諸愛兄弟に告ぐ

拜啓仕候陳者御承知の如く去る七月東京に於て開会せる日本基督教会の大会は新たに伝道局条例を作り従前と異なりたる方法に依りて伝道致す儀と相成候今其の注目すべき諸点を挙ぐれば

一 此の伝道局は外国の伝道会社等と全く關係を絶ちて運動するものなり

一 此の伝道局は日本基督教徒の間に在りては最首の企図にて実に独立の先鋒なり。

一 此の伝道局は中会の伝道委員を無視するものに非ず之と交渉し、相互の運動をして円滑便利ならしむるを期するものなり
一 此の伝道局は日本基督教会伝道の大勢に注目し、全体の有様に依りて其の運動の方針を定むるものなり。然らざれば教会の各部偏立局在して其の運動或ひは支離滅裂の弊あらんを恐る。

一 此の伝道局の成功は大会を活すの唯一法なり。大会に伝道の事業なくんば殆んど死物に等しきの觀あらん。若し日本基督教会の各部一致して伝道すること無くんば一の有機団体たるの実を挙ぐる方法無かるべし。

一 日本伝道の大勢を察して、各部の力を或る要所(一ヶ所に限

(はず)に集注するは極めて必要なることなり。伝道局は実に此の目的に達するの唯一機関たり

今や国力大いに膨脹して、外征の挙あるとともに、海外伝道の企を為すものあるに至れり。此れ実に伝道興隆の秋に非ずや。此際日本基督教会は鋭意奮進して独立の伝道を内国の諸要所に試み一は以て基督の聖意に答へ奉り一は以て東洋の先進国を以て自任する此の帝国の根本的改新に向ひて、其の責任を尽すべき儀と存候。思ふに今年七月日本基督教会の大会が新に此の如き伝道局を設け候は実に此の千歳の一時に於て、此の絶大の事業を負担したるものに候。伝道局の現状を見れば資金少く力微弱にして大いに為すあるに足らざる如くに候得ども、局員は深く時事に感激し、且つ主に在りて日本基督教会に属する諸愛兄弟の精神を信じ、殊に此の任命を授けたまへる神に頼みて、熟議の上先づ長野県、北海道及び九州の中各一ヶ所に伝道地を開くことに決議仕り候。而して其の伝道の方法等に至りても稍や従来と異なりて一生面を開かんと欲するの志望に御座候。局員等自ら掃らず奮つて此の大事業に着手せんと欲す。諸愛兄弟が主に祈りて懇切なる同情を此の企圖に表せられ、祈りの補助を与へらるるは勿論、多少に限らず伝道資金を寄附せられんことを懇請す。

一大會書記より通知せられし毎月第一日曜日の集金は教会に於ても一個人に於ても成るべく御奨励あらんことを願ふ。

一各教会に伝道局寄附金を取扱ふべき委員を置かれんことを願ふ。

『福音新報』明治学院関係記事

一 一個人にして毎月若くは一時に伝道局に宛て寄附金を直送し若くは特に其所属教会の委員まで出金する有志者を募るは甚だ必要と存じられ候。

一 総べて寄附金は毎月福音新報に広告すべし。或る場合に於ては別に受領書をも差出すべし。

一 伝道局事業の模様は時々福音新報若くは他の方法を以て御報知申上ぐ可く候。

一 大会にて撰挙せられたる伝道局員は左の如くに有之候

押川 方義 大儀見元一郎

井深 棍之助 貴山 幸次郎

瀬川 浅 アレキサンドル

留川 一路 服部 章蔵

山本 秀煌 植村 正久

三浦 徹 (欠員一名)

一 本局役員は左の如くに有之候

局長 大儀見元一郎 (長崎市寺町興福寺内)

書記 山本 秀煌

(神奈川県久良岐郡戸太村戸部五十四番地)

會計 貴山 幸次郎

同 アレキサンドル

事務委員長 井深 棍之助

『福音新報』明治学院関係記事

事務委員 山本 秀煌

同 貴山 幸次郎

同 アレキサンドル

同 植村 正久

一寄附金は

東京京橋区築地二丁目三十九番地

貴山 幸次郎

宛にて御送付下され度候。

一外国有志者の寄付金及び通信は

東京京橋区築地新栄町四十二番地

チイ・チイ・アレキサンドル

宛にて御送達下され度候

(一八九号・明治二十七年十月二十六日)

(四—M 27—21) 東山学院近況

◎長崎東山学院通信

修学旅行。神学部、普通学部並びに教員諸氏と、共に四十余名、去る十月二十九日諫早(当市を距る八里)に修学旅行を試みたり。生憎同日午後三時より雷雨となりしため、着後外出をなすこと能はず、空しく旅館に籠居せしが、夜に至り瀬川氏の発議にて談話会を開き、十分の歓を尽したり。翌日は天気一変、昨日と全く異りて、萬里の秋晴となりしかば、或は山野に、或は神社仏閣に、各散策をなしぬ。帰路日見峠を経しが、上り一里に余る嶮坂なり

しも、思ひ思ひの輕装にて、愉快に勇壮に踏み破りぬ。因に云ふ、当院の修学旅行は今回を以て嚆矢とす。

送別会 本科第三年生なる栗屋正助氏は徴兵検査の上、騎兵となり、十二月一日熊本第五師団に入營せらるることとなりたれば、其の送別会を兼ね長崎教会の親睦会を、去る九日当院体操場にて催はせり、演説、文章、詩歌あり、後余興として生徒の劍舞、梅ヶ崎女学校生徒の琴、安達操一氏の演芸等あり、一同歡樂を尽くして散会せり。(一九三号・明治二十七年十一月二十三日)

(四—M 27—22) 明治学院の戦勝祝賀会

◎明治学院の祝捷会

明治学院にては帝國軍旅が旅順口を占領したる大捷利を祝せん為め去る二十六日午後六時より神学部普通学部の教員生徒打揃ひ祝意を表せし由、(一九四号・明治二十七年十一月三十日)

明治二十八年

(四—M 28—1) 明治学院卒業式

◎明治学院第十回卒業式

去る二十七日芝白金の明治学院にては、第十回の卒業式ありたり、開会時刻未だ至らざるに、式場なる同院講堂は内外の來賓を以て、充滿す、定刻午後二時に至るや、マコーレー博士の祈禱聖書朗読を以て開会す、始に普通学部卒業生末松多美彦君、(演題、批評)

次に旧普通学部卒業生政田辱治君、(演題、通有性) 熟れも英語を以て演説せられ、終りに神学部卒業生松永文雄君(演題、歴史に於けるカルヴキンの地位) 邦語を以て演説せらる、三君共流暢の弁を以て頗る花やかに論じ来り弁じ去られし所、来会者驚嘆せり、之れに次で枢密顧問大島圭介氏の簡單なる演説あり、着実に処世の心得ともなるべきことを語り特に忍耐の必要を説かる、演説の後総理井深梶之助氏卒業証書を授与せられ、普通学部総代として川井運吉神学部総代として好川一二の両氏出でて答辭を述べ、続いて懸賞論文優等者に金牌を授与せらる、(同賞牌を受けしは浅見氏なりき) 斯くて祝詞ありて此式を閉づ、同日は朝来の曇天晴れ渡りて一層の爽快を感ぜしめ、ヴァイオリン、ピアノの合奏亦頗る此盛式を助けたり、同日卒業証書を受領せられしは左の諸君なり

○普通学部普通科

樺島 樸 熊野 春江 篠原 耐
末松多美彦

○旧普通学部

秋葉鑑次郎 浅見好太郎 平野 円
川井 運吉 政田 辰治 中沢 貞蔵

八木 篤造

○神学部

赤須 広 千屋 和 河田繁太郎
松永 文雄 笹倉 弥吉 白井 胤録

『福音新報』明治学院關係記事

白石喜之助 鈴木 直丸 竹林 寅蔵

好川 一二

○同別科

白土弥之助 竹内 平八 鵜野市太郎

(二二二号・明治二十八年四月五日)

(四一M28—2) 神学生の夏期伝道

◎明治学院神学部諸氏の夏期伝道

同神学校去ぬる十五日を以て夏期休業の時期に入りぬ、修学中の諸氏四十余名は之より三四ヶ月の間府下と地方とに分れて伝道に従事せらる、其の功蓋し僅少に非るべし、教会及び伝道地の其の利益に与かるも多からん、明治学院神学部別科の卒業生白土弥之助氏は長老ミッシヨンの依頼を受けて上州桐生に赴任せり

(二一九号・明治二十八年五月二十四日)

(四一M28—3) 東山学院神学部長の交代

◎東山学院の神学部長

スタウト氏帰国せられしに付き瀨川浅氏其の後任となられたる由
(二二〇号・明治二十八年五月三十一日)

(四一M28—4) 神学部第二回同窓会総会

七月十一日午後六時より名古屋市西魚町御納屋楼上に於て、第二回総会を開く、会する者二十二名、初に幹事貴山氏の過去一年間

に於ける事務会計等の報告あり、次で幹事の改撰を行ひしに石原秋葉、貴山の三氏当撰、次で議事あり、一年四回発兌すべき通信雑誌を廢して、其代り明治学院より発行せらるべき(多分)文学雑誌に特に本会の通信欄を設け、會員皆之を購読すること、及び一年三十銭の会費を改めて十銭とすることを決せり、後坂野氏の祈禱を以て一同会食をなし、新任幹事石原氏の挨拶に就て函館の栗原宗治氏、神戸の青木仲英氏(氏特に面白き遼東実見談あり)豊浦の青山準次郎氏等の演説あり、尚ほ山本氏、吉川氏等の感話井深氏、熊野氏の明治学院近况報道あり、一同歎を尽して散会したり、因に記す神学部卒業生のみにて、已に百十名あり、内就眠者六名、全く伝道界を離れたる者四十五名にして、他は概ね夫々諸派に於て重要な働を為しつつありと云ふ、本会に關する通信は当分の中東京築地二ノ三十九貴山方に宛て送られて可なり、(七月二十九日貴山氏報)(五号・明治二十八年八月二日)

(四—M28—5) 石本三十郎の死去

明治学院の教授たる同氏は先年渡米して、プリンストンの大学に修学せられ居りしが、九月中腸室扶斯に罹り、病勢次第に重り、終に本月二日午前八時二十分此世に亡き人とはなりぬ。来年帰朝の上はと思ひし事業の独り世に遺れる果敢なき如何にぞや。明治学院は言ふに及ばず、日本基督教会は此の少き同労者を失なひたるを深く残念に思ふことならん。(二十二号・明治二十八年十一月二十九日)

(四—M28—6) 石本三十郎追悼会

○明治学院に於ける追悼会

前月上旬米國に於て客死したる明治学院教授石本三十郎氏の追悼会は同月二十七日同学院に於て催さる午後二時即ち預定の時刻に達するや数輛の馬車数十の人力車は構内に並び来会者は犇々と詰め掛けて左しにも広きサンダム館の礼拝堂も殆んど立錫の地なきに至る司會者は井深氏なり氏は懇に弔ふて曰く人生誰か死なからんや又誰か死に付ての見解を有せざらんや而かも其事実に際会しては平生学得したる見解も往々にして曇りゆき宛然夕陽斜なる所眸を放つて雲烟模糊たる間に遠山を眺むるが如し古来大人君子にして尚ほ然り左れど我儕は只須らく旧約の聖徒と共に『我儕を判くものは活く』との信仰を保ちて満足せむと余音嫻々として拳坐寂々たり熊野雄七氏は同郷の人なるを以て殊に石本氏の小伝を述べ冒頭に曰く氏は嘗て余が老父の就眠の際には必らず其履歴を朗読せんことを約せしことありき而かも如今却て所を換へ老父は依然健在するに自ら天涯万里の異域に客死し乃ち余をして其履歴を述べしむるに至ると是れより氏が熊野氏の家嚴亨堂氏の門に入りたること東上して横浜に遊びたること転じて東京に遊び遂に雄國を懷きて米國に遊びたること帰朝後著述を為さんと期せしこと等を纏述せり次にマコレー博士の悼辞あり後水蘆采陽氏の弔詞あり曰く余と氏の間は固より師弟の關係あり然れども余が校堂以外に氏より蒙りたる恩化亦口舌に尽くし難し今や端なく氏の訃音に接

す所謂死者をして死者を葬らしむるの真理なるを知れども神よ願くは余をして外国に死せる石本氏を葬らしめよとの追悼の念禁じ難し氏は元來富岳を愛して既に登ること數回なりき富岳は千古猶ほ依然たれども氏は則ち亡し、然れども今や富岳の白雪よりも清澄なる信念を懷いて既に富岳に勝る天国に上りたるや疑なし於是余は心緒紛々怵むべきか將た慶すべきかを知らずと次に生徒總代として神学部よりは国沢氏普通学部より篠原氏の悼辞朗誦あり次に石原保太郎氏の祈祷あり其言遺族に及ぶや曰く彼の遺族には未だ東西を弁せず黑白を知らず氏の慈恩をも感ずる能はざる頃はなき嬰兒もあり……（語暫らく断えたる後）神よ我れ云ふべき所を知らず願くは彼等を御手にて護り給へと此時滿堂涙を吞んで往々歎歎の聲さへ聞えぬ此くてアレキサンドル氏の祝福を以て終る閉会するに際して富岡氏の發議あり即ち石本氏の教授薰陶を蒙れる者共は此際宜しく師恩を懷ふ微志を表し以て聯かにても未亡人を慰藉したきものなりと云ふにあり此くて散会したるは午後四時半金風蕭颯として落葉を捲き晚鴉啞々として館外に鳴く、（二十三号・明治二十八年十二月六日）

（四—M28—7） 石本三十郎小伝

故石本三十郎氏の小伝

文久二年九月二十三日今の太陽曆にすれば十一月三日肥前国大村藩公の城下片町に生る金物商山口儀三郎氏の二男也年甫て四歳同町雜貨商石本徳藏氏の養子となる幼にして伶俐人に過ぐ年尚三四

『福音新報』明治学院関係記事

歳の頃未だ曾て字を習はざるに往々紙を請ひ筆を取て之に書することあり父母怪んで之を驗すれば字画頗る整然たり如何にして之を學びたりやを質せば日々保姆の背上に在りて市街を徘徊するの實際商家の店頭に掲げある看板を視て之を習得したるなりと云ふ又記憶力極めて強く母の寝物語りに彼桃太郎舌切雀等の如き昔物語を一たび聴く時は能く之を記憶し翌朝に至り尽く之を反復して二語をも誤らざりしと云ふ其近隣に板坂俊道と謂へる医師ありしが此児の伶俐なるを愛し閑暇あれば常に之を我家に呼び唐詩選を教へて暗誦せしむ教ふること一二回にして能く之を暗んじ數日ならずして五言絶句を概ね暗吟するに至れり医師益々其才を愛し児の齡未だ六歳に滿たざる時試みに孝経の素読を授け翌日之を復読せしめしに更に渋滞する所なかりければ此兒真に教ゆべしとて是より四書五経の素読を教授したりしに業大に進み十歳の頃は史記の講義を聴くに至れり然れども是れ甚だ不完全なる教育なりき何となれば當時未だ今日の如き小学の制度立たず藩立の学校はありしも士族の外容易に入学するを得ず加之商家の子弟は只僅に筆算を學べば足れりとなし會々儒學に志す者あれば無用の事をなす者なりとて之を擯斥するが如き風習なるが故に規律ある学校にも又儒者の門にも入ることを得ざりしに由るなり明治四年廢藩置縣となりしも封建の余習未だ脱せず士族平民の區別懸隔依然当藩地に於ては尚従前の学校を存し士民を混入せしめざるを以て商家の子たる石本氏は十一歳の時までは学校なる者の味を知らざりき又儒者らしき者に從學せしこともなかりき先是当藩士熊野亨堂氏多くの

子弟を薰陶教育し居りしも皆士族の子弟にして農商家の子弟の敢て入学を請ふ者なかりき而して氏は如何にもして其門に入らんを熱望し之を其養父母に諮る養父母其情の切なるを知るも大に憚る所あり躊躇して決せず氏益々熱望して已まざりければ養父母遂に心を決し他の批評をも顧みず養父自ら氏を携へて熊野亭堂氏に至り其事情を告げ入学を許さんことを請ふ亭堂氏曰く今の時に当り何ぞ彼此を論すべけんやとて直に之を諾す此時明治六年の四月十七日にして氏の年齢は十一歳なりき是より士族の子弟と共に業を受け数日ならずして学業に大進み斬然頭角を顕はずに至る士族の子弟等皆て氏の商家の子たるを以て頗る之を軽侮せるも其学業の進歩著しきを見て稍之を嫉み腕力を以て之を凌がんことを企て之を挑むこと屢々なり然れども氏は常に温容謙辞を以て之に接しければ彼等遂に手を下すこと能はざりしと云ふ明治六年の末小令出で領内の各村に小学校建設せらる而して其最大なるものを致島小学及琴浦小学の二校とす氏は琴浦小学に入り初より上級生となり励精勉学常に級中の首座を占め試験毎に優等賞を受く地理歴史の二科は其最も長ずる所たり而して小学校の課程のみを以て足れりとせず尚熊野亭堂氏に従学すること初の如し明治八年六月熊野雄七氏其家族を横浜に迎へんが為に帰郷せし際其父亭堂氏を紹介して曰く此児は町家の子なるが学に志すこと甚篤く三年前余が門に入りしより今日まで致々怠らず疾の故にあざれば一日も学を廢したることなし学業の進歩同年輩の企て及ぶ所にあらずと雄七氏其横浜より携帯する所の支那訳白文聖書天道溯源及び唐本數

種を読ましめたるに大抵能く之を解説したり雄七氏其奇才に驚き遂に英語を教へんとて「エービシー」を授けしに日ならずして巧に其音を発するを得たれば英書を読ましめんとせしも其携ふる所は只英訳聖書天路歷程及び二三の小説類に過ぎざるを以て聖書の詩篇を教へたりしに甚だ不思議なる程能く之を習へり雄七氏益々其非凡なるを認め父亭堂氏と計り横浜へ携へ往き完全なる教育を授けんとて其父母を説諭せしに彼等其兒を東京若くは横浜の如き遠地に遣し学問せしむる程に教育の必要を感じず加ふるに家甚富むにあざれば学資を出すこと能はずとて固く之を拒みたり然れども熊野父子深く之を惜み学資を送るを要せず万事扶助すべければ安心して随伴せしめよと懇諭して已まざりしかば彼等遂に之を肯するに至れり此時氏は十三歳なりき其年七月三十日熊野氏拳族と共に其郷里を發し横浜に向ふ崎陽より横浜に至るの間風波極めて平穩なりしかば氏は常に甲板に出て四方を眺め各所の山嶽若くは城市を瞥見し一々指呼し其名を挙げて更に誤らざること其海路を數回往来せし者の如くなりし是れ嘗て小学校にて得たる地理学の智識を応用せるなり船客中中将曾我氏(當時は少将)判事安井清厚氏ありしが之を見て甚だ之を奇とし屢々其室に招き大に親愛せり其後は屢々曾我氏を其邸に訪へりと云ふ横浜に着せしは八月七日にして明治十三年四月東京に転移する迄は終始熊野氏に寄寓せり同年九月六日居留地三十九番ジョン・バラ氏担当の学校に入学せり先是へボン博士の夫人此小学校を開き男女混淆の学校とも云ふべきものなりしがジョン・バラ氏之に代り専ら男子を教育する

こととなり氏入学の時は即ち其開校の日なりき此時氏は既にブライマリーを読み卒り第一ロードルの半途を讀習し居れりバラ氏に從学せし以來英学の進歩甚速にして大にバラ氏を驚かせり僅に一年半にして稍英学を語ることを得るに至れり横浜に來りし以來日に聖書を読み教の話を聴き學校に出ては日課の一部として聖書を學び日曜毎に礼拝堂に出て或は日曜學校に往き且つ交る所も多くはクリスチャンなれば知らず感化せられて夙に信仰を起し遂に熊野の母堂及び夫人と共にゼームス・バラ氏より領洗し海岸教會に屬せり實に明治十年十月二日なりき氏は初より医学を修めんとの志ありしを以て明治十三年の初大学予備門に入らんと心を決せしもバラ氏切に之を止め且つ氏は医師たるよりも寧ろ教育家たるの資性を有することを論し遠からずして且從來の學校を東京築地に移転し一層規模を大にし隆盛を計るべく氏の教育のことに就ては己れ十分責任を帯ぶべければ是非々々止れと勧められ氏は遂に其意に従ひ卒業する迄止まるべきことを約せり明治十三年四月中旬バラ氏の學校は東京築地七番新築の校舍に残らず移転せり氏亦隨て転じたり是より後其學校を築地大學と稱す氏はバラ氏の外ノックス、アレキサンドル、マコーレー三博士の教育を受けしが皆其誠実に學課を勉むると進歩の著しきことを賞せざるはなかりき

學院普通学部及び神学部の教授として誠実に其任を尽せり其基督教徒たる生活を述べれば氏は初め横浜海岸教會に屬し日曜の礼拝を始め祈禱會其他各種の集會に欠席すること殆んど稀なり日曜學校に出づるを以て最も其快樂とせりゼームス、バラ氏夫妻ドクトル、ブラオンと其娘及バラ氏等の教を受く殊に學校に在りてジョン、バラ氏より受けたる宗教上の感化は甚だ大なりと云ふへボン博士よりも頗る愛顧を蒙り宗教上及學問上の智識を受けたること尠からずとぞ當時少年信徒にして公けなる集會の席に於て感話を述べ或は祈禱をなす者は甚だ稀なりしが氏は感ずる所あれば憚るところなく感話祈禱をなせり聴く者をして感歎せしむること屢々なりき又慈善の心厚く近隣の貧民を憐み少許ながらも金員及び物品を与ふることあり其東京に転ずるや築地新榮教會に籍を移し其教會のために尽すこと尠からず或は日曜學校の教員となり或は長老に撰ばれ會務に執掌し又は牧師を助けて説教演説等をなすこともありき明治二十二年明治學院教會の設立せらるるや氏も其教會籍を此に移して長老となり台町教會と合併するや復其長老に挙げられ尽力すること尠からず各教會若しくはキリスト教団体の依頼に応じ説教或は演説せしこと其幾十回なるを知らず英米人の新に我國に來り宗教及學術上の演説をなす時は大抵氏を其通訳者に依頼せり氏が能く英語を解すること其記憶力の強きことは普く人の知るところにして如何に長き演説にても一語をも遺さず極めて明瞭詳細に通訳するを以て聴く者其絶妙を驚歎せざるはなかりき

『福音新報』明治学院関係記事

氏の手に成れる訳述の書多く一々挙ぐるに遑あらず氏平素一大著述をなさんとするの志を抱き米國より帰朝の後着手すべしと友人に語りしことあり今や之を見るべからず噫惜むべき哉

明治二十年一月二十一日服部綾雄氏の妹すく子と築地ユニオン・チャーチに於てイムブリー博士の司式の下に結婚す其年郷里より養父母を迎へて同居す

明治二十六年八月神学研究の爲め二年間の休暇を得米國に渡りプリンストン大学に入り大に螢雪の功を積み学業の進歩大に見るべきものあり氏の大学に在るや学資乏しきを以て学科の余暇には各地に至り或は演説し或は翻訳に従事し以て其学資を得たりと云ふ本年八月帰朝すべき予定なりしも尚研学せんとする情切にして一ケ年の猶予を請ひ滞学することに決し再びプリンストン大学に帰り未だ業に就かざるに俄然腸室扶斯に罹り十月十一日同地病院に入り治療を受けしも菓石其効を奏せず終に本月二日午前八時二十分永眠せり嗚呼悲哉

氏は幼にして身体甚だ健ならず屢々病に罹り危険に陥りたることあり而して横浜に出でし以来身体大に強健病臥せしこと甚だ稀なりき氏に二人の兄弟二人の姉妹ありしが唯一人の妹の外皆早く世を去り氏は最も長く生存せるも僅に三十三年を以て一期とせり氏は一女二男を挙げ長女は八年長男は五年次男は僅に二年十ヶ月也其実父養母は既に世を去り養父及び実母は今尚健在す

氏の特徴を挙げれば嘗て怒を発せしことなし学校に在るや殆ど一日も欠席せしことなし且つ其学科を充分に自修準備せずして出で

しことなし。生徒たりし時極めて誠実能く教員を助けたること。何人にも能く親み交り且つ容易く人に親まれ友情殊に厚く一たび友を得れば決して之を失はず又決して敵を作ることもなかりき
右は昨日明治学院に於て追悼会を開きし時熊野氏の述べられたる者を筆記せる儘貴社に投ず

十月二十九日

水蘆幾次郎

(二十三号・明治二十八年十二月六日)

明治二十九年

(四—M 29—1) ランジス教授帰國

◎ランデス氏の帰國

明治学院教授ランデス氏は、病氣のため今二十一日出発、独逸に向はる、願はくは行程常に平安なれ(三十四号・明治二十九年二月二十一日)

(四—M 29—2) 明治学院卒業式

◎卒業式二件

○青山学院にては前月二十六日に

○明治学院にては同二十八日に

而して同院神学部卒業生の任地は長谷川峰吉氏、山口鼎岩園に、川添満寿得氏信州佐久郡に、北野高弥氏高知に、国沢篤実氏大

坂に野村直彦氏は高知に、島田正七氏は東京麹町教会に、杉本栄太郎氏は北越に略ぼ定まりたりと云ふ。尚ほ又別科の卒業生本川次郎氏は北海道武市農場に、小河内碧及び関力之助の二氏は未定なりと云ふ、(四十号・明治二十九年四月三日)

(四—M29—3) 明治学院関係者懇談会

◎明治学院関係者の懇談会 は前月三十日明治学院に於て催はされたり同会は神学部普通学部の卒業生及び同学院関係者の交情を厚うせしめ且つ学院の方針等に関し各自の所感を叩かんために同学院が主となりて京浜間の関係者を招待したるものなり来会者八十九名、一同晚餐を共にしたる後井深熊野山本杉森植村の諸氏交々起つて演説を為せり井深氏所説の大意は官学跋扈の時節柄なれども本学院は飽迄も当初の主義を貫徹せんと欲すと云ふにありき普通学部の旧卒業生依田雄甫氏は事故ありて欠席せしかども演説の主意を認め越せしを以て熊野氏之を朗読せり、因みに記す今後は毎年此かる会合を催すべしとのこと也(四十九号・明治二十九年六月五日)

(四—M29—4) 篠原方慶の死去

◎篠原方慶氏の就眠

氏は明治学院神学部の出身にして暫らく築地ヤングメン氏の伝道学校に従事し、其後高知県高岡に伝道せられたりしが明治二十六年の頃英国派聖公会に転ぜられ三田四国町の同派教会を牧せられ

たり、然るに過般凶らずも病気に罹り養生終に叶はずして去る二十二年午前五時妻子五名を遺して永眠せられたり、(六十一号・明治二十九年八月二十八日)

(四—M29—5) 東山学院々々長交替

◎長崎の東山学院

九月九日新学年を開き普通科に十数名の入学生を得たり、大儀見氏辞職後ビータルス氏仮院長となり其他教員中にも多少の変動ありたり(後略)(六十七号・明治二十九年十月九日)

(四—M29—6) キリスト教主義学校教育論

基督教徒の教育問題(一)

青山学院の本多庸一氏は米國より帰朝せられしの間もなく「同志教育」の紙上に於て近頃また「護教」に於て、其の教育上の立脚点を宣言し、力を極めて之を弁護せられたり。滔々数千言、説き去り、説き来りて、また余蘊なきに似たり。我ら其の觀察の老實にして用意の懇到なるに感ぜずんば有らず。

氏は米國に於ける天主教徒の地位に就きて深く悟りしものあるが如く、日本の基督教徒が余り毛色の異なりたる人民とならんことを心配し、戦々兢兢として其の用心を怠らざるなり。氏の如き心配を抱きつつ日本に伝道し、且つ基督教主義の教育を施す者と神武東征の時代に於ける日本の祖先が一種の異分子として世に立ち天孫人民を以て自任せるが如く、邁往直前して、ただ吾が志す所

を貫徹せんことを期して、余り斯る事情に頓着せざるものと、二者の間には、自から非常に大なる差異あり。其結果も雲泥間に非るを記せざるべからず。我らは今日までの経験に徴して、氏の心配は徒らに杞憂に属することなるを知る。吾が国に於て基督教の精神及び教育が氏の言ふ如き曲げものを養成せりとの事実何処に在りとするか。又将来に於て斯る事実起らんとするの徵候何れに在りや。其の杞憂は米国の経験（若し彼の国情実に氏の報告する如しとすれば）に基きしものにて、日本には左る心配を誘起すべき事情殊に存すべしと思はれず。

過度なる教育を機械的に施し、凡べての生徒をして唯だ国家中心主義の奴隸たらしめんとするは文部省の規定せる教育の大患に非ずや。此際小数の基督教者が毅然として其の主義を堅守し、兎に角其の理想とする所を主張し、其の力に応じたる分限に於て之を實際に応用せんことを図るは、豈に国家の慶事に非ずや。画一の弊横流せる今日に於て、健全なる方法を以て特殊なる異分子を養成すべき教育は甚だ必要なりと謂はざるべからず。

官立の学校に入り若くは学士の称号を獲んと欲するものは、其の階梯として文部省の規定せる学制に依るを便とすべし。斯の如き志あるものは文部省の主義に則りて教育を受くるも可なり。基督教徒が小学より大学に至るまで己れの理想に従ひて教育を実施し得るまでは斯る不便を忍ぶの外有るべからず。然れども天下の広き、人事の頻繁なる、豈に大学に入りて其の学士たるの外、有為青年の馳せべき競争場なしとせんや。社会の実況を看破して、深

く慮を運らすときは、文部省学制の規定外に飄逸高踏して天下の人材を教育するの余地綽々として、裕かなりと謂はざるべからず。

今日は文部省の規定に外れ、独立の主義を操りて教育するの施設を必要とする場合なるにも拘らず、且つ基督教徒の資金甚だ裕かならず、同志の人物常に乏しきを告ぐるにも拘らず、故らに尋常中学の如きものにまで手を広げ、其の経営に忙殺せらるるは策の得たるものに非るなり。況んや文部省の規定に従ひ、官の認可を受けて、尋常中学の教育を施すに当りては、常に宗教の事につき、意の如く行ふこと能はざるもの多きに於てをや。

或ひは基督教主義の特殊なる教育を施すが上に、文部省規定の如き尋常中学科をも設けたるのみと云ふ乎。斯の弁解に対しては、我ら敢て不同意を表するを好まざるなり。然れども今日の場合に於て日本の基督教徒は云ふも更らなり、外国の伝道会社が其の多からざる資金と人物とを斯る事業に投じて、其の力を専ら他の方面に用いざるは決して策の得たるものに非るなり。

或ひは文部省の規定に準拠して、教育を施すも、聖書を教へ、宗教の精神を鼓吹するのみか、又我が理想に近き教育布くに於て毫も遺憾なしと説かんとするか。論者の説く所果して事実ならんとは我らの切に望む所なり。之をして事実ならしめば、また何をか言はん。ただ斯くの若き言議は事実を曲解して強いて弁論を弄するものならんを恐るのみ。

曰く余り毛色の異なりたる人物を養成する勿れ。此の一言取て理

なしとせず。然れども此の用心よりも必要なは基督に同化せらるる人物を養成するを第一義とし、世論の如何んに頓着することなく、真正の教育を為すことに非ずや。事物の軽重を転倒し、實際的と云ふに溺れ、処世的老成を以て自らを欺きただ時と世とに都合よき教育を施こさんとするものは、近く聖公会の設立せりと聞ゆる奈良尋常中学校に鑑みよ。其の校長にして且つ基督教徒たる河村九淵氏は教員生徒を引率して氷室神社に参拜せり（去二十四日の『日本』所載河村氏の自白に拠る）。妄りに世と推し移るより基督教の精神も終に此の点にまで墮落せり。豈に思はざるべけんや。（七十四号・明治二十九年十一月二十七日）

基督教徒と教育問題（二）

所謂ミシオン、スクウルが、男女の教育に関して、世に大功ありしは、蔽ふべからざる事実とす。其の欠点を摘発し、其の不完全なるを非難するの声のみ多く聞ゆる今日に於て、我等はミシオンスクウルの功德を称へ、幾多の点に於て、其冤を雪がさるべからず。或は曰くミシオンスクウルの有用なるべき時代既に去れり。昔日は兎もあれ、将来は勿論、今日に於てはミシオンスクウルの利益甚だ少かるべしと。

斯くて此の説をなすの輩は、次第にミシオンスクウル旧来の組織を棄てて、世の流行に随ふ有様に変更せんとするに至れるなり。然れども我等を以て之を見れば、ミシオンスクウルをして今一層深切に基督教の精神を伝へ、品性の陶冶を主眼とし、飲食学より

も修養の学を重しとするの目的を確定し、頻りに西欧文学の真味精萃を紹介し、青年子弟をして外国の書籍に由り、又多くの外人と親交するに由り、東西融和し、内外相補益するの便を得せしめ、其他種々の方法を以て、天下の人才を養成するを得せしむるときは、功利の学を勉め、科学の準備に意を専らにし過度の教育を施し、并蛙自大の僻習を醸成し国粹に偏安するの氣風を養ひ、開國進取の大目的を挫折するの弊を馴致し、人民を挙げて国家の機械たるに終らしめんとする現今の教育界に於て、実に鷄群の孤鶴最も貴重すべきものなりと謂はざるべからず。我等は今日のミシオンスクウルが此の確實にして主義ある教育を十分に実行しつたりと言はず。

然れども其の当局者をして大いに奮発して斯に従事せしめば、教育機関として特殊なる有用の事業を成就せんこと決して望み難きことに非ず。唯だ彼等が生徒の少きを憂ひ、外国宣教師が本国に報告書を送る間に感ずる苦心を憫笑しつづ、自らも同様の弊に陥り、妄りに生徒の多数ならんことを渴望し、左顧右眄あたかも時のもの商売をなすが如き陋態を演ず。我等は最も之を嘆息するのみ。又日本基督教徒の間に神学校なるものあり。是れ靈性を開拓し、天国を拡張し、日本伝道の大事業を負担すべき人物を養成するもの故、其の組織を慎しみ、其の制度を明かし、其の基礎を堅固にすべきこと論ずるを俟たず。然れども見渡す所神学校にして、純然日本基督教徒の手に成れるものなし。同志社神学校の如き稍之に近しと雖、我等は世人とともに之に対して多くの不満足を抱

くものなり。之を要するに日本に於ける基督教神学校は、皆な外人の設立する所とす。日本将来に於て基督教の發達に付き、是は最も慨嘆すべきことに非ずや。漫に自給独立を主張すと雖、此の一大欠点を等閑にするが如きは、唯だ枝葉に目を着けて根本を忘るるものに非ずや。日本基督教徒の合同に由り、一の有力なる神学校を設立せんこと必ずしも望むべからざる企てにあらず。我等は日本人の基督教神学校設立を緊急問題として各派の教友に提出せんと欲す。

我等が屢々論じたる如く、日曜学校は基督教徒の教育機関として、非常に力あるものなり。其の組織を拡張し、其の教育の範圍を擴大にし、基督教の福音を説くと同時に、目下教育界の難題たる徳育に従事せば、日曜学校は国家のためにも莫大なる利益を興すことを得べし。特に未だ基督教を信ぜざる家の子弟を生徒とするもの故、決して西洋の日曜学校を以て模範となすべからず。教員を精撰し、必要なる場合には多くの報酬をも払ふまでの奮発をなし、基督教の精神を以て徳育を施すの計画を定め、其の目的を広く世人に告白し、着実なる組織を立てて、此の種類の事業に尽力せば、其の成功意外に多かるべく、之がために基督教の勢力も、一層著るしきものあらん日曜学校を以て教会の閑事業の如く見做し、聖經歴史の嚆呑み話し、十誡の暗誦を第一とし、カアドの引力等を六韜三略として、僅かに其の命脈を繋ぐが如きは、活物を死用するの甚だしきもの、基督教の損失之より大なるもの少からん。故に我等は日曜学校の改革を基督教徒教育問題の内に特筆大書せん

と欲す。

何れの教会にも婦人会なるものあり。靈性を鍛練し神に近づき、讚美祈祷等をなすは、その眼目とする所なり。然れども日本今日の社会には、婦人の教育最も欠乏せし折柄、此の婦人会を利用して女子教育の便法を設け、家庭の趣味快樂を高尚にし、婦女の精神を開発するの一助となさば、其の利益不完全なる女学校を設立するよりも却て大いなるものあらん。各教会の婦人会にて趣味ある談話に伴なはれたる音楽絵画の説明、其の实地演奏及び展覽会を催ふし、或は文学会を開き、名士を聘して歴史小説等の講演を開き、僻地の地方に在りては、牧師伝道者若くは会中の適任者をして、毎週一回位雑誌新聞紙等の読会なるものを開きて、婦女子に聞かしむるなど、其の方法一にして足らず。我等は婦人会が最も宗教的なるを望むと同時に、傍ら斯る計画にも心を用いられんことを望む。基督教徒の教育問題として是れ決して輕んずべきことに非るなり。

基督教徒が自ら手を下して教育することをのみ其の注目すべき教育問題なりと心得るは、大いなる間違ひなるべし。日本到る所基督教徒の子弟は、公立官立の学校は言ふも更なり、私立の学校に於ても屢不利益なる待遇を受くるの事情あり。基督教徒は教員として屢困難を感じ、一種無名の迫害に苦しめらるるに非ずや。又生徒としても基督教信者の子弟が学校に於て不自由を感じること少からず。其の外教育の科目多きに過ぎ、生徒をして過度の勞を為さしめ、日曜日の休暇にも快く樂むこと能はざらしむるが如き事

実多し、斯の如く教へ来れば、基督信徒が日本国民として、且つ基督の僕として、大いに論じ且つ活発に運動すべき問題頗る多からん。我等は教会に属する父兄をはじめ、人の母たるもの妻たるものが、是等の問題に注意し、会中の兄弟姉妹相一致し、諸教会互ひに相連絡して、弊を矯め、害を除くの運動を活発にせられんことを望む。若し基督教徒の団体に於て、此れ等の問題を提出し、兄弟姉妹当局者に迫り、郡区役所に推しかけ、学務委員に談判する等尽力到らざる所なくんば、其の成功果して如何ぞや。斯の如き意気込みにて推し行かば、教会は大いなる活動の中心となり、改革の牙管となるを期すべし。唯だ自ら計画せる教育事業のみを以て、基督教徒の問題と見做すは、不利益千万なりと謂はざるべからず。天下の教育はみな我等の論すべき問題なり。

基督教徒は未だ社会に於て実際の権力を有せず。彼等は処士横議の時代に立てるものなり。実力なくして区々たる小機関を造らんよりは、寧ろ空論を唱へ縦横に批評を試み、策を建て、主義を説き、精神的の準備を整へて、他日実力の発達せんことを待つは、今日の日本基督教徒予て覚悟すべき所に非ずや。我等は日本基督教徒の相率いて一層教育の主義を論じ、縦横に空論を上下するに熱心ならんことを希望するものなり。(七十七号・明治二十九年十二月十八日)

明治三十年

(四—M30—1) 明治学院概況

明治学院

組合教会に同志社学校ありメソヂスト教会に青山学院あり日本基督教会に明治学院あり東北学院あり日本の教育会にありて各々一種の特色を有するものとす、本紙に掲ぐる所のものは明治学院普通、神学部講堂並に寄宿寮へボン館の図なり、尤も神学部講堂は一昨年大地震の際破損したるを以て大に修繕を加へ更に美観ある堅牢の建物となれり

沿革並に位置

抑も明治学院は東京一致英和学校と東京一致神学校の合一に由て成れるものなり、東京一致英和学校は最初築地明石町に校舎を築きて築地大学校和称し東京一致神学校も亦同町内に在て独立の神学校たりしが明治十九年に至り協議の上両校和合して一の学院となり前者は其普通学部となり後者は其神学部となれり是れ明治学院沿革の大略なり

築地居留地は学校を置くべきの地に非ず且学生の数も漸々増加し来りて教場も狭隘を告るに至りたれば合併後拡張の第一着として芝区白金に地をトシ広大なる講堂及び寄宿舎を新築し明治二十年の秋より之に移転したり現今の位置たるや大都の南廓に位し品川停車場を去ると僅かに十数町にして新橋銀座街又は横浜に往来するには汽車の便あり芝公園三田通辺に徒歩するも僅かに数十分にして達することを得べし、此の如く出入の便ありと雖も市街の熱

開に遠かり土地高燥空氣新鮮遠近の景色頗る佳にして学生の勉強衛生上に於ては実に究竟の地なり而して構内一万坪以上あり建物には図の如き二層の両学部講堂あり三層楼及び二層楼の寄宿舎あり図書室あり食堂あり皆堅牢にして清潔なりと云ふ

学部並に学科

明治学院に普通学部神学部の二あり普通学部を分つて尋常科高等科の二つとなす尋常普通科、程度課目は尋常中学校と大差なし但英学は大に優る所あり高等普通科は和漢文学、英文学、文明史、論理、心理、倫理、理財、社会学、人類学、天文学等を教授し又生徒の志願によりては独逸語、拉丁語、希臘語をも教授せり、神学部を予科本科の二つに分ち凡て四年の卒業期限となす予科に入学するものは普通学部高等科第一年を終りたるもの又は之と同等の学力あるものとなすと雖晩学にして英学に通ぜざる者は員外生として神学を修むるの方法あり

教授並に講師

普通学部英学教師には明治初年以來本邦に於て英学教授に経験あるドクトル・ワイコッフありドクトル・マコーレーあり又ハリス氏あり和文学には戸川安宅氏あり和漢歴史には熊野雄七氏あり数学には山田万太郎氏あり訳読には水戸幾次郎氏あり漢学には大沼綱政氏あり画学には藤田文蔵氏あり動植物には池田作次郎氏あり又来学期よりは理財学及び社会学講師として法学士伊藤俊助氏が来らるる筈なり神学部教授には神学に精通したる上に実地伝道に十数年の経験を積みたる神学博士アレキサンデル氏あり哲学及び

心理学に精しきランデス氏あり近頃神学上の新知識を齎し来たる哲学博士ヤコブ、ポツピン氏あり囑託講師には陶山斌次郎氏あり
柏井園氏あり、

図書

明治学院所蔵の図書凡て七千余巻あり就中哲学、神学及び宗教に關する書籍に富む、恐くは神学文庫として日本第一の文庫ならん

運動

孰れの学校に於ても近来は大に体育に注意することとなるが明治学院に於ても体操の正科以外に自由運動を奨励し之が爲に構内に広潤なる運動場を設け又屋内には柔道々場を設けて生徒の運動に便ならしむ殊にベースボールは学院生徒が最も好み且練達せる所の遊戲にして時々慶応義塾又は学習院等の生徒と其技を競ふことあり德育の緊要なるは今更に言ふ迄もなきことなれども今日我邦の德育に就ては夙に視る所ありて特に意を注ぎ力を尽して生徒を薰陶し其方向を誤らざらしむることを務む此目的を達せんが爲には可成たけ生徒をして寄宿舎に入塾せしめて親切に之を監督しつつあり東京に青年を遊学せしむる地方の父兄達は只東京の学校にさへ入学し居れば自然と学問も上達し人物も立派になる様に思はるものもの如くなれども之より大なる過はなし血氣の青年を広き東京に出し只其好む所の学校に入らせしめて特に其操行を監督誘導する者なからしめば忽地種々の誘惑に陥りて一身を誤り遂には其累を父兄にも及すことは火を賭さるよりも明かなり、是れ実に今日東京に遊学する青年学生の通弊なりとす明治学院は大に之を憂ひ

来学の青年をして此弊を免れしむることに力を尽しつあり近來
実業界に於て明治学院の卒業生が漸々信用を得つつあるは蓋偶然
に非るなり、

卒業生

普通学部は創立以來一〇名の卒業生を出せり其中既に故人とな
れる人も数名あれども大抵社会に出て夫々位置を占め或は学校
教員となり或は教師牧師となり或は医師となり或は実業に従事し
或は海外に遊学し或は今方きに高等の学校に入りて専門の学科を
修めつつあるもあり創立以來日尚浅きが故に未だ卒業生中社会の
表面に著しく顕はれたる人多からずと雖他日必らず顕るる所のも
あるや疑を容れず神学部卒業生は創立以來凡て百二十一名あり其
他卒業前に学校を出でて後教職に就きたる人を加ふれば百二十二
となる、其中既に故人となれるもの八人あり其他の十分の九は現
に伝道若くは教育に従事する人々なり実に現今日本基督教会の教
役員其の三分ノ二以上は明治学院の出身の人なるべし、(七十九
号・明治三十年一月一日)

(四—M30—2) 井深の文部省特別認可論

基督教主義普通学校は文部省の特別認可を求むべき乎

福音新報記者足下貴新報紙上に於て所謂ミシオン、スクール問題
或は基督教主義教育問題に就て卓見を開陳せよとの來論正に承了
御厚情拝謝仕候、乍不肖十數年來基督教主義教育に従事し其間多
少の経験も積み又前途幾多の希望をも抱き候元來所謂ミシオン・

スクール問題は一方に於ては国民教育との關係あり他の一方に於
ては内外教会との關係もあり随分複雑せる問題にて凡ての方面よ
り仔細に之を論ぜるには頗る長大の文章を要し可申候然るに刻下
期末試験に際し小生に於ては其余暇なきが故に今回は單にミシヨ
ン・スクールの立脚地とも可申文部省の特別認可を求むるの可否
得失如何に就て聊か卓見を開陳し以て大方の教を仰度考に御坐候
青山学院総理本多庸一君は先頃の護教に於て同学院の予備学科を
變じて尋常中学科と為したる件に付て綏々數千言丁寧親切に其処
置の至當なる理由を開陳致され候小生は本多君の意見に對し大に
同情を表すべき所多々有之候得共然れども又未だ全く心服難致点
も不少候、愚考するに此問題に付き論者中に全く二個の別問題即
ち尋常中学科設置と申す事と文部省特別認可と申す事とを混同し
居る人もあるかの如くに察せられ候、然れども此二者は全然別問
題にして此區別を判然と記憶すること緊要に御坐候。

本多君の意見書を閲読するに今回青山学院に於て為したる変更は
只從來の予備学部を改めて尋常中学科と為したる迄の事にて決し
て文部省の特別認可を受けたる訳には無之、随つて特別認可に伴
ふ所の徴兵令及び文官登用試験等に関する法律上の特權を得たる
訳には無之候、單に此だけの変更あれば何も根底的の改革と申す
程の事にも有之間敷又特別異論のあるべき筈も無之様に覺申候何
となれば中学科設置と申候得共其実予備科なる者は從來尋常中学
科と殆んど同種類同程度の教育を施したるものにて申さば名義上
の変更には不過候、且又学校全体の組織上より申せばミシオン、ス

クルなる者は未だ本邦の教育制度の一定せざる時に際し外国宣教師の計画創立に係る者多きが故に其学科程度の如きも自然に外国の「ハイスクール」又は「カレッジ」に倣ひたるは無理ならぬ次第と存候、然して日本の教育制度の漸く確定し来るに随ひて之に当て餼らざる所の生じたるも又自然の結果に候、固より基督教主義の教育と申候へとも宗教及び倫理を除くの外は一般普通の教育と違ふべき善無之其学科程度の如き可成一般の教育制度に準拠すべきは勿論の事に候、我が明治学院に於ては既に三四年前に於て此必要を認め従前の予科二年本科四年の制度を変更して尋常普通科と申すは即ち尋常中学校と同程度の者に候只未だ中学校と称せざるのみに候。

右の次第なれば単に予備科を改めて中学科と称し東京府庁よりその許可を得たる丈にては本多君の申さるる如く別段「福音的教育の機関上損失する所」なく「又我が大主義を犠牲とする」必要もなかるべく其点に就ては深く心配致すに及び申間敷候、乍然それ又また学校の資格とか卒業生の肩書とか申す方面からの効能は薄き事に候、否従前と何も差したる別は有之間敷と存候、何となれば元來耶穌教嫌ひの連中は従令中学校と名けて見ても矢張耶穌中学校として之を嫌ひ申すべく又特別認可若くは官立学校との連絡の利益を当に入学を願ふ学生はそれらの特権なき以上は名称を変更したるのみにては容易に來学せざるべしと推察致候。

乍然本多君の精神は単に尋常中学科を以て満足せず若し出來得べくんば文部省の特別認可をも受けて十分法律上の便利を得んと欲

するものの如く察せられ申候、是れ又もしも「我が大主義を犠牲とせずして」得らるべき特権ならば誰も異論のあるべき善なく論ずるまでもなき事に候、乍然事実果して如何、是れ即ち問題に御坐候、我が文部省は明白に基督教主義の教育を施す学校に対して（若も他の必要な条款備はる時は）特別認可を与へ法律上の特権を附与すべきか、若しも此事あらば実に幸福といふべし、然れども、小生の今日迄取調たる所にては文部省は之を与へ不申候左れば將來に於てはイザ不知今日の場合に於ては判然たる基督教主義の教育と文部省の特別認可とを天秤に掛けて其輕重を量るべき筈に御坐候、而して小生は断然後者よりも前者を重しと為す者に御坐候、其他世の風潮に誘はれて容易に教育の方針を変更するのは不可なること及び基督教主義の学校は世間の学校と異なりて一種犯すべからざる特色を有すべき事等に付ては既に貴社の卓説も有之候に付敢えて蛇足を附不申候 敬具

明治二十九年十二月二十二日明治学院に於て

井 深 梶 之 助

(七十九号・明治三十年一月一日)

(四—M30—3) モット博士來院

明治学院に於けるモット氏

明治学院は此度渡來されたる万国青年会派遣者モット氏を聘して去二十二日午後二時よりチャペルに於て演説会を開きたり会するもの八十余名なりき

井深総理先づ起ちて丁寧此遠來の珍客を紹介し了ればモット氏
通訳者と共に徐ろに起ちて壇に出で一揖して先づ井深氏の好意を
謝し次で曰く

余は此度此使命を受けて欧州各国に到り濠洲印度を経て今や貴國に
到着せり今日まで旅せし所実に五万哩到る処に大学高等学校を訪
ひ又学生大会を開けり、各國の学生は皆な我等は日本の青年の爲
に其祝福を祈りつつあれば君彼の國に到らば幸ひ此意を伝へよと
言へり余は諸君が此事を記憶せられることを希ふ

余は今日学生の誘惑に就て述ぶべし世には学生ほど誘惑にかかり
易く其の誘惑程多くして強きはなし誘惑とは身体智識精神上の誘
惑なり曰く不正直不熱心淫猥……數へ出ればなかなか多し時
間に限あれば此中の唯一つ即ち淫猥に就て述ぶる所あらんと欲す
この誘惑こそ世界万国の青年学生の身と心を蝕食しつつあるもの
にて如何なる國の学生も此誘惑に苦しまぬものはなかるべし余が
此言ひ難く又聴にくく口にするさへ汚らはしき此問題に就て述ぶ
るは真に青年学生諸君を愛すればなり余は自ら此誘惑と戦て其力
の如何に強きかを知る如何にして此力に勝ち得んかは我等の考ふ
べきことにあらずや。

淫猥と云へば唯に娼妓を弄ぶのみにあらず手淫男色不浄なる談話
不潔なる想像すべて此等を指すなり。聖書に罪の価は死なりとあ
り罪は果して死を來らすか余は茲にこの語を改めて更に淫猥なる
罪の価は死なりと云はん又不正なる直罪の価も死なりと云ふを得
べし先づ述べんと欲する所は此淫猥なる罪惡の結果は肉体上の死

を來すことあり。

尤も恐るべき多くの病は此罪惡の結果なることは掩ふべからざる
事實なり之れ一個人の断定にあらずして医界の輿論なり普通の病
と雖も青年に於ては多は此罪惡の結果にして又此行によりて病勢
を増すなり。淫猥なる行為は健康を害するのみならず病に抵抗す
るの力を失はしむ。

時として遊女に戯れ手淫を行ふ青年にして一見身体の虚弱ならざ
るが如きものあり或者は此故を以て敢て身体を害せずと思ふもの
あり雖然其害は明白なりかかる青年は事を成んとするに至りて空
しく倒るるなりよし一步を譲るも少しにてもかかる害毒を受けざ
れば尚一層成功多き業ある生涯を送り得るにあらずや。余が知れ
る一人の医者許に將に眼を失はんとして來れる一青年あり医者
は診断して曰はく君よ其明を保たんと欲せば君が今日迄の悪しき
習慣を止めざるべからず君の意存如何にと憐むべき青年は暫時頭
を垂れたりややありていと力なげに答へけるは君よ余はよし明を
失ふとも余が習慣は到底制する能はざるなり此青年は真に其力の
如何を知るものと云ふべしアア精力なき青年活力失せたる学生よ
彼は生ながら葬られつつあるにあらずや

実行によりてのみ此害毒を來すと思ふべからず不浄不潔なる談話
想像も亦青年を斯る実行に導く所の種を播きつつあるなりこは我
等が深く考ふべきことなりとす。

余の曾て大学に在るや社会学を研究して一週に一日間必ず實際上
の研究をなすを常とせり一日瘋癲病院に到る長き廊下の両側に數

多き病室あり此処に多くの不幸者が在ると知り給へ案内者に導かれ其説明を聴つつ室より室へ廻り行けば中に四十歳に至りたる富家の子あり彼が此処に來りしは遊女狂ひをなせしに因ると又貴族の子あり其齡三十歳位なるべし彼が今日此みすほらしき境遇に至りしは手淫不潔なるいまいましき行為に原因せしなり余は今尚其時の事を忘る能はず此時の光景と感想は今も余が心をいためつつあるなり。

加之ならず精神上の害毒も決して輕からず今其一二を述べれば注意力を害して一事に其力を集注すること能はざらしむ又自尊心を害して吾が身の価値を忘れ自暴自棄せしむ特に甚だ令聞を害するなり諸君の中誰かこの壁上に己がなせる汚行の一二を記し得るものありやあらば乞ふ出で來れ是れ不能の事なり余も亦決してなす能はず実にかかる行為は我をして甚しく卑屈ならしむ。

姦淫せる婦を引き來れる学者とパリサイ人に対する主イエスの答を見よ「爾曹のうち罪なきものまづ彼を石にて打て」と誰か此婦を打ち得しものありしや。ユーゴーが物せるクイクサンドに於ける青年を見よ今迄いと樂しげに海辺に逍遙してありしに先づ彼の足は重くなりぬ彼がせめては身を支んとしたる手は砂中に入りぬ救ひを呼びたる口救人を視はりたる眼しかもいとうらめしげに見廻はしたるこの眼終には頭髮迄も砂中に入りて再び見るべからずクイク、サンドは再び旧に復して平かなること前の如く依然として少しも其消息を伝へずア吾人の同情感慨眞に茲に動くも見る。

若も此砂中に一個の岩だもありしならば如何若も此時彼の青年をして此岩に一本の指にてもつくるを得しならば如何最初には一本の指次には手終には全身迄支へ得て此不幸なる死をなさざりしならん。

主キリストは実に我等を永遠の不幸なる死より救ふ所の岩石なり今日までキリストの人物を研究して之を傷げんとさへ試みたるものあり然れど事は無益なり神は主を汚すことを容し給はざりき余在校の四年間最初はキリスト信者ならざりき多くの誘惑と戦ひ特に誘惑の爲めには苦心慘憺我は先づ吾が力の到底己を救ふ能はざるを悟れり次に我を救ふべき活力を得んことを求めたり余は眞に之を主キリストに得たりき今も主の思籠の下にあり余は敢て隔てなく告白す余は不幸にも此力を主キリストの外には見出すこと能はざりきキリストこそは我等の救の岩にして昔も今も無限の同情と愛をもて不幸可憐なる人類を顧み永遠の死を免れ限りなき生命に入るべき活力を与へつつあるなり。

愛する諸君よこは実に最大問題なり専心熟考すべき事なり願くは今より沈思黙考熱心に祈禱して主の力を得よ又未だキリストを信ぜざる諸君は今茲にキリストに従ふの決心をなせ諸君の生活必ず今より一変せん限なき思籠に富める主キリストは愛の御願を向け給はん。

以上記する所は氏が演説の大意なり順序或は前後するものあらん其の大意を与しては誤りなしと思ふ。(七十九号・明治三十年一月一日)

(四—M30—4) イムブリー・ランデイス来日

○インブリー、ランデイス二氏

は相前後して久しく帰国中なりしが本年四月頃には熟れも再び来朝して明治学院の爲に尽力せらる可しと云ふインブリー氏は例の滑達的手腕を奮はるべくランデイス氏は新智識を齎して教授上一層の光彩を添らる事ならん、(八十五号・明治三十年二月十二日)

○インブリー及びランデイス二氏

イムブリー及びランデイスの二氏は先週月曜に來着、明治学院構内に住居を定められたる由、(一〇四号・明治三十年六月二十五日)

(四—M30—5) マコレー教授逝去

○明治学院教授マコレー氏の來歴

マコレー氏名はジェムス、ミツチェル千八百四十九年を以てペンシルバニヤ州ロチェストルに生る長ずるに及びて同州ウエストミンスター高等学校に入り多年螢雪の苦を積て卒業し直ちに予備中学の教師たるの名譽を担ひ後更に同州アレガニーのエスト神学校に學んで専ら神學を研究し業を卒へて以來内地伝道者の任を帯びミネソタ州の開墾地に伝道し幾分の成功を得千八百七十七年身を挺してシャムロに伝道す然れども不幸にして氣候の激変に依り病を得又任に堪ゆる能はざるに至り去つて身体の保養を兼ね千八百八十年即ち今を去る十七年前日本に來り時東京築地に於てジョンバラ氏の設立せる築地大学に教授となり後同校の芝白金に移つて明治学院と稱するや同氏亦之が教授たり爾來健康兎角元の如く

『福音新報』明治学院關係記事

ならざりしが旧臘遂に病床に臥してより病勢日々悪しく超へて一月十日独り最愛の夫人の悲嘆を枕頭に聞きつつ永逝せらる年四十八氏正に死なんとするの前二日博士アレキサンデル氏其病床に侍

すマ氏徐ろに謂て曰く爾來君に對して礼を失ひ又過決して少なからず幸に之を寛恕せよとア氏答へて曰く更に配慮する事勿れ余未だ是あるを覚へず若し在りたりと雖焉んぞ是を恕するに難からんやマ氏更に謂て曰く余も亦君が寛恕するの急なるを信す若し我等互に其罪過を赦さざらんや君幸に此事を以て余が葬式の際の説教の主旨とせよ但し余が名を挙げず死に瀕せる者此語をなすとア氏即ち之を諾せりと云ふ。(八十六号・明治三十年二月十九日)

(四—M30—6) 井深の渡米

○井深梶之助氏の渡米

来る七月を以て米國ニューヨークに開かれんとする万国学生大会に井深梶之助氏は本邦青年会の代表者として出席せらるる事となれりと云ふ。(九十二号・明治三十年四月二日)

○井深梶之助氏の出發

予報の如く同氏は愈々去る十七日十二時三十五分品川発の列車にて無事に出立せられ本田押川貴山石原熊野伊藤(俊介)植村明治学院其他帝國大学を初め各学校の生徒の見送ありたり。(九十九号・明治三十年五月二十一日)

(四—M30—7) 明治学院卒業式

『福音新報』明治学院関係記事

○明治学院

同学院第十二回卒業証書授与式は去月二十七日講堂に於て執行せられ普通科卒業生田中信道氏の偉人の感化(英語)神学部卒業生矢島宇吉氏の遙に洗礼の約翰を憶ふ(邦語)高等科卒業生戸田謙三氏美の力(英語)等の演説あり其間奏樂独吟等ありたり矢野文雄氏の演説ある筈なりしも病氣の爲め書状を送られたるは残念なりき。卒業生は高等科六名普通科四名神学部十二名なり。

神学部卒業生の任地は千響武雄氏(高知県安芸)深尾泰次氏(多分北海道滝川)河野政喜氏(信州坂下)郡山源四郎氏(加賀小松)村松米太郎氏(越中高岡)長山万次氏(足利)柴山幾久松氏(越前金津)清水久次郎氏(札幌)和田三郎氏(北海道武市農場)矢島宇吉氏(千葉)山田幸三氏(市下赤坂)山野友一郎氏(東京)等なりと聞く。(九十二年・明治三十年四月二日)

○正誤

明治学院神学部卒業生の任地を和田三郎氏は北海道武市農場と記せしは北光舎の誤り山田幸三氏は赤阪と記せしが後ら大森に転ずるに至れり。(九十四号・明治三十年四月十六日)

(四一M30—8) 笹尾桑太郎の帰国予定

○笹尾久米太郎氏

明治学院を卒業せられたる同氏は一昨年来米國オーボルの神学校を卒業し其後ユニオン神学校並にコロンビヤ大学に一年間修学の後昨秋独乙ベルリン大学に入り目下ハルナック、カフタン、パウ

ルセン等に就き神学並に哲学の諸科を攻究し居らるる由なるが今年は業を卒へ来る八月には帰朝ある由知人への來信の端に見へたり。(九十三号・明治三十年四月九日)

(四一M30—9) 奥野武之助の逝去

○奥野武之助氏逝く

奥野昌綱翁の令息武之助氏は數年來米國に在って刻苦勉勵せられ本年四月には目出度帰朝せらるる筈なりしが二三月前より病に犯され遂に肺結核に交じ始めはニューヨルシーのイーストラールンジなるヘボン老博士の宅に療養せられたりしが病勢益々宜しからずブルクリンの肺病院に入院せらるる事となり手厚き療治を加えたるも遂に其功なく空しく有為の才を懷て五月十二日午前七時三十分異郷に逝き翌十三日曾て日本に在留し同氏父子と入魂なりしアメルマン氏の説教にて葬儀を営み墓地はヘボン氏の子息の葬られたる処また老博士の爲に設けられたる墓地の傍に葬られたりとの事なり昌綱翁の悲嘆果して如何許ならん詳細の事は追て報道することあるべし。(一〇二号・明治三十年六月十一日)

○奥野武之助氏の葬儀

奥野武之助氏の死去せられし事は前号報じ置きしが其遺髪の到着せし爲め去る十二日午後二時より葬儀を牛込弘方町なる牛込教会に営なみたり福田錠二氏の司会にて星野光多氏同氏の履歴を語られ植村正久氏バラ氏等の話あり又湯谷盛一郎氏村山敏雄氏等は吊歌を詠せられ会葬者は百五十名以上もありたり式終て遺髪は青山

の墓地に埋葬せられたり(一〇三号・明治三十年六月十八日)

(四—M30—10) 井深の米国到着

○井深梶之助氏米国へ着す

我国青年会よりの代員として米国へ赴かれたる同氏は、航海中常に海上の不穩に苦しめられしのみならず、機関の破損のため三日間大洋に漂流するなど非常の困難を極め二十四日を費して前月八日タコマへ着せし旨社員へ來信あり。其の翌日ニウヨルクへ向け同地を出発せし筈なり(一〇六号・明治三十年七月九日)

(四—M30—11) 井深・瀨川の帰国

○井深梶之助氏及び瀨川淺氏の帰朝

先頃万国学生大会に日本学生の代表者として米国に赴かれたる井深氏は去る一日無事帰朝せられたり又昨年來米国に在って勉学せられたる瀨川淺氏も同船にて帰朝せられ長崎東山学院にて従前の如く教授の任に當らるる由なり(一一五号・明治三十年九月十日)

(四—M30—12) インブリー歓迎会

○インブリー氏歓迎会

去る四日青年会館に於てインブリー氏の再び來朝せられたるを歓迎する会合ありたり京浜の有志者二十五六名相集り石原與野の両氏歓迎の辞を述べインブリー氏は答辞と共に米国に於て近年著し

く変動せる状態を詳細に語られたり時間短かきを以て単に自転車流行の甚だしき事と躰育を重する非常なる事とを述べられたるのみにて神学界及び教会の模様を聞くを得ざりしは遺憾なりき終て晚餐を共にし互に懇談し且つ二十五年紀念祝会の事をも協議して散会したり。(一一〇号・明治三十年十月十五日)

明治三十一年

(四—M31—1) フルベッキの逝去

○博士フルベッキ逝く

博士フルベッキは久しき以前より心地何となく勝れざる様なりしが去る十日終に遠逝せられたり。健康は衰へし後と雖も元氣なる博士のこととて絶て病床に臥すが如きこともなく、其の前日にいたるまで機械体操を試みられし位なりしが、十日の正午午餐をなしつつありし間、心臟麻痺のため突然逝去せられたり。フルベッキ氏がレフォームド教会の宣教師として初めて米国より渡來されしは実に四十年の昔なり。爾來或は英学校の教師となり、開成所の御雇となり、太政官の顧問となり、又明治学院に教授となり、後専ら巡回伝道に力を尽され、死する数日前までも近々地方伝道に出で行かんとて勇ましく物語られし程にて、教会の内外に少からざる功勞ありしは恰く人の知る所なり。ジェームス、バラ氏が追悼の詞に博士は、神と共に走らざりしも常に神と共に歩みたり、博士は火の一時に燃え立つが如き熱きことなく、又底に深きこと

なくして平坦なる道を歩み断えず基督教徒なりきと言ひしは、善くも博士の生涯を評したるものと謂ふべし。博士享年六十八、前途尚ほ伝道上に多くの志望を齎らして逝く、真に惜むべし。

超えて十二日同氏の葬儀は芝教会堂に於て営る。和田秀豊氏詩十九篇を朗読し、タムソン博士英語にて祈禱し、讚美歌四十八番を歌ひ、井深梶之助氏追悼の辞（別欄に在り）を述べられ、続いてジェームス、バラ氏英語にて詩三十七篇及び八十五篇を引きて追悼せられ、奥野老教師の祈禱の後、英語の讚美あり、次に福音同盟会を代表して本多庸一氏追悼文を朗読し、監督マキム氏の祝詞にて式を終りたり。会葬者は外山正一、佐々木伯、公爵岩倉家の代理、大木伯、西園寺侯、石黒軍医総監、何礼之、九鬼隆一、渡辺洪基、岡部長職、辻新二、末松謙澄、青木周蔵、英国公使ベック、布哇公使イルウイン、其他片岡、江原、安藤、三好、本多、小崎等内外朝野の諸名士を始め内外人四百名もありたり。且つ儀仗兵を遣はされ、盛なる葬儀なりき。柩を送りて青山の墓地に至り、ブース氏及びワデル氏等の祈禱ありて、埋葬了んぬ。

(一四二号・明治三十一年三月十八日)

(四一M31—2) フルベッキ略歴

神学博士ギドウ・エフ・フルベッキ先生略歴

神学博士ギドウ・エフ・フルベッキ先生略歴 神学博士ギドウ・エフ・フルベッキ先生は元和和蘭の人なり、西曆一八三〇年一月二十三日和蘭国ザイストに生る、幼にしてモレビアン派の学校に

入りて尋常普通の学科を修め稍々長ずるに及んで専ら工学を修む、蓋先生誕生の年は即ち欧羅巴に於て始めて鉄道の敷設せられたる年にして工学は必らず他日社会に盛らんことを推察したればなり、一八五二年氏は工学を卒業して後、思ふ所ありて米國に渡航し数年の間ウイスコンシン州及びアルカンサス州に於て工業に従事したり、然れども氏は工業に従事するを以て満足すること能はず、熟考の末我が天職の此に在らず寧ろ教職にあるを信じ断然従來の事業を休め再び一介の書生となりてニウヨーク州オーバルン神学校に入学したり、是れ実に一八五六年にして氏が二十六年の時なりき、

西曆一八五六年は即ち本朝安政四年にして米國公使タウンゼントハリスが下田港に來り百方術を尽して徳川政府に開港条約を迫りたる時なり、當時早く既に米國基督教會に於て日本へ宣教師派遣の議ありき、然して第一に此議に賛成して之を實行したるを米國リホームド教會となす、同教會外國伝道局は直ちに三名の宣教師を日本に派遣することを決議したり、但其中一名は必らず和蘭國に生れ其國語に通ずる人たるべしとの条件を付したり、何となれば和蘭は昔日より日本と交通絶へざるが故に同國人たり且其國語に通ずる時は万事に付け便利たるべきことを察したればなり、然して其撰に當りたるは即ち當時オーバルン神學校に在りて神学研究に余念なきギドウ・エフ・フルベッキ氏なりき、

リホームド教會外國伝道局は神學校授業某並に同市の牧師某を介して神学生フルベッキ氏に日本國派遣の事を交渉したり、恐ら

くは此交渉は氏に取り青天の霹靂なりしならん、実に一驚を喫せしならん、然れども流石に幼時よりモレビアン派の教育を受たる同氏のことなるが故に外国伝道でふ事に必らず多少の同情は懐きたるや知るべし、只此の如く突然と我が身の上に此の如き使命の降らんことは预期せざりし処ならん、然れども氏は熟考の上是れ即ち神の召たることを確信し伝道局の命に応じ公然宣教師の職に就き而して神学博士ブラオン医学士シモンズの二氏と共にニウヨルクを出発したるは一八五九年五月上旬なりき、當時は未だ米國大陸を横ぎるの鉄道もなく帆船に乗り亜弗利加喜望峰を廻りて渡航したるが故に航路に六ヶ月余を費し漸く同年十一月七日長崎に到着したり、是れ実に今を去ること三十九年前なり、

フルベッキ氏は基督教を宣伝せんが為に日本に派遣せられたり、然れども當時は尚幕末の世の中に於て切利支丹邪宗門は國の嚴禁たり、殊に九州地方に於ては天草騒動の歴史尚人民の記憶に存在するものから上下一般基督教を視ること蛇蝎の如くなりき、此の逆境に立たるフルベッキ氏及び其他最初の宣教師諸氏の困苦艱難は独り當時の状態を熟知するもののみ能く之を推察することを得べきなり、固より余は今之を叙述すること能はず、

氏は此の如き困難の中に在ながら一方に於ては自ら日本語を學び他の一方に於ては数名の書生に英学を教授したりしが学校に於て其書生等の成績拔群優等にして褒美を得たり、是より誰云ふとなくフルベッキ氏は良教師なりとの評判高く遂に長崎奉行は氏を聘して長崎英学校の教師にせんと申込たり、氏は容易に之に応ぜ

ざりしかども強ての請求により或条件を以て遂に承諾したり、是れ氏が前後十四年間継続して日本政府に聘せられて教育及び法律調査等の為に尽瘁したる始めなりき、當時長崎は日本全国に於て海外の事情の最も明かに知れたる場所なりき、又天下の有志家が最も多く往来する処なりき、當時屢々氏の門を叩きて外国の事情を尋ね又は氏の議論を聴きたる人物の中に於て小松帶刀、西郷吉之助、後藤象次郎及び今日尚顯要の地位に立つ我國第一流の政治家学者等も少からざりしと云ふ。

當時鍋嶋侯は長崎に一の学校を開き氏に英学教師たらんことを囑托したり、依って氏は長崎英学校と隔日に出勤して教授することとなれり、恰かも此頃天下の形成は愈々危く終に慶喜將軍は政權を奉還し幕府倒れて明治維新の世の中となりたれども氏の地位は依然として動かさず此大變革に際しても一日も休業せざりしと云ふ、唯徳川政府の英学校は變じて明治政府の英学校となりしのみ、但し翌年即ち明治二年に至り中央政府の召に應じて東京に上り開成所の教師となりたり、其名称は即ち教師なれども其実は寧ろ学政顧問にして殆んど教頭の事務を執れりと云って可ならん、此の如くして開成所の教師たること四年なりき、

明治五年開成所を辞し更に太政官御雇法律顧問となり其後元老院に転じて算作、加藤、細川等の諸氏と共に諸種の法律書類の翻訳及び取調に従事したり、且同時に教育又は宗教と國家の關係等に就て屢々当局者の質問に對へ又一時學習院の教師に聘せられて万国公法を教授したり、此の如くして日本政府に仕ること十四年、

而して其勲功に依り明治十年七月勲三等に叙せられ旭日章を賜はりたり、

氏は日本政府に仕ふる間は固より十分に直接伝道に従事すること能はざりき、然れども其間と雖も機あれば則ち或は説教に或は演説に或は聖書講義に宣教師たる者の職務を怠らざりき、

遂に明治十年に至り政府に於ても夫々専門の顧問官も備はり且伝道の門戸益開かれたるが故に政府の雇を辞し一たび家族を挙げて帰国し而して一年を経過して再び渡来し此時より以後は全然伝道に身を委ねたり、然して第一に着手したるは聖書翻訳の事業なりき、是より先新約全書は「ドクトルス」、ヘボン、ブラオン、グリーン、奥野昌綱、松山高吉、高橋吾良諸氏の手に由て翻訳せられたりしが旧約書は未だ翻訳成らず内外数名の委員分担して之を翻訳することとなりしがフルベッキ氏は即ち就中最も困難なる詩篇を負担することとなりて松山高吉氏植村正久氏等と共に之が為に尽瘁したり、実に日本訳詩篇は氏が吾人日本人に遺したる所の賜の一に数へざるべからず、之と同時に氏は明治学院神学部講師として旧約釈義又は説教を教授して伝道者養成にも力を尽したり、

近年に至りては之をも辞して専ら巡回伝道に従事したり、東京横浜の間に於て氏が屢々能弁を振ひ幾千の聴衆をして感歎措く能はざらしめたることは世人の普く知る所なれども単に京浜間のみならず或は九州に或は四国に或は山陽に或は北陸に或は東北に恐くは新領地を除くの外日本國中殆んど氏の足跡の至らざる所なか

らんと思はる、然して其日本語に熟達して演説に妙を得たることは衆人の均しく許す所なり、氏常に謂て曰く余不敏なりと雖三事を能くす、曰く教授曰く翻訳曰く演説は余の最も好む所なりと蓋自らを知るの言と云ふべし氏は元より強壯の質なるのみならず常に衛生に注意して日々運動を怠らざりしが旧冬以来兎角健康を失し時々胸部に苦痛を感じ呼吸の不自由なることありしかども左して病氣と云ふ程のこともなく医師の治療を受けながらも未だ病床に就かず去る九日には室内に在て自由に運動したる位なりき、一昨十日の正午十二時に至り例の如く食卓に就きたるに食事中俄かに激烈なる心臓麻痺を起し終に之が為に六十八年を一期とし焉として逝去せられたり、

フルベッキ氏は世間に米国人として知られたり、然れども実は米国の市民に非るなり、如何となれば氏は原と和蘭国に生れ二十歳にして米国に移住したれども未だ同国に帰化するに至らずして日本に渡航したればなり、然らば和蘭人なるかとなれば亦然らず和蘭人にも非るなり、何となれば数十年間同国内に住居せざるの故を以て同国の臣民たるの権利を失ひたればなり、依て氏は数年前日本に帰化せんことを政府に出願したり、然れども未だ外国人帰化法の備らざる故を以て時の外務大臣榎本武揚氏は氏が多年日本の為に尽瘁して其功勞少からざるにより特別の旅行免状を与へ而して氏と氏の一家族は帝国以内何の地に於ても自由に旅行若しくは住居して日本法律の保護を受けること本國臣民と毫も差別なきの権利を与へたり、是れ本邦に在る幾多の外国人中に於て未だ

曾て比類なき事にして縦令其名なしと雖も其実は既に日本に帰化したるものと見て不可なかるべし、然らばフルベッキ氏は米国人と称せらるるよりも寧ろ日本人と称へらるべき人なりとす、

終に臨み謹んで先生の性行に就て一言せんと欲す、然れども吾人は殊更に賞讃の辞を列ねて先生の功德を頌表するの要を見ざるなり、何となれば先生平素の言行と其生涯の履歴とは既に其美德を彰はして余あればなり、嗚呼誰か一次たび先生に接して其温厚篤実の君子たることを感ぜざるものあらんや、誰か一次たび先生の演説を聴きて其博識卓見の学士たることを認めざるものあらんや、誰か一次たび先生の履歴を読んで其教会と国家とに大功あることを疑ふものあらんや、嗚呼先生の死や、独り親戚朋友の不幸に非ず、敢えて基督教会と日本国の不幸なりと断言するを憚らず、吾人は今此思寄らざる不幸に際して痛惜の情に堪へず日本國中先生幾万の知己朋友を代表して先生の御遺族方に対して真実の同情を表せんと欲するなり、然れども亦吾人は哀悼の情に耐へざると同時に明治創業の時に当りて天地の主たる神は先生の如き人物を日本に遣し爾來四十年一日の如くに教会の爲又國家の爲に尽力して其功を成さしめ玉ひしことを思へば実に感謝の念亦禁ずること能はざるなり

先生今や逝矣、然れども其功は尚存して長く國家を益すべし、曾て先生が薰陶したる人物は今尚朝に野に枢要の地位に在り、先生が刻苦丹誠したる詩篇は幾百年の後に至るまで益す多くの日本

人に愛読せらるるべし、先生が南船北馬夜に日を継ぎて伝播したる福音の種は必らず發生して或は十倍となり或は六十倍となり或は百倍とならん、

キリスト曰く嗚呼善且忠なる僕よ汝の主の喜に入れよと先生や此世に在りて実にキリストの忠僕たりき然らば則ち既にキリストより此賞詞を賜はりたるや疑を容れざるなり、

明治三十一年三月十二日

後学 井深梶之助謹述

(一四二号・明治三十一年三月十八日)

(四—M31—3) 明治学院卒業式

◎明治学院の卒業式

去る二十六日午後二時明治学院講堂に於て、其の第十三回卒業證書授与式を執行せられたり。神学部卒業生宮川巳之作氏は(ジョン、ヘンリー、ニウマン)の神学上の位置と題する邦語演説、普通学部研究科卒業生里見純吉氏は(人類同胞の觀念)と題する英語演説ありて後ち、總理井深氏は夫人の喪に遭ひ熊野雄七氏之に代りて卒業證書を授与せられ、卒業生總代の挨拶あり、奏樂に次で三好退蔵氏の卒業生に対する勧めありたり。卒業生は普通学部研究科二名普通科五名、神学部二名、同別科二名なり。來賓は余り多からざりしが式後別室にて茶菓の饗応ありき因に言ふ神学部卒業のうち早川友三氏は盛岡に伝道せらるべく、宮川巳之作氏は尚ほ留りて研究生となり府下四谷講義所の説教を担当せらるべし

となり。(一四四号・明治三十一年四月一日)

(四—M31—4) 東山学院卒業式

◎長崎通信

(略)

東山学院の卒業式は去る一日に挙行せられ、(在来の忠君思想と基督教的愛国心)と題し岡部珪蔵氏の英語演説、(人生行路難)と題する磯江克蔵の演説ありたり。卒業生は高等科二名ありき。ダッチ、リフォルムド、ミッションの宣教師会議は当地にて開かれたり。スタウト氏も来秋は渡来の筈なり。(尾島氏報)(一五九号・明治三十一年七月十五日)

(四—M31—5) ワイコフ再来、マクネヤ帰国

◎往来

明治学院教授ワイコフ氏は再び来朝せられ、マクネヤ氏は去ぬる九日を以て米国に帰省、其の妹の病氣看護のため上京中なりし福井捨松氏は去ぬる十二日帰任、大石城築氏は伝道局より派遣せられて熊本に行かるべしと、(一六八号・明治三十一年九月十六日)

(四—M31—6) フルベッキ博士記念碑建設計画

◎故フルベッキ博士記念碑設立の計画

先に日本基督教大会は、故フルベッキ博士の功労を憶ひて、種々の議事あり、其の徳を記念すといふの決議もありしが、此度副嶋

種臣、大木喬任、細川護成、長岡護美、曾我祐準、加藤弘之、渡辺洪基、細川潤次郎、杉亨次、菊地大麓等諸氏、フルベッキ氏に恩義あり親交ありし人々の發起にて、博士のために記念碑設立の計画あり、左の趣意書を發して汎く義捐金を募れる由。

故勲三等神学博士フルベッキ先生は文久元年初め長崎に渡來し日本語学習の傍ら長崎洋学所済美館并肥前藩校の教師に聘せられ當時天下の有志者は海外の事情に通ずるを以て急務と為して概ね長崎に來遊し先生に就て学ぶ所あり問ふ所あり語学、数学より陸海軍工技法政の諸学に迫るまで講述解説夜以て日に継ぎ循々として倦色を見ず愈々其博識に驚き其懇篤に服せり其中今日朝野知名の士多し明治二年大学南校の教師に徴せられ同五年太政官の法律顧問と為り更に元老院に転じて法典の翻訳及調査に従事し又学習院の教師と為る同十年政府雇を解き特に勲三等に叙し旭日章を賜はりたり爾來全く一身を布教伝道に委ねて經典の翻訳説教学の教授に尽瘁し又全国を巡歴して教旨を宣伝し東船西馬席暖なるに暇あらず遂に本年三月を以て東京葵坂の寓居に溘然易簀す享年六十有八洵に痛惜の至なり抑も先生我国に渡航せしより殆ど四十年其間文明の新氣運を催進したる功德の著大なるは今更に讃辭を措くを要せず其学識の該博なる其言行の濃厚なると我国に竭せる勤勞とに至ても先生の履歴之を証して余あり今や斯の不幸に遭遇す生等久しく先生に親炙して師友の交誼を訂せるもの其遺徳を追慕するの情止む可からざるものあり是に於て同志相會して協議の結果各応分の金員を醜集し以

て先生の爲めに青山の塋域に石欄を建てて永く弗諼の志を表し且薰陶の恩に酬い若し剩す所あらば之を挙げて未亡人に贈贈し或は以て子女の学資を補ひ或は以て手沢の遺書を購ふ等其意の望む所に従んと欲す切に願くは平生先生に交誼ありし門生友人は勿論其他同情を有せらるる諸君に於ても幸に賛成を賜ひ多少の義捐ありて以て此挙を成就せしめられんことを生等懇請の至りに勝へず謹啓

明治三十一年九月

右委員

麻布区市兵衛町一丁目一番地 和田秀豊

赤坂区青山権田原町三十三番地 何礼之

本郷区弓町二丁目二十四番地 辻新次

芝区西久保城山町三番地 中嶋永元

神田区三崎町二丁目十一番地 永井尚行

(一六九号・明治三十一年九月二十三日)

明治三十二年

(四—M32—1) アレキサンドル帰国

アレキサンドル氏の帰省

米國アレシビテリヤン教会の派遣宣教師にして常に本紙に寄稿せられたるアレキサンドル氏は、此度暫く我國を去て米國に帰ることとなり、途次パレスチナ埃及を漫遊せんとし、昨十六日東京を

出発せられたり。氏は二十余年の間、我國に在留し、或は伝道のために尽力し、或は神学校に教鞭を執り、我國基督教伝播のために寄与したる所実に尠少に非ざるなり。氏は最も多く日本人のために計画し心配し、最も多く日本人のために助言し弁護し、また最も多く日本人のために勉められたり。日本基督教会に属する殆ど凡ての教会は、氏を以て其の信友となせり。氏は実に教会の友なり。伝道局の友なり。其他種々なる事業の友なり。而してまた個人の友なり。府下に在る教役者にして氏と個人的の友誼を結び居らざるもの殆ど之なからんとす。外国宣教師が一時帰国するも、日本基督教会倶楽部にては去る十三日特に氏のために送別会を開き、府下の教役者は殆ど皆な之に会せり。また以て氏に対する感情の如何なるかを知るべし。氏の家族は先年中既に帰りて米國に在り。氏もまた久しく拮据尽瘁せられたり。其の帰省して休養せらるべき権利は疾くより十分に具はりしなり。然れども我國伝道界今や多事多望の秋なり。此時に当て着実、親切、温厚にしてまた熱心なる氏を失ふ。真に惜むべきことと謂ふべし。吾人は氏が帰休して英氣を養ひたる上、再び我國に帰り来り、当に振興してあるべき伝道界に投じ、ますます其の力を尽されんを望んで止まざるなり、送別会の席上、湯谷礎一郎氏が朗吟したる短歌數首あり。乞ふて左に掲ぐ。

なつかしき香をのこしつつ梅の花

かさしにさしてかへる君かな。

『福音新報』明治学院関係記事

月花の折にふれては敷島の

やまと島根をおもひませ君。

みそのにはなすわざ多し何事も

さきくいましてはやかへりませ。

願はくは君に従ひゆかまほし

ガリラヤの海辺ユダの山里。

(一九〇号・明治三十二年二月十七日)

(四—M32—2) 明治学院卒業式と卒業生任地

◎卒業式

明治学院普通部及び神学部卒業式は去る二十八日に挙行せらる。

普通部卒業生は五名にして、神学部卒業生は五人なり。

同志社神学校卒業式は二十五日を以て挙げられ、卒業生は三人なりといふ。(一九六号・明治三十二年三月三十一日)

◎明治学院神学部卒業生の任地

深津基一氏は広島、島村穂吉氏は盛岡、藤井竹次郎氏は備後福山、

竹内虎也氏は未定、田島進氏は一年留学に決せり。(一九六号・

明治三十二年三月三十一日)

(四—M32—3) 松永文雄近況

◎松永文雄氏の近状

同氏は米國紐育洲オーヴルン神学校にて勉学中なるが此程友人の許に寄せられたる書によれば、卒業は来年の夏にて帰朝の上は身

を献げて伝道の事業に当らるる決心なりと。伝道界其の任に当る者の少なき今日、同氏の健康を祈る。(一九八号・明治三十二年四月十四日)

(四—M32—4) イムブリー演説

帝國ホテルの演説

イムブリー

凡そ十五六年前の事でございますが、私は当時の米國全權公使ビンガム氏と共に吹上御苑を拝見したことがございます。その時は丁度夏で真に朗かな天気でございますが、御苑の景色の立派なことから話は自ら転じて日本國の事、殊に条約改正の問題に移りました。ビンガム氏は最も熱心な条約改正論者でございましたが、その熱望したことが遂に成就して、愈よ遠からざる中に日本も世界列國の中に正当の位置を占むる時が近きました。

十数年前の彼の朗な夏の日私に私の心に浮んだ思想は此の如きものでございましたが、今日は一種変った思想が浮びます。その思想は更に高尚に又更に熱心なる冀望でございますが失敬を顧みず今之を開陳して見たいと存します。今日私の心に浮ぶ思想と申すのは外でもございませんが、他日日本が只一大國民たるのみならず、一大キリスト教國民たらん時の事でございます。日本の高山日本の静かなる湖、日本の美観なる滝、此等は皆世界各國の漫遊家が賞讃して措かざる所でございます。又日本の政治上の進歩改良も世界こそぞりて感服する所でございます。然しながら私の考では日本に今一つ足らぬものがございます。それは即ち日本は未だキリ

スト教国でないと申すことでございます。私の考では日本が未だキリスト教国にならない中は丁度 日本に未だ彼の立派な不二山が出来ない中の様な心持でございます。

然しながら或は之に対して日本はキリスト教国たる可からずと云ふ人もあるかも知れません。そう云ふ議論をする人の根拠とする所が二つあるやうでございます。

第一キリスト教は愛国心を鈍くする故に國家に害があると申す論があります。その人の議論によればキリストに従ふと云ふことと自国を愛すると云ふことと火と水との様なものでどうしても一緒になることが出来ぬと申しますが事実果して左様でございまするか成程キリスト教は執れの國に於ても——英國でも米國でも日本でも不義不正な事は容赦なく攻撃して之を改良することを勉むるに違ありません。且又今日の仏國に於る如く虐政的な偽國民的精神が起る時には基督教はそう云ふ間違た精神に反対して容赦なく之を呵責致します。然しながらキリスト教は國民の愛國心を弱くするとか忠君の心をなくすとか云ふことは真実でございません。試みに大英國を御覧なさい。英國はキリスト教国でございますが誰かキリスト教が英國から愛國心や忠義心を追払ったと思ふ人がありませうか。英國は數百年來キリスト教国でありましたがそれが為に英國國民は次第に墮落して支那人の様になりつつあると真爾目に考へる人がありませうか。加之のみならず若しも人口數億方を有する支那國が今日キリスト教国であつたならば支那分割論と云ふやうな話が起らぬであらうと云ふことは誰れにも知れきつた

ことでございます。其訳はキリスト教は元來戰爭を好むからではありませんがキリスト教は何時でも如何なる場合に於ても一切の腐敗、敗徳には徹頭徹尾反對するものであるからです。又米國を御覧なさい。今より三十年程以前に米國に大戰爭がありました。四年間恐しい戰爭がありました。その時戰爭に出た青年の數は三百萬人、そうした國の為に斃れた青年即ち國の花と云ふべき青年の數が三十萬人程でございますが是れはキリスト教國たる米國に於てあつたことでございます。然しながら何も外國の例を引かんでも御國の事を御覧なさい。四年前に日清戰爭がございました。

彼の戰爭には陸戰もあり海戰もあり焼くが如き甚暑もあり肌を裂くばかりの沍寒もありました。そうした其時出陣した海陸軍人中には數多のキリスト信徒がありました。が彼等は他の戰友と同様に海陸の戰爭に従ひ沍寒甚暑の辛苦を嘗めましたが其時に彼等の信じたキリスト教が彼等の愛國心や忠義心を弱らしたと申す話がありましたか、いいえ。キリスト教が愛國心や忠義心をなくすると云ふことは真実でございません。只真実でないといふばかりでなく、實は論ずるにも足らぬ愚論でございます。

然しながら又此にたとへキリスト教は國民的精神の上に左したる害がないとしても何も格別利益がないと申す人がございます。米國や英國へ往て大都會の市街を見て見よ、その日刊新聞を読んで見よ、其人々の無遠慮に咄して居る所を聞いて見よ、キリスト教國と非キリスト教國とどれ程の違があるか、と云ふ人があります。是れは能く聞く議論でございます。なるほど是は一応尤もな議論でこ

ざいます。何処へ往て見ても不道德の行はれて居らぬ国はなく又その不道德を喜で居る人もあります。実に是は眞のキリスト信者をして最も心を傷ましむることでございます然しながらこれは何も珍しいことではございません、キリストも稗子が麦と一所に生へるであらうと申されましたそれはそれに違ひありませんが然し之を以てその真相とはいたされませぬ何せなれば誰でもキリスト教国の複雑なる事績を調べて見ると之と同時にもう一の事実があることを発見致します、若しもキリスト教国の中に腐敗した水溜があつて疫病の源となるなれば又他の一方には清水の流があつて億兆の人民に生命を与へて居ます。即ち此等の不道德を以て充滿したる大都會の中にも常に正義の爲、人道の爲、清潔の爲に働いて居る所の大なる感化力であります、それは何故であるかとなればそこには数百年來多くのキリスト信徒があつて熱心に其命令を守らんと勉めつつあるからでございます、何せなれば所謂キリスト教国には只キリスト信徒の名あるのみならず眞実キリストの教を信奉するものがあるからでございます。私が他日日本がキリスト教国になる時の事を思ふと申たのもつまり其意味でございます。日本に於ても此の如き眞実なるキリスト信者の団体が出来てパン種がパンの塊をふくらますが如くに社会万般の事に感化力を及す時のことを思ふのでございます。其時には日本の官吏は一層職責を重じ、日本の教育家は一層高尚なる理想を懷き、日本の家庭は新なる幸福と新なる美風を生ずると同時に日本は依然として天皇陛下の忠義なる帝國として存在するでございましょう。只違ふ

所は 天皇陛下の帝國が増す立派なる天国になると申すだけの事でございます。

今日私共は英國人米國人又日本人として会合致しましたが既に存在する所の国民的友誼を益す厚くし御互の国との關係を愈よ親密にすることは私共の眞実に望む所でございます。然しながら又私共は人間として会合したと申す意味もあらふと思ひますから国民的の關係をば全く脱して単に一個人として諸君に一言と呈し度と存ます。即ち私はキリスト教を一個の國民として日本に幸福を來すのみならず個人としても之を信奉する諸君に幸福を與ふことを確信するものでございます。キリスト教は人生の大問題に一の新なる光明を放つてございませふ 又悲哀の時には安慰を與へ失望の時には勇氣を與へませふ抑も吾等人類は一の洪大なる宇宙の間に立つて居るものでございますがその宇宙の上にも下にも一種の不思議なるもの即ち吾等の神と稱ふる所のものがありませんがその神とは何であるか これが即ち大問題でございますがキリスト教は此問題に対して一の解釈を與へます。そうしてその解釈は千數百年以來凡て之を受容れた人の耳には美妙なる音楽の如く美しく聞へました。イエスキリストの語に我は世の光なり我を見し者は即ち父を見しなりとありますが此解釈こそ実に吾人に平和と冀望と勇氣とを與ふる解釈でございます夫故にどふぞ諸君も同情を以てキリストの宗教を能く御研究なさることを冀望致します。

(二〇〇号・明治三二年四月二八日)

(四—M32—5) 井深の渡清

◎井深梶之助氏の渡清

井深氏は清国学生基督教青年会よりの招聘により今回上海にて開かるべき同会総会に出席せんため、去る十日東京を出発せられたり。(二〇三号・明治三十二年五月十九日)

(四—M32—6) 文部省訓令十二号と六キリスト教学校

◎文部大臣訓令と六基督教学校代表者

青山学院、麻布英和学校、同志社、立教中学校、明治学院、及び名古屋英和学校の代表者諸氏は、去る十六日東京に会合し、先日發布となりし教育と宗教に関する文部大臣訓令に付て如何なる態度を取るべきかを協議し、結局基督教主義諸学校の設立者職員等に向つて、此度の訓令にて前よりも一層明白に又一層嚴重に宗教々育及び儀式を私立学校より駆逐したるは、憲法の精神に違ひ、公立官立の学校と私人の資金を以て其の主義の上に立てる学校との別を弁へざるものにて、真に不法千萬なれば、願くは基督教主義諸学校の設立者職員等は飽くまで確乎たる態度を取りて、政府の特権を得んがために、其の主義を枉げ之を没するが如きことなからんを切望すとの意味なる警告書を発したり。(二一八号・明治三十二年八月三十日)

(四—M32—7) 明治学院の学科変更

◎明治学院と学科の変更

『福音新報』明治学院関係記事

明治学院は此度の文部大臣訓令により已むを得ず中学科を廃止することとなれり。されど昔日の如く普通学部を設けて實際中学科相当の学科を教授し、尚ほ高等学部を拡張し、英語師範科をも設けて、今日の必要に應ずる教育を施すこととなれりと云ふ。(二一九号・明治三十二年九月六日)

(四—M32—8) 訓令に対するキリスト教諸学校の善後策

◎文部大臣訓令と基督教諸学校の善後策

曩きに宗教に関する文部大臣の訓令出でしより、同志社、明治学院青山学院麻布中学立教中学等は之に對する善後策を講ぜざるを得ず随て或は従來の中学制度を廢するに決したるもあり、或は本学年中は此儘にて繼續せんとするもあり、或は全く訓令に従ふことを決したるもあることなるが聞く所によれば同志社は基督教を基本とする憲法を有しながら該訓令に従ふ旨を決したるに、其筋にては之を許さず全然憲法の明文をも取り消すにあらずは特典を与へざる由にて已むなく中学位を廢するの議起り、明治学院及び青山学院は目下其の筋に向ひ來年四月まで即ち本年中該訓令の實施を延期せられんことを願出で其の返答如何にて所決するに至るべしといふ。青山学院は先頃已に本学年を其の儘にて訓令に従ふ事となりしも監督の反対ありし為め再び其の議を翻さざるを得ざりしなりと。麻布及び立教の二中学は訓令に従ふ由なり。

(二二二号・明治三十二年九月二十七日)

(四—M32—9) 訓令に関するアメリカ各教派伝道局決議

文部大臣の訓令に関する米國各派伝道局員の決議
次に掲ぐる所は米國に於ける各派外国伝道局の事務員及び之に
關係ある者の會議の顛末にして、其の會議の書記たりしロベル
ト・イー・スピーア氏の録されしものなり。

ウイリアム・イムブリー

去ぬる十一月九日紐育市なる長老派外国伝道局樓上に於て、日本
の基督教事業に就き、各派伝道局員の會議を開かれたり。其の目
的は私立学校令に關し、八月三十日附を以て文部大臣の発せし
一般の教育をして宗教の外に特立せしむるは学政上最も必要と
す。由て官立学校、及び課程に關し法令の規定ある学校に於て
は、課程外たりとも宗教上の教育を為し、又は儀式を行ふこと
を許さざるべし

てふ訓令に対し諸伝道局は如何なる態度を取るべき乎を協議する
に在りき。

当日出席せし議員は、アメリカン、ポールドより博士バルトン氏、
バプチスト、ミッシヨナリ、ユニオンより博士バルボール氏、監
督教会の外国伝道局より監督サルボオロオ氏、博士キンベル氏、
及びバットン氏メソヂスト教会より博士ボルドウン氏、及び同ス
ミス氏、長老派伝道局より博士エリンワード氏、同ブラオン氏、
同ハルセイ氏、及びスピーア氏、改革派伝道局より博士コウプ氏
等なり。博士コウプ議長に撰ばれ、スピーア氏書記に挙げらる。
書記先づ日本の一般の状態より、此数ヶ月間私立学校に対する文

部省の態度に就き事情の顛末を述べ、而して此際米國の各外国伝
道局が請求すべきものあるを説き、能ふべくは互に合同して等し
く蒙むる所の困難に処せんことを希望せり。

議員何れも之に与かりて鄭重に討議せし末、會議の意見として左
の決議案を可とし、之を書記より合衆國及び加奈太に於ける各伝
道局に通牒して賛成を請ひ、且つ此意見を採用せらるる時は其旨
を書記に報ぜられんことを求むることと成れり。

其の決議案に曰くバプチスト、コングレガティオン、エビスコパル、メソヂスト、
長老、及び改革等諸教会に属する外国伝道事業の当局者

及び其の局員によりて成立せし此會議は、八月十六日を以て、基
督教主義の六学校代表者が東京に會し、其の課程に關し法令の規
定ある学校に於ては宗教上の教育を施し、又は儀式を行ふことを
許さざるべしと言へる文部大臣の訓令に就き、外国伝道局により
て補助せられたる諸学校の処置を協議せし決議案に十分なる同意
を表す。(尚ほ東京に於て開かれたる會議の決議案をも附記せら
れたれど、世人の熟知する所なれば之を略す)。

日本に於て大に要する所は基督教及び基督教主義の教育なること
を確信し、又此會議の代表者として出席せる各教会の會員は、宗
教上の訓練を為し又之を教ゆることを禁止せられたる諸学校に対
し、ミッシヨンの補助を与ふるを喜ばざるが故に、此會議は日本
に於ける各ミッシヨンが断乎として或は一時にもせよ、或は外見
のみにせよ、如何なる性質に於ても調和することなく、其の教
育事業に宗教を躰するならんことを確信する旨を発表す。且つ此

會議は此際若し各ミッションが一步を誤まり諸種の學校に於て、如何なる世上の利益と政府の特典も之を犠牲とし、更に誤解せらるる所なきやう公然基督教主義を維持するにあらずんば、最も甚だしき不幸に陥るべしと成すものなり。(二三四号・明治三十二年十二月二十日)

明治三十三年

(四—M33—1) フルベッキ記念碑

○フルベッキ博士の記念碑

故勲三等神学博士フルベッキ氏の為め同志者相計り記念碑を青山に建立し、過日其の建立式を行ひたるに副島伯、辻新次、中島永元、清水彦五郎等の諸氏來会し、一同撮影したるの後、バラ博士、パリー夫人(フルベッキ氏の令嬢)より懇篤なる謝辞ありたりし。(二三六号・明治三十三年一月一日)

(四—M33—2) 訓令十二号に対するキリスト教徒の運動

○文部省訓令に付きて基督教徒の運動

曩きに世の物議を生じたる文部大臣の訓令に対しては基督教徒引續きて尽力せしも遂に無効に帰せしかば、之を与論に訴へんと決心にて該訓令の欠点を指摘し、併せて従來運動の顛末を述べたる一文を横浜のジャパンメール新聞に掲げ、又之を広く世に配布して判断を請ふ所ありたり。(二三六号・明治三十三年一月一日)

(四—M33—3) アレキサンダー博士の再来日と京都転任

○博士アレキサンデル

博士アレキサンデル大坂より東京に來れし以來、明治學院神学部に尽力せしのみならず、府下の伝道につきて功勞大なるは皆人の認識するところなり。其の温厚忠実なる品性は、日本基督教徒の中に多くの朋友を造りたり。一年の帰休期終りて再び東京に歸られしは其の友人等の喜びし所なるに、伝道上の都合によりて、京都に転任せらるることとなりしため失望せしもの少からざるべし。特に氏の關係最も厚き日本基督教会の人々は甚く同氏の他に転ぜらるるを惜むことならん。(二三七号・明治三十三年一月十四日)

(四—M33—4) 井深の結婚式

○井深樞之助氏の結婚

井深樞之助氏は昨日神戸女学校の教師たりし大嶋花子と明治學院講堂に於て結婚の式を挙げられたり。(二三七号・明治三十三年一月十四日)

(四—M33—5) 東山學院ビーターズの帰來

○長崎日本基督教會

去る五日一人の東山學院生徒受洗し、同じく一人の生徒は信仰を告白して會員となり、尚ほ目下受洗準備の者十名程あり。過日來當港にては聖書之友巡回委員來り大会を開き、又美山氏ラーシ夫

『福音新報』明治学院関係記事

人の禁酒演説会あり、石原保太郎氏の台湾の帰途立寄り諸集会に尽力せらるるありたり。八年間東山学院の教授の外実地伝道の為補助を与られたるエ・ビートルズ教師は其家族と共に去十一日帰米の途に就かれたり、氏は我邦に基督教主義大大学校設立の目的を以て滞米中運動し、明年再び来朝せらるる心算なりといふ。

(二四六号・明治三十三年三月十四日)

(四—M33—6) 明治学院卒業式と学則改正

○明治学院彙報

○卒業式、去ぬる二十七日午後二時、明治学院講堂に於て第十五回卒業証書授与式を挙行せられたり、該日は朝来陰雲結んで解けやらざるに拘はらず、遠来の賓客割合に多く、定刻に至りて満堂雖地を余さざるに至れり。初めに奏楽ありて博士インブリー氏の聖書朗読並に祈祷あり、次に吾人の天職と題して普通学部卒業生鈴木春、基督の品性と其意識と題して神学部卒業生森田金之助、両氏の英語演説あり、夫れより井深総理より卒業証書の授与ありて、普通学部よりは宇野直彦、神学部よりは井上胤文、両氏の卒業生総代として挨拶あり。シグナル、レンジ氏のヴァイオリンの独奏の後特命全權公使矢野文雄氏の卒業生への勧め並に支那に政教一致の密接なる関係あるを述べられ、次で奏楽祝福を以て式を終りたり。因に記す米国全權公使エー・イー・バック氏には当日演説せらるる筈なりしが遽かに差岡ありて臨席せられざりしなり。本年の卒業生は神学部二名普通学部三名にして神学部卒業生

井上胤文氏は野州小俣に森田金之助氏は多分越前福井に伝道せらるるとなり

○学則改正 文部省の訓令ありし為め中学部を廃して、普通学部となし、高等普通部は是迄二年なりしを三年となし、更に之れを文学科商業科と分ちて、専ら英語に重を置れ、中学校師範学校の英語教師又は実業家を養成する方針なりといふ。(二四九号・明治三十三年四月四日)

(四—M33—7) ワデル送別会

○ワデル氏の送別会

二十七年間我国に在りて鋭意伝道に尽されし蘇国伝道会社のワデル氏は此度病を養はんが為めに帰国せらるることとなり、且つ蘇国伝道会社は日本の伝道を引き上ぐる決議をなしたりとのことにて、去る五日午前十時より芝教会に於て府下有志者の送別会を催はされぬ。石原氏の司会にて井深氏先づ送別の辞を述べ、併せて府下の有志者が連署して蘇国伝道会社に日本伝道の大切なるを告げ尚ほ伝道を継続せられたき旨を通ずる書翰を同氏に托せられ、次で星野氏は曩きに奥野氏慰勞会の席に列せし者を代表して送別の辞を述べ、且つ連名の感謝状を呈し、続て植村氏はワデル氏の根気よく伝道に従事せられのみならず、氣論に熱心なりしが如きジョンプールの気性を現はされしことを語り、自らも近來はS. J. P. を靈と訳するの不十分なるを知るに至りたれど氣を以て之に代ふべきや否やは未だ決せずと語り、ワデル氏は喜んで一々其

の辞に答へ特に氣論につきては日本のジョンブルに味方を得たるは満足なりとて大喜びなりき。次で和田氏は今回再び帰任せられしマクネヤ氏の歓迎の辞を述べ、其の答辞ありたり。因に言ふワデル氏は去る六日横浜より出帆せられたり。(二六三号・明治三十三年七月十一日)

(四—M34—3) 明治学院卒業式
△明治学院は来る二十八日午後二時より卒業式を挙げ、女子学院の卒業式は二十九日午後二時よりなり。(三〇〇号・明治三十四年三月二十七日)

○明治学院卒業式

明治三十四年
(四—M34—1) 明治学院公開演説
△明治学院にて毎月一回公会演説を催はすこととなり、去る日曜日には植村氏の演説ありたり。(二九四号・明治三十四年二月十三日)

前号に報じたる同学院卒業式は去る二十八日講堂に於て挙げられたり。普通部の卒業生二名英語にて演説し、神学部の卒業生桑田繁太郎氏邦語にて演説す。証書授与式終りてハオルス氏の「品性養成」てふ演説ありたり。其の間林定子の独唱を始め、西洋人の合奏、合唱等ありて甚だ面白かりき。来賓には片岡本多山東諸氏を始め中々に盛会なりき。卒業生は中学部七名にて高等科は一名神学部一名なり。桑田氏の任地は水戸に赴かるる筈なり。(三〇一号・明治三十四年四月三日)

(四—M34—2) 神学部における社会学講演

(四—M34—4) 明治学院説教会

△今回明治学院神学部にては高木正義氏を招聘して社会学講演を開く筈にて、本月十四日より始め一週二回(月木両曜日)午後六時半より開筵し、都合十回にて結了の見込なり。其の問題は左の如し。第一回社会学研究の必要、第二回社会学とは何ぞや、第三回社会現象論、第四回社会心理論、第五回社会政策(経済)、第六回同(教育)、第七回同(宗教、政治)、第八回同(商業、工業)、第九回同(慈善、犯罪)、第十回結論。此講演は明治学院総理へ宛てたる紹介を有する人々には教場の許す限り傍聴を許す由。

○明治学院説教会
来る十四日より三日間同学院内に説教会を開かるる由時節柄定めて盛会なるべし。(三一〇号・明治三十四年六月五日)
△明治学院説教会 去る四日より三日間開かれたる同学院説教会は盛会にて第一回目に三十二名の決心者あり後の二日間の模様は明ならざれ共三日間にて多分五十名以上の決心者を出したることならん。(三一一号・明治三十四年六月十二日)

(二九五号・明治三十四年二月二十日)

(四—M 34—5) 大挙伝道と明治学院神学部

○明治学院神学校

今回の大挙伝道に伴ひたる、信仰復興の結果として、有為なる青年信徒中に、将来専ら伝道に従事せんと志を立てたる向も少なからざる由なれば、此の如き人の便利の爲め、来年度に於る、明治学院神学部の学科目及び授業分担等に就き、信すべき筋より聞込たる所を略述せん、

入学試験は広告にも見ゆる如く、九月二十日に執行し同月下旬より開校する由、入学試験の程度は従前と異ならざれども、或は本年度より本科選科の区別を立て更に標準を高くせんとの評議もある哉の由、普通教育の進歩及び社会の情態に従ひ、教役者の地位を高くするは極めて必要の事たるべし、

旧約釈義及び文学は従前の通りドクトル・イムブリー氏の負担、基督教教理史、倫理学、及び説教は井深氏受持るべく、植村氏には更に基督教「ドグマチックス」を負担せらるる様交渉中の由、教会歴史、新約歴史、英文学は柏井氏の負担なること従前の如くなるが、過日明治学院理事會は全会一致を以て、多年三州岡崎に伝道せらるるフルトン氏を神学部教授に招聘する事を可決したるが、多分同氏は本年九月若くは十月より東京に移住して、明治学院神学部の一講座を担任せらるるべし、而してその講座は同氏の得意たる新約文学及び希臘語なる由、フルトン氏は日本語に熟達せる事に於ては若年の宣教師中屈指の人なれば神学教授の外にも亦一の勢力あらん、牧会学は専任の教授なし、然れども京浜間の

老練なる牧師諸氏を聘して臨時講演を開き又は諸教授分担して講義する事もあり、其他社会学哲学内外文学等に就き専門の学士を招聘して臨時講演を開くことある由(三一七号・明治三十四年七月二十四日)

(四—M 34—6) ワデルの永眠

ワデル氏の訃音

ヒウ・ワデル氏は六月二十一日愛蘭のベルファストに於て病没せられたり。昨年病氣の故を以て帰国せられし頃は、一見したる所左したる重躰とも思はれざりしかど、之と昵懇なる人の説に依れば既に容易ならざる大患に罹り居られたるなり。今此訃音に接するは其の熱信、勤勉、洒脱、正直、質素、友愛等に依りて得られたる本邦多くの朋友が痛惜に堪へざる所とす。氏が上野公園に於て、野外説教に多くの聴衆を集めたるは世人の尚ほ鮮かに記憶する所なるべし。氏が芝、麻布辺の伝道に尽力せられ、諸方の説教會に時としては諧謔を以て聴者の頤を解かしめたるも、世に亡き人の記念とはなりぬ。氏が最も力を用ひられしは聖氣論なり。支那に伝道せられたる頃より思ひ立ち、明治六年伝道者として日本に來任せられし以來三十余年一日の如く、ニウマの訳字に靈字の不適當なるを論じ、氣の字を以て之に換ゆるべしと主張せられしは、日本に於ける内外基督教徒の普く知る所とす。氏之が為に日本及び支那の群書を涉獵し、靈字、氣字の用例を調査せられたり。其朱黄の点を付せし書籍堆積して殆ど山をなすべし。其熱心と勤

勉とは常に吾人の驚歎する所にてありき。靈字氣字の調査に三十余年を消費して倦まず、狂と云はれ、痴と嘲けらるるをも厭はず、自説を世に行はしめんとして尽力怠り無かりし、氣の長さ氣の強さ、感ずるの外無し。此氣象だにあらば天下の事必ず成就すべきを疑はず。余輩は氏の実行に依りて忍耐と勤勉とを教へられしこと少なからず。然るに其議論正確にして靈の字を用ふるの不都合なるを知り、却て氣の字を使用するの便にして且つ穩当なる場合甚多きを覺りて、之を尊重するの念更に加れる心地せり。余輩實地に之を応用して基督教文學に一の改良を加へんと欲すれども、靈字氣字に関する知見氏の如く確實ならず、尚ほ幾多の精煉を要すべき点あるを以て、依然従來の慣例に司配され居るは一外人たる氏に對して深く恥る所なり。余輩は氏の該博精通なる調査の結果を福音新報に掲載し、驥尾に附して聯か其忍耐勤勉の精神に酬ゆるところあらんを期せり。去年氏の日本を去るや、必ず之に關する論文を草し和田秀豊氏の靈訳に依りて之を本紙に寄すべしと約せられしが、病の故を以て荏苒今日に至り、又遂に他界に入りて此約を履むこと能はざるに至りしは遺憾千万なり。聖書文の改良基督教文學發達の為に甚だ惜むべき事なりと言はざるべからず。余輩は又ワデル氏の調査に於て聖の字の不穩當なるを学びたり。

氏は齋の十字を以て之に換へんとの意見にてありき。此点氏の調査氣に於ける如く精密ならざりしかど、其說余輩に暗示して發明せしめしもの少なからず。ワデル氏は不幸にして其研究を世に公けにする事能はずして死せり。然れども余輩は信ず、其忍耐強き

調査研究は必ず孰れにか果を結びて、痕跡を止むる事なるべしと。余輩も亦氏の労苦をして水泡に帰せざらしめん為め、幾分小心掛くる所あるべし。

ワデル氏は蘇國長老教会と日本伝道との關係を想起せしむ。蘇國一致長老教会が日本に伝道者を送りしは敢て他諸派に遅れたるに非ず。実に明治六年既に其伝道はフォールズ、ワデル、デビソン、マクラレン等に代表せられて、日本の教化に与りたり。其効果他諸派の如く形に現れて存せずと雖も、冥々の中決して輕からざる感化を与へられたるを疑はず、博學にして計画に富めるフォールズ氏が病院を設置し、公會演説を催ふして當時物珍らしかりし進化論の無神的なる部分を駁撃し、クリサンスマム雜誌を興されし如き、其他日本基督教の為に功蹟少なからず。氏が築地病院に催ふされたる生物学等の講演には小崎、元良、其他の諸氏も出席して啓発せられし所少なからざるべし。本紙記者の一員も氏に對して恩恵を感ずる一人なり。マクラレン氏が神学校の教授として忠実に精勤せられしは、當時其の門下生たりし人の記憶する所なるべし。邦文に訳出せられたる聖經歴史は今尚ほ學者を益しつつあるならん。日本の伝道にマクラレン氏を失なへるは、少なからざる損害なりと言はざるべからず、明治学院の図書館には是等宣教師の手を経て、エテンボローの神學生が日本の為に寄附せし書籍少なからざるなり。こは蘇國の長老教会が日本伝道に關係せし紀念物にて、余輩之が為に残念に思ふ所少なからず。何となれば蘇國の基督教が日本の伝道に關係すること一層深くなりたらんには、

思想の発達、信仰の傾向等に余程健全なる感化を及ぼし得たるならん。然るに其宣教師は相前後して去り、蘇国の代表者其跡を止めずなりしは日本基督教会の不利益なるのみならず、日本基督教全株の損失なりと云はざるべからず。日本の基督教は余り多く米國風なり。安逸の宣教師来りし為反対の極端に立てる異彩を放ち、神学思想を動揺せしめたり。害も有りしならんが空氣の交換を助け、刺激を与へし功能大なりしを認む。英國の監督教会ありて、一種の思想慣習を吹き入れつつあり、蘇国の長老教会今少しく奮発して日本の伝道に従事したらんには、思想信仰の風習に於て一派の潮流を日本に注ぎ入れ、基督教の發達に稍健全なる貢獻を為し得たらん事疑ふべからざるなり(三一九号・明治三十四年八月七日)

(四—M34—7) 和田秀豊のワデル追悼書簡

故ワデル氏

拝啓、過日は福音新報紙上に故ワデル教師の事につき其性質品行等具さに御説明被下感謝至極に御座候。御存知の通、小生は明治十年以来同教師と親しく相交はりたる一人にして同教師の持論、希望等承知致居申候につき、同教師の就眠を深く悲み遺憾至極に感じ申候。氣と申す詞が英語のスピリット (Spirit) に相当し、靈てふ詞は英語のデワイン (Divine) に当るとは同教師の持論にして、同一の主意を三十年間一日も怠ることなく和漢洋の書に就て研究致されたる其熱心と其忍耐とは、小生の深く感心仕る所に

御座候。或時は聖氣きちがひと称へられ、或時は頑固おやちと評せられたることあるも平氣に聞流し、聯も意に介する様子これなく、又同教師の説を賛成してスピリットを氣と訳する人次第に増加する模様相見え申候ても、左程嬉しく感ぜられた様子これなく、然し昨年同教師帰國の途に就かる前、芝教会堂に於ける送別会の折、大兄がスピリットてふ英語を靈と訳するは不当なり、氣と訳して或は可ならんと御陳述ありしを耳にせられたる折の同教師の喜悅満足は実に非常にして、恰も鬼の首でも取りたる如き心持致候様子相見え申候、其時迄は雜誌上に其説を公けにすることを拒んで承諾これなく候得共、其時以後は幾度となく小生に向ひ「帰國の上は氣と魂との関係、氣と心との関係、氣と体との関係等は迄調べたる所を英語に認めて郵送致しますから何卒日本語に訳して、植村氏に渡し福音新報紙上にだしてください、此事は植村氏も喜んで引受け呉れましたから嬉しいで」と申され候次第に御座候。此希望を以て歸られたるに病は追日重くなり一度も筆を取ることを得ずして終に此世になき人とはなりぬ。噫悲ひ哉。

近頃小生の手が届きたるワデル夫人の書中左の一節有之候「わが夫の心は終まで日本を離れざりし、今となりては彼の心に懸り居たりし事業は中途にして遣されし如く見ゆ、されど必ず実を結ぶことあるべしと信ず、氣に関する彼の持論は世に明かになる時あるべしと思ふ」実に然り、小生も同じ希望を有し候。少しく冷氣相催候時至ればワデル教師追悼記念会相開度希望に御座候間、其

節は充分御尽力被下度今より御願申上置候敬白

八月十五日

和田秀豊

植村正久様

(三二一号・明治三十四年八月二十一日)

(四—M34—8) 大挙伝道における福音主義の問題

—植村・海老名論争の端緒—

福音同盟会と大挙伝道

東京に行はれたる大挙伝道に就きて、其の当局者間に意見の異なるものありしは、余輩の聞知する所なり。之を明地に言へば、京橋区に於て大挙伝道を計画せし人々、所謂福音主義なるものを標榜して、或一派の人士を排斥し、説教を依頼せざるは勿論、全く之と無関係ならしめんと努められたるを始めとし、神田、小石川、本郷、牛込等の聯合区に於ても、之が為多少の紛議を生じたり。此の事が起因となり、福音同盟会の役員中にも問題を生じて、其の解決を要しつつありと聞けり。

余輩は先づ此かる紛議の生じたるを悲しむ。基督教信徒が旗幟堂々一齊に大挙伝道を試みるに当り、互に異見を生じて味方同士相争ふが如き觀を世間に示すは甚だ心外千万なりと言はざる可らず。蓋し是等の紛議は組織の不完全なるより来り、到底共にすべからざるものを共にせんと企てたる過失に基く。此の外に誤解も存すべく、行き違ひもあるべし。兎に角余輩は今後此かる不都合の生ぜざる様注意せざるべからず。

『福音新報』明治学院関係記事

右に就第一に解決したき問題は、東京の大挙伝道は果して福音同盟会の事業なりしや如何の一事なり。今更此かる問題を提出するは時候遅れの如き感あれど、余輩は種々の事実より之に就きて疑を生ぜざるを得ざる事情あり。此程福音同盟会よりして地方に派遣せられたる者の中に、自己の地位を弁明して、余輩は福音同盟会より遣はされたるに非ず、青年会館に集會せる聯合大祈禱会関なる『大挙伝道』の報ずる所と相一致せざる事なり。余輩は其の是非を判別すること能はず。然れども此の外種々の事情を綜合して之を考ふれば、過般の運動は福音同盟会の計画と云ふは名のみにて、其の実有志の教会が思ひ思ひに企てし事にあらざるやを疑ふ。而して福音同盟会が凡ての事己が所為なるが如く呼号せしに拘らず、其の実は大いに之と相違する点ありしに非ざるか。福音同盟会の大挙伝道とは嘗て弁士を諸方に派遣せし時の如く、基督の福音を宣伝すると云ふよりは、寧ろ基督教を加味したる道德若くは學術演説を為さしめしに過ぎず。東京の各区に起りて地方に波及せるものと劃然区別有るに似たり。其の故にや此度の伝道は福音同盟会従となりて他の人々主たりしが如き觀も有りしなり。故に余輩は此に東京の大挙伝道は果して福音同盟会の事業なりしや如何の疑問を提出したるなり。若し實際に於て福音同盟会の事業に非ずとせば、伝道に就て或る一の理想を有し、信仰に就て或る一の主義を懷抱する者共が、其の主義理想を一致せざる他の一部の人々を排斥したりとて敢て非難すべき事に非るべし。其の主

義理想の異なるより生ずる事なれば、又如何ともするに由なし。実に止むを得ざる次第にあらずや。然れども余輩をして福音同盟会の弁明若くは他の手より出づる議論に依りて、東京の大挙伝道は実に福音同盟会の事業なりしを認識せしめよ。此に更に次ぎの問題の生ずるを禁ずること能はず。曰く、福音同盟会の事業たる東京の大挙伝道が海老名氏を始め、普及福音教会を排斥せんと試みたるは果して穩当なる所為なりしか。

元來福音同盟会は曖昧なる集会なり。其の結合の基礎は福音主義なりと称すれども、所謂福音主義とは何ぞや。其性質及び範圍頗る曖昧なり。英国監督教会には一種の福音派あり。我国にも基督を神と認めざる独逸の普及福音教会あり。所謂基督に立ち返れと呼号する極端自由神学者も、福音主義とは我が説く所の如しと断言す。福音主義とは何ぞや。此かる曖昧なる徽章の下に集りて、基督の神性、救ひに就ての信仰などを嚴重に言ひ立つるは抑も大いなる間違ひに非ずや。

且つ余輩の伝聞する所をして誤り無からしめば、普及福音教会は既に福音同盟会に加入し居るものなりと。既に之を会員たらしめたるにも拘らず、其の計画の伝道事業に關係すべからずとするは甚だ不穩當なりと謂はざるべからず。余輩をして不幸にも排斥せられたるものの地位に立たしめんか、必ず其の不当を鳴らし、其の不公平を咎むることならん。福音同盟会の事業たる大挙伝道は、海老名氏等を排斥するの權利無きものなり。之を排斥したるは甚だ不公平なりと言はざる可らず。

殊に怪むべきは海老名氏と福音同盟会との間に成り立てる從來の關係なり。氏は同盟会に於て撰擧せられたる弁士の一人なり。而して氏は屢々福音同盟会の依頼を受けて、東西各地方に派遣せられ、至る所其の雄弁を以て歓迎せられ、其の主義とする所を宣伝したるなり。然るに福音同盟会の事業なる東京の大挙伝道に従事する輩が之を排斥したるは、矛盾之よりも甚しきもの有るべからず。

斯く論じ来れば東京の大挙伝道が、海老名氏等を排斥したるの都合明白なるべく思はる。

此に於て第三の問題自然に生じ来るを覚ゆ。曰く、此の如き性質なる福音同盟会は、果して伝道の機關たるに適するか。余輩は此の問に対して否と答ふるを躊躇せざるなり。

福音同盟会は全国基督信徒の親睦会を催する機關たる事を得べし。親睦決して軽んずべきことに非ず。時に盛大なる親睦会を開くも不可無かるべし。新教各派のみならず、カトリック、及びグリシヤ兩教会をも集めて親睦するは甚だ美はしき事なり。福音同盟会は其の機關なるに適當なる組織なるべし。

福音同盟会は世間の淫祠迷信に対して十字軍の如き総攻めを計画し、之が為には萬朝報とも提携するまで結合の門戸を広ふして可なり。或は廢娼、禁酒、労働者保護、日曜日の休暇等其の他多くの社会問題に就きて、基督教徒の聯合運動を計画するも、福音同盟会恰好の事業たるべし。譬へば海外教会の如きも、福音同盟会に於て賛成するも敢て不都合なること無し。

或は全国基督教徒の統計を調査して、緻密なる報告を爲し、或は
信教自由等に関する問題の起るに際し、主として斡旋し計画し尽
力するが如きは、福音同盟会の事業として最も歓迎すべきものに
非ずや。然れども人を基督に導きて、其の救ひに与らしむるを期
する伝道の事業は福音同盟会の負担するに堪ざる所なるべし。其
の信仰的基礎は曖昧なる福音主義にて、ユニテリアンを包容すべ
く、プライデレルの徒をも歓迎せざるべからず。漫然基督に事ふ
ると言ふのみにては、基督に就ての有らゆる信仰を包含すべし。
基督教の超自然的要素を否定し、其の復活を信ぜず、唯だ之を道
徳上の模範、古今の大教師と爲す程度にあるものも悉く之を受け
容れて、共に伝道せざるを得ず。否之に伝道を托せざるを得ず。
彼が基督の神性を非難し、或は基督教の根本的要点に就きて反対
の言説を爲すも、之を歓迎すべく、之と提携すべく、之と進退を
同ふせざるべからず。自由、寛容、博愛を名とし、雅量、大度の
口実の下に、此かる不自由を忍び、此かる窮屈に堪へ、此かる庄
制に苦しめられ、時としては己が最も重んずる所の主義眞理を排
斥せらるるをも、こは基督教の要点に非ずと辛抱せざるを得ず。
福音同盟会の伝道亦困難なるかな。余輩は神人となりて世に下り
十字架に死して人の罪を贖ひたるを信ず。而して余輩の信する耶
蘇基督は活ける神のひとり子にして、人類の祈りを受け、礼拝を
受くべきものなり。基督は人類より此の上無き崇敬と愛とを受く
べきものなり。此の信仰を主張し、此の信仰を人に伝ふるを以て
主義とするは余輩の伝道なり。此の点にまで導かざれば伝道の目

的を達すること能はざるべしとは、余輩の確信する所なり。福音
同盟会は此点に就きて確かなる立ち場に居らず。否、此両信仰を
蔑みするものにも伝道を托せざるを得ず。此の故に余輩は断言す、
福音同盟会は伝道の機関たるに適せざるものなりと。此の伝道に
不適当なる同盟会が、自らの分際を揣らずして伝道せんと試み、
他の人々が此の同盟会の曖昧なる旗幟の下に伝道するに賛成し、
而して信仰の正統不正統を揚言す。兩者共に非なり。余輩は同盟
会は己の適當なる範圍分際にあんぜんことを勧告し、大挙伝道の
如き事業を企つるものは、更に旗幟鮮明なる組織を整へ、堂々運
動せん事を希望す。

秋期伝道の時節到来せり。大挙伝道なるものは如何なる程度にま
で成功せしや。伝道は如何にして爲すべきものなりや等の問題は
余輩の研究すべきところなり。(三二四号・明治三十四年九月十
一日)

(四—M34—9) 海老名弾正の公開書

海老名弾正氏の公開書

福音新報所載福音同盟会と大挙伝道と題する文章に対し、海老名
弾正氏は一片の公開書を発せられたり。氏曰く、戦場に臨みて互
に武者振りを一見致し候へば一回も鈍銃を交へずして相笑ひ直に
鋭鋒を鞘に収むるやも難凶候、若し夫れ論戦致すべき件果して有
之候はば之を辞する筈も無きかと存じ候云々。全篇銳気天を衝く
が如く、勢ひ頗る豪壮なり。横井氏及び我が社の植村氏其他基督

社会幾多の所謂先輩よりも年長なる氏の気象如此なるを見れば海老名君万歳と祝せざるべからず。頗る人意を強ふるものあるに似たり。福音新報読者に便利を与へんが為余輩は海老名氏公開書の大部分を左に抄録せり。

今や基督教の信仰も基督教の人格其ものに熱中致し^{つこ}はじめ候は信仰上大々の進歩にして、足下も亦之を是認せられ候事と見え、足下の信仰表白の如き専ら此点に存するを拝承致候は喜悅の至に堪えず候。爰に足下の主張せらるる信仰の表白を掲載致候へば

余輩は神人となりて世に下り、十字架に死して人の罪を贖ひたるを信す。而して余輩の信する耶穌基督は活ける神のひとり子にして、人類の祈りを受け、礼拝を受くべきものなり。基督は人類より此の上無き崇敬と愛を受くべきものなり。此の信仰を主張し此信仰を人に伝ふるを以て主義とするは余輩の伝道なり。福音新報第三二四号二頁

足下の表白文の簡明にして要領を得たるは感服の外なく候。乍去僅々一句の内容に於ても大文章を要すべき程のもの有之様に被考候に付、改めて足下の真意を伺はんと欲する次第にて候。却說足下に伺はんと欲する簡条は先づ神、人となりの一句にて候。此一句は表白文の劈頭第一を占むる程にて僅々三語にて成り候へども、実に深遠なる哲学的意義を包蔵し決して単純なる福音の如きものにては無之様に被察候。元來神は不変と承知致候處、此の永久不變の神が人と成り給ふとは則ち一大変遷にして自家撞着にては無

之候哉、足下の明確なる説明を承り度候。仮りに人と成り給ふ事の出来るとすれば、神が人と成り給ふたる以上は神は最早神にては有間敷く、全く人にて候かと合点致され候。猿族が進化して人類と相成候たる上は、仮令猿族の性質は尙遺存し居り候とも、最早猿にては決して無之全く人類にて候、神の人となり給ふたのも亦其の如くにては無之候哉。然らば則ち耶穌基督は何なる場所何なる時代を問はず、永久真の人にて渡らせられ候義と被存候。此真の人は復其人たるの性情を脱却して本来の神となり給ふ時も可有之候哉。將基督は最早其人たるの性情を蟬脱して純乎たる神になり給へりと足下は信仰なされ候哉。又神が人と成り給ふたる其時間には天地には唯人のみ存在して、神ある筈は無之道理にて候様に被考候處、足下の意は那邊に存し候哉。足下の意は決して斯る淺薄なるものあらざるは明白と存候。然らば人と成りたる神とは定めて聖三位の第二位を意味せられ候事と推察被致候。左候へば神、人となるの信仰は一転して三位一体論となるべき筈に候。就ては足下の三位一体論を一寸承知致さねばならぬ次第と相成候。足下の奉戴せらるる聖三位は各位人格を有し給ふものにて、又各位十分に神たるの性徳を備へ給ふ訳にて候哉。若し各位が十分に神たるの性徳を具し給はぬとすれば、聖三位の第二位が人となり給ふたと申しても、それは神其ものが人と成り給ふたとはいひ難く候。是れにては『神、人となりて』の意義は通じ兼候。結局神其のものでなく神の一部が人となり給ふたと信仰するより外はなきか被考候。足下の意那邊に存し候哉若し夫れ神の第二位が人

となり給ふたるを以て神其ものが人になり給ふたものと信仰被致候はば、足下の三位論は則ち一転して三神論にならねばならぬ様に被考候。足下は三神一体論者にて居られ候哉。足下は如何にして神の本体に三人格あることを証明なされ候哉。足下が神、人となりて発言せられたる一句は深遠なる哲學的問題を包蔵致し居候事にて、今日に至るも未だ議論紛々として決定せざる義に候。足下は此大問題を主張し又人に伝ふることを主義となされ候との言明もあれば、必ず先づ小生に其深遠なる意義を教示せられんことを伏て奉願候。小生の如きは二十有余年此問題を解せんと欲したれども、不敏にして未だ能く解すること能はざる次第に候、小生は足下の御指導を蒙りて朝に年来の難問題を解し、哲學上の神の本体より一大光明を得るの幸を得候はば夕に死すとも怨みは無之候、小生には之を聞くことを得るは実に一大福音にて候。足下幸に此大福音を小生に御伝へ被下度候。尚御教示を願ひたきは第二句にて候。『神、人となりて世に下り』とあれば、神は常に何処に住し給ふ哉、日月の世界にて候哉、星辰の世界にて候哉、又は日月星辰の外にて候哉、世に下りとあれば、より高き世界より来り給ふたに相違なき義と存候。小生は神は無所不在と心得候処、『世に下り』とある以上は足下は神の無所不在を信仰して居られぬかと邪推致され候が如何にて候哉。又は無形の靈界より有形の人界に来り生るるを足下は『下り』といわれ候哉、其れにしても往來を意味することにて、神は宇宙に往來し給ふと足下は信仰なされ候哉。仮令靈界より人世に生れ来ると考へ候ても、之れは有

限に適用すべき語にして無限には適用致されぬ様に被考候。足下の真意は那邊に存し候哉、不肖の如きは甚た了解に苦しみ申候。幸に高論を惜むこと勿れ。

此外質疑致度件は一にして足り不申候へども一々尋問致候へば余に長く相成り、又『神人となりて世に下り』の二句に基督崇敬の根本的問題を含蓄致居候間、僅に此二件につき足下の明確なる説明を拝承致し候上にて、若し論戰可致こと有之候はば此処にて開戦致し候ても宜敷からんと存候。此処は吾人が信仰の関ヶ原にて候間、此場所にて足下の鋭鋒に接し候はば、基督崇敬の深淺厚薄も自から判明可致候。足下幸に前陳の二件につき御教示被成下度奉願候敬具

新人記者 海老名 弾正

福音新報記者植村正久殿足下

(三二八号・明治三十四年十月九日)

(四—M 34—10) 植村の海老名への回答

海老名弾正君に答ふ

新人第二卷第三号に小生に宛てられし公開書拝見仕り候。福音新報は無論小生の関係する所に相違無之候。然れども貴殿の質問を起されたる福音新報の文章には小生の署名無之候。直に之を捉へて小生に宛て御質問なされ候段、少々筋違ひかと存じ候。唯だ福音新報記者に宛て御質問あるが当然と存じ候。後日の事もあれば右念の為一言致し置き候。

併しながら、彼の論文の主意は固より小生も同感のことに有之、且つ折角小生の名を挙げて御質問なされ候事故、何の御答も不致候ては余り風情無き儀と存じ一言左に陳述致し候。

第一閉口致し候は開戦とか、鋭鋒とか、武者振りとか頗る陽気なる御事、小生如きは武者振りを見せたくも見たくも無之、唯だ靈界の実戦を極く真面目に遣りたきものと考へ、及ばずながら真理を發揮致したき存念の外他事無之候。

福音新報が其の信仰を宣言して、神人となりて世に降り云々と書きしに御不審を抱かれ、御尋ねの条々逐一玩味致し候。猿族が進化して人となりたる以上は猿族にてはあるまじとか、不変なる神が人となるとは一大変遷にして自家撞着にては無之候哉とか、神世に降ると言へば、神は常に何処に住し給ふや、日月の世界にて候哉、星辰の世界にて候哉とか、かくては神が無所不在で無くなるとか、種々御陳述相成り候工合、宛かもトマス、ペインの『道理の世』やインガルソウルの基督教駁撃の論を読む如き心地致し、奇異の感想に打たれ申候。

貴殿は余程進歩的御自任の由にて常に新生面を開かるるが御得意なりと伝聞仕候。成程数年来種々御説き出しに相成り候御議論は果して噂の実なるを証明致し候。貴殿の頭脳敏捷なるには平生驚き居り候。然る所小生如きは中々開創的とか新機軸を出すとか及びもつかぬ話にて、何も珍奇の信仰無之候。福音新報に見えし、神人となり世に降り云々の如きも、全く歴史的の信仰にて、基督教徒が古来共に認め来りたるものと少しも変りたる所御座無く

候。古来基督教徒が耶蘇を如何に信じたるか、又神人となりて世に降りたりとの信仰が其の大眼目たりしことは貴殿に於ても疾く御承知の御事と存じ候。小生は此信仰の外に別段見聞きたる点も無之候。又此信仰が（其是非は兎もあれ）通常如何なる意味を有する者なるか、此れは貴殿に於て百も御承知なるべく候。今更の様に難題がましく御質問あるは了解致し兼ね候。若し此の信仰に御不同意ならば御遠慮無く御攻撃あらせらるるに若くもの無しと存じ候。堂々反対の地位に立ちてアリアニズムなり、サベリアニズムなり、ユニテリアニズムなり、リッチル説なり、將た別段に御見開きの御新説なり、御発表なされ候方自他の便利と存じ、切に御勧告申上候。貴殿が基督を神に非ずと御断定なされ、若くは神人となりしと言ふ説に駁撃を加へらるるか、基督教信徒の歴史的に繼承し來れる信仰に向ひて非難を下さるる様なる事を公然御議論あらば其時こそ小生も、基督教信仰の主張者并護者として、非基督教的の信仰なることを公示せられたる貴殿と論戦を開くことを辞せず候。

貴殿近頃は如何に基督を御信仰なされ候哉。基督は人となりし神に御座候哉。之を神として礼拝し、之に祈祷し、之に向ひて神に尽すべき敬愛を献すべき筈に候哉。神の子は父なる神を愛し又愛せらるるものとして、永遠無始に存在せられしと御認めに候哉。此点に就ては貴殿の立場を明かにせらるるが必要と存じ候。福音新報及び小生の立場は、前にも申せし様の次第にて、其の範圍及び其の意味共に有りふれたる事の外無之候。故に貴殿の提出せら

るるが如き御質問は無用なるべく、直に賛成なり、駁撃なり御慮無く御発表相成るに於て何等の差支へ無かるべしと考へられ候。然れども不審なるは貴殿の立場に候。御質問の模様を窺へば何となく基督信徒普通の信仰に反対せらるるものに非ずやと懸念仕候。此の所御信仰を発表せられて世間の疑惑を解かれ候方然るべくと存じ候。

之を要するに貴殿御好みの武張りたる句調を拝借すれば、広く哨兵線を張られ遠く斥候を出さるるなど御用心無益と存じ候。当方には御見懸けの外別段伏勢と申す様な奇策も無之候間、毛頭御懸念無く御本軍を御進め下され度候。篤と御武者振り拝見仕候上にて必要有之候はば、当方よりも相当の御挨拶申上げべく候。先は御返事まで如此に候。敬具

海老名弾正君

植村 正久

梧下 (三二八号・明治三十四年十月九日)

(四一M34—11) ジェームス・バラ在日四十年

ジェームス・バラ氏

日本基督教大会が同氏に對する祝賀感謝の決議案を通過せし時、其の述べられたる答辭こそ面白けれ。彼は先づ聖書より三の文章を引き来りて其の所感を述べたり。曰く、汝紀念べし汝の神エホバこの四十年の間汝をして曠野の路に歩ましめ給へり是汝を苦しめて汝を試験み汝の心の如何なるか汝がその誠命を守るや否やを知らんが為めなりき(申命記八ノ二) 此れ彼が日本在留四十年間の

小歴史とす。又曰く、その小さきものは千となりその弱きものは強國となるべしわれエホバその時いたらば速かにこのことを為さん(以賽亞書六十ノ二十二) 彼は實に日本伝道の結果が小さき者より千に至るの愉快を實驗せり。又曰く、汝らの父等は何処にありや予言者永遠に生きんや(撒加利亜書一ノ五) 彼は日本伝道の先輩及び同労者にして既に世を去りし人々を記憶せり。其の友情の厚き感ずべし。曰く、ブラオン、フルベツキ、ブライン、ピヤソン、ガスリイ等、日本伝道に功勞有りし者、上なる國に召されて休息に入りたり。彼は今尚ほ米國に健在するヘボン氏のことなどを引きて、予言者永遠に生きんやと言はれたるが、余輩は同氏自身に向ひても、同一の感情を抱き、敬愛の念愈よ切なるを覺へたり。

彼が日本に來朝せし第三年目に、矢野隆山といへる人洗礼を受けたり。バラ氏が彼と共に始めて日本語の祈りを捧げし時、宛ら天の門開けたるが如く感じたりと言ひし如き、當時の狀態及び氏の心事眼前に見るが如き心地せり。

矢野隆山氏が病革りて世を去らんとするや、一日バラ氏之を訪問せしに、矢野氏曰く、あなたの御深切には報ゆべき様なし、然れども天国に行く時あなたの名を耶穌さまに申しましよう。バラ氏は之を聞きて恐しくも尊く感じたり。彼はニューヨーク灣水清く緑草美はしき所に祖先來の墳墓の地を有す。日本に來るも、其の葬むらるるは彼の処ならんを望めり。彼は米國の故郷より天国に行かまほしく思へるなり。然れども矢野隆山の信仰篤く、基督

『福音新報』明治学院関係記事

の僕たるの死を遂げて天国に上りし時、彼の思想は全く一変せり。彼れ天災に日本の上に在る如く感じ、死なば故郷に於てせんと念全く止みたりと語れり。其の短時間の演説、靈的の趣味津津々々きざるものありき。(三二九号・明治三十四年十月十六日)

(四—M34—12) J・R・モットの講演

東京に於けるモット氏最終の演説

去る三日より七日に至る連日の青年協議大会を了りて、八日より帝國大学其他に於て演説を爲したる氏は、十日夜七時より神田青年会館に於て当市に於ける最終演説を爲したり。来会者は頗る多く大抵学生にして階上階下に充満したり。当夜は主として信者に対してのみの予定なりしが、来会者中未信者も多数ある模様なりしを以て、先づ最初には等の人々に対する一場の演説あり。了りて後『日本基督教徒学生の前に横はる最大事業』と題して述べられたり。其の大意を左に記す。

日本基督教徒学生の最大事業とは何ぞや。言ふまでもなく『伝道』なり。北海道より、台湾に至るまで凡ての地に神の道を伝ふる事なり予は満堂の学生諸氏が此の最大目的を達するが爲に凡てを棄つるの覚悟を有せられん事を希望する者なり。此目的を達するが爲には二種の学生を要す。一は即ち一信徒として各自の境遇各自の職業によつて、教育家、医師、軍人として各々命ぜられたる神の事に働くべきもの。一は教役者として其の全生涯を神に献げ、福音宣伝の爲に他の凡てを犠牲に供せんとする者なりとす。而し

て此等の学生は最も聖き勢力ある学識あるものならざるべからず。何となれば実に其の国の元動力(モーター)たればなり。

支那印度に於ける其基督教徒学生は、其の国に取りて実に有力なるものとす、欧米諸強国の今日有るに至りし原因は何ぞや此れ皆英國の大学等の学識ある力ある学生が信徒として各其の国に尽す所ありたるが故なり。今や東西両洋共に、此の世紀間に於て大いに全世界に向て伝道せんとす、日本も宜しく此機に乗すべきなり。

日本に伝道するは日本のみに非ず、更に支那朝鮮に及ぶの大いなる希望あるを思ふべし。又伝道者に最良の学生を要する所以は、其の事の実に最大事業にして國家の元動力たるが故なり。予日本に來りて基督教界及び社会の先輩諸氏に対し現今日本に最も要する所は何ぞやと問ひしに、其の答は皆道徳上心靈上の改善にあるとの事なりし。思ふに日本は元來貧しき国に非ず、又物質上の進歩に於ては世界無比にして毫も不足する所あるを覚え、只憾むらくは彼の先輩諸氏の答へし所のものが事実最も必要なことなり。唯だ物質上のみの文明は偏したる平均を失へる文明なりと言はざる可らず。こは何れの国に於ても然り。羅馬を見ずや、彼は物質上の文明に於て、其の政治に於て実に完備したるものなりき。されど其の心靈上に於て欠くる所ありしが爲に終に衰亡を來たせり。或人嘗てグラッドストウンに向ふて曰く、英國今日の隆盛ある果して何に原因するやと、グ翁手を聖書の上に置きて、原因は此に在り、と。実に聖書は其の國家を隆盛ならしむるに足るものなり。

凡そ何れの国に在りても其の最も悲しむべき現象は、未だ神を識らざる人民の多きことなり。吾人基督の事蹟を思ふ時に、伝道なるものは凡てを犠牲にするの価値あることを切に感ぜずんばあらず。欧州の有名な一説教育家あり。其の学生たりし時は法律を研究しつつありし者なるが、或夏期休暇に際し一の大なる伝道を目的とせる集會に出席し、偶ま一人を導きしが、其の時の歎喜愉快を忘るる能はず、遂に一生涯を伝道に送るべきの決心を為せりと。伝道は最も大なる愉快なる事業なり。進んで当るべきなり。唯だ自己の好めるが故に為すに非ず、神の召しに応じて為すべきなり。如何にして神の召しを覚知すべき乎。国家の要求、之れ神の召し給ふ声に非ずや伝道を命令し給ふ神の声に非ずや。軍陣に於て司令官の進撃を命令せるに不拘、兵士茫然として為すこと無くんば如何。予は日本歴史を讀みて其の民族の古來服従心に富めるものなるを感じたりき。今や進むべきの軍令は下れり、進まずして可ならんや。

予は今此処を去るを惜む。予の東京に於て語ることは今が最後にして又再び語ること能はざるやも知るべからず。願はくは我等の生涯をして唯だ良きものたるに止まらず、最良の生涯たらしめよ。基督の生涯の如くあらしめよ。願くば此の世紀に於て、最大最良の目的を以て我等の事業を為さしめよ。而して此の最大最良の目的とは、最も要しつつある所に、最も良き働きを為すことなり。即ち基督の意志を行ふに在り。(三二九号・明治三十四年十月十六日)

明治三十五年

(四—M 35—1) 明治学院生徒募集

来四月十日新学年開始同八日九日の両日入学試験執行各級入学を許す高等小学二年修了者は無試験にて普通学部一年級に同卒業生は二年級に編入す入学志願者は履歷書を添へ来四月五日迄に申込べし普通学部は徴兵令第十三条に由て認定せられ高等学校其他諸官立学校と聯絡あり高等学部も無試験教員免許状下附及徴兵猶予の許可出願中

三月

東京芝区
白金明治学院

(三四九号・明治三十五年三月五日)

(四—M 35—2) 台町教会の大挙伝道

○台町教会大挙伝道演説会

去月二十八日より本月一日まで四日間連夜説教會開かれたり、弁士は井深梶之助、フルトン、貴山幸次郎、本多庸一、松永文雄の諸氏にて、青年會員は主として路傍演説其他を以て熱心に活動したる為め、連日の雨天に係らず毎夜聴衆百余名、求道の決心を為せしもの四十二名を得たり。此八名は明治学院學生にして、他には教会附近の商人等もありし由。(三六二号・明治三十五年六月五日)

『福音新報』明治学院関係記事

(四—M35—3) 神学生の夏期伝道

△明治学院神学生の夏期伝道 池田氏は九十九里教会に、井口氏は新潟に、西氏は諏訪に、松本氏は土州安芸に、島森氏は房州館山に、柏木氏は横浜指路教会に、口村氏は宇都宮に、大野氏は新草教会に、長沢氏は角管及び八王子に、江川氏東京某教会に、坂本氏は尾の道に各々夏期伝道の為め赴かる。(三六六号・明治三十五年七月三日)

(四—M35—4) 服部綾雄・水声幾次郎の消息

△服部綾雄氏 来月頃渡米の途に就かるべし。
△水声幾次郎氏 今般明治学院を辞し金沢高等学校英語教師となる(三六八号・明治三十五年七月十七日)

(四—M35—5) 山本秀煌氏の帰朝

○山本秀煌氏の帰朝
昨年神学研究の為め米國に赴かれたる同氏は本月十六日着の香港丸にて無事帰朝せられたり。(三六九号・明治三十五年七月二十四日)

(四—M35—6) 神学部規則改正

○明治学院神学部規則の改正
明治学院神学部にては今般規則を改正し程度を引き上げ本月末開始せらるべき新学年より之を實施する由なり。従来神学部入学

志望者は、同校普通科を卒業し或は他の中学卒業程度の学力あるものは神学予科に編入して一年間専ら英語の学力を養ひ然る後本科に入らしむる規定なりしが、新規則に於ては予科を廃止し中学卒業程度の学力あるものは先づ高等科二年間の課程を履むて後神学本科に入ることに成り。高等科は大凡高等学校の程度にありて主なる学科は英語、倫理、心理、哲学、経済、天文、地質、歴史等なり。神学部入学志願者にして高等科に在る者は以上の科目の外基督伝の如き一二の神学の科目を学ぶことを得、他に神学生としての便利を与へらる。高等科二年の卒業生と同じき学力ある者は固より試験を受けて直に神学本科に入るを得べし、高等普通科の教育あれども英語の学力なき者は二十五歳以上の人に限り員外生として或る学科を撰修することを許さるべしと云ふ。(三七五号・明治三十五年九月四日)

(四—M35—7) 東山学院の状況

○東山学院
長崎にある同学院は未だ文部省の認可を得居らざるも、毎学期入学志願者多くして初年級は止むを得ず謝絶する次第なり。二年級以上に至りて漸次減員となり居れり。一昨三十三年学制改正以来高等科、神学科は中止の所、本年三月より高等科を開きたり。神学科は未だ開かざるも志願者起りつつあり稍望みを属するに足るものありと云ふ。(三八一号・明治三十五年十月十六日)

(四—M 35—8) 普通学科生徒の遠足

△明治学院普通学科生徒一同は本月十六日より富士の裾野なる須走に遠足を試み箱根に立寄り十八日帰校せり。(三八二号・明治三十五年十月二十三日)

(四—M 35—9) アレキサンダー博士の死

アレキサンダー博士遂に死す

アレキサンダー氏がその病ひを養はんとて、本年三月一日横浜解纜の汽船に搭して布哇に赴かるるや、本紙は次の文章を掲げて之を送りたり。

温厚篤実にして、学を好むこと深き、博士ティ・ティ・アレキサンダー氏、心臓に病ひを獲て、日本に在留すること能はず、医士の勧告黙止し難く、来る二十八日横浜解纜の船にて帰国せられんとす。博士は福音新報の最も善き朋友にてありき。日本基督教会の最も忠実なる教役者の一人なり。其の伝道局は博士に負ふところ多大なり。日本基督教会の教役者は博士の同情と援助を受けしを忘ること能はざるべし。博士は日本伝道のために豊富なる未來を有するの人なり。其の謙虚の品性、聖徒的人格は日本基督教徒のために一大勢力なりと謂ざる可らず。此人今や病ひのために日本帝国を辞し去らんとす。余輩豈に悲しまざるを得んや。余輩は博士が異なる風土に其の病ひを養はれて、健康旧に復せんことを祈る。余輩は博士と其家族とのうへに天父の祝福裕かならんことを望む。

氏は布哇に安着して、静かに其の病ひを養ひ、健康の許す限り、間接直接に伝道に心を用いられたり。氏が布哇にありて病中尚ほ神の国に貢献する所多かるべきは曾て日本に在りしとき其の如何に基督のために忠実なりしやを熟知せる余輩の容易に想像し得たる所にてありき。其の起居は日本にある内外の知人が常に氣遣はしく感じ、船の布哇に寄港することに幸便に托して其の安否を問ひ、遙かに之がために祈りつつありし所なり。近きうちに其の令嬢日本に來りて伝道に従事せらるべしと聞き、途次必定病る父に面会すべければ、其の近状を詳かにすることを得んことを期せり。然れども予定の如く令嬢は日本に來着せざるなり。這是父の病ひ甚だ覺束なきを以て、暫くホノルルに留り之を看護せられたればなり。

余輩は此の報に接して其の病勢危篤なるを推測し、痛く心を傷めたりしが、果せる哉先月十四日アレキサンダー博士遂に布哇に客死せりと悲報は、去る日曜日余輩の許に達したり。此の大いなる打撃の下に悲しみつつある未亡人と其の子女に向ひて、余輩は深厚なる同情を寄す。然れどもアレキサンダー氏が多年日本に在りて、基督と其の福音のために善き戦を戦ひて大いに成功し、其の高尚なる人格に由りて、外人中殆んど比ひなき多数の友人を日本に有し、実に神と人にと愛せられつつ、其の深められたる品性に相応はしき天に移されたるは不幸の中の慰めなりと謂ざる可らず。

アレキサンダー博士は最初今の明治学院が築地にありし頃之が教

『福音新報』明治学院関係記事

員として尽力せられたり。間もなく大阪に移住して、専ら伝道に従事して其の成績著しく、日本基督教会が京阪地方を始め、山陽道、四国及び九州の一部にまで布教伝道を企て、多くの教会を建設せるは、其の勤労に負ふ所最も多し。殊に大阪の南北二教会及び京都日本基督教会の如きは、永く其の徳を記憶すべき関係最も親密なりと謂ざる可らず。

ノックス博士が米国に帰らるるや、氏は再び東京に移住して明治学院の神学部勤務せられたり。其の才学燦爛たるにあらず、壮快の弁人を喜ばするにあらず。敏腕衆を御するにあらず。然れども其の忠厚にして精勤、親切にして人のために労を厭はず、学を好んで倦まず、謙遜にして信義に富みしため、明治学院の歴史に□の如く学生と同僚とに敬愛せられたるものあるべしと覚えざるなり。

博士は福音新報の良友にてありき。其の有益なる文章は数年の間を以て其の紙面を飾れり。之に従事する記者の多くは、博士の同情厚き援助を記憶して懐旧の涙に咽ぶものあるならん。

アレキサンドル氏は日本伝道の歴史に最も光栄ある事蹟を遺されたり。其の死は日本基督教徒の間に逼く惜まるる所なるを疑はず。

アレキサンドル博士逝く

神学博士トマス・チー・アレキサンドル氏は十一月十四日午後四時布哇ホノルル府クック氏方に於て心臓麻痺を病みて死去せられたり。享年五十二歳なり。博士は二十五年の久き間日本に在て熱心に伝道し、其学識と篤信とを以て我國の教化に貢献せられし所

尠からず。病氣療養の爲め本年春布哇に転地せられたる後も同地に於ける日本人の伝道を助け居られたり。殊に美以教会に於ては毎日晝夜旧約聖書を講じ嶄新なる批評と学説とに照し聴衆を益せられし事甚大なり。博士は健康少しく勝れなば冬期は布哇にて過ごし夏日本に至り伝道すべきか又は植村氏の手紙もあれば寧ろ台南に赴き伝道せんか考へ中なりしと云ふ。肉体衰ふるに反して伝道の精神益々壮なりしと云ふべし。死せらるる十日前本川源之助氏が訪問せし時の話に曰く、「昨夜は夢に英語説教を為しイスラエル人が神の摂理に依りて埃及より救ひ出されたる為今日の世界に此大文明あり。若し此摂理なくば二十世紀の文明を見る能はずと説きたり。しかも大声を發したりと見へ隣室のものを驚かしたり」と又曰く死するも少しの苦痛なしと。博士は友情に厚く病中日本にある信者の事など語り其の前途を氣遣ひ布哇にある日本人の伝道に同情を寄せられ早く全快して説教を助けたしなど常に語り居られたりと云ふ。

博士が物せられし最後の文章は死刑に処せられんとする二人の同胞のため認められし特別減刑の請願書ならん。パレステナ紀行の残りを福音新報に出したきものとは博士の願ひなりしも遂に其事なかりしは読者と共に遺憾に思ふ所なり。博士は一八五十年十月八日米国テンネッシー州マウント・ホレブに生れ故郷に五人の子女あり。令嬢の一人エンマ・アレキサンドル女史日本女子学院に赴任の途次立寄られ看護せられしも其甲斐なく遂に病死せらるる惜むべきなり。葬式は十六日午後三時ギューリッキ氏司式の下に執

行せられたり。(三八九号・明治三十五年十二月十一日)

(四—M35—10) 井深梶之助の神学博士

○神学博士井深梶之助氏

井深氏は明治学院総理として知られたる人なり。嘗て米國プリンストン大学よりマストル・オブ・アーツの学位を得られしが今回同じく米國のラットガルス大学より神学博士の学位を贈られたりと云ふ。日本人にして神学博士の学位を有するもの多くあるを聞かず。新島襄氏がアムスト大学より神学博士の学位を贈られたのは皆人の知る所なるが本多庸一氏も数年前神学博士の学位を与へられたり。余輩は氏が其学位を受諾せられしや否やを確めざるも同氏が自ら博士と称へられざるだけは事実なり。井深氏が外国大学に於て其の価値を認められしは其の榮譽なりと謂はざる可らず。

(三九〇号・明治三十五年十二月十八日)

(四—M35—11) 熊野雄七の自伝回想

熊野雄七氏と語る(上)

熊野氏は我國基督信徒の先輩にして好個の基督教的紳士なり。氏は直接伝道に従事せられざるも日本伝道に浅からざる關係あり。近頃氏を明治学院に訪ひ聴き得たる所を記す。K・K

紋章の逸事

予が洗礼を受けたるは明治五年三月なり。当時の事情を明にせんがため少しく古に遡らざるを得ず。郷里大村は元龜天正の頃より

耶蘇教に深き縁故を有せり。一時は大村純忠氏の如き藩主にして熱心なる信者たりしため教勢盛なりしが貞享三年五代將軍綱吉公の時代に至り形勢頓に變じたり。將軍は全國に耶蘇教嚴禁の令を下したる外特に大村藩に向つて邪教取締の不行届きを以て藩の領地を没収すべき旨使を以て達したり。當時の藩主大村因幡守純長大に憂慮し殆んど為す所を知らず。時に予が先祖福田十郎左衛門長紹(知行所福田にあるを以て姓とす、熊野姓と並用したり)儒臣たり。藩の存廢、君公の浮沈に關する大事となし自ら卓んで、藩主に謂つて曰く我能く上使と折衝して君公の安きを計らん。若し帰途時津より海上鉦鼓を鳴らし樂を奏して来らば安心を玉へ。斯くて彼は死を決して上使と論談する所あり。自ら藩の邪教を尽く鎮庄すべきを誓ひ遂に望を得て城に帰る。

城中に於ては藩主以下事の成行如何と苦心最中鉦鼓の音楽最と愉快に聞へたり。純長公座に耐へずして洗足あらいその儘海岸に至り手執つて十郎左衛門の上陸を助け、手てから小松を根引して扇に載せ功勞の紀念として之を十郎左衛門に与へたり。予が家世々扇に根引の松を定紋とするは此の故なり。

此時以後大村藩に於ける福田家の勢力蔑視すべからざるものありしが如し。

思想の回轉機

予は明治三年藩の俊才に撰ばれ中尾と共に漢学研究の爲め上京を命ぜられたり。父は嘗て安井息軒の塾頭たりし事あるより上京後は安井氏に就て学ぶ予定なりき。然るに實際の見聞は國に在りし

時に想像せし所と大に異なり。時勢の変遷は到底漢学を以て指導し得べきものにあらずとなし英学を学ばんとの野心を起せり。之入塾後間もなき事なり。中尾に謀り共に慶応義塾に学ばんとす。藩命にて漢学を修め将来藩校を教ふべき信任を受け加え父よりは特に安井氏に依頼しあれば彼是れ思義に絆さるる所なきにあらず。之を藩に謀り、家敵に訴へ、師に告ぐるも到底我が望の容れらるべきにあらず。遂に偽って藩命なりと告げ安井氏の塾を出で慶応義塾に入る。即ち明治三年の暮なり。

斯くて一ヶ月の後ち藩の大参事之を知り我等を召ひ付け譴責すること甚だし。若し志を翻さずば断然学資を絶つべし。父又此事を聞き大に怒り藩命に背き父の志を無にするものは勘当すとの来書あり。今や学資に窮し止むを得ず藩邸の物置小屋に在りて雨露を凌ぎたることあり。之も僅かの間に明治四年三月には藩の恩命を蒙りて再び学資を得公然英学を学ぶことを許されたり。此れ予が基督教を知るに至りし発端なり。

当時英国史を学び新教旧教の衝突よりプロテスタントの事明になれり。我が祖先が極力鎮庄に勉めたる旧教は弊害多かりしにもせよ此の新教は其の大に異なるものあり。斯る宗教を信する英国が大に進歩するは該教の道徳が人心の根本たるにありとなし予が思想稍基督教に傾き始めたり。又同級に瀬屋某と云へる人あり時々聖書を読み居たり。素行如何にも□すべきものありたり。今より考ふれば此等も予が信仰を起すに多少の関係ありしならん。

決心して洗礼を受く

都合により明治四年の暮慶応義塾を退きて横浜に至りピヤソン女史の許に通ひ専ら英語を研修す。女史の許には毎日晝夜集会あり。一夜試に出席せり。時にバラ氏馬太伝の講義をなすに当り祈りし所大に我心を刺撃せり。其は善きサマリヤ人の話にて敵の罪をも赦し給へ。若し此所に基督を信せざるものあらば其罪を赦し給へと云へる所如何にも我が心に徹して聴へたり。

然し藩の持論より見るも、予が家柄より考ふるも予は容易に信者たるを得ざる境遇にあり。殊に行く行くは然るべき役人になる内約束もありしこと故、信者となる曉には非常なる不利益と苦しき地位に立たざるべからず。彼れ是れ思ひ回らせば勇氣も信仰も頓に鈍る事なきにあらざりき。然るにピヤソン女史の親切なる教導に依り漸次信仰に進み遂に明治五年三月バラ氏より洗礼を受くるに至れり。

弾正台の糺問を受く

予と同藩の渡辺昇氏は予の年長者なりしも親しき交りあり、予が受洗當時氏は弾正台忠たり。窃に探偵を横浜に遣はし基督教徒の内情を探らしむ。彼は予が受洗せし事を探知するや今は故人となれる楠本正隆氏等と相談の上予を糺問せんため召喚せり。予は事情を知らず何事ならんかと疑ひながら永田町なる今の楠本氏邸に至る。藩の歴々威儀を正して居流れたり、予は只事ならざるを知り静に着座するや先づ渡辺昇氏口を開いて曰く「君は邪教を信すとの事なるが信否如何」と。予答へて曰く「然り予は基督を信す」と。茲に於て論難の声重立つものの口を衝いて出づ。日本の

国体より論じては乱臣賊子となし、外交上より説いて国を売るものとなし、藩の持論より帰納して不忠不義を責め、家柄より論ずるに得策にあらざるを以てす、若し君の両親之を聞かば或は事の意外に打驚き氣絶するやも知るべからず。宜しく悔悟して藩命を全ふせよ。君は前途大に望を属せられたるもの若し邪教を棄てなば一廉の地位に就くを得ん。と嚇すに威を以てし、喰はずに利を以てするの有様なりき。當時予は信仰日尚浅きため充分基督教を説くことを得ざりしも自ら信する所を明に述べ毫も屈せず。却って信を増したる心地せり。

茲に一の面白き事あり信者となりし予が祖先が耶穌教を迫害したる反対に、幾多の天主教徒を浦上に於て殺害したる渡辺氏の祖先が熱心なる信者たりし事はなり。永祿年間と覚ゆ、君公邪教を信ずるため大村藩に一揆ありたり。佐賀の竜造寺も之に加はり君公を攻むること甚だし。君公は味方するもの七騎と共に山城に立籠り僅に敵に対するを得たる事あり。渡辺氏の先祖は実に其一人にて信者たりしこと後に至りて明になれり。(三九一号・明治三十五年十二月二十五日)

明治三十六年

(四—M36—1) 統熊野雄七の自伝回想

熊野雄七氏と語る(下)

ブラオン氏の訓戒

『福音新報』明治学院関係記事

明治五年の事なりと覚ゆ一日ブラオン氏予等青年の集會せる席上に於て政府或は諸君を捕ふるに至るやも知れず須らく用意あれと告げられたり、當時に於て斯る言を聞く固より意外にあらず。心窃に期する所ありしにブラオン氏の言は実に予が信仰をして愈々堅固ならしめしものあり。

氏曰く諸君は如何に考ふるやを知らず。我は諸君が神妙に縛に就かれん事を望む。国法に依りて諸君を罰せんとならば宜しく之を受くべきにあらずや。縦へ死刑に処せらるるとも之を受くこそ真に基督教徒たる名に恥じざるものなり。我若し米國公使に依頼せば諸君を公使館に引取り無事ならしむを得るは容易なり。然れども難を避けて安全を図ること必ずしも賢き方法にあらず。国法を執行するに當っては宜しく之に従ふこそ臣子の本分なれ。我は諸君が雄々しく紳士らしき行動に出でん事を望む。と予は此の言を聞き始めて基督教道德の高潔にして勇健なるを悟れり。日本の武士道にも優りて立派なるものあるを知り得たり。苦心慘怛の末洗札を授けたる初代の信者が今や捕はれんとするに際しては出来る限り之を擁護し伝道の便を謀るが師たるもの情にはあらざるか。殊に公使の手を借りて容易に為し得らるる救済法あるに於てをや。然るにブラオン氏は断乎として愛するものに「捕に就け」「死刑に処せられよ」と訓戒す。実に古武士の風ありと言ふべし。形勢危きに迫りたる頃英國公使パークス氏等の抗議に依り信教の自由となり無事なるを得たり。(後略)(三九三号・明治三十六年一月十日)

『福音新報』明治学院関係記事

(四—M36—2) アレキサンダー博士追悼会

故神学博士アレキサンデル氏追悼会

予期の如く去月三十一日午後二時女子学院に於て執行せられたり。此日朝来天曇りて寒氣身に沁み感ぜられしが午後に至って歩行に困難なる位雪降り積れり。其にも拘はらず来会せし内外人男女合せて八十名斗りて見受けたり。石原氏の司会にて星野、タムソン両氏祈禱、植村氏説教、井深、イムブリ、有馬三氏の弔辞等あり極めて厳肅に其会を終りたり。井深氏が演説せられたる大意を左に掲げアレキサンデル博士の往時を知るの便に供す。

トマス、チエロン、アレキサンデル氏は千八百五十年頃北米合衆国テネスシー州の東部マウント、ホロブに生る。氏の家は農を業とす。南北戦争の時人となりメルビル大学に入学し卒業後二ヶ年間同大学の助教を務め後ちニューヨーク市のユニオン神学校に入れり。氏は卒業後間もなく米國プレスビテリアン教会派遣宣教師として日本に渡来せり即ち千八百七十七年(明治十年)なり。最初東京に居住し一致英和学校に於て英語を教授せしが其頃プレスビテリアンミッションは関西地方の伝道を開始し氏其の創業者の選に当り赴任せり。明治二十六年明治学院神学教授ドクトル、ノックス辞任帰国の後を襲ぎ四年間忠実に其任を尽されたり。明治三十二年休養の期来り一旦家族を携へて帰国し一年を経て单身再び来朝せられ京都に住ひ関西伝道に従事せられしが遂に昨年布哇に於て病死せられたり

故アレクサンデル博士は日本伝道のため其全生涯を献じたる人な

り。博士に就て知る所を挙ぐれば第一宣教師としては一、上品にして紳士、学者風の日本語に熟達せられし事。二、日本人の事情に精通したる事。三、日本人に同情深く之を信すること厚かりしこと等なり。斯る長所ありし結果として日本人が博士を信頼することも亦極めて深きものありき。第二に博士は神学者又聖書学者なりき。氏は旧約文学に精通せり。氏の著述「旧約書の人物」「予言者アモス」等有益なる基督教文学なり。氏は神学上の意見に付て一時同僚より誤つて大に非難攻撃せられたることありき。氏病を得て將に帰国せんとするや予は東京中会委員の一人として横浜に送りたり。其時氏は日本の神学界に於て我が日本基督教会

が守るべき位置、取るべき方針に就き頑冥固陋に流れず又極端破壊の神学説に対して確乎たる建設的の信仰を維持主張すべきは我が教会の大使命なりと滾々述べられたり。此れ博士の神学及信仰上の立場にして吾人に与へられたる遺訓なりと言ふべし。願くは謙遜忠実なる基督の僕熱心にして同情に富める宣教師、寛大にして進歩的而も極端に走らず常に健全なる聖書学者たる博士の精神長く我が教会に活動し氏が二十有余年日本各所に伝播せし福音の種子百十倍の実を結ぶに至らんことを祈る。(三九七号・明治三十六年二月五日)

(四—M36—3) 神学部学生募集広告

○神学生募集○

当学部の本科は来る九月生徒を募集すべけれど神学の予備科たる

べき高等学部の学年は四月より始まる故に中学卒業程度の学力ある者にして将来神学校に入らんとする志望ある向は四月より入学せらるべし入学試験は四月九日とす

東京芝区白
金今里町 明治学院神学部

(四〇三号・明治三十六年三月十九日)

(四一M36—4) 明治学院卒業式

明治学院卒業式

明治学院卒業式は去る三月廿八日午後二時より同学院講堂に於て執行せられたり。来会者は満場立錫の余地なき程にて、三百人位はありたるならん。来賓の重なる人の中には、ニコライ主教、救世軍大佐ブラード氏等あり。渡辺国武子の卒業生に対する演説あり。青年の天職を撰択する必要より、海外漫遊の折の所感を述べ、列国の競争は軍事、実業、学術、政治の競争なるも、其根本的の競争は、国民の道德と品性の競争なることを述べられたり。ポオル博士も一場の演説あり。人の言語、行爲、愛、確信、純潔等に就て有益なる勸を与へられたり。(四〇五号・明治三十六年四月二日)

(四一M36—5) 柏井園の教授就任

△柏井園氏 明治学院の講師なりし同氏は理事会の決議により今回教授に任ぜられたり。(四〇五号・明治三十六年四月二日)

(四一M36—6) 東山学院生徒募集

○生徒募集広告○

第一年級五十名、各級へ若干名入学を許す

四月七日午前八時入学試験を執行す

規則入用の者は二銭切手を送らるべし

長崎 私立 東山学院

(四〇五号・明治三十六年四月二日)

(四一M36—7) ブラウン博士

ブラウン博士

維新前後から日本に來られた外国教師の中で、其の従事された職務は何であつたに拘らず、幸ひに政府の認むる所となつて勲章を受けた人もあるが、又た不幸にして認められずに特殊の待遇を蒙らなかつた人もある、博士ヘボン氏及博士ブラウン氏の如きは即ち立派なる貢獻ありながら勲章も受けずに済んだ人である、過日博士井深梶之助氏は東京中会の教役者会に於てブラウン博士の事に就て演説せられたので記者は猶ほ他に調査した所のものと合し之れを取捨して此に掲ぐる事にした。

五十歳にして日本に派遣せらる

日本が米國と通商条約を締結したのは実に千八百五十八年即ち四十三年前である、此時にブラウン博士は自ら日本伝道の急務なるに感じ外国伝道会社に出願して其の任用を得、彼のフルベッキ及シモンズの両氏と同船にて來朝した、是れは条約締結の翌年の十

一月頃である、此時博士は齡既に五十歳を過ぎて居ったので、其の氣力の旺なる事、目的の遠大なること実に驚歎に堪えぬ次第である、又此のシモンズといふ人は後に時事新報の客員となり横浜十全病院長を勤めて居った人である。

ませうを見付けた

當時幕府は公然基督教を許さなかつたし又國民は理由もなく外教の名の下に蛇蝎視したので、博士は第一に日本語を知る事の必要を感じ、日夜其の練習に心を砕いた、練習といつても今日の様に便利な字び方ない。詰り自ら想像して自ら研究するより外なかつたのであるから、其の労力は尋常一様でなかつた、或日博士は突然として、物に狂ふた如く慌ただしく叫んだ、

「へボンさんへボンさん見付けました見付けました

へボン氏は驚ろいて立上り

「何、何をです。

博士は漸く我れに帰り

日本語の動詞の未來です、日本語のフューチュアテンスです、ありませう、ムいませうの、せうを見付けたのです

と言ふた、彼の比重発見者が湯槽から飛び出して裸躰のまま町中を見付けました見付けましたと叫んで走つたのと同じで、此の発見をなした時博士の愉快はどんなであつたらうか、事程左様に當時の言語上の不便が察せらる、彼れが英語會話篇は後に脱稿しても出版の資金が無かつたので一商人が之れを引受け香港で出版したのである。

写真の嚙矢

博士は写真術にも達して居つたので、本国の外国伝道會社に伝道報告其他の通信をなす場合には、必らず其手づから撮影した日本風俗、景色等を添へて送る事にして居つた、此の爲めに會社では居ながら日本の実況を知るのみならず、日本其ものに對する趣味を深く感ぜしめた、此時博士は写真術を下岡連杖氏に伝へたのが抑々日本写真術の嚙矢である、或は下岡氏に伝へたのは米人シヨイヤ氏であるとの説もある。

伝道者養成

日本に在留すること八年、博士は健康回復のため本国に帰り其後明治の初め即ち千八百六十九年に再び来朝し、新潟英語學校、神奈川県の修文館に教鞭を執て居たが明治七年官立學校を辭し、自宅に於て私立學校を開設した、此時に入門した人々の中で目下伝道に従事して居る人々は本多、押川、熊野、真木、井深、植村の諸氏である。博士は常に言ふたことがある、自分は直接に伝道してあるかないけれども、伝道者を養成することに全力を尽すのであると、実に其通りである。清國に於ても一千八百三十八年博士が広東に行きて八年間支那人を教育したが其の帰國するに臨んで彼は清國學生中有爲の少年三名を伴ひ帰米の後之れを薰陶した其一人たる容宏ヨウカウはエール大学から法学博士の学位を受け曾て米國駐割の清國公使となつた事がある、今ま一人の黃勝ワウシヤウといふは在米清國領事もした事があるのだ、彼れは実に其言の如く人物養成といふ遠大なる計画に力を尽したので、此点は彼れの一大美德と言

ねばならぬ。

日本のために

アメルマン博士が本邦に渡米すると同時に彼れは専ら新約全書の翻訳に全力を注ぎ、奥野昌綱、高橋五郎、松山高吉、ヘボン、グリンの諸氏と協力して竟に翻訳の完成を見るに至った、博士は之れがために其の健康を害ひ再び其本國に帰った、出発に臨み端然として人に語って曰く「若し自分が百の生命を持って居ったとするも其の全部を日本のために捨てることを吝まない」と、彼れは故山に帰省し、或る日曜日朝、両親の墓を弔ひて家に帰り、夜半静かなる安眠の中に何の苦痛もなく此世の息絶えて限りなき世に移ったのである。

此母ありて此子

ブラウ博士は一千八百十年六月十六日、米國コンネツチカッ州エースト、ウキンヅルに生れた、父はテモセイ、ブラウンと名づくる木工で母をフキベ、ヒンステエル、ブラウンといふ、夫人は幼少の時から貧家の中に人となり、十八歳の頃まで他人の婢女となり毫も教育を受くる余暇もなく全く無学文盲であつた、然るに夫人は十九歳の頃から始めて修学の志を立て業務の余暇を竊んで讀書をしたけれども一銭の余裕もなき貧困の中なれば学資の出づべき筈なく、僅かに筆とインキを買ふ事さへも出来ぬのであるから、市に出て鳥の羽を拾つてペンを作り紅葉の木の汁を採つてインキに代用し、夜は燈し残りの蠟燭を集めて之れを燈し一生懸命に勉強したので遂に後に有名なる詩人となつた、讚美歌第四

番「タくれ静かに」の歌は実に夫人の作である。

夫人は極めて教育に熱心に其の敬虔誠実なる信念は男子を生まば外國伝道者となして天父に献げんと希望甚だ切なるものであつた、果して彼れは男子を生んだ、彼れは予言者サムエルが幼時よりエホバに事へ其生涯を神に献げた事に因み其嬰兒にサムエルと命名し、同時に外國伝道者たらしめんことを神に誓つた、ブラウ博士の母たる所以である。

刻苦の人

博士の家は斯の如く貧困であるから到底博士の学資を得る事が出来ない、ソコで彼れは中学校を卒業してから暫時小学校の教師となつて居たのである、彼れが二十二歳の時、彼れはエール大学に入学した、而も此時は彼れが母から貰つた二弗入りの財布がある許りで他は凡て苦学せねばならぬのである。

入学の時に彼れは篤志家のため学資の幾分を扶助されたけれども逆も其れ許りでは足りないから或は薪を挽き、或は食堂の給仕人となり、或は学堂の鐘打となり、非常の辛苦を嘗めて勉強し遂に良成績を以て卒業した、彼れの卒業論文は盲啞教育に対する意見で彼れは盲啞教育に就ては造詣甚だ深い、彼れが日本に居つた時仏國の貴族で啞の人が来遊した事がある、其時に彼れは巧妙なる話術を以て応接して左右の人を驚かした事がある。

牧師にして教育家

大学卒業の後、プリンストン神学校に入学を勧告する者あつたが、其父の生計を助くるが為に紐育市設立の盲啞学校に就職して三年

間首聖教育に従ひ其後コロンビヤ神学校に入つて神学を専攻する事とはなつたものの学資の不足から音楽の教授となつて之れを補ふて居つた、今までの大統領ルウズヴェルト氏の母堂は実に此時の門下生でアルサ、ブルックと呼ぶ妙齡の一婦人であつたのである。彼れは其後紐育州ロウムと言へる地の大学校の教師となつたが其の薫陶の成功著るしく大蔵大臣ゲイチの如き偉大の人士を輩出せしむるに至つた、千八百五十一年彼れは紐育州オワスコレイキの教会に招聘され牧師として赴任したが、当時教会萎靡として振はず殆んど瀕死の状況であつたにも拘はらず、彼れが熱心にして敬虔なる信念より迸り出でたる活力は教会を復活し頗る健全なる状態に立たしめた。

女子大学の濫觴

彼れは教会の余暇を以て女子教育に貢献する所あつたが、竟にエールマイラと称する女子大学が創設されるに至つた、此れ米國女子大学の濫觴である。(四一—一号・明治三十六年五月十四日)

(四—M36—8) 普通学部、専門学校入学者無試験検定校に指定さる

専門学校入学者無試験検定と明治学院普通学部

先頃發布せられたる専門学校入学者検定規定によれば入学検定に試験検定と無試験検定との二あり、然かして無試験検定を受ける者は中学校若くは修業年限四箇年女学校卒業者の外に之と同等以上の学力を有するものと指定せられし者に限られたり。右省令の発

布以來如何なる学校が指定せらるべきかは教育界の一疑問なりしが本月六日文部大臣は無試験検定を受けることを得る者を左の如く指定發表したり

一 学習院中等学科及元尋常中学校卒業生

一 官立台湾總督府國語学校中等部卒業生

(明治三十三年四月二日以後の卒業者に限る)

一 師範学校元尋常師範学校及元師範学校高等師範学科卒業生

一 女子師範学校卒業生

一 東京府私立明治学院普通学部卒業生

(明治三十三年七月十七日以後の卒業者に限る)

一 東京府私立青山学院中等科卒業生

(明治三十四年五月三日以後の卒業者に限る)

一 東京府私立真宗東京中学卒業生

(明治三十三年二月二十七日以後の卒業者に限る)

一 東京府私立第一仏教中学卒業生

(明治三十五年二月十九日以後の卒業者に限る)

一 三重県私立真宗勸学院中学校卒業生

(明治三十五年九月二十日以後の卒業者に限る)

一 東京私立新義真言宗豊山派(高等尋常) 中學校高等科卒業生

(明治三十四年十二月十八日以後の卒業者に限る)

右にて数年来の一問題たりし中学程度の基督教主義の学校即ち明治学院普通学部青山学院中学校等と高等学校及び専門学校との連絡問題も半ば解決せられ明治学院普通学部及び青山学院中等科卒

業者は総ての専門学校入学規程に関しては中学校卒業者と均一の権利を有することなれり。唯高等学校との連絡は未だその運びに至らざれども是れも多分遠らざる未来において専門学校入学規定と同じ様なる者に改正せらるるならんと信ぜらる。されば基督教主義の普通学校も将来益々便宜を得て隆盛に赴くならん。(四一号・明治三十六年五月十四日)

(四—M36—9) 井深梶之助の談話

井深梶之助氏を訪ふ

井深博士は明治学院の総理として教役者養成に尽力せらるること茲に年あり、嘗てプリンストン大学よりマストル、オブ、アーツの学位を得、昨年来ラットガルス大学より神学博士の学位を得られたり。明治初年より今日に至るまで教会の進歩發達に貢献せられし所蓋し小少にあらざるなり。

教派合同の沿革

教会合同問題は今日起りたるにあらず。明治五年始めて新教の教会横浜に組織せられ之を日本基督公会と稱へし以来の宿題なり。公会は外国宣教師と關係を有し且其の組織も米國長老教会に則りたりと雖も当時の信徒及び關係者は教派の分立を好まず之を日本独立の教会とせり。然るに意見を異にする宣教師もありて神戸、大坂の組合教会、日本長老公会等新に設立せられたり。明治七年の始め教派に関する議論起り東京横浜の日本基督公会は依然非教派的独立主義を固守することを決議せり。組合教会は当時日本基

督公会と稱し東京、横浜の日本基督公会と同様長老、執事を置き長老政治を行ひ居たり。明治八年四月神戸に大会を開きし時デビス、新島両氏神戸、大坂両公会を代表して東京横浜両公会の代表者バラ、奥野両氏に謂って曰く、「当時の日本基督公会条例の信条に受納し難き所あり」とて遂に分離することを申出られたり。之を日本基督教会及び組合教会分立の紀元とす。

神戸及大坂の公会と横浜及東京の公会の合同破れたる翌年プレスビテリアン、ミッションはダッチリフォームド、ミッションと合同の議を開き更に蘇格蘭スコットランド一致長老教会ミッションを誘ひ各二名の委員を選出して明治十年十月遂に合同の議成り之を日本基督一致教会と稱したり。日本基督公会も之に加入せり。此は合同の範圍狭小且つ合同の基礎、信仰個条等に就き満足し難き点なきにあらざりしも予は之を合同の第一着歩と認めて喜びたり。

各地の教会漸次盛大になり伝道の区域従って拡張せらるるに就き関西に根拠を有する組合教会と関東に拠って立つ一致教会とは合同する必要を認め明治二十年より二十二年に亘り数回の交渉を遂げたり。両教会より選出せられたる委員等は合同の基本を左の如く議定せり。

基督諸教派の合一は最も望まましき事なれば此志望を達せんが爲に日本組合教会及び日本基督一致教会は相合して一の基督教会となり之を日本基督教会と稱す而して真理は敬虔に必要な事を確信するが故に茲に左に掲ぐるものを以て合同一致の教理上の基礎と定む

夫れ新旧兩約書に記載する神の言は信仰及び行状の唯一の誤謬なき法則なり、然れども教会の歴史に於て敬虔なる人々が時勢の必要に由り信經中に記載する処の重大なる教理を陳述したる者あり即古より我等に伝はれる信經及び信仰箇条の中には使徒信經並にニカヤ信經と稱する者あり其他近代に至て我等に伝はれる者の中にはウエストミニストル略問答及びハイデルベルグ問答アレマス信仰箇条と稱する者あり凡て此等信經及び問答は

吾が教会に於て貴重すべき者とす我等は此等信經及び問答は既往の教会歴史上關係を有し且教会の大なる首が我等に委託したまへる事業を共にせんと常に冀望する所の諸教会に現出せる教法改革後の諸信仰箇条に対して負へる所ありとす此等の信仰箇条は皆我が教会に於て貴重すべきものと雖此等を以て同様に教師の必ずしも信すべき者となすに非ず凡そ役者たるものは使徒信經ニケヤ信經福音同盟会の九箇条を承諾して之を信すと言者はすを要すと雖ウエストミニステル略問答及びハイデルベルグ問答アレマス信仰箇条は其大意を是認するを要する耳（此は合併草案の大意なり井深氏の談を明にするに必要と認め之を「日本基督教會歴史」より転載せり）

二教派は信仰の大綱目に変更を來すことなきのみならず教會政治に就ても大体上の一致を期し其の形式の如きは深く之を問はざる趣意なりしなり。

合同の議大に進み二十二年の夏議將に調はんとするに及び新島襄氏之を喜ばず組合教會青年教役者中反對するものありて遂に成ら

ず二年半余の苦心尽力もや水泡に帰せりと云ふべし。其頃美以教會派にも合同の相談ありき。不幸にして一致、組合の合併成らざりし爲め美以派の合同亦立消えとなれり。以上は既往に於ける教會合同の沿革大要なり、今後は如何に成り行くべきか。

合同の理由と趨勢

予は今日に於ても大体の方針として基督の教會は一致すべきものたるを信す。基督の祈に「汝と我と一なるが如く彼等をも一ならしめ給へ」とあり。教派の合同は基督の望み給ふ所と言はざるべからず。是れ予が合同の成るべきを信じ之が成功を計らんとする理由の一なり。

今日の教會政治、神學上の意見等は異なる所ありと雖も而も眞に基督に拠りて救はれたる団体と見る時は各教會、信徒皆一体たるに

あらずや。是れ予が合同を可とする理由の二なり。

以上は根本理由とも稱すべし。此外目前の事情に就て考ふるも大に合同を可とすべき理由あり。欧米の教會は今や教派合同に傾きつつあり。米國は教派最も多き所にして又最も多く其弊害を實踐せし所なり。故に教會の合同を計り其弊を免れんとする傾向あり。

加之外國伝道上其必要一層大なるものあり。教派分立すればこそ同一地方に伝道するに幾多の機關を設け伝道者を遣はさざるべからず。斯る方法の不得策たることは伝道地に於て著るしく表はれたり。伝道会社の所在地たる英米國の教派合同せざるに先^{また}て日本に在る教會が合同せし如き其実例と言ふべきなり。

英米国の教役者中伝道地に教派分立の不得策なることを認むるもの日々に増しつあり。且又実業上の運動今や凡て合同主義即ちトラスト主義となれり。孤立して運動するものは競争に耐へざるの危険あり。米国の教会に關係ある新聞紙が続々合同しつあるは此の大勢を示す一端と言ふべし。即ち「イバンゼリスト」と「クリスチャン、ウォルク」と「コングレガシヨナリスト」と某新聞と合併せしか如し。濠州に於て組合、長老兩教派の合同せしは最近の事実なり。英國の於てもコングレガシヨナリスト、バプテスト、プレスビテリアンの三派は余程接近し居れり。大会の時など互に代表者を派出して其の安否を問ふ。加之監督教会の有力者中にも合同を主張するものあり。倫敦の監督等は門戸を開きて非国教派と一致すべしと論じ居れり。斯る主張論議は十年前の英國に於て思ひ設けざる所なり。英米國に於ける教会合同に關する現勢、希望洋々たり我國に於ても亦基督の精神に則り教会の協同一致を企つべきにあらずや。然らば其の方法如何。

合同の要義

既に合同一致の必要を認めたる以上如何にして之を實行すべき。先ず何れの教派が一致すべきか、此等実地問題に至っては今俄に之を決し難し。何れの教会が如何なる方法を用ふるにせよ形体上の一一致を強ひて精神上の一一致を欠くが如き事あらば其は無益なりと言はざるべからず。而して一致に必要なは寛容なり。信仰上の事又教会政治に關し眞実に一致の意見を有することも必要なり。聞く所によれば六メソヂスト教会一致の傾向ありと此れ大に喜ぶ

べきことなり。離を得て蜀を望むは人の情なり。願くは一步を進めて組合、メソヂスト、浸礼、監督諸教会の一致合同あらまほしき事なり。

教役者養成問題

我國に於ては目下直接伝道に従事するもの大に欠乏す。此れ一般教会及び教役者が共に認むる所の事実なり。茲に於てか教役者養成の必要起る。如何にして教役者を養成するかを研究するに先ち如何にして教役者たらんとする者を得べきかを考ふること大切なり。最も適切なる人物を得んとせば教会及び外国伝道会社が教役者を厚遇すべきこと勿論なり。献身的事業に従事する者をして衣食住の問題に其心思を煩はしめざるは至当のことなり。斯く言へば精神の陋劣なるが如く之を蔑視するものなきにあらざるも適當なる教役者を得るに大切なる事柄に相違なし。

又先輩は後進を抜擢し之に向つて教役者たらんことを奨励すること必要なり。自ら進んで教役者たらんことを願出づるものこそ給果宜しけれとは普通に考へらるる所なり。然るに實際は然らず他人に奨励せられたるものに成功者多し。実に人を見るは困難なるも内外教役者の先輩たるもの此点に就て大に勉むる所なくんばあらず。

右の如くして適當の人物を得て之を養成するに當つて教育上の標準を高くするも必要なり。明治学院に於ても茲に見る所あり昨年規則に改正を加へ予科の年限を二年とし本科に入るものの実力を高めたり。然りと雖も今日日本に在る神学校の多くは不完全なり。

『福音新報』明治学院関係記事

其欠を補ふ方法として神学校卒業後多少実地伝道を試みたる上米
国若くは英國の神学校に学び兼ねて教会伝道の經驗をも積むを良
しと認む。明治学院は此の趣旨を以て米國十二の神学校とは特約
を結び居れり。彼地に在学するもの現に三十四名あり。本年更に
二十三名遊学するならん。

神学校が外國語に重きを置くを難するものなきにあらざるも日本
に神学上の好著述なきと、卒業後神学上の智識を得るに外國文を
読破するの必要あるのみならず訳字を以て言ひ尽し難き意義を味
ふに当り外國語を知ること肝要なり。又多数卒業者の經驗に倣す
るも此は極めて大切なり。

語学の研究

教役者は英語等の外ギリシャ語、ヘブライ語を研究する必要あり。
明治学院は將來此等古文学の専科を特別に設立し語学の才あるも
の或は他日神学を専門に研究せんと志す人々を收容せんと企あ
り。聖書に關する智識進歩するに連れ牧師、教師たるものは原語
に就きて之を解釈するの必要多きを加ふ。且又日本語聖書は早晚
改正さるべきものと思はる。該事業は極めて重大なり。改正者の
半数は聖書の原文に通ずる日本人に依りて実行せらるるの必要あ
るべし。斯く言へばとて現在の邦語聖書を輕んずるにあらず。予
は之が翻訳に尽力せし外國人の功を認め邦人が永く其恩を忘れざ
らんことを願ふものなり。

予は専門的知識に富める適當なる教役者を得んため神学校の合同
一致を願ふ。日本の神学校は教師も生徒も少数なり多くの学校を

要せず。殊に勝れたる教師に乏しき今日之を合併して良教師を集
め生徒を精撰して教育するに至らば只に神学上の進歩著るしきの
みならず伝道上大に見るべきものあるを疑はず。(四一二号・明
治三十六年五月二十一日)

(四—M 36—10) 柏井園就任式

◎柏井園氏就職 既記の如く去三十一日午後二時半より明治学院
講堂に於て挙行、同院総理井深博士の告辞、柏井氏予定の演説等
あり。凡て鄭重に結了。(四一四号・明治三十六年六月四日)

(四—M 36—11) 秦庄吉の帰國

△秦庄吉氏 来る十六日頃米國より帰朝せらるること。(四一
四号・明治三十六年六月四日)

(四—M 36—12) 柏井園渡米送別會

△柏井園氏送別會 近々渡米せらるるに就き去十四日芝公園三縁
亭に於て送別會を開かれたり(四二〇号・明治三十六年七月十六
日)

(四—M 36—13) 杉森此馬消息

△杉森此馬氏 広島高等師範学校教頭なる同氏は英語研究のため
文部省より二ヶ年間英米に派遣せらるべしと云ふ(四二三号・明
治三十六年八月六日)

(四—M36—14) 元田作之進、神学校の衰微を論ず

神学校問題

元田作之進

軍事上の素養を与へずして兵卒を戦場に出さば、向ふ見ずに暴進するか、或は臆病にして忽ち逃げ去るか、孰れにしても、勝算なきは明なり、牧会或は伝道の事も亦た然り、感情一天張りの伝道、熱心一片の牧会は、一時の成功を来たすことはあるべきも、確實なる神学上の素養なきときは、到底永続すべきものにあらず、神学校は牧会伝道の士官学校にして、布教上に必要なことは固より論を待たざる所なりとす。

此必要あるを以て英米各派の伝道会社は日本に伝道を開始するに当りて各神学校を設けて教役者を養成することを計れり、而して此計画は大に其功を奏し一時は各神学校とも多数の生徒を收容し、其中には俊才も少からざりき、今日伝道界に於て成功しつつある教役者は、殆んど凡て此等の或る神学校に於て学びし人なりと信ず。

斯くの如く一時伝道界に貢献せし神学校が、今日に至りては孰れも微々として振ず、生徒十人以上を有せる神学校果して幾許かある、生徒に充分の満足を与へつつある神学校果して幾何かある、日本に於て学校として存在せる者の中に、神学校ほど生徒の少く、神学校ほど不平の多き学校は他に非ざるべし。神学校の生徒に斯の如き変化を来たせしは何か理由なくんばあらず、神学校旺盛の時期と異りて今日青年間に伝道的精神の減少せしは髓に其原因

なるべしと雖ども、神学校其ものの内容に於ても亦た其原因なりと認むべきものなきにあらざるが如し。

一概に論じては少しく酷なるが如しと雖ども、孰れの神学校に於ても一の欠点と認むべき所は、学課の配当及び教授法、学校の行政法等凡て外国の神学校を其儘日本の地に扶植せるが如き形を示せることなり、日本の教役者は未信徒をして信徒たらしむるの責務を有し、外国の教役者は概して信徒をしてよりよき信徒たらしむる責務を有す、此間には大なる差異あり、故に日本の教役者を養成する神学校にては学課の配当に於ても或は教授法に於ても外国のそれとは大に異ならざるべからず、外国人が説教に於て多く成功せざるも、日本語の拙なるが為めよりは寧ろ其思想の順序が日本未信徒の要求に適合せざるが為めなり、同じ福音書を書くにも、猶太人を目的としたる馬太と理窟家を相手にしたる約翰とは大に其筆法を異にせり、日本人の頭脳には外国風の進化論もあれば日本風の仏教もあり、国家主義もあれば社会主義もあり、此等に対する教役者を養成する神学校にては其覚悟なかるべからず、外国の日曜学校の上級生を教授する如き教授法にては、とても生徒の知的要求を満足せしむること能はず。

次に一言したきは神学校卒業生に対して一層の尊敬を払ふの道を開かざるべからず、中学を卒業して三年間の或学科を修むれば直に四五十円の収入を得るの時代に於て、神学校卒業生は同じ年数或は尚ほ長き年数の学問をなしながら妻子も養はれず社会の交際もなし能はず親戚扶養の義務も果し能はざるに於ては、伝道に従事

したくも、止むを得ず、他に職を求めざるべからざるに至る。是等の困難の爲めに、組合教会などは随分有爲の教役者を失へるなり、単に彼等が信仰の冷却したるが爲めとのみ思ふは誤れり。

神学校卒業生を優待するには固より金銭問題に限らず、教会内に於ては勿論、社会に於ても相當の尊敬を与ふることにならざるべからず、今日の処にては神学校なる者は教育系統の外に孤立して治外法権の有様を呈し居れば、社会の人は神学校の卒業生を以て下ノ位の学力ある者かを判定する能はず、寧ろ実働以下の人物なりと想像せる者多きが如し、今神学校を以て専門学校令に従はしめ、卒業後数年の研究科にて或学科を専攻し、神学士の称号を得たりとすれば、社会の人は直に其実力を判定するの比準を得て、神学卒業生に幾層の尊敬を能ふるに至るべく、従て伝道にも牧会にも其勢力を増加するに至るべし。

更に一言を加へ度き事は従来神学校の教授法には、独断的の教授に傾て推理的の教授に拙なる所はなきか、教師が教へ込むことに注意して、生徒をして自ら研究せしむる方法を授くることに注意せざるもの多きが如し、是れ生徒に勉学の興味なきを致す原因なり、學生に興味を与ふるは教授法の秘訣なり、哲学或は科学と異なりて神学には随分ドグマもあり、然し何も蚊もドグマチックに教へて學生に推理的研究の余地を与へざるときは、神学は無味乾燥の學問となり果すべきは当然の勢なり。

神学校には神と人との關係を教ゆる學課が多く、人と人との關係を教ゆる學課は誠に少し、或は皆無と言っても可なり、是れは神学

校の名義に稱へるものかも知れざれども、教役者を養成する場所としては甚だ不備なりと言はざるを得ず、米国のイレー氏が言へる如く、福音学校と稱して其中に神学と人学（即ち社会学）を置くべきものと思はる、予は専門学校と稱したらんには適切なならんかと思惟す。（四二九号・明治三十六年九月十七日）

（四一M36—15）片岡健吉逝去

◎片岡健吉氏の死去

衆議院議長片岡健吉氏は、郷里種崎の静養地より高知中嶋町の邸に帰り、武田病院長を主治医とせられ、家族の看護にて手厚く療養中なりしが、氏の病状は其の始は胃病にて、其の後盲腸炎を患ひ居られたり。然るに先月十三日俄然腸管閉塞の諸症を發し、臍の左側に当り劇痛を發し、其の疼痛は四方に放散し、肚腹緊満し、腸蠕動機亢進し、外部より明かに目撃するを得る程にて便通なかりき。十四日の午後に至り胃部緊満甚しく時々嘔吐あり。十五日には数回の瀉腸をなし、少量の便通あり稍や輕快。十七日に精神少しく爽快を覺へ、十八日に飢餓の感あり、卵二個スープ少許を用ふ。十三日より此日まで全く絶食し身体非常に衰弱す。十九日異状なく、二十日午後下腹少しく緊満す。二十一日異状なく、卵及スープを用ゆ。二十二日異状なく便通あり。午後腹部に疼痛を覺へ非常に不快を感じ。二十三日再び腸閉塞の諸症を發し、腹部疼痛冷汗を發し、苦悶甚しく皮膚的熱の感あり。午後は体温三十八度二分、脈拍百二十至、身体非常に衰弱し食機全くなく腹部の諸

症滅却せず。二十四日二十五日は前日に比して稍軽快に赴きたるも、二十六日頃より衰弱の度は甚しく去月三十一日死去せられたりと言ふ。

因に言ふ、本日午後二時より、神田青年会館に於て、追悼会あり。板垣退助、井深梶之助、丹羽清二郎、大野亀三郎、植村正久、小崎弘道、江原素六、箕輪勝人、杉田定一諸氏の發起にて、本多庸一氏の司会、植村正久氏の説教あり。板垣伯を始め友人諸氏の追悼演説あるべし。(四三六号・明治三十六年十一月五日)

◎故片岡健吉氏の追悼会

本月五日午後二時より東京青年会館に開かれぬ、式場は黒紗くろさもて厳かに装はれ、講壇の正面には国旗を交叉し、其の間に氏の肖像は恭しく挙げられぬ。講壇の前面は花の環もて美しく飾られ、白菊の活け花は氏が生前の清かなる徳を物語もの如くなりき。定刻に至らざるに堂上も堂下も追悼者をもて満ちぬ。本多庸一氏は司会をなし、始にハウオルス夫人の奏楽あり、貴山幸次郎氏は詩篇第九十一篇を朗読せられ、石原保太郎氏の祈祷あり、女子学院有志者は讚美歌第百五十二番を合唱せられたる後に、故片岡氏の信仰の生涯に深き縁故ある植村正久氏は、約翰伝八章の三十節より三十九節コリント前書七章の二十二節を読み真理は爾曹に自由を得さすべしと言ふ聖書の詞に基き、片岡氏の経歴に就き、趣味深くして勢力ある権威ある説教あり。終りて片岡氏が臨終の折か

ら家族を集めて歌はれ且つ平素愛吟せられたる讚美歌百七十五番を、本多庸一氏の懇にして適切な説明ありて女子学院の有志者合唱せられぬ。次に明治学院を代表して井深梶之助氏の弔辞、憲政本党より箕輪勝人氏の弔文、福音同盟会より会長小崎弘道氏の弔辞、政友会総代として杉田定一氏の弔文、基督教青年会日本同盟を同表して元田作之進氏の弔文、マクネヤ、ハウオルス両氏の讚美歌合唱あり。土佐協会より総代奥宮正治氏、東京青年会より丹羽清次郎氏、日本基督教会伝道局より星野光多氏、在京土佐政友総代として林有造氏等の弔文又は弔辞あり。林氏の如き多年の政友たる心情流露して、情迫り感極って弔文を通読するに堪へざるもの如く見へたりき。次に板垣退助氏は片岡氏の親友として其の言行の跡に就て片岡氏の人物を説かれ歴史上に氏の誤解せられる点を明かにせられたり。終りに発起人総代として江原素六氏の丁寧なる挨拶あり。頌栄の歌を一同起立して謡ひ、司会者の祈祷を以て午後五時頃無事に終りたり。

出席者の重なる人々の中には、板垣退助、谷干城、杉田定一、島田三郎、箕輪勝人、江原素六、佐々友房、元田肇、田口吉卯、清浦奎吾、大浦兼武、田健次郎、堀田蓮太郎、田中正造、大井憲太郎、尾崎行雄、竹内綱、土方寧、波多野敬直、大竹貫一、豊川良平、高梨哲四郎、白井哲夫、江藤新作、横井時雄、押川方義の諸氏各教会及び団体よりの代表者、親族、政友、知己、無慮一千余名にして盛会なりき。(四三七号・明治三十六年十一月十二日)

◎故片岡氏の葬儀

故片岡氏の遺骸を納めたる柩は、去る五日正午十二時高知市中島町の自邸を出て、同志社生徒銘旗を持ち、次に第一中学生徒賜り物の幣帛を捧げ、次に中屋警部、次に大原氏勲章を捧持し、其左右と背後とに巡査附添ひ、柩側には安芸、細川、岡崎、土居、中沢、織田、山本、島田の諸氏、左右に別れて従ひ、次に十字架、嗣子及び遺族、親戚故旧随従し、十二時二十分高知基督教会堂に達し、市長を始め県下の有力家棺を迎へ、場内の正面講壇の前に安置し、一同着席の上、午後一時牧師多田素氏の挨拶ありて、会衆一同讚美歌第二十一番を合唱し、伊藤氏の聖書朗読及び祈祷あり。一同百九十八番の讚美歌を歌ひ、土居平左衛門氏は故片岡氏の履歴を誦まれ、多田牧師の死に就て適切なる説教あり、終りて祈祷の後故片岡氏の愛唱せられたる百七十五番を歌ひ、親戚総代大原里靖氏、県下政友総代として島田糺氏の吊詞朗読あり。次に山本幸彦氏起つて柩側に進み、板垣伯代理として訣別の辞を更に在京土佐政友を代表して吊文を読まれたり。次に吉岡弘毅氏日本

村の老弱男女の会葬者無慮二万人に達し、同県下空前の盛式なりしと言ふ。柩の墓地に達するや、一同讚美歌二百十番を歌ひ、吉岡氏の祈祷とデビス博士の祝詞あり。埋葬を終り帰途に就きたるは午後六時頃なりしと言ふ。(四三三七号・明治三十六年十一月十二日)

(四一M36—16) 高等学部・神学部の専門学校認可
△明治学院高等学部及び神学部は文部省令により専門学校たる認可を受けた(四四一四一号・明治三十六年十二月十日)

基督教伝道局を松山高吉氏京都同志社を代表して吊辞を述べられ、二百六十七番を合唱して祝詞あり。本日の会葬者は県外より板垣伯及び在京土佐人の総代として山本氏、伝道局より吉岡氏、同志社より松山、デビス、和田、千葉其他の諸氏、県下の政友及び基督信徒、各高等官、各学校長、各会社員、浅井、川崎、川島等の各豪紳、其他官民凡そ八百余名参列して非常の盛式なりき。式終つて会堂より秦泉寺に到る沿道は人の山を築き、市内各町郡

(四一M36—17) ランジス重傷
△明治学院教授ランヂス氏は去る十二日朝新築中なる礼拝堂の棟上より墜ち数ヶ処の重傷を負ひ脳震蕩を起し築地病院にて治療中なるが容体甚だ憂ふべきものと云ふ(四四二二号・明治三十六年十二月十七日)

明治三十七年

(四一M37—1) 明治学院神学部の現状

◎東京の各神学校

今や靈性的田園は成熟して穫時となれり然ども穫者少く往々にして取穫の秋を逸せんとす此の時に当り穫者即ち伝道者を養成する神学校の現状如何を知悉せんとするは、吾れ人、共に渴望する所

ならん故に余は東京に在る各派の神学校を紹介し以て其需めに応ぜんとす。

明治学院神学部

高輪御殿を去る南に五六丁、右に折れ坂路を下る半丁ばかり左側に近頃落成せし白金郵便局あり其の筋向ふに当り工事中の練瓦石造は明治学院礼拝堂なり建築費の予算壹万五千元なるも不足を告ぐるならんと云ふ竣効期は本年三月下旬なる由、門を入り左に三棟併立するは教師館なり正面に巍然たる三層楼は普通科の寄宿舎、西方の二階建は神学部の寄宿舎にして右方の宏壯なる二階造は普通科の講堂なり神学部は之と稍や並びて井深総理の校宅とインプリー教授の校宅との間にあり

明治十九年の頃一致英和学校、英和予備校、及び一致神学校相合して明治学院なるものを設立し英和学校は普通学部となり神学校は神学部となる同廿二年九月築地より現今の白金に移転せり而して神学部の講堂は翌廿三年に落成せしも其後震災の厄に逢ひ大破せしを以て修繕を施したり構造は練瓦木製折衷の二階建にて宏壯ならざるも華麗なり

明治学院の地面積壹万有余坪、土地高燥、垢塵を避け雑間に遠かり勉学と健康には頗る好適地なり試に楼に登りて左眺右望せしめよ近くは品川湾の静波の打寄する所白帆点々鷗の如く、水煙彷彿の間に房総の巒峰画図の如く其爽快云ん方なし若し夫れ知友相携へて戸外に散策するの時、古松老杉の間に書見を試むるも可なり数百歩を運らさば泉岳寺境内四十七士の墓畔に義人の佛を偲ぶべ

『福音新報』明治学院関係記事

し地幽境閑なる芝公園は十四五丁、春の花秋の紅葉半日の清遊に値す可し

品川停車場を去る僅々十二三丁、新橋横浜を初め東海道各地方へ行く、交通頗る便利なり加るに近來電車鉄道開通せし京橋日本橋方面へ行くも亦軽便なり神学生は総て十九名内六名は昨秋の入学者なり本科九名別利十名、外に五名の予備生として高等学部在り年令は本科生概ね二十五六別科生は三十前後なるも中には禿頭白髪のものあり老て益々壯んなること人をして奮起せしむるに足る多年軍律に服せし軍人あり東京に倫敦に在りて実業に鞅掌せる会社員あり彼等は非常なる決心と抱負と以て其位地を捨て他日救靈の任に當んとす其意氣天を衝くの概あり其精神其勇氣実に稱するに余りあり

学科及び教師は左に

教理史、教会政治、説教学、弁証論、

神学博士 井深梶之助氏

新約釈義、旧約歴史、

同 インブリー氏

新約緒論、新約釈義、希臘語、

同 フルトン氏

(博士オルトマン氏は本年來朝教鞭を執らるべし)

教会歴史、旧約歴史、英文学、

秦 庄吉氏

昨年専門学校令に依り学科に改正を加へ文部省に申請中なりしが先頃認可せられたり

神学部を分ちて本科、別科、研究科の三とす、本科の入学者は中学卒業程度の学力を有する者先づ予科に入り二年間修学の後更に

『福音新報』明治学院関係記事

本科に入るものとす、別科の入学者は年令廿五歳以上にして普通教育を受け相当の経歴を有する者とす、研究科は本科卒業生にして老年若しくは三年間既修の学科の一或は二を研究し論文を提出し教授会の推薦に依り理事会より神学士の称号を授与するものとす、明治十一年より昨年迄の卒業生を職業により分類して左に掲ぐ、卒業生百五拾貳名内本科百三十九名、別科十三名、外に卒業前出でて教職に就きたる者十二名總計百六十四名なり、

- 一、死亡者 十三名
 - 二、不詳 十三名
 - 三、実業家 十三名
 - 四、官吏 四名
 - 五、新聞記者 二名
 - 六、孤児院の爲め 二名
 - 七、医者 一名
 - 八、画工 一名
 - 九、中等教員 十八名
 - 十、海外留学生 六名
 - 十一、神学教師 四名
 - 十二、他教へ転ぜし教役者 十六名
 - 十三、日本基督教教会教役者 五十八名
- (備考) 統計上日本基督教教会教役者とあるも實際他教会に働く者四五名はあるならん又神学教師にして牧師たる者自然一人を二度計算せし事もあるべし、因に記す本年の卒業生は本科三名なる由、

(及川生報) (四五二号・明治三十七年二月二十五日)

(四一M37—2) 明治学院学生募集広告

文部省 明治学院 東京芝区
指 定 白金今里町

電話新橋一八八〇

高等学部は専門学
校令に拠れる 専門学校也

普通学部は徴兵猶予及高等
学校専門学校への連絡皆 中学校に同

高等学部各年級普通学部四年以下若干名生徒募集す

○高等小学二年修業者無試験に普通部一年へ入学を得○志願者は四月五日迄履歴書添願出べし○入学試験は四月八日九日両日執行

○規則入用の者は二銭郵券送れ

(四五五号・明治三十七年三月十七日)

(四一M37—3) 明治学院卒業式

◎明治学院第十九回卒業式 去る廿六日同院講堂に於て執行せられたり始に奏楽あり熊野幹事聖書を朗読しハウオルス教師祈禱を捧げられたる後に君が代を三唱し高等学部卒業生富尾氏の歴史の目標と云ふ英語演説及び神学部卒業生池田氏のシユライエルマツヘルモノログに関する邦語演説あり林竹子の独吟あり褒状賞品及び卒業証書の授与あり井深総理の卒業生に対する告辞普通高等

神学三学部総代よりの謝辞ありグレースタムソンの独吟終りて帝
国大学総長山川健二郎氏の演説あり明治学院学生一同の英語讚美
歌合唱ありミロル教師の祝詞を以て式を終れり当日の來賓は内外
の紳士淑女無慮三百余名にて盛会なりき式後神学部講堂に於て來
賓に晚餐の饗応あり同窓会あり席上大谷松井宮地白井熊野其他の
諸氏の卓上談話ありて楽しき同窓会なりき(四五七号・明治三十
七年三月三十一日)

(四—M37—4) 日本基督教会の戦時体制

◎日本基督教会戦時伝道部

日本基督教会大会常置委員会及び伝道局理事会等の協議の末、此
の度日本基督教会戦時伝道部なるものを伝道局内に設置すること
となりたり。其の計画は戦時に於て広島佐世保等特に伝道の必要
なる場所を撰び出来るだけの伝道をなすこと 明治学院 東北学
院 聖書学館 横浜偕成女学校等に交渉して男女の神学生を遣は
し戦時特別伝道をなさしむること東京日本基督教会聯合婦人会及
び全国婦人会に交渉して伝道的運動をなさしむること、日本基督
教会の信徒にして出征せる軍人及び其の家族に對し冊子を送り或
は慰問状を呈すること、九、十、十一の三ヶ月間戦時巡回伝道を
全国に試むることなどなり。此は伝道局設立第十年の記念を含め
て其の挙に出でたるものとす。其の伝道部員は大会常置委員及び
伝道局理事を以て之に充て、植村氏を部長とし、貴山松永二氏を
幹事とし、石原福田二氏を會計とす。経費は第一期運動の爲め一

千円を募集する考への由。評議員として全国より百名を挙ぐる管
なり。主意書及び小冊子は植村氏に托して起草することを決議せ
りといふ。(四五九号・明治三十七年四月十四日)

(四—M37—5) 井深梶之助の説教要旨

◎井深梶之助氏(十七日明治学院に於て△基督の善き兵卒)

明治学院の講壇は井深氏の説教せらるる所である。毎日曜日附近の
台町教会と時間の衝突があるけれど、学生の聴衆が可なりに有る
さうだ。井深氏例に依て秩序整然、流水の如くに弁せられた。其
の要に曰く。

基督の善き兵卒たらんとするには五つの資格を具へねばならぬ。
其の一は勇氣である。臆病腰拔は古來武士の最も賤む所であるが、
学生諸君も卒業後社会に出でて基督教の腰拔武士とならぬ様奮勵
せねばならぬ。或る県下の公立学校に於ては基督教徒を以て国賊
と侮辱せねばならぬ様な倫理問題を提出して生徒を苦めたと言ふ
ことで有る。古代羅馬に於ても基督教徒は実に悲惨なる迫害を被
った。けれども熱誠忠実なる信徒等は此の時代に処して基督を弁
明するに頗る忠勇であつた。基督の兵卒には勇氣が必要である。
其の二は忍耐である。兵卒が兇悪なる道路を行くに無限の忍耐を
持して進む様に、信仰の生涯に於ても忍耐力を以て困難の路を行
かねばならぬ。一時に火燄の燃え上る様な感情的の信仰を振り興
して少刻に倒れる如き愚を学ばず、強く耐忍して信仰を維持せね
ばならぬ。其の三は従順である。軍隊が上官官の指揮を俟つて行

動する如く、信徒は基督の命令を奉じて従順に進退すべきである。

一騎討の功名手柄を争ふよりも基督の命之れ順ふと言ふ美德を養ふが肝要である。其の四は警醒である。番兵が居眠を貪つて居ると遂に地獄に投げ込まれる。基督信徒は武装せる国民の如く常に戦闘準備を為て居らねばならぬ。亜弗利加内地を旅行する一隊は夜中絶え間なく篝火を点じて居る。若し火を燃さないと獅子に襲はれて無残に喰い殺さるるとの事だ。我等も信仰の火を点じて居らぬと悪魔の獅子に喰い殺さるるで有らう。其の五は忠義である。我等は自己の利害得失のために戦ふので無い。神と基督の爲めに自己と戦ひ、亦た悪の靈と闘ふのである。故に須臾も忠義の心を失つてはならぬ。(四六〇号・明治三十七年四月二十一日)

(四一M37-6) 宗教家大会と日露戦争

◎宗教家大会 は去る十六日午後二時より芝公園弥生館に於て開かれたり。ピアノ、バイオリン合奏の後、久我侯爵司会し、一同君が代を三唱し、黒田真洞氏開会の辞を述べ出席中の年長者たる西有穆山氏(曹洞宗大本山総持寺齡八十四歳)を座長に推して議事に移り左の宣言書を満場拍手の裡に決議せり。曰く

『日露の交戦は日本帝国の安全と東洋永遠の平和とを畫り世界の文明正義人道の爲に起れるものにして毫も宗教の別、人種の同異に關する所なし故に吾儕宗教家は宗派人種の異同を問はず此に相会し各自公正の信念に懇へ相与に奮て此交戦の真相を宇内に表明し以て速に光榮ある平和の克復を見んことを望む』

右決議し之を中外に宣言す』

議事了りて平田盛胤、佐治実然、小崎弘道、村上專精、大内青巒、柴田礼一諸氏の演説あり、奏樂に次でイムブリー氏祝辞を述べ、井深樞之助氏之を通訳せらる。尚ほ尾崎市長、千家東京府知事、瀬沼恪三郎(希臘教会有志者を代表して)、村田叔順諸氏祝辞を述べられ、陛下の万歳を三呼して散会せり。来会者は地方より来る者も頗る多く無慮八百余名、満堂立錫の地なき盛会なりき。僧侶神官基督教徒入り乱れて相座し、我国にては未曾有の集会なり。外国人は宣教師を始め数十名見受けられ、日本の婦人も数十名列席せり。(四六四号・明治三十七年五月十九日)

(四一M37-7) 井深樞之助の演説要旨

◎井深樞之助氏(十五日戦時伝道演説会に於て△演題、基督教と黄色禍) 日本基督教教会戦時伝道部の集中運動として、神田青年会館に其の大演説会が開かれた。昼夜出席の弁士は都合十名であったが、其の演説は孰れも拍手歡呼のうちに迎えられて頗る盛観であった。紙面余白なきため悉く紹介は出来ぬが、唯其の二三を摘載することに仕やう。井深氏の時間切迫のため頗る簡潔であったが、聴くべき節は多かつた。曰く。

欧米各国は日露戦争で我国陸海軍が連戦連勝を制するのを目撃して薄気味悪く感ずるの余り、再び黄色禍を絶叫し始めた。思ふに彼等は日本帝国が老大なる支那帝国を誘掖啓発して之を文明に導き繊弱なる朝鮮を包擁して勢力を整へ、大舉して歐洲各国を侵

略するに至るだらうかと憂慮するのである。支那は排外思想の盛んな国だから無論歐洲文明国を排斥するだらう。けれども我日本帝国は開国進取の国是に基いて進歩する方針を取って居る故、毫も排外的の思想に駆られて歐洲の文明を拒絶したり、若くは歐洲大陸を蚕食したりする考は無い。今の傾向が愈増して黄色禍を恐るる熱度が熾になつたら先づ黄色禍を撃退せんと企つる白人禍が起るだらう。世界の交通機關が益完備の域に達すると同時に地球は漸く縮小されて来る。所で人種や宗教の争も生じて来るし、領土の侵略も生じて来るのである。孰れの争闘も恐るべきであるが就中人種の争ほど怖るべきは無い。殷鑑遠からず印度は人種の紛争のため今に独立が出来ぬではないか。主義と、風俗と、習慣を異にする世界の各国民を打って一国となし、之を調和して同胞主義の下に立たしむる力を有するのは特に基督教ばかりである。而して基督教は亦た之を实地に行ひつつ有るのである。英米二国外國伝道会社が世界に於て伝道に従事せしめつつある伝道者は目下其数十万に達して居るさうだ。以て基督教の平和的事业が如何に盛大で有るかが判る。(四六四号・明治三十七年五月十九日)

(四—M37—8) ミッション・スクールへの批判

宣教師学校の気風

直言生

宣教師学校の気風は男女何れの学校もあまり慕はしきものに非ざるは一般の認むる所なるが如し。固より宣教師学校には甚だしき

悪人をば多く出ださず。他の官公私立学校の中より兎もすれば社會を毒する人物を出だすに比して確かに美くしき所存する。然れども他の学校が大いなる人物、深き人物を出だすことあるに反して、宣教師学校よりおもに小才子のみを出だし軽調なる浮淺なる人物を多く産するは事実なり。

此は何故なるか。余は其の原因の一を教育の方法に帰せざるを得ずと思ふ。宣教師学校は從來溢れ者を取容することも多かりき。是れ教育の不成功の原因の一なるべしと雖も、教育がおもに枝葉に走せて根本の教育を施さぬが失敗の大原因なり。宣教師学校は外國語を教へたり。然も外國語にて顯はされたる基督教を生徒に与へざりき。其の主眼とする所は英語を喋り、短き実用の手紙を書かしむるにあり。故に生徒は十年も学校在りて、商館の番頭、中学校の下級教師、宣教師の通弁たる外、何等の素養ある人物となること能はざるなり。此を以て其の気品甚だ淺劣、少しも高潔美麗なる所なし一たび学校を出づれば忽ち信仰(?)を落し、道徳を破り、不信者よりも甚しきに終る也。

斯く言はば或は言はん。宣教師男女学校にては決して口舌の外國語を教ふるを以て満足せず、宗教々育を施すに熱心なり。毎朝礼拝あり、聖書の講義ありと。余輩之を知らざるに非ず。然れども是等に由て生徒を基督教化せんとするは思はざるの甚だしきものなり。元來人間は自然に教化すべくして強制的にすべきものに非ず。特に精神反撥的なる青年に於て然り。毎朝の礼拝、聖書講義は、彼等に取りては重き日課なり。之を心に受くる念殆どなし。

千万言を費すも其効殆どあるべからず。如かず彼等の精神を無意識の間に高きに導き、之に基督教の精神を注入せんには、斯くの如くせばよしや洗礼を受けぬまでも立派なる人物となりて、教育の目的は達せられたりと言ふべし。学校を出でて社会に入りても其の及ばず感化は甚だ大いなるものあらん。然るに宣教師学校は之を思はざるが故に下品なる人物を作り、表面のみの信者を作り、学校卒業と共に墮落しうる人物のみを養成するなり。試みに宣教師学校高等科あたりの教科書と官立高等学校の其れとを比較し見よ。其の撰択標準の差驚くべきものあり。官立学校及び二三の名

高き私立大学にては教科書も成るべく高尚なるものを選び、生徒をして単に語学に達せしむるのみならず、又西洋の精神に私淑せしめんことを期せり。余は曾て某高等学校の文学会に招かれ、其の材料の撰択の真に高潔なるに感じ、窃に宣教師学校の文学会を見たりし記憶を呼び起して心に恥ぢたることあり。官立学校にては理工科生徒の如きへは特に注意して、精神的の修養となるべき書物を其の教科書の中に入れあり。用意実周到なりと言ふべし。宣教師学校に於ては精神的教育は全く聖書の講義と礼拝とに譲り、生徒をして通弁たるに適する学問のみをなさしむ。此れシツカリしたる人物の出でざる原因なり。彼等の中に実力ある人果して有りやと思はるるも無理ならず。伝道者もかかる養成中より出で来る人物なるが故に、甚だ頼もしからぬが多きなり。余輩は寧ろ漢学生より善き伝道者の出づるを待ち得る理由あり。何となれば漢学者は彼等よりも多く精神的の教育を重んじたればなり。彼等よ

りも思想に富めば也。余輩は男女ミッション学校が、よろしく覚醒して改むる所あらんことを警告す。然らずんば余輩は有志と計りて寧ろ其の破壊を企てざるを得ず。何となれば今のままにてはミッション学校は何の効もなければなり。単に外国語を喋らんとめならば、外国語学校などにて可なり。ミッション学校の今のままならば、此れ基督教徒に恥をかかすものなり。

(四七四号・明治三十七年七月二十八日)

(四一M37—9) 植村正久の神学塾開設計画
神学研究志望者に告ぐ

来る十一月より同志と共に毎週数回基督教神学の講義を開始せんとす今や伝道の切要愈急なり有志の諸君来会あれ

入学御希望の向きは履歴書を添へて至急御申込あるべし
但し婦人のため一科を置くべし

東京麹町区中六番町五十五番地

明治卅七年九月五日

植村正久

(四八〇号・明治三十七年九月八日)

◎神学研究の塾開かれんとす、広告にも見ゆる如く本社の植村正久氏は同志の人々と共に来る十一月より伝道に志ある人又は基督教を研究せんと欲する人々のために、毎週数回基督教神学の講義を開始せらるる善なり。神学校と言ふには至らざるも、通常神学校にて教ゆる課目の大体を三年にして学得せしむる計画なりといふ。其の方法は固より講演もあれど、成るべく学者をして自修せ

しむる方針にて、且つ多少の謝儀を要する由なり。先づ講義せらるるは基督伝宗教哲学及び聖書解釈系統神学の類なるべしと云ふ。

(四八〇号・明治三十七年九月八日)

(四一M37—10) 新学年を迎える明治学院神学部

△明治学院神学部去る二十日より始業せることなるが、新入学生は高等科より神学部に移れるもの三名、別課神学部に入学せるもの四名なりと(四八二号・明治三十七年九月二十二日)

△明治学院神学部は己報の如く二十日より開校せるが教授に當らるる人々はハオルス氏(系統神学) 新たに加はりたるあり其の他は従前のオルトマンズ、井深、秦、フルトン、松永等の諸氏なり。

(四八三号・明治三十七年九月二十九日)

(四一M37—11) 明治学院青年会

◎明治学院青年会通信

『今は恵みの日救の時也此時に當りて、各会員間に伝道の精神振ひ起り、信仰の靈火の燃へ上るに至らん事は我等朝夕の祈りに候。去月十六日は本学期に於ける初回の集会を開き、夏期学校列席代表者及び夏期伝道者の報告を聞き、引続き之が為に慰労会を催し、又新入会員をも歓迎せり。当日同盟本部よりは小松幹事も来會、一場の奨励演説をなされ、先づ近来に於ては祝福せられたる會合にてありき。

余事は扱措き 茲に少しく夏期伝道の事に付き記す所あらんに

『福音新報』明治学院關係記事

抑も此挙たるや本会創立以來初回の企図にして 有り触れたる神学生の夏期伝道とは其性質を異にせるものなり。即ち是れ全く我学生青年会の事業にして、従つて其伝道者の如きも高等科及び普通学部の生徒を以て之に充つ。而して無論其経費の如きも一に會員相互の贖金と、同情ある有志諸君の義捐とに依り 一厘もミツシヨンの補助を仰がず 是は我等が特に快しとする所なり。

扱本会が派遣せる伝道者は高等学部の伊藤春吉、普通学部の村上二郎、同高橋信太郎の二氏にして、其伝道地は名古屋、水戸、横須賀の三所なりき。

有体に云へば其伝道者も悉く是れ無経験なる年少の平信者 それのみならず伝道の日数甚だ僅少なれば素より多くの結果を予望し能はざるは勿論にして、我等は初めより伝道の結果に付きて余り多くを考へざりき。問題は伝道の効果幾何ぞてふ事にはあらで、伝道をなす事其自身は果して善きか悪しきかにありき而して我等は信じぬ。我等の事業が、仮りに其結果に於て失敗する事あるとも、而かも我等の小さき志——伝道の精神其物は遂に之れ失敗すべき性質の者あらずと。斯の如くにして此小さき事業は実行せられぬ。而して今其予望せざりし成績に就て觀るも亦優に成功と称することを得べし。彼等若き伝道者は他に對して応分の働きをなせしと共に。又自己の靈性にみだりに得べからざるの貴き実験を得『喜びて帰り来りぬ』我等の心豈感謝に充たざらんや。因に記す、我等に直接の關係あるにもあらぬ横浜海岸教会信者諸君は此事業のために多大の助力を与へられたり。特に記して感謝の意を

表す。(益富政輔氏報)(四八四号・明治三十七年十月六日)

(四—M37—12) 東京神学社開校

広告

東京神学社開始

来十一月三日午前九時牛込区市ヶ谷薬王寺前町三十二番地市ヶ谷教会に於て開社の式を挙ぐ諸兄弟姉妹の来会を願ふ

東京神学社

(四八七号・明治三十七年十月二十七日)

(四—M37—13) 東京神学社設立の明治学院

神学部への影響

△『基督教世界』の東京通信に明治学院の神学部は植村正久氏東京神学社設立の影響を蒙りて漸次衰頹の運命に陥りつつありと記載されしが、実際は之れに相違し、新入生もありし為生徒の數前日に比して余り減少せず。且つ学科も教師も増し居れり(白金迷惑生)(四九二号・明治三十七年十二月一日)

(四—M37—14) 富永徳磨の教会独立論

日本基督教大会に於ける独立論

富永徳磨

日本基督教大会の大会に於て 教会独立奨励の決議案が否決せられ
てより既に五旬となりぬ余は心ひそかに同案評議の経過が何人か

信用ある人に由て報告せられ、其の精神の説明せらるるならんことを期し居たり。然も未だ其の之ありしを聞かず。思ふに事理あまりに明白にして、之を議論するを漆膠(マツ)しとするものか。將に敗軍の將は戦を談ぜずの意なるか。然れども同案の運命は大いに將來の日本基督教會が進歩しつつあるか、退歩せんとせるかは、同案の運命に由てトせられ、日本基督教會を進歩せしむると退歩せしむるとは、同案に対する會員の態度如何に由て岐るものなり。余は此を以て同案の廢棄をば唯だ一議案の廢棄として冷然看過する能はず、敢て我が賢明なる教會員諸君に訴へ、一考を煩はさんとは欲するなり。

▲日本基督教會の特色 余輩は基督の公同教會を信ず。基督を信ずる者は何れの宗派に屬するも救はるるに於て甲乙あることなしと信ず。然も籍を日本基督教會に列ぬることを以て名譽とせる所以は何ぞや。日本基督教會が信仰に於て自由なる其の一なり。而も徒らに寛漫ならず、基督を信仰するに於て堅く相結合せる其二なり。氣風に於て独特の美はしき所あるも他の理由なるべけれど、第三の理由として指を屈すべきは、即ち日本人が自ら結合し設立したる教會なること是れなり。されば此の自治独立の精神弛廢し、外國人の庇陰の下に生存するを苦痛とせず、形式上にては如何にあるも可なり、要は基督を信するに在りなど言ふに至らば、日本基督教會は其の最大特色を失へるものにて、殆ど彼の外人隸屬の支店的教會と異なるなきに至れるなり。

▲特色の消磨 然るに此の特色は日本基督教會の發達と共に發達

せずして、年を逐て消磨せんとするの形跡なきに非ず。外国ミッシオンに補助を受け居れる教会は、現状に満足して殆ど独立の氣概を抱かず、唯だ行きなりに委すの風あり、甚だしきに至ては一旦奮発して独立せし教会にして、會員の意氣銷沈し、克己献身の精神失はれて、再びミッシヨンの補助を受けしものあり、牧師伝道者は苦勞を厭ひて快樂を追ふの余り、ミッシヨンの事業に身を托して飽食暖衣を喜ばんとするあり。此れ実に憂へて慨すべき傾向に非ずや、心あるの士は須らく熟慮せざるべからず。植村氏の決議案が大会に提出せられしは、此の時弊を救ひ教会を進歩せしめんとする心より出でしものならん、余が同案に賛成者たりしは一に此故なり。

▲植村氏の決議案

一、補助を受ける教会は規則第六條第一款中の「柔弱なる教会にして其の建設の目的を成就すること能はざる」教会中に含有するものとす

一、補助教会の資格は中会に於て審査をなすものとす

一、今後伝道上の必要より補助教会の意義に相当する教会を設立するときは之を區別して日本基督教會某伝道教会と稱す
明治四十年一月に至り猶獨立の運に至らざる教会も此例に準ず

一、議長の名指を以て三名の委員を挙げ伝道教会の権限に關する規定を調査せしめ次回大会に報告せしむること

一、教会が冷淡なる個立任地の弊を去り大小相聯り強弱相扶く

るは基督の精神なり互に人物及資力を通用するの路を開き教会の間に任意聯立の約束を結びて相共に發達し伝道を盛ならしむるは已に信仰の修養且其進歩なりと言はざるべからず大会は三名の委員を選び以上の趣旨に基づきて諸教会に奨励することを決議す

之を言ひ換ゆれば補助を受ける教会と純粹の獨立教会とを明白に區別し、補助教会は日本基督教會に於ては未丁年教会たり仮教会たるものにして未だ一個人並の教会に非ざることを明かにし、補助教会をして現状に安んぜしめず、奮発して一個人並の教会たらんとするの翹望心を盛んならしめ、以て間接に獨立を奨励し、斯くて獨立したる教会は強弱相扶けて獨立の全きを期せんといふの意なり、讀者之を読まば、一点の非難すべき点をも見出さざるべく、斯かる議案が二票の少数にて否決となりしに付て、怪訝措く能はざるならん。然れども讀者よ、物は道理と主義との通りに行かぬものと見え、此の案が提出さるるや、未だ其の性質をも知らず、案文をも読まざる先より、議場は俄に色めきわたり、先づ此の案を本大会の議題たらざらしめんとして苦心慘憺たりし人々あり、されど愈々議題となるや之を質問責めにして押し付さんとせし人々あり、之をも排して案が討議さるるや、全方面より一斉射撃総砲撃を試み、曰く此は教会を潰すものなり、曰く此は中会を掃蕩するものなり、曰く此は憲法に反す、中会の権限を犯す、曰く何、曰く何、甚だしきに至ては、聖書の中に獨立教会と補助教会とを區別せしこと見え、之を區別するは聖書の主義に反すと

唱へ、或は教会建設の目的は単に信徒が集つて礼拝せんためなり、之さへ叶はば建設の目的を達したるものなりなど言ひし人さへ出で、一種滑稽の感を抱かしむるに至りたり。

▲反対説 議論百出して甲は彼を言ひ、乙は是を言ひ、甚だしきは同説の人にして論旨撞着することあり、一人にして前後の主張矛盾することあり、傍聴者の一人は閉会後余に告げて曰く、今日決議案の反対説は殆ど条理の捕ふべきものを見出だすに苦しみぬと。余も其人と同感なり。否提出案賛成者はみな反対説を反駁せんとするも、殆ど捕ふべき点を見出し得ず、第三説会の時の如き事理すでに明々白々にして、もはや弁論を要するの余地なく、唯だ反対者が同じことを繰り返すに任したりしに、不思議なるかな逐条審議に於て全部可決となりし議案が、此時に於て俄然顛覆して否決の運に遭はんとは。国会県の議事に慣れたる某議員が、此れ実に前代未聞の珍事にして、大会議員知性の信用問題起るべきことなりと叫びしは、尤もなる次第なりとす、若し言葉数を多くすれば勝つ者ならば余も何かと喋々すべかりしなり。然れど余は唯だ議論が大会にて勝利を占めんとは期せざりしなり

然れども其等混乱せる反対説を大別せば、兎に角三種となるべし一は教会に独立を奨励するは誤れりと唱へ、非独立説とでも称すべき者、二は此の決議案は憲法に違反すと唱ふる説、三は教会の現状を打破するが故に悪しと言ふ利害説是れ也。余は今主張者諸君の名を挙ぐるの自由を与へられんことを乞ふ。思ふに諸君も責任を負ふて議論し玉ひしなるべし。

▲非独立奨励説は松永氏の熱心猛烈に主張せし所に於て其要に曰く、教会は自然の發達に任すべし。徒らに独立を奨励するは不可なり。先年独立を奨励せし結果、幾多無理を生じ疲弊せる教会を出だしたり。且つ夫れ今日の大教会はみな曾てミッシヨンに補助せられし者、然るに自教会が先に發達したるを幸ひとし、おくれたる教会に自立せよと強ふるは甚だしく無理なり、宜しく補助教会が補助を受けつつ發達するを待つべきなりと。此の議論を若しも監督教会の總會か美以教会の年會にて聞きしならば、何人も怪しとせざるべし。然れども之を我日本基督教の大会に於て聞くに至りては、実に案外千万にして、余は大会の名譽のため、且つは青年教師たる發言者のために、甚だしく之を悲み惜まざるを得ず。植村案は決して薄弱なる教会に向て補助を絶てと強ふるものに非ず。唯だ補助教会をして自教会未丁年たることを感じ、一人前とならんとの慾望を盛んならしめんとするにあり。然も松永氏は斯くの如く独立を奨励することが既に悪しく、微弱なる独立教会を菌生せしむればなりと言へり。独立奨励のため多少は悲しむべき結果も出で来らん、此れ如何なる善事にても免れ難き所なり、然れども之をミッシヨン依頼の氣風を助長するに由て生ずる結果と比して其弊何れか甚だしきぞ。況んや独立を奨励せられざる教会にして善き進歩をなすもの實際に之あらざるをや。往年独立せし教会にして一二の或は困憊せるものあらん、然れども当時独立せざりしならば其の教会は大会となり得しと思ふか。断じて然らざるべし。多少は無理をしても、牧師會員が克己献身して独

立してこそ美はしけれ。他人の脛をば噛むことを已め、小さくとも手一杯のことをなし、飽食暖衣は出来ずとも、貧乏世帯なりに独立するが、個人には当然のことなるに、教会のみは基督の教会なるが故にとて、平氣平左に他人の御世話になり居てよろしきや。日本基督教会も會員一万五千人、一年の集金五万余円、之を統一し按配したらんには、日本人のみにて十分運轉するの能力あるべきなり、植村案の最後の一項は蓋し此の理由より出づ。独立大いに奨励すべからずや、統一大いに計るべからずや。小さき教会は其の小さき力限りにて生活し、次第に發達するが自然なり。自力は小さきに他人の袖の下より補助を受け、妄りに玄關を張り辺幅を飾ること不自然なれ。若し伝道の見込十分なる地方等にて、大いに運動する必要もあらば、一時補助教会となり独立の出来るやう奮発する又可ならずや。植村案は之を禁するの精神なきこと一説明瞭ならん。

▲決議案を以て日本基督教会の憲法に違反すと唱へしは井深氏なり。曰く憲法によれば各個の教会の建設を許否する権を有せるは中会なり、然るに今大会が補助教会を以て建設の目的を達する能はざる教会と看做し、年限を限りて之を伝道教会と称するものとし、憲法規定の教会としての權利を失はしむるは違法なりと。某法律家議員は此の議論を称して、弁護士よりも牽強的議論なりと云へり。読者も一読其の理否を判別せらるるならん。

教会が中会を相手取りて大会に訴訟するときには、大会は其の一個教会に付ての処置を正当ならしむべく中会に訓示し、中会は

日本基督教会に在る限り之に従ふの道德的義務あるに非ずや。規則第二十條を見よ大会が擅に或る教会の設立を許可し若くは取り消すならば其は中会の権限を侵し、憲法に反する事ならんも、日本基督教会の大会が我教会の一個教会の設立資格を定め、諸中会教会をして、此の決議に依拠して、教会を設立し若くは解散せしむるが何の違法なるや。憲法第十三條によれば大会は憲法規則及信仰の告白を解釈するの権あり。解釈を与ふるは処置の扱ふべき方針を示すもの也。故に補助を受くる教会は之を設立の目的を達せざる教会と認むと決議せば、唯それだけの決議にても中会は部内諸教会を調査し、独立教会と補助教会とを區別し、目的を達せざる教会をば其れ／＼処分すべき也。決議案は此の決議に由て中会が必然取るべき手続をまで明示したるものにして、少しも憲法と抵触せる所なきなり。若し大会は此種の決議をなす能はずとせば抑も何をなす所なるか。毎年九州の隅や北海道の端より遙々出て行きて、蛙鳴蟬噪ただ報告を聞き、伝道局予算案に盲判を押して帰るのみなるか。余は憲法の大会に関する規定は今少しく具備せりと信ず。若し何所までも中会本位主義を以て成り立ち、大会は何等の統治権訓示権を有せざるものならば、是れ今日の要求に適せざる時勢おくれの制度にして、余輩は大いに憲法起草者の淺見を痛惜し、急速に改正を望まざるを得ず。

▲利害説はピータルス氏有馬純清氏の唱へしものにして、其の聲小さかりし割に有力にして、植村案の否決となりしも、実は議員の多数が此の説に動かされたるに由るものの如し。曰く決議案通

過せば、一個の獨立教会もなき宮城、鎮西、山陽の三中会は消滅せざるべからず。曰く補助教会は中会に代員を出だす能はざるやうなりて甚だ哀れむべしと。余輩も其等の中会及教会に對しては氣の毒に堪へず。然れども決議案は明治四十年を以て有効となるものなれば、其時まで獨立し得る教会を造り、已むなくば鎮西と山陽位は合併すべく、宮城と北海道とは再合してもよろしく、尚已むなくば鎮西山陽は浪華と合併し、一年一度の中会の外、便宜部会やうのものを開くも可ならずや、若し決議案の精神を賛成せば、之が実行の良法は如何程もあるべし。而してたとひ中会にして解散となるも、伝道上の實際に何の異れる様を生ずるや。教会は従來の通りにして差支へなし。唯だ中会は代員を出だすことの出來ざる教会の出來るのみ。然れども此は自己の實力が其れだけなるに由ることなれば、權利を殺がれたるにあらで、間違つて有せしものを返却するのみ。其位のもの損しても日本基督教教会全体の發達幸福のためには喜ぶべきが基督信徒の抱くべき精神なりと思ふ。余は決議案を賛成する者が獨立教会の牧師長老のみならず、外國ミッション若くは伝道局の補助せる教会の諸君ありしを見て、其の公正に感服し、大会議員たるものの挙止皆まさに斯くあるべき善なりと思ひたり。否初めに於ては皆かくあらんと預期したりしなり。

以上本年の大会に於ける獨立奨励決議案の經過を報告し、之を我教会の會員諸君に訴へ、教会より外資依頼の實を一日も早く艾除し、未開野蠻の異教國民と同じ様に外人より待遇せられ、我も

又其の如き根性を抱けることの甚だ不可なるを明かにし、飽くまで獨立のために尽心尽力せられんことを諸君に乞ふものなり。之がためには余は日本基督教會員が一人残らず協心戮力せざるべからずと思ふ。今や實に其時なり。今年の大会に決議案に反對せられし諸君と雖も、余は積年の諸君の言行に徴して決して此の案の精神に反對せしものとは思ふ能はず。何等かの誤解もありしなるべし。余は今後の大会に於て同一精神の提出案現はれんとき、大会議員の歩調全然一致して、喜ばしき結果を見るべきを疑はず。

(四九三號・明治三十七年十二月八日)

(四—M 37—15) 富永論文への井深の反論

富永氏に答ふ

井深梶之助

福音新報記者足下 本月八日発行の福音新報に掲載せられたる富永徳磨氏の日本基督教會大会に於ける獨立論中に左の一節有之候決議案を以て日本基督教會の憲法に違反すと唱へたるは井深氏なり 曰く憲法に依れば各個の教會の建設を許否するの權を有するは中会なり、然るに今大会が補助教會を以て建設の目的を達する能はざる教會と看做し年限を限りて之を伝道教會と稱するものとし憲法規定の教會としての權利を失はしむるは違法なりと、某法律家會員は此の議論を稱して弁護士よりも牽強的議論なりと云へり云々(以下略之)

富永氏の議論を熟読するに同氏は小生の意見を了解せられざる様

に存候、少くとも福音新報の読者にして唯同氏の議論のみを読む人は同問題に対する小生の意見を大に誤解するの恐ありと存候に付貴重なる貴社新報の余白に於て少しく答弁するの栄を賜はらば幸甚に候。前大会に提出せられたる植村氏の決議案に關してはその利害問題と憲法問題との二方面あり、之を判然と區別する事最も必要と存候、その利害得失に就ても卑見有之候得共利害の問題は姑く措き此には單にその憲法問題に就てのみ答弁可致候

乍然直接にその問題を論ずる前に一個の事実上の誤謬に付て富永氏及び一般読者の注意を促し度点有之候、即ち富永氏がその論文中に植村氏の決議案として掲げられしは同氏の決議案には無之最後の一項を除く外は全く特別委員に依て提出せられたる修正案たる一事に有之候、植村氏の決議案は左の如くに候

一、補助を受ける教会は規則第六條第一款に抛り当然その教会たる資格を失ふものとす。

但此決議は明治四十年一月より有効とす。

一、中会は部内各教会の現状を調査し前條決議の趣旨を實行することを務むべし

一、今後伝道上の必要より補助教会の意義に當る教会を設立する時は之を區別して日本基督教会(某地)伝道教会と称す明治四十年に至り尚獨立の運びに至らざる教会も此例に準ず議長は伝道教会たるに必要な資格及び権限を調査して來年の大会に報告せしむる為に三名の委員を挙げべし。

(最後の一項は第一項の憲法問題には直接の關係なし故に之

を略す)

右は明白なる事実にして失礼ながら全く富永氏の誤解若くは覺違かと存候、但或は植村氏の決議案も委員の修正案も大同小異なるが故に後者を掲げたのみと曰はるるやも不知候得共憲法規定上の事は一言一句にても議論の相別るる事有之候故此の如き事は可成正確に致度者に候、若しも原案と修正案と全然同様のものならば特に修正を加ふるの必要は無之筈に候、加之のみならず該問題に關する大会議場の議論の前半は委員の修正案の未だ出ざる前の事ゆゑ此に原案を掲ぐるの必要ありと存候

是より植村氏の原案及び特別委員の修正案に対する小生の意見を簡略に開陳可致候

一、植村氏の原案は(第一)補助を受ける教会は規則第六條第一款に依り当然その資格を失ふものとす但此決議は明治四十年一月より有効とすといふにあり、

然して規則第一條第一款は如左

中会の判断に於て一箇の教会柔弱にして其建設の目的を成就することを能はざるか若くは中会に代員を出すの資格を失するか若くは中会の訓戒を用はずキリストの聖名を濫す所の主義又は所為を固執する時は中会はその教会を教会籍より除名しその會員は未だ教会に組織せられざる信徒の集會として登記すべし。之と共に記録すべきは憲法第十二條中の

中会は其部内にある凡ての小会教会教師伝道者及び未だ教会に組織せられざる信徒の集會の事を掌る所とす是故に中会は教会

の建設転籍合併加入退籍解散（中略）の事を掌。

といふ明文なり、之に由て各個教会の建設及び解散は中会の権内に属すること明白なり。然るに此決議案は大会の決議に依つて明治四十年一月以後補助を受ける教会即ち直接間接を問はず他の伝道機関より補助を受くる教会（前の大会に於て採用せられたる定義に依る）をして悉皆その教会たるの資格を失はしめんと欲する者なり、然らば憲法第何条に依て大会は斯くの如き処分を行はんとするか、是れ即ち憲法論の由て起る所以なり、

憲法第十三条を見るに
大会は（中略）憲法規則及び信仰の告白を解釈し各中会及び諸教会中に秩序を維持す。

との明文あり、其他には該問題に直接關係ある明文を見ず、然らば規則の解釈が若くは秩序の維持か兩者その一に拠らざるべからず、之を規則の解釈とせんか「規則の解釈としては補助を受ける教会は明治四十年一月より当然教会の資格を失ふべし」とは奇怪なる解釈に非ずや、若しも規則の改正ならば何年何月より有効とすと規定するの必要あらん、然れども規則文の当然の意義ならばその意義は最初より存したる筈なり、況んや現在に於てをや、然るに二ヶ年以上を経過せざれば此解釈は効力を有せずとは甚だ奇怪なる解釈法に非ずや要するに此決議案は規則の解釈には非ずして補助を受ける教会の処分法なり、即ち中会の決議を待ずして大会の決議に由て既設教会の資格を失はしめんとする者なり。是れ即ち小生が該決議案が憲法に抵触し中会の権利を侵害するの嫌ありと

主張する所以なり。

然れども或は曰はん故に第二項に
中会は部内各教会の現状を調査し前条決議の趣旨を実行するを
務むべし。

とあるに非ずやと、然らば問はん。第一項の決議は中会の決議を待て而して後に効力を有するものなるか、若しも其決議に由て当然その資格を失ふものならば其上に中会の処置は不必要なる訳にあらずや、若しも中会の決議を待て而して後に始めて効力を生ずるものならば其一事に依つても此決議案は中会の権内に立入たる事自ら明白ならん故に此決議は規則の解釈としては不都合なりとす、然らば之を規則の解釈とせず、教会の秩序を維持せんが為めに必要な処分法と為さんか然らば宜しく規則第六条第一款を改正するか又はその他の方法を執るべきに非ずや 故に孰れにしても小生は此案を賛成すること能はざるなり。

二、特別委員は上記の如き不都合を發明せるにや左の如く之を修正したり、
一、補助を受くる教会は規則第六条第一款中の「柔弱なる教会にして其建設の目的を成就すること能はざる」教会中に含有するものとす。

右修正案は其形式に於ては明白に規則の解釈となれり、故に其形式に於ては憲法に抵触する所あるを見ず、唯此に考察すべきは此解釈が果して其当を得るや否や即ち直接間接を問はず他の伝道機関より補助を受ける教会は柔弱にして建設の目的を成就すること能

はざるものと認むるは我が教会の憲法規則の規定なるや否やとの問題なり、然して此に一の注意を要する点あり、即ち規則條款の当然の意義と将来に対する吾人の希望若くは方針との區別之れなり。若しも将来に於ては教会は必ず自然独立するを要すとの趣意ならば規則の解釈にはあらずして其追加又は改正たるや論を俟たず、若しも規則を改正せんと欲せば既定の方法に依つて可也強ひて規則の解釈として新たなる条件を追加するは立憲的の所為に非ず、小生を以て之を見れば此修正案は其形に於ては解釈なれども其実に於ては改正なり、即ち教会の資格中に自給と云ふ一の新条件を加へんと欲するものなり（余は今その事の可否得失を論ぜず）何となれば現行憲法規則の確定せられたる當時に於ても未だ自給せざる教会あり又其後に於ても中会は未だ自給する能はざる教会を建設したる例一にして足らざればなり、若しも自給せざる教会は憲法上当然教会たるの資格なきものなりとせば中会は今日まで憲法を犯したりと云はざるべからず、若しも中会が憲法を犯したりとせば大会は之を懲戒すべかりし筈に非ずや、然るに今日に至るまで自給即ち財政上の独立は憲法上教会建設に必要欠くべからざる条件として認められざる確証に非ずや。

然るに今俄かに教会建設の資格中に新条件を追加し而して既設の教会中其の新条件を具へざる所の者は単に其丈の理由を以て直ちに教会たるの資格を失はしむるは新に法律を設けて其効力を既往に溯らしむるの不法に陥る者に非ずや、察するに原案提出者が此教会は明治四十年一月より有効とするの但書を加へたるは即ち此

の如き不法を避けんが為なるべし、且夫れ此の定義は實際に於て穩当なるや否やを考察するの必要あり、例せば此に甲乙の二教会あり、甲は会員数十名を有し會堂を有し且専任の牧師を有して之に若干円の謝金を払へど他より多少の補助を受けるもの、乙は会員若干名を有すれども専任の牧師を有せず唯日曜日毎に他より説教者を依頼して礼拝を為すものと仮定せよ、此の如き場合に於て甲教会は単に他より多少の補助を受けるの故を以て教会の資格を失し、乙教会は他より単に補助を受ざるの故を以て教会の資格を有すと為さば如何、之を穩当公平なる定義と認むべきか余は然く之を認むる能はざるなり、此の如きは実地の問題にして宜しく其事情を審査したる上ならでは確定し難き事なり、固より単に自給独立の教会と補助を受ける教会と孰れか優れりやと云はば何人も前者を以て優れりと做ざる者なからん、然れども補助にも次第あり又自給にも次第あるなり、自給とは単に他より補助を受けざるの意味なるか將た責任の牧師又は伝道者を有して之に相當の謝金を払ひ且その他教会の義務を尽すの資力を有する者のみを云ふか一方に於て補助教会の定義を下すの必要あると同時に自給教会の定義を下すの必要あり、単に消極的の意義に於ては自給独立も健全なる状態と認め難からん、思ふに人の身体の強弱の別ある如く教会にも強弱の別なき能はず、然して積極的の意義に於ける自給独立の教会その強壯なる者にして補助を受ける教会は比較的柔弱なる者たるや論を俟たず、然れども健康を失したる人間にても生命ある以上は人間たるを失はざるが如く強壯ならざる教会にても尚教会たる

の資格を具有する場合なきにあらざるべし、要するに此の如きは程度の問題なり、故に我が憲法は之を判断するの権を中会に委任したり、然るに中会の決議を待たず規則解釈の結果として直ちに補助を受くる教会の資格を奪ふは明かに我が憲法の精神に違反するものと余は信ずるなり、若しも憲法規則に不備の点あらば宜しく之を改正すべし憲法規則不備なりと言ひて之を度外視して可ならんや。

修正案第二項に補助教会の資格は中会に於て審査を為すものとあり、補助教会の定義は既に大会に於て与へられたれば其点に於ては最早疑なき善なり、然らば中会に於て補助教会の資格を審査すとは如何なる事を指すや、若しも其部内に於て補助を受けつつある教会が柔弱にして其建設の目的を成就する能はざるや否やを審査するの意義ならば其れは既に規則第六条に依つて中会が当然有する権利にして今更大会の決議を要せず。

大略如上の理由を以て余は其目的には全然同意しながら發議者の原案にも特別委員会(特別委員会)の修正案にも賛成すること能はざるを遺憾とす然らば余の意見は如何とならば余が大会に提出したる修正案を以て之に答ふべし、其案如左

修正案

各教会の自給独立は我が日本基督教会建設以来の主義とする所、今大会は其趣旨を貫徹せんが為め各中会に向つて左の方針を訓示する事を決議す。

一、各中会は自今其部内に於て自給独立する資力なき信徒の團

体を教会に組織せざる事、

二、各中会は其部内にある教会の状態を調査して未だ自給独立せざる者は自今三ヶ年即ち明治四十年九月を期して自給独立せしむるの方法を講ずる事、

然して其時期に至るも尚自給独立するの見込なき者は即ち柔弱にして建設を達する能はざる者として解散の手續を為す事、

何人にてても虚心担懐以て此修正案を熟読せられ候はば小生の意見は自ら明瞭ならんと信じ候富永氏が小生の意見を批難せらるる時に一言も小生の修正案に就て論ぜられざりしは遺憾に存候、若しも「読者をして一読其理否を判別せしめん」との趣意ならば少くも小生の立場を表明する所の修正案を掲げらるるは当然の事かと存候、要するに小生は其目的に於て原案と一致し其方法に就て意見を異にする者に候、終に臨み尚一言申度事有之候、此問題に就ては今後猶幾多の議論可有之と存候得共之を議論する者は相互に徳義を重じ公私共に言語を慎みて、徒らに人の感情を激昂せしめ或は人身攻撃に涉る如き言論を避け、虚心担懐、事の是非得失を研究し以て我が教会の進歩發達を謀り度き者に御座候敬具。(四九五号・明治三十七年十二月二十二日)

(四—M37—16) 明治学院生の軍人遺族救済

明治学院生徒出征軍人遺族救済に尽力す。

明治学院普通部生徒大津佐中 堀洋三 尾崎安次郎 峰村英三郎の四氏発起となり、慈善会なるものを企てくりすますの贈物を賤

して之を出征軍人遺族救済事業に充てん目的にて大いに尽力せられ、神学生益富政輔氏また之を助力せられ寄附者統々起り外套衣類を始め外国宣教師の家族よりは頗る高価の物品を多く寄附せられ、校外の有志者をも説きて大いに成功せり。何れ之を救世軍に托するか或は前記四氏の手にて遺族に分与するならん。(感嘆生)

(四九六号・明治三十七年十二月二十九日)

明治三十八年

(四—M 38—1) 井深梶之助渡仏送別会

◎井深梶之助氏送別会、来月仏国に赴かるる井深氏の行を送らんと爲め明治学院同窓生及び有志者の催しにて去る十八日上野精養軒に於て祖道の宴を開けり。来会者は五十名、席上明治学院卒業生を代表して池亨吉、石川林四郎二氏、伝道者を代表して貴山幸次郎氏、明治学院教師を代表して宇野光三郎氏の演説あり、井深氏の答辞ありたり。同氏は巴里に開かるる青年会記念会に臨まれし後、和蘭に催さるる学生青年会大会にも出席せらるる由なるが、同会はユウトレヒトの近傍サイスに開かるることとて、宛かも故フルベッキ氏の生地に近いければ之を訪ふて昔を偲ばるる積りなりといふ。(五〇四号・明治三十八年二月二十三日)

(四—M 38—2) 明治学院生徒募集広告

◎生徒募集

『福音新報』明治学院関係記事

高等学部 専門学校令に依る専門
校一年三十名、二年級以上数名
普通学部 一年八十名(高等小学二年
修了無試験)二年以上数名
補習科 来る四月新た
に設くる筈
高等学部 徴兵猶予 普通
普通学部 学部 高等学校専門学校 学校に同じ
入学試験 四月七、八日願書は五日迄
規則は郵券二銭を要す

芝区白金 文部省 明治学院
(五〇七号・明治三十八年三月十六日)

(四—M 38—3) 東山学院生徒募集広告

◎生徒募集広告 入学試験
四月十一日

第一年級五十名其他各級へ補欠入学を許す
◎志願者は試験前日迄に願書を差出すべし
◎入学資格、高等小学第三学年修業以上の者は無試験にて入学を許す其他は総て試験を要す。本学院は地勢高燥にして眺望佳絶なる東山手九番に位置す。程度、中学程度にして英語の発達、徳性の涵養を以て特色とす。教師は米国人二名邦人数名にして英語は第一年級の初歩より米国人担当し懇切に教授す。寄宿舎は寒暑共凌ぎ易く且つ勉学衛生に好適の位置にあり寄宿料凡四円二十銭◎入学志願者は希望により九州各地に於て試験其他入学の手続をなす便法あり◎其他詳細の事項は本院幹事宛承合あれ

(五〇八号・明治三十八年三月二十三日)

(四—M38—4) 明治学院卒業式

◎明治学院卒業式 明治学院は去ぬる二十五日午後二時より第二十回の卒業式を挙げたり。式場は新築の礼拝堂にして、来会者満堂なりき。幹事熊野雄七氏の司会にて、石原保太郎氏聖書を朗読し、来遊中なる博士ハットン氏の祈祷あり、次で高等学部卒業生

古川笈夫氏の「文明の潮流」と題する英語演説、神学部卒業生大野直周氏の「オーガスチンの神学」と題する邦語演説あり、終て褒状、賞品、及び卒業証書の授与ありて後、総理井深氏不在の爲め熊野氏代理として卒業生に対する告辞を述べ、卒業生総代、宮田文一(普通部)浅野一郎(高等部)二氏の答辞あり、次でダッチ、リフォームト教会外国伝道会社書記コップ博士、及び加藤高明氏の演説(梗概は別欄にあり)あり、小川義綏氏の祝詞を以て式を終り神学校の一室にて校友の爲めに饗応せられ、ハットン氏、永井直治氏其の他の数名の卓上演説ありたり。卒業生は高等学部四名、普通学部二十九名、神学部一名、神学部別科一名なり。(五〇九号・明治三十八年三月三十日)

(四—M38—5) 加藤高明卒業式における演説要旨

◎加藤高明氏(去る二十五日明治学院卒業式に於て) 雄弁家と言ふ可らざれど事理明白なる演説にして観察点も趣味多く聞かれ

た。其の要に曰く。

『今回の戦争に就ては日本は飽まで平和主義を執り余りに温和に過ぎると或る人々よりは評せられた位であった。之に反して露国は日本を輕蔑して無理を言ひ通し遂に今日に至ったことである。而して其の結果は実に連戦連勝で、大なる露国將に何するものぞと言はるるに至った。特に奉天会戦の如きは露軍の大敗世界に比類なき有様、外国新聞紙は之にて日本が初めて世界大国の仲間に入ったと言ふ。』

『我国は四十年間も昼夜苦心して文明の進歩を計った。政治にも學術にも工業にも。然るに数年前余が英國に在りし頃までは日本通の外人すら猶ほ不思議な人民と評する位であった。併し今日では全く其の趣きを異にし寧ろ日本の真価を見過ぎはせぬかと怪まるる程となった。外国人の見過ぎるのはまだしも、日本人自らが其の弊に陥りはせぬか。此は大いに考へねばならぬと思ふ。』

『日本人は欧米人に比し体力の点にも身長矮小にして腕力また弱しと思はれたが、今回の戦争にて団体に於ては決して其の体力も少しも彼に劣らぬことを覚った。氣力の点より見るも決して露国人に劣らぬ、其の学問を応用する力は寧ろ日本人が勝つて居る。兵器の如き彼は我よりも遙かに精銳であるに拘らず之を応用する力に乏しい。道徳上に於ても君に尽し君に報ゆる精神は世界に比類少きまでに發揮されて居る。』

『然るに日本の發達して居る所は団体的であつて個人的の点は余程劣つて居るやうである。特に道徳に就て考ふるも、従来の教へ

多く極端なる非常の道德であつて、平時の中庸の道德に至つては教ゆる点が少ないではないか西洋文明の輸入と共に凡ての制度破壊せられ之と同時に道德も在来のものでは間に合はずになつたが、さりとて欧米のままを輸入することは出来ぬ。家族制にしても男女交際にしても然うである。故に今日は未だ十分我が社会に適當な道德が出来上つて居るとは言へぬ。

『第一外国人の道德に就て学ぶべきは、個人と個人の信用である、日本人も昔は余程信用が厚つたものであるが、近頃は然うでない。外国人は往々日本人の商業道德が卑いと評する。併し此等は多く横浜神戸辺のサイ取り的商人を見ての評で、日本橋辺の商人に取引して後のことではなからう。併し日本ほど証書を八釜敷云ふ所はない。曾て日清戦争の終つた頃余は全權公使として八二五万磅の償金を英国倫敦で支那公使より受取つたことがある。此の大金を英国銀行に預けるに当り、預り証を与へぬ。其の理由を聞くに未だ斯るもの出したることなし、若し銀行の帳簿を信用せぬならば、一片の紙に何うして信用が置けようかとのことであつた。之には一言の答へもなかつた。第二は公共心である。イザ戦争と云ふ場合には君の馬前に討死をする。生命を國の爲めに棄てて願みぬ。併し国会議員になるには名誉や利益の爲めにするものが少なくない。此点に於て英国の國民は甚だ其の趣きが異なる。地方の役人などは殆んど義務で之を遣つて居る。第三は職責を重んずる事である。日本人には *pony* を尽きぬ者が無いことは無い。少数かも知れぬが、其の少数者が到る所に多いには困つたものだ。

第四は礼儀である。日本は礼儀國と外国人の目には映じて居る。併し此は日本人の他所行きの有様を見たのである。汽車や電車中の無作法なことは驚くべきではないか。日本の礼儀は形式が多くて精神が少くない。西洋のには精神から来たものが多い。即ち他人の心持を悪くせぬやうにとの精神から礼儀が起つて居る。(五〇九号・明治三十八年三月三十日)

(四—M 38—6) ヘボン博士近況と叙勳

ヘボン博士

ヘボン博士は北米ニュー、ジョルジイ州のイイスト、オレンジに静養せられつつあり。今は同所ブリック長老教会の長老として後進の規範たるの外別に従事すべき勤務なし。然れども去月十三日が博士の第九十誕辰なりしと聞かば何人も之を怪むことならん。此の日長老教会の外国伝道局は委員を派遣して之に頌徳の賀辞を呈し、隣友及び其の所属教会の会員は牧師リッグス博士を先導として博士の居宅に來集し、敬愛の意を表せり。

同時に日本政府は之に勲三等旭日章を贈与せり。ヘボン博士の功勞は福音新報紙上に屢々記載せしことあり。且つ何とかして其の勲功を表示するの至当なるを論じたるも読者の記憶せらるる所ならん。今にして此の事あるは余輩の頗る満足する所、博士の友人の相共に祝する所なるべし。温和謙恭の人なるヘボン博士の光榮は旭日章に由り始めて輝くものに非ずと雖も、満九十歳を過ぎたる今日、日本に於ける其の精神的戦争の勞苦が斯の如く記憶せら

るを見るは、亦た其の老後を慰むる一つなりと謂はざる可らず。○博士へボン翁の叙勲
 へボン博士は日本開國の後ち幾程もなく伝道のため来朝して神奈川の寺院に仮住ひし、伝道者、医師、日本語研究の開拓者、聖書の翻訳者として数十年間我國のために静かに尽力したり。医学未だ開けず、一の病院らしきもの無かりし時代に、博士は横浜海岸裏通り三十九番館に診察所を設けて汎く治療を施し、傍ら多くの醫生を薰陶せり。博士が辛苦して編纂せる字引は宣教師の日本語を學ぶに欠く可らざる助けを与へたり。所謂るへボン辞書は日本の文明に多大の功績あるなり。創業として驚くべき成功と認むべき日本訳聖書の完成は亦た博士に光榮を添ふる一大事業にてありき。是等の事業より以上に最も深く記憶すべきは其の温恭謙遜なる風采品性と、堅忍不拔勉めて怠らず、心を熱くして主に事へたる正直篤信の宗教なり。

へボン夫人は老衰の結果殆んど人事を弁せずと聞く。之れ余輩の切に同情を寄する所なり。老博士は尚ほ神の恩寵己れに足るを實驗しつつ喜びの中に寂しき生涯を送らる。在米國の日本牧師某が先日老博士を訪問せりとて其顛末を社友のもとに書き送れる一節に曰く、へボン博士は常に日本を懐ふこと深し。日本の近事、伝道の状態等に心を用ひ其の新たなる事実と接触を断たざるもの如し。此は常に福音新報を読むに由ると。

余輩は日本の恩人なるへボン博士の健康にして其の余命愈神の平和に満され、老後の祝福愈裕かならんことを祈る。(五一三三号・明治三十八年四月二十七日)

○博士へボン翁の叙勲
 横濱開港後間もなく(四十六年前)我邦に來り、伝道の傍、聖書を翻訳し、醫術を開拓し英文学を教へ、和英字彙を編纂し、泰西文明を輸入するに与つて力あるのみならず、兼ねて日本の親友として我邦の文明をも世界に紹介せる米國人博士ジェームス、カルチス、へボン氏は去る三月十三日を以て九十歳の高齡に達し、其の祝宴を紐育府イイスト、オレンジなる僑居に於て催したり。折り節華盛頓駐劄の我が高平米國公使より勲三等に叙せられ旭日章を賜はる旨の電報達したりといふ。(五一三三号・明治三十八年四月二十七日)

(四一M38—7) 柏井園の帰國
 △柏井園氏 二年間米國紐育ユニオン神学校に留学されたる同氏は去る二十四日横濱着の加奈川丸にて無事帰朝せられたり。(五一三三号・明治三十八年四月二十七日)

(四一M38—8) ジェームス・バラの帰米
 △ゼエムス・バラ氏 は休養の爲め六月三日横濱出港帰米せられたり。(五一九号・明治三十八年六月八日)

(四一M38—9) 松永文雄・有馬純清消息
 △松永文雄氏と有馬純清氏、松永氏は此程日本橋教会の牧師たるを辞し専ら明治学院神学部教授の任に当られ、有馬氏日本橋教会

を辞し専ら明治学院神学部教授の任に当られ、有馬氏日本橋教会

を兼牧せらるることとなりたり。(五三三三号・明治三十八年九月十四日)

(四—M38—10) 教会破壊と慰問御礼広告

△教会破壊と福音同盟会、福音同盟会は去る十一日臨時評議員を開き今回暴徒の爲め被害せる市内諸教会に向ひ権利の有無に拘らず損害賠償などは要求せざる様通告することを決議せり。(五三三三号・明治三十八年九月十四日)

廣告

今回の遭難に就ては諸教会及諸兄弟より懇篤なる御慰問を辱うし難有奉謝候一々手紙を以て御礼可申上筈に候得共混雜の際乍略儀紙上御礼申上候也

九月

浅草美以教会

東京府北豊島郡日暮里元金杉一三六番地

三浦泰一郎

当分の内教会への用事も右三浦方へ御通報願上候

(五三三五号・明治三十八年九月二十八日)

明治三十九年

(四—M39—1) 明治学院神学部近況

○明治学院神学部近況 ハオルス教授教授辞任以来、井深総理も不在に際したるを以て、本科に於ける組織神学は止むなく休課し

『福音新報』明治学院関係記事

来りたるが近々総理も帰朝せらるることなれば早速後任者を招聘し、二年級生の後期同課目を三年級に於て修めしめ、一年級生には同じく二年級及三年級に於て修学せしめ休課の補ひを為す都合となり居れり。客月新学期始めに当りて入学を願ひ出でたるもの五名に及べるも、当部に於ては九月の学年始めに非らざれば入学を許可せざる規定を以て右は講聴生として単に授業に列するを許せり、之等の新入生を加へ現下の学生総員は十九名なり。本学期に於ける課外講演は姉崎文学博士に依頼する筈にて目下其の委員に於て交渉中なるが多分は承諾せらるべく、其の他井深総理の帰朝を待ちて各方面に一層の改良を加ふる計画なり。尚ほ松永教授は高等部、普通部生徒有志の爲め寄宿舎の一部に於て約翰第一書を講ぜらるることなれり。(五五三三三号・明治三十九年二月一日)

(四—M39—2) 井深の歓迎会と帰国談話

○井深博士歓迎会 市内日本基督教教会教職諸氏二十名、去る十九日神田青年会館に井深梶之助氏の帰朝を歓迎せり、同席上の談話は来週の福音新報によりて紹介せらるべし。(五五六六号・明治三十九年二月二十二日)

井深梶之助氏欧洲漫遊談

左は昨年仏国巴里万国青年大会に日本青年会を代表し、近頃帰国せる井深梶之助氏の日本基督教役者の歓迎会席上に於て為せる談話の要領なり (社末生)

故フルベッキ博士の故郷なる和蘭のサイストに於て開かれたる大会に蒞み、それより独逸のストットガートに至れり。ストットガートは独逸に於ても宗教の勢力甚だ盛なる処にて日本人の独逸に於て信仰を起すは稀なる由なれども、此地に於ては基督を信するに至る人あり、其青年会は独逸第一と称せられ其会館の壮大美麗なる事と其事務の敏活にして整頓せる事遙に伯林の青年会に優れるを見る。予等は同市の人グングルト氏の家客となり好遇接待せられたり。(此人遠からず日本に來り青年の間に力を尽すべし。彼は日本語を勉強しつつあり)予は本多君と共に青年會館に於て演説せり。

ストットガートよりハイデルベルグに至り、瑞西に入り、パースルに至り、それより独逸のミューニックに至れり。此地にてデビス博士の子息夫婦に會す。ミューニックは有名なる麦酒製造地にして医学の盛なる処なり。日本人三四名に會せり。予は大学の青年會に於て演説を依頼せられたるが、集るもの日本の留學生を併せて十四五名に過ぎず頗る微々たるものなりき。後にて新教信者は大學生中僅かに二十名位なるを知れり。此地の学生の氣風は甚だ宜しからず。メンズル(決闘に類せるもの)は盛んに行はれ、學生組合に加入せんとするものは少なくとも六回のメンズルを為さざるべからずと云ふ。且飲酒の盛なること驚く計なり。それよりウキレナを経てブタペストに至れり。此地にて行政裁判所の判事にて巴里の大会に於て相識となりし人に迎へられ、頗る好遇せられたり。此地は天主教の盛なる所なれどもリフォームド教会其間

に在って戦闘甚だ力む。ブタペストは美麗なる市街にてゲニューブ河畔の王宮衆議院など宏壯目を驚かすものあり。其人種の種別甚だ多く十六種國語の新聞ありと云ふ。其電氣事業の盛は殆んど世界第一にて電話新聞と稱する者あり。電話にて最近の新聞を伝ふるの仕組にて、此地を除ひて外に未だ斯る仕組あらずと云ふ。

ハンガリー人は日本人を以て同一人種なりとなし、予等を吾等の親戚來れりとて歓迎せり。且彼等の露國に対する敵愾心は殊に彼等をして予等に対する殷情を加へしめたり。彼等は言語相通せざれども手真似をなして予等に祝意を表せり。此時偶ハンガリー獨立の勢あり示威運動の盛に行はれたる時なりしかば、予等其運動を目撃するの機會を得たり(ブタペストにては人名を記すに日本と同じく姓を先にし名を後にし、所書きも日本同様の順序を用ふ)日本の戦勝に対する情熱は非常にて大山大将に名譽の劍を送るとの評判あり、小兒に至るまで万歳なる語を知り、予等を見れば万歳を叫べり。婦人は日本婦人の如く握手と共におじぎをなす。唯彼に在っては膝を屈し此に在っては腰を屈するの差あるみ。是れ米國などにては絶えて見ざる風習にて亦一奇なり。パンノペレーなる人に會せり。ユダヤ人にて土耳其の事情に精通せり。又東洋語學博士ストラウス氏にも會せり。予等はブタペストを去つてウキレナに帰り、青年會及びリフォームド教会に於て演説し、それより伯林に入れり。時偶独乙皇室に慶事あり、為に非常の雜鬧にて何事も為す能はざりしかば、ハレの大学に至り一夜彼処に泊し、大學生有志者の為に演説せり。此地にて教授ワー子ル氏に會せり。

ライブチックにても青年会に於て演説せり。此地に於て元良勇次郎氏に会し同氏の案内にて市中を見物せり。此地は歐洲に於て印刷事業の最も旺盛なる場処なり、それより引返して伯林に入り伯林大学にて演説せり。二百人余の聴衆ありたり。概して独逸学生の風儀は宜しと謂ふべからず。斯くて予はドレスデンに至り、ラヂス氏の家族を訪ひ、且世に聞へたる同市の美術館を見たり。ラファエルのマドンナ（聖母の画像）は予をして感嘆去るに忍びざらしめたり。それよりデンマークのコッペンハーゲンに至り皇太子の侍従長伯爵モルトケの家に客となれり。客寓僅に数日に過ぎざれども其篤信にして人品の高きに深く感ぜり。聞く所によれば元は甚だ物質的の人物なりしもロポルト・ワイルドルの説教を聞ひて信仰を起せりと云ふ。予は青年会に於て演説せり。日本人の珍らしき為にもあらん中々の盛会にてありき。其市街建築の美なる元大國の首府たりし面影を在せり。それより諾威瑞典に赴けり。ストックホルムにては学生青年会同盟の会長博士スリースの紹介にて青年会に於て演説せり。其体操の盛なるは同地人の誇る所なり。諾威瑞典は露國の為に芬蘭を奪はれたる事に深き怨を懷き日本に対して頗る同情あり。斯くて予等は瑞典の学生夏期学校に招かれ之に臨めり。学生の集るもの男女併せて三〇〇人余もありたらん。言語相通ぜざれども人情の厚く、靈的にして真面目なるは明かに観取せられたり。ワイルドル氏も其会に来れるが同氏の言に依れば瑞典人は非常に内氣にて信仰の告白をなす時は森林の中に入らん事を求むと云ふ。それより諾威のクリスチアナに至

り同市より少し離れたるドレメンの会に臨み演説せり。諾威分離の問題起れる當時にて六千人余の大衆集り、新しき国旗を立てて示威的運動をなせり。予等の至るや露國に勝ちし日本人来れりとて歡呼して予等を迎へたり。予は英語にて演説したりしに日本語にて今一度演説せよと迫られ遂に復び其大意を日本語にて述べたり。斯くて再び南方に向ひりエージの博物館に至り、ワルトロロの古戦場を吊ひそれより英國に渡れり。竜動にてはシチー、フンブルの礼拝に參せり。集会は頗る盛にしてキャンベル氏の説教予に深き感動を与へたり。其声は小さけれども印象甚だ強し。（此時其顔に変化ありと伝ふるが果して然るやと問へる人あり。氏は明に其様子を見る能はざりしも確かに然らんと答へたり）蘇格蘭にてはセント、チョーチ教会にてヒュー・ブラック氏の説教を聞きたれど左して斬新なりとも思はず、時正にリバイバルの起りたる時なりしがフュー・ブラックの如き大教会の牧師も大道演説をなせり。エデンポローにてノックスの家を訪へり。ノックスの臥床食台など古の儘に保存せらる。其墓はセントジイルス大教会の庭内にアイ、ケーと記したる石あり、それなりと言ひ伝へらる。エデンポローよりコニッシュヨッドなる英國大学生の夏期同攻会コンベンツに赴けり。古の修道院の跡にて天幕を小山の上に張り、女子は院中に男子は天幕に起臥寢食せり。男女各三〇〇名余集りたらん。予も一両日天幕の中に学生と共に生活せしが、至って無雜作にて單純なるものなりし。彼等は青草の上に油紙を布き、帆布に薬を入れたるを臥床とし、一枚の毛布をかくる

のみなり。予は珍客たる故を以て特別の待遇を受け二枚の毛布を給せられたり。学生中にて順番に給仕をなし、皆給仕々々とて遠慮なく用を命ぜり。彼等の学校に在るや皆少なからざる金銭を消費する貴公子なり。然れども彼等の茲処に来るや斯る殺風景の生活をなしても毫も不満の色なく、快活にして無邪気に嬉々として怡めり。而して其集會に至っては頗る着実にして真摯の風あり、司會者はオックスフォードの神学生之をなせしが、如何にも真面目にて立派に、其語る所も淺薄ならざりき。此処にても非常の歓迎を受けたり。それより予等はケチックに至れり。湖水あり山あり、風光頗る美なり。二ヶ処に天幕を設けらる。各三〇〇人を容るるに足る。この天幕共に人を以て充たされたり。予等の至りし時はリバイバルの最高潮に達せし時にして前夜は祈祷會夜半にまで及べりと言ふ。五人或は十人競ひ立って祈祷をなし、又告白をなせり。ケチックの市は小なれば斯く多数の人を容るるの旅舎なく、戸々皆客を迎ふ。予はウエルスに渡り其リバイバルの状を視察せんと志したれども、エバンロベルツ氏過勞の為に運動を中止せりと聞きて遺憾ながらも思ひ止まりぬ。云々、(五五七号・明治三十九年三月一日)

(四—M39—3) 明治学院の近況

◎明治学院各学部 学院普通学部は近來漸次隆盛に向ふ有様に於て外觀、内容共に完きを期しつつあり。従て生徒も定員以上に達し、校舎を増築せざれば到底収容する能はざるに至り、昨年来当

局者は頻りに考慮し居れり。昨春基督教青年會及び学院の要務を帯びて欧米を漫遊せられたる井深総理も帰朝せられ、大いに学院の發展を計画し居らる。高等学部の如きは殊に學室狹隘なるを以て今回を機として之を拡張す見込なり。四月新学期より補習科を普通学部を設置し、他の高等或ひは専門學校に入學するもの便を計るはづとなり居れり。両学部の卒業式は本月二十七日午後二時講堂に開かれ、其の前日文學大會を催して広く内外の校友を招待する筈なり。神学部は生徒數十名あり。昨年来多少物足らぬ心地ありしも今般井深総理の帰朝と共に追々刷新を加へられんとし、殊に悦ぶべきは高等普通両学部の生徒中に卒業後伝道に従事せんと決心せるもの統々起れることにして來學年には神学生の數大いに増加し、その面目も大いに改まるを見るべし。近來府下學生の風紀乱れ寒身すべき記事新聞紙上に現はるるは歎かほしき至りにて主義を以て立てる我学院は一層此の点に注意し主義の實現に努力しつつあり云々(通信)(五五八号・明治三十九年三月八日)

(四—M39—4) 東山学院生徒募集

生徒募集

四月九日午前九時
入学試験執行

第一年級、一〇〇名。高等小学三年修業以上の者は無試験にて入学を許す但し人員超過の際は選抜試験を行ふ、其他第二級以上若干名。前學校の品行証明ある者に限り試験の上入学を許す入學志願者は四月五日迄に願書並に証明書を差出す可し。入學願用

紙並に規則書入用の者は二銭切手を添へ申出づべし

長崎市 私立 東山学院
東山手

(五五九号・明治三十九年三月十五日)

(四—M39—5) 明治学院生徒募集

・生徒募集

高等学部 専門学校令に依れ
る専門学校なり

第一等級三十名中学校卒業生は定員迄無試験第二三等級補欠
数名

普通学部 徴兵猶予、高等学校専門
学校の連絡中学校に等し

第一等級一〇〇名高等小学校二年以上第二三四年級共補欠
数名

補習科 普通学部_に補習科を置く
徴兵猶予の特典あり

入学試験四月七九の両日出願期日同五日迄

文部省 東京芝区白金
指定 電新一八八〇 明治学院
(五五九号・明治三十九年三月十五日)

(四—M39—6) 松永文雄・秦庄吉消息

△松永文雄・秦庄吉両氏、は先週の明治学院理事員会に於て同学

院神学部の教授に撰挙せられたる由。(五六一号・明治三十九年三月二十九日)

(四—M39—7) ヘボン夫人病歿

博士ヘボン氏の令閼は、三月四日米国に於て病歿せられたる由にて横浜の指路教会は、此の責ふべき夫婦と関係親密なるにより、前日曜日昼夜に亘り其の記念会を催した。

席上有益なる話も多くあったが、明治学院の井深梶之助氏が夜の集會に語られたところによれば、ヘボン博士は二十一歳、ペンシルベニア大学にありし時真実に基督の弟子となることが出来、故夫人を娶りて間もなく、伝道のためシンガポールに渡航した。夫人が風土の合はぬため健康を害したるにより己むを得ず帰国して新育市に医業を開かれたが、居ること十年、余程繁昌して前途頗る望み多く見えた。時恰かも日本開国の報に接し、之に赴任すべき外国伝道者を要求する声頻りに聞えた。ヘボン氏は奮然起って其の募りに応じ、一八五八年夫婦して日本に來られたのである。真に献身的の奮発である。博士が当時の日本に泰西の医術を伝へて多くの患者を救ひ、和英字典を著述し、聖書を翻訳し、明治学院最初の総理として教育に貢献し、帝國政府より勲三等旭日章を賜はり、其れよりも高き精神上の誉を上帝の前に有し、齡九十一に達し、静かにして、然かも大いなる功を建て得たるは、夫人内助の力其の多きに居ると云はねばならぬ。井深博士の語るところによれば夫人は日本を去らるるまで数十年間同一の料理人を使用

『福音新報』明治学院関係記事

したと云ふ。奉公人の斯くの如く居着しは珍らしいことである。横濱フェリス女学校設立の其の淵源するところへボン夫人が日本に未だ女子教育の起らざるときに数名の婦人に英語を教へ其の事業を今のミロル夫人当時のミス、キダに譲りたるにありと云ふ。へボン夫人は良人の光榮ある事業の外に自己の事業はないと見ゆる程、良人の影に隠れ、良人の志に身を埋めて了つたのであるが、其れでも其の徳の高さと志の厚かりしこととは斯の如く隠れることが出来ぬ。次の福音新報に掲げようと思ふ渡辺治子の品性と共に我らの尊敬して措く能はざるところである。(五六二号・明治三十九年四月五日)

(四—M 39—8) 明治学院卒業式

同学院卒業式は去月二十七日午後二時新講堂に於て挙行せられたり。卒業生は高等学部四名普通学部四十二名ありて優等生十数名へ夫々賞品を授与したる後総理井深堀之助氏は卒業証書を授与し、且彼等の前途に就きて簡単なる教訓を与へられしが普通学部卒業生総代として八田舟三氏高等学部卒業生総代として池田三男也氏は答辭を述べたり。当日は曩きの文部大臣たりし菊地男爵の演説あるべき筈なりしが、当日貴族院に於て鉄道国有問題の議事ありたりに出席なかりしは一同の甚だ遺憾とせし所なり。然れども男爵の代りに博士イムブリー氏は戦捷の日本といふ趣意にて一場の英語演説を試みられ、一同は之れに對し満足を表せり。猶当日は高

等学部卒業生の一人坂野峻氏の英語演説もあり。式中陸軍楽隊の壮快なる音楽ありき式後旧講堂に於て來賓及卒業生に茶菓の饗応あり。互に旧を談じ新を語り散会せしは午後五時頃なりき。因に言ふ今回の普通学部卒業生の内には神学部へ入学志願の者数名あり其他にも本科神学部に入學志願の者少からず。尚は本年の卒業生は高等部四名、普通部四十二名なりき。(通信)

(五六三号・明治三十九年四月十二日)

(四—M 39—9) スタウト博士の婦米

◎スタウト博士の婦米、明治二年宣教師として長崎に渡來せられ、自來殆んど四十年伝道に従事し、傍ら教育に尽瘁せられたるスタウト博士は、事情ありて一昨年已むなく其の職を退き、同地ジャパンホテルに滞留せられたるが去る十日長崎出發婦米の途に就き、十二日横濱に立ち寄られたるが、同博士の教育を受けたる東山学院出身の紳士学生十数名は同地に集りて送別会を催したりと聞く。(五六八号・明治三十九年五月十七日)

(四—M 39—10) 大日本平和協会

◎大日本平和協会

友会宣教師ボウルス氏を始め同会の会員及び宣教師が中心となりて起されたる平和協会は漸次發達して正式の委員として井深堀之助、今井寿道、本多庸一、ボウルス、チャペル、岡慶治、渡瀬寅二郎、加藤万治、根本正、能野雄七、山本邦之助、普賢寺敬吉、

平沢均治の諸氏愈組織の任に当らるることとなり、此の程憲法制定せられたるが、憲法に依れば事務所は仮りに東京青年会館と定め、国際的関係の親密と人類間感情の融和とを謀り、平穩手段を以て国際争議の解決を促し以て世界の永久普遍的平和を確保増進するを目的とし、之を達せんがために家庭及び諸学校内に其の目的を普及せしむること、仲裁々判、平和會議、其の他国際争議を解決すべき平穩手段に關し、時々研究会、講演会を開き、若くは印刷物を発行して輿論を喚起するに努め、必要あるときは当該官府に建白請願をなすこと、内外同志と氣脈を通ずること等を其の事業となす由又地方会員二十名以上ある地方には支部を設立することとなれり。委員に依りて選ばれたる役員は會長渡辺暢氏、副會長井深梶之助氏、會計ランヂス、渡瀬寅二郎兩氏、書記ボウルス、平沢均治兩氏にして前記委員諸氏の外海老名弾正、植村正久、内村鑑三、木下尚江、加藤直士、小林富次郎等の諸氏を始めとして目下八十余名の会員あり、今月講演会を開き、又『平和の曙光』なるツラクトを出版し、追々各種の会合を催すこととなり居れり。尚ほ会員は日々に増加し、教界内の諸先輩、信徒等統々加入しつゝあれば間もなく多大の会員を有するに至るべしと、ボウルス氏を助けて専ら其の運動に尽力したる同会員佐々木邦氏は語り。(五七二号・明治三十九年六月十四日)

(四—M39—11) 明治学院神学部卒業式

◎明治学院神学部卒業式、第二十一回の卒業式は去る九日午後二

『福音新報』明治学院關係記事

時より同部図書館下広間に於て催され、井深総理の証書授与及び告辞、卒業生総代関口幸四郎氏の答辞、小崎弘道氏の演説、ミス・バラの独吟、マクネヤ・フキッシャア外二氏の四部合唱等ありて散会せり。来会者一〇〇余名、当年の卒業生は関口幸四郎、松尾年太郎、吉岡徹の三氏なり。(五七二号・明治三十九年六月十四日)

(四—M39—12) 明治学院青年会

△同青年会 当青年会は毎年会員の中より特別の伝道者を選挙して夏季伝道に送りつつありしが本年も之を派遣することとなり。普通学部五年級生郷司健司及び高等学部生八太舟三、藤本保己の兩氏を撰定せしが全く学生並びに教授の寄附金を以て全く支弁するに至れり。目下委員の撰定したる伝道地は郷司氏、三島柏久保方面、八太氏新潟地方、藤本氏水戸なるが未だ右各地の日本基督教会に交渉の上各教会に於て異議なくば両学部の休業せらるると同時に三氏を出発せしむることとなり居れり。(五七二号・明治三十九年六月十四日)

(四—M39—31) 神学生送別会

△神学生送別会九日七時半より開会、沖野五点氏司会、教授を代表してフルトン博士、学生を代表して佐々木謙三氏送別の辞を陳べ、松尾年太郎氏の答辞あり。後数名の祈祷勸話等あり。夏期伝道地、其の伝法に対する意見等を互に語り合ひ愉快にして且つ有

益なる懇話をなして閉会せり。(五七二号・明治三十九年六月十四日)

(四—M39—14) 南長老派ミッション

新らしき名称 長老派ミッションの講義所は従来多くは日本基督教会の名を冠するが普通なるも特に神戸の葺合講義所は南プレスビテリアン講義所と命名し居れり。主任者として明治学院卒業生松尾年太郎氏来任せらるべし。(五七二号・明治三十九年六月十四日)

(四—M39—15) 明治学院近況

◎明治学院 ワイコップ夫人はブウス氏に代りて横浜フェリス女学校に教鞭を執らるる事となり、一家挙って同校に移転せられ、ワイコップ博士は毎日汽車にて通勤せられ、従来同氏の寓せられたる校内舎宅にはオルトマンズ氏移転せられたり。フルトン氏の帰米は本国伝道会社よりの指令によりて見合となり、再び何等かの命令あるまでは依然神学部を執らるべく、神学予科の基督伝講義は従来松永教授の担任なりしが、本学年より秦教授受持たる事となれり。本学年の神学部入学者は別科五名にして外に二名近々入学の筈なり。(五八七号・明治三十九年九月二十七日)

(四—M39—16) 東山学院校舎増改築

◎長崎東山学院

入学生の増加と文部省認定請願に対し増築改造を要すべき個所少なからず、先ず第一に旧来の雨天体操場を礼拝堂に、其階下を二個の教場に改造せんとし其の資金の募集方に就き米国改革教会外国伝道会社通信幹事コップ博士に書を寄せられしが去月コップ氏より其の返信あり。資金は本院創立の当時其資金を寄附せられ記念として英語の校名には其名を冠する故スチール氏令嬢より一三〇〇弗を寄附すべき旨承諾せられたるを通知し来れり。依りて右一三〇〇弗の内、五〇〇弗を以て雨天体操場を改造し、八〇〇弗を以て更に梅香崎女学校のと同様なる雨天体操場を建築すべしと言ふ。スチール嬢は今回のみならず、数年前運動場模様替への費用として一五〇〇弗以上を寄附せられたる事あり。尚ほ運動場、校舎の設備、教師の招聘全く調ひたるを以て文部省の認定を請願せしが不日文部省参事官出張取調べの上許可せらるることとなるべし。(五八七号・明治三十九年九月二十七日)

(四—M39—17) フルトン帰国

△フルトン氏 本国の指令あり二十九日出発帰米の途に就かる。(五八八号・明治三十九年十月四日)

(四—M39—18) 日本基督教会大会における

協力ミッション審議

△協力ミッションの件。其の定義に付きて植村正久氏及び永井直治氏の修正案出でしも両案とも少数にて否決、原案は二十一に対

する二十五の多数を以て可決せられたり。原案に曰く、
『協力ミッションとは其のミッションとして日本基督教会の部内に於て又は之と関連して実施する所の凡ての伝道事業は其の大体に於て該教会が之を管轄するの権利ある事を承認し而して其の伝道事業を上文の原則に基き且大会が伝道局を経由して承諾したる方法に依て実施する所のものを言ふ』と
尚ほ其実行に付きて、

『従来我が教会に於て協力ミッションとして知られたる諸ミッションは其の本國伝道局の認可を受けたる上前条の決議に従ひ夫々協力の方法を案じ之を伝道局に提出して商談を遂げん事を懇切に勧告す』

以上は第三説会に於て世の多数を以て可決せらる。(五八九号)
明治三十九年十月十一日)

(四—M39—19) 東山学院在京同窓の会

◎東山学友会 長崎東山学院出身の在京者に依りて組織せらるる団体なり。去る七日午後四時より牛込矢来町吉田屋に於て秋季の定期会を開きしが、大会のために上京中なる同学院長ビタルス氏、梅香崎女学校校長広津藤吉氏を始めオルトマン氏其の他同校出身者二十六名出席し、席上ビタルス氏、吉武五右衛門氏、瀬川想一氏等の演説あり、歓を尽して午後七時散会したり。(五八九号・明治三十九年十月十一日)

(四—M39—20) 台町教会の改築

◎台町日本基督教会 目下教会改築中なれば礼拝其他の集会は明治学院旧講堂に於て催はし居れり。教勢今や大に振はんとするの時、会堂の速かに落成するに至らんこと会員一同の熱望しつつある所なり。市の漸々膨張して品川、大崎等に家屋新築せられ、場末の如く思はれたる新会堂附近は商店も追々改築しつつあり町の体裁一変したれば教会の地位亦伝道上最も適當なる場所たるに至れり。(六〇〇号・明治三十九年十二月二十七日)

明治四十年

(四—M40—1) 秦・松永教授就任式

◎明治学院就任式 昨九日午後二時より同学院神学部に於て秦庄吉、松永文雄両教授の就任式執行せられ、秦教授は「基督の神学とパウロの神学の調和」松永教授は「教会歴史と神秘主義」に就きて講演せられたりと云ふ。(六〇二号・明治四十年一月十日)

(四—M40—2) 台町教会改称高輪教会竣工

◎台町教会

台町教会は昨冬以来二本榎二丁目十九番地に改築中なりしは既報の如くなるが年末中に愈竣功し名を高輪教会と改称し去る六日の聖日より新会堂に於て礼拝其の他の諸集会をなすを得るに至れり。場所は従前の地より教会としては却て好地位を占め加之建坪大凡

『福音新報』明治学院関係記事

十坪を増築し内部裝飾器具等は新調したれば外觀は大いに整ひ来れり。田嶋新任牧師を得たると共に此新会堂を与へられたるを機とし本年は一大発展を試みんとして奮発且つ計画しつつあり。先日加藤米司氏長老を辞せられたるを以て来る十三日総会を開き其の補欠選挙を行ひ、其の他二三の重要問題を決定せんとす。又一月三十日には改築祝賀式を行ひ引き続き一週間連夜大演説会を催さんと計画し居れり。旧臘十五日当教会建設者の一人にして執事たりしことある加藤順蔵氏突然死去せられ十七日其の葬儀あり。男利雄氏は五十円を教会基本金に寄附せらる。(六〇二号・明治四十年一月十日)

(四—M40—3) 久米邦武の課外講演

◎明治学院の課外講演 明治学院神学部に於ては久米邦武氏を聘し「神道と日本古代史の關係」と題する約十回に亘る講演を請ひ、余席の有る限りは有志者の聴講を許すべく日割は毎週水曜、金曜兩日午後二時よりとし、明日より開始する筈なりと。(六〇五号・明治四十年一月三十一日)

(四—M40—4) 南長老派神学校の新設

◎南プレスビテリアン神学校新設 南プレスビテリアン、ミッシェンは今回新たに神学校を設立することに決し、場所は神戸とし、目下婦米休養せらるるフルトン氏、神戸教会牧師青木澄十郎氏等教授たるべく、同ミッシェンより明治学院に送られたる神学生等

は九月には同学院を退き神戸に転ずべき通知に接したり。(六〇六号・明治四十年二月七日)

(四—M40—5) 明治学院四教授在職二十五年記念会

◎明治学院記念会

本学院内同窓會員有志の発企にて来る二日午後一時より東京青年會館に於て総理井深博士を初め教授ワイコフ博士、同イムブリー博士及びバラ氏の在職二十五年記念祝賀会を開き内外の名士を招待し、本学院出身者、現在生徒、父兄、保証人は勿論有志の参列を歓迎し、四教授の演説、名士の講演、余興の催しあり。場内に於て記念絵はがきを発行し、スタンプを押捺すべく尚ほ散会后参列の有志者一同会食する筈なり。発企者の重なるものはオルトマンス、ランデキス、熊野雄七、島崎藤村、馬場胡蝶、和田英作、松井安太郎の諸氏外十数名なり。(六〇九号・明治四十年二月二十八日)

◎明治学院の四教授

明治学院の総理兼神学教授井深梶之助、神学教授イムブリー、普通学部教授バラ及びワイコフの四氏は就職以來二十五年を経たりとて、其の友人等相謀り、三月二日祝会を神田青年會館に催せり。其の状況は別項記載せる如し。

明治学院の過去に溯れば其の源流にはエス、アアル、プラオン及びフルベッキ博士の如き既に他界の人となりしものもあり。

其の第一の総理たりしヘボン氏は、老を故國に養はれつつあり。築地以來神学の教育に全力を傾注し、明治学院のために功勞頗る多かりしアメルマン氏は現に米國一教会の伝道局會計として健在す。而して現在井深、イムブレイ、バラ、ワイコフの四教授既に其の就職以來一世紀の四分の一を経過し了ぬ。明治学院は実に興味多く、聯想豊かなる歴史的のものとなりしなり。

明治学院の功績

明治学院は健全なる神学思想を主張し、多くの伝道者を養成せるを以て其の最も大いなる誇りとなすべし。我國の伝道界より明治学院と關係浅からざる勢力を取り除きなば、甚だしき空虚と寂寞とを生ずべし。明治学院出身者にして伝道界に名あるものは特記するまでもなし、雄弁世に隠れなき松村介石、文界に漸く其の名を高めつつある島崎藤村、美術界に一頭地を抜ける三宅克巳、和田英作の諸氏も明治学院の出身者なり。田中達、桜井彦一郎、木村鷹太郎、戸川明三諸氏の如き文士、服部綾雄、杉森此馬、笹尾久米太郎、水苜幾次郎、松井安太郎諸氏の如き教育者等を始とし、其の他実業に、政治に、多少の重きを為せる人物、明治学院を母校として回想すべき關係を有する者少なからず。ミシヨンスクウルに懽焉たるものと雖も、明治学院が教育機関として或る程度にまで成功せるものもあるを認むるに吝ならざるべし。余輩は此歴史的の學校が愈健全なる方針に向ひて發展し、其の將來の光榮更に大なることを希望するものなり。

井深梶之助氏

『福音新報』明治学院關係記事

が二十五年一日の如く、始めは教授として後ちに其の総理として、最も忠実に明治学院に在職せる功勞は世人の遍く認識する所とす。其の明敏なる頭腦、耐久の精神、謹慎なる態度、学び易からざる辞令、巧妙な英語は之を如何なる所に置くも、其の地位を重からしむるに足れり。氏が其の半生を明治学院のために費やして倦むことを知らざるは同人の敬服する所に非ずや。此の二十五年間に「福音史」、「歴史上の基督」其他井深梶之助氏の訳述せられしもの少なからず。事務的を以て知られたる氏も筆に於て全く閑なりしに非るなり。欧米に遊ぶこと二回、清韓の各地を巡回すること二回、加ふるに南船北馬、其足跡殆んど国内に普ねし。氏が社会に活動せられしもの静にして多大なりと謂はざる可らず。

イムブレイ氏

博士が明治学院の教員として既に二十五年を経過せるにも拘はらず、其の日本語を以て説教せるは世人の屢聴かざる所なりと雖も、久しき間外人の日本語研究に便利を与へたる「ジャパニイス、エテモロジイ」は實に其の著述に係るものなり。余輩は井深博士の訳せられたる「福音史」其の他二三の注解がイムブレイ氏の軽快なる筆に成れるを記憶す。明治学院神学部の發達、氏に負ふ所少なからず。然れどもイムブレイ博士の功績最も多とすべきは、其の外交的手腕を有し、多くの場合に於て談判の衝に當り、其の教会制度に精通し案件を処理するの才幹を以て、屢重大なる問題に調和的解決を与へ、外國ミシヨンを率ゐ、歩一步日本基督教会の革新に同行せしめんと試みて多少成功せられたるに在りと謂は

ざるべからず。此の点に於てはイムブリー、井深の二氏性行相近きものあり。常に其の歩趨進退を同うせらるるを怪まず。天下の事物唯だ創為の人物にのみならず、亦修正と調和あはれとに長ぜる輩に俟つところ少しとせんや。日本基督教会も外国ミシオンもイムブリー博士に對して負債少からず。

ジョン・バラ氏

氏が明治六年横浜の高島学校に聘せられて日本の教育に与りしより間もなくプレゼビテリアン教会に任用せられ、ミシオン、スクールの教員として今日に至るまで終始一つの如く、教場に事務室に拮々として懈怠の色なきは之を知るものの皆敬服する所とす。実に明治学院元老の首席を占むるの人なり。バラ先生は事務家なり。講堂にありては簿記学を担任せられしこと久し。明治学院が多くの実業家及び外国商館の書記を出だせるもの偶然にあらず。明治学院氣質にはジョン・バラ氏の印象今日に至るまで磨滅せざるものあるなり。

ワイコフ氏

博士は日本に基督の教会創立せられたる明治五年來朝せられたるなり。恭謙なる好個の紳士、且親切なる英語の良師として先志学校に於て、明治学院に於て多くの青年に敬慕せられたり。井深総理は三縁亭に於ける祝宴の席上、ワイコフ氏等が興味少なき読本の教師として二十五年宛然余念なきものの如く見ゆるは敬服の外なしと言はれたりと聞けり。此は最も適切なる讃辭にてありき。余輩はバラ、ワイコフ氏の如き余り広く人に知られざる偉大の功

績に對して多量の尊敬を払ふに躊躇せざるべし。

(六一〇号・明治四十年三月七日)

◎明治学院四教授二十五年祝賀會

予報の如く明治学院総理兼教授井深博士、教授ワイコフ博士、同イムブリー博士、同バラ氏の就職二十五年祝賀會は去る三日午後一時より東京青年會館に於て催されたり。熊野同窓會副會長の司會、デビス夫人のピアノ独奏を以て開會、稻垣信氏の祈祷あり。司會者の開會の辭に續いて在校生徒總代小野某、現職員總代足立理学士、卒業生總代宮地謙吉、理事員總代渡辺暢の諸氏祝辭並に謝辭を述べられ、野矢丈夫氏は其の旧師ワイコフ氏に、松村介石氏は其の旧師バラ氏に、服部章三氏は同じくイムブリー氏に祝辭を呈せられ、右三教授の之に對する答辭、女子学院生徒有志の合唱、松永夫人の独吟あり、次いで青山学院長本多庸一氏は井深総理のために陳べて曰く「井深君の地位と余の立場と酷だ相似たり。二十五年君が經營の跡を尋ねれば蓋し一に是れ辛苦の歴史、今日の盛典を得るは實に一朝の事に非ざるを想ふに難からず。夫れ宗教学校に長たらんものは彼の帆船の逆風に航する如く帆を練りて千鳥掛けに乗り切りて僅かに目的地に達するに異ならず、順風を受け理想に奮進する日和に會する如きは一日として望む能はず。文部省は右に控へミシオン左にあり、前に社会あれば後に教会あり、更に身に近くして然かも執拗なる挾撃は教授と生徒とより来る。其の辛苦實に言語に堪ふ。諸子、総理の頭髮其時にあらずし

て落剝斯の如きを見よ。蓋し是れ諸子のために然りしのみ」と。

学生等が喝采に送られて降壇、之に対する井深総理の答辞に曰く

「本多君の陳べられたる所殆んど我が意を穿ちて遺憾なし、且つや自ら過去を語るは其の屑とせざる所、聊か将来に対する希望を述べん。

外国人諸信徒より従来本校の被れる恩義を想ふにも速かに本校の基本確立せられ、独力の経営によりて存在するに至らんことは余が旦夕の宿願なり。之と同時に明治学院大学の設置最も急務なるを覚え、専心其の希望の実現に焦慮しつつあり。翼くば卒業生並に関係者諸氏の援助を俟ちて其目的を達せんことを」と。終りに当校出身文士島崎藤村氏の作に係る校歌を合唱し、小川義経氏の祝詞を以て式を閉ち、茶菓の饗応ありて閉会、来会者四〇〇余名。午後六時より更に芝公園三縁亭に於て招待会あり、アルムニ会の諸氏七十余名来会。卓上、石川、岡本、ソオバル、コオツ其他諸氏の祝辞、井深博士の挨拶ありき。尚ほ来賓に贈れる四教授肖像入りの記念絵端書は当校出身者岡田^(マ)三郎氏筆と見受けらる。

(六一〇号・明治四十年三月七日)

(四—M40—6) 東京博覧会特別伝道

◎博覧会伝道 上野ミッシヨン其他の発企にて伝道隊組織せらるる由報道せしが、更に市内各団体神学校等によりて大なる組織なり其の日割も既に確定したりと聞く。(六〇九号・明治四十年二月二十八日)

◎東京博覧会特別伝道会 前号所報の如く博覧会伝道会の日割は左の如く確定せり。

- (一)連合運動 三月二十日—二十三日マデ
- (二)救世軍 三月二十四日—三十日マデ
- (三)聖書学院 三月三十一日—四月六日マデ
- (四)福音教会 四月七日—四月十日マデ
- (五)浸礼教会 四月十一日—四月十七日マデ
- (六)同盟教会 四月十八日—二十日マデ
- (七)聖公会 四月二十一日—二十七日マデ
- (八)東京神学社 四月二十八日—四月二十九日マデ
- (九)明治学院神学部 四月二十九日—五月四日マデ
- (一〇)クリスチャン教会東京伝道学校 五月五日—五月十一日マデ
- (一一)基督伝道会同胞教会 五月十二日—五月十八日マデ
- (一二)日本伝道隊 五月十九日—二十五日マデ
- (一三)青山学院神学部 五月二十六日—六月一日マデ
- (一四)浸礼教会 六月二日—六月八日マデ
- (一五)救世軍 六月九日—六月十五日マデ
- (一六)聖書学院 六月十六日—六月二十二日マデ
- (一七)基督伝道会同胞教会 六月二十三日—六月二十九日マデ
- (一八)明治学院神学部 六月三十日—七月六日マデ
- (一九)聖公会 七月七日—七月十三日マデ
- (二〇)聖書学院 七月十四日—七月二十日マデ
- (二一)救世軍 七月二十一日—七月二十七日マデ

『福音新報』明治学院関係記事

(三)連合運動 七月三十日―七月三十一日マデ

(六一〇号・明治四十年三月七日)

(四一M40―7) 東山学院文部省認可

○東山学院 同学院は此のたび文部大臣の認可を経公立中学校と同一の特典を得たりき。(六一一号・明治四十年三月十四日)

(四一M40―8) 明治学院生徒募集広告

私立明治学院 芝区
白金
生徒募集

○高等学部(専門学部)

一年三十名中学卒業者は無試験

○普通学部(資格中学校に等し)

一年八十名高等小学二年修了者は無試験二三四五年各凡四十名○
補習科若干名

試験五二年四月五六日四三年八九日前九時○願書は試験前日

迄三部共徴兵猶予あり規則書切手二銭(新学年より教室学級を増す)
(六一一号・明治四十年三月十四日)

(四一M40―9) 東山学院生徒募集広告

生徒募集広告 入学試験四月
八日午前九時

第一学年八十名其他各学年に補欠入学を許す○志願者は試験
当日迄に願書を差出すべし○一学年入学資格、高等小学第二

学年修了以上の者は無試験入学を許す但し人員超過の時は選
抜試験を行ふ○二学年以上は前学校の品行証明ある者に限り
試験の上入学を許す○位置、本学院は地勢高燥にして眺望佳

絶なる東山手九番にあり○程度、中学程度にして英語の発達
徳性の涵養を以て特色とす○徴兵猶予の特典あり○教師は米

国人二名邦人八名其中教員免許所持者六名あり、英語は第一
学年の初歩より米国人担当し懇切に教授す○寄宿舎は寒暑共

凌ぎ易く且つ勉学衛生に好適の位置にあり宿料凡四円五十銭
○入学願用紙並規則書入用の者は二銭切手を添へ本院幹事に

申出つべし

文部省 認定 長崎私立東山学院

(六一二号・明治四十年三月二十一日)

(四一M40―10) 東山学院近況

長崎通信

(中略)

△東山学院は今回文部省の認可を受け四月十日より開始の新学期
には入学者大に増加するの見込ありピートル氏院長として校務を
経営し諸般の改善見るべきものあり今回新に英文、歴史教授とし
て土井口寿彦氏(前高知第一中学校教授) 体操教師として樽橋新
三郎氏(戸山学校体操科卒業)を聘用しワルボルド氏草野芳穂氏
八木絹助氏原辰一氏阿部從二氏大久保要蔵氏米村逸次氏等の教授
講師と力を合せて熱心に教授せらるれば校運益々隆昌に向ひ愈々

同院独特の学風を發揮することとなるべし同院は長崎市眺望第一の場所に地位を占め一種特色ある教育を施すが為め九州の健児各地より笈を負ふて来り学ぶ者多しと云ふ。

(後略)

(六一三号・明治四十年三月二十八日)

郎、一七〇円仙台市青年会、二三〇円横浜市青年会、一五六円神戸市青年会、七十円長崎市青年会等なり。委員等は腕に係りの役名を記せる布を結び上を下へと準備に忙し。(六一四号・明治四十年四月四日)

(四一M4011) 万国学生青年会大会の開催

◎万国学生青年会大会

開会前の光景を記せば会館の内外修繕全く成りて見違ふばかり綺麗になり。代表者は海外代表者一八〇名、日本青年会同一三〇名、市青年会同七十二名、女子青年会同五十名、教師五十五名、牧師三十九名、宣教師十九名、中央委員二十三名、大会委員二十九名、その他一〇五名なり。海外代表者の旅宿中、大会委員十五名は錦町昌平館、清国人四十五名は三崎町春館、其他の五十名は表神保町日芳館、錦町今城館、駿河台竜名館、同日昇館等に投宿。讚美歌は日、英、仏、独、清韓の各語に同譜、同歌詩を編輯せり。

其の第一日午前の光景は別項に記さるる如くなりしが外務大臣の外賓招待会は予定の如く午後四時三十分より催され、之に列せし外客一五〇余名主人側よりは林外相を始め吉田、寺島両秘書官、田次官夫人等にして並に江原、本多両氏も列席立食の饗応あり外相の挨拶に次ぎて数名の謝詞及び演説ありき。寄附金の重なるものを挙げれば三千円三井三郎右衛門、三〇〇円及び英訳開国始末一〇〇部伊井直忠、三〇〇円吉村鉄之助、二〇〇円森村市左衛門、一〇〇円大倉孫兵衛、同小林富次郎、同鈴木藤三郎、同服部金太

◎万国大会

万国基督教学生青年大会は去る三日より七日に至るまで、後藤男爵が後楽園に盛大なる宴会を催ふされし八日を通算すれば、六日間に亘り、渾て予定の如く首尾好く完結するを得たり。二十五個国を代表せる六二七名の会員一堂に集り、東西幾多の人種一意同心重訳して、主耶穌基督を語り、其の恩寵を讚美せり。其の事既に偉大なり。加ふるに世上の光栄之に花を添へ、外務大臣も之を歓迎せり。大隈伯も其の庭園を開きて之を歓迎したり。男爵後藤新平氏も盛んに之を饗応せり。東京市の重なる公民も之がために盛宴を張りたり。伊藤侯、ロオズヴェルト、大英国皇帝、及び諸威国王の祝電は少からず大会の感興を昂進せしめたり。万国基督教学生青年大会は斯くの如く一つの盛大なる示威的行動として確かに成功したるなり。其の形に於ける成績頗る著明なりと謂はざる可らず。大会の精神的内容に至りては、出席者に失望を与へしもの或は之なきに非ざるべし。然れども斯くの如く言語の相通せざる、会員の甚だ雑駁なる、品質の頗る異なる集会に向ひて精神的貢献多大なることを求め、思想上の寄与富贍ならんことを要するは、酷に過ぐるものに非ずや。形と響の大いなりし万国

基督敎学生青年大会は其の謙りて満足すべき範圍に於て成功したり。之に由りて基督敎に対する日本国民の注意と興味とを増加せること疑ふ可らず。青年会当局者の勞亦多とすべきなり。

(六一五号・明治四十年四月十一日)

(四—M40—12) 明治学院卒業式

◎明治学院卒業式 去る三十一日午後二時より同校講堂に開かれ新渡戸稲造氏の演説あり、卒業生は普通科六十二名なりしと聞く。

(六一五号・明治四十年四月十一日)

(四—M40—13) 在京東山学院同窓の会

◎在都東山学友会 長崎東山学院出身の紳士、学生等は去る十三日午後六時瀬川浅氏の宅に会合して祈祷、懇談会を開けり。矢島重虎氏司会し、前院長たりし大儀見元一郎氏、瀬川浅氏其他二三名の談話。数名の祈祷あり、種々相談する所ありて午後十時頃散会したり。(六一六号・明治四十年四月十八日)

(四—M40—14) 明治学院神学部卒業式

◎明治学院神学部卒業式

明治学院神学部第二十二回卒業式は去る一日午後二時同講堂に於て挙行せられたり。卒業証書授与の後、井深総理の卒業生に対する告辞あり、嶋森進氏は卒業生を代表して答辞を述べ。次いでマクネヤ氏の独吟あり。両国教会牧師星野光多氏は卒業生に対して

神の心に適ふ役者とならんと欲せば諸君は先づ総を擲たざるべからず。伝道の事業は勿論名譽あるに相違なし、然かも亦基督の苦痛を補ふの事業なり。基督の足跡に從ひて其の苦痛を学ぶの覚悟を要す。伝道者は又活動を要す。単に思想を練磨するのみならず、社会に投じて其の間に活動せざるべからず。更に個人伝道に就きての技倆あり。而して其の人格品性基督を表明に足るものならざるべからず。以上を欠かざるものにして始めて伝道者たるを得べきなり云々」と演説せられ、音楽学校卒業生のヴァイオリンとピアノの合奏あり、祝祷を以て閉会す。卒業生は本科都留仙次、別科嶋森進、矢島重虎、兒玉充次郎、沖野岩三郎、園部丑之助、山野虎市の七氏にして、都留氏は研究科に居残るべく矢島氏は佐世保に、兒玉氏は和歌山県粉川に、沖野氏は同県新宮に、園部氏は静岡県御殿場に、山野氏は肥前の唐津に夫れ夫れ赴任すべく、嶋森氏の任地は未定なり。(六二三号・明治四十年六月六日)

(四—M40—15) 東京神学社第一回卒業式

◎東京神学社第一回卒業証書授与式

東京神学社は去る十五日午後二時より第一回卒業証書授与式を市ヶ谷教会堂に於て挙行せり神学社理事長渡辺暢氏を司どり、奏楽に次ひて、開校の時以来式日毎に必ず歌ひ一種の校歌となれる讚美歌第一二三番を歌ひて開会し、理事山本邦之助氏祈祷を捧げ、校長植村正久氏の演説あり。續ひて各卒業生に卒業証書を授与せり。此時植村氏は以賽亜書五二〇七を以て伝道者の職分の如何に

美はしく且尊きかを教へ、又提摩太後書四〇一—八を以て伝道者の精神正に此の如くなるべきを告げしが辞意共に頗る惻篤なりき。斯くて歌を歌ひて後講師波多野精一氏（希臘人の未來觀と基督教の未來觀）と教頭柏井園氏（新約聖書に對する遠近法）の演説あり、其れより來学年の課目に関する報告あり、毛利官治氏の祝禱を以て閉会せしは四時半頃なりき。卒業生は神学科に日高善一、上与次郎、石川四郎、森岡謹吾の四氏（うち修業証書を与へられし一人あり）婦人神学科に大森春野子あり、尚神学科に深き同情を寄せたる一人の特志者より卒業生一同に懷中時計を送れり。（東京神学社書記通信）（六二五号・明治四十年六月二十日）

（四—M40—16） 服部綾雄氏歓迎会

◎服部綾雄氏歓迎会

服部氏は日米問題の爲め先月米國より帰朝されたることなるが、旧友諸氏は去る十一日夜鮫津川崎屋に於て歓迎親睦の会を開きし由。（六二九号・明治四十年七月十八日）

◎服部綾雄氏歓迎会 を兼ね京浜在住の明治学院出身者の懇談会二十四日午後六時京橋区采女町精養軒に催さる。（六三〇号・明治四十年七月二十五日）

（四—M40—17） 藤生金六の逝去

◎藤生金六氏の葬儀

曾て東北学院の教授として、又下谷其の他の日本基督教会牧師として、基督教の爲めに尽力されたる藤生金六氏は、近年宗教界と縁遠くなられしが、去る十三日朝溢充血にて俄かに逝去されたり。十五日午前八時半より富士見町教会に於て其の葬儀営まる。星野光多氏の司会にて稲垣信氏の祈禱、五十嵐正氏の履歴朗読、星野氏の説教、平岩愼保氏の祈禱ありし後、井深梶之助氏旧友を代表して吊詞を述べられたり。会葬者は一〇〇名ばかりなりき。同氏は実業界にて志を得ば再び宗教の爲に力を尽さんとの精神なりしも、志成らざるに身先づ逝かることとなりしは遺憾に堪へず。（六二九号・明治四十年七月十八日）

（四—M40—18） 明治学院近況

◎明治学院

明治学院は近來生徒著しく増加し、総数四〇〇名に達し、教場狹隘にして更に夥多の申込者あるも之を收容するを得ざる有様なりといふ。高等学部生徒は四十名程にて、多半は神学部に入るの志を有する者なる由。來学年よりは目下帝國大学法科に学びつつある者にして神学部に入學する向あり、早稲田大学よりも多分転學する者一名あるべしと。同部寄宿舎は目下新築中にて九月までには落成するならん。（六三〇号・明治四十年七月二十五日）

（四—M40—19） 南長老派神学校

◎南長老教会神学校

『福音新報』明治学院關係記事

従来日本基督教會に關係ありし南長老教會外國伝道局にては、明治学院と協力して神學生を養成しつつありしが、既報の如く愈よ来る九月より明治学院と分離して神戸に神學校を設立することとなり、フルトン博士専ら其の衝に當られ、教頭は青木澄十郎氏にして、近日帰朝せらるる溝口悦治郎氏及び兵庫教會牧師内藤賀一氏等其の教授たるべしと聞く。是まで明治学院に於て勉強しつつありし同派補助の學生数名同校に転ずる由。

(六三〇号・明治四十年七月二十五日)

(四—M40—20) 井深梶之助入院

△井深梶之助氏 マラリアに罹られ去月三十日高輪病院に入院せられたり。併し危険の憂ひは無しと云ふ。(六三六号・明治四十年九月五日)

(四—M40—21) 東山学院記念式

◎東山学院創立記念式及感謝會

東山学院は本年二月徴兵猶予の特典を得しが八月更に専門學校令に依れる指定を受け校舎の増築内部の改善等略一段落を畢へしかば去九日午前九時より同校講堂に於て盛大なる創立記念式及感謝會を挙行したり。米國領事シーモア氏佐賀在住の宣教師ピーク氏長崎県事務官高崎行一氏鎮西学院長笹森宇一郎氏等内外人の來賓五十余名あり、讚美及び国歌の合唱聖書及勸語朗誦等の後院長ピータラス氏学院創立の由来を述べ「本学院は明治二年フルベツ

キの後任として長崎に來りたるスタウト氏の主張に依りてダッチ・リフォームド伝道會社長スチール氏が其死去せる長子の記念學校となすの主意にて一万円を寄附せるによりて明治二十年始めて設立せられたる者なる事を説き次でピーク氏は「スタウト氏の本校を起すや高尚なる理想を有したり氏の理想は普通の学科の上にエホバの御言葉を教へ人をして自然と人との奥に神の御業ある事を覺得せしめんとするにありたり故に本校の生徒はよくその主意を知り以て一種特別の人物とならざる可らず」とて面白き例を挙げて生徒を訓戒し次で高崎事務官は「米國と我國と特別の国交ある事より説起し從來の教育は人格の養成を忽にしたれども今や道德を基として人格を養成するを以て教育の第一義となすに至りたれば本学院の如き強固なる道德の上に樹立せる學校の生徒は深く其學院の精神を呑込み高尚なる人格を養成して將來社會に立つの覺悟なかるべからず」とて頗る有益なる演説あり次で學院卒業生總代として梅香崎女學校長広津藤吉氏の趣味ある懷旧談ありかくて十一時全く其式を畢り更に夜七時より同講堂に卒業生を招きて同窓會の親睦會を催したり、同學院は目下一七〇名の生徒あり、從來の校舎の外に二棟の増築をなし近々又た一〇〇名を收容すべき大寄宿舍を新築せんとして今其敷地及構造法の考案中なり。(六四三号・明治四十年十月二十四日)

(四—M40—22) 細川瀧信仰歴

如何にして基督信者と為りしや(細川 瀧氏)

左に掲ぐるは台南日本基督教會牧師細川瀏氏の談話なり。氏は高知市に生れ、長ずるに及びて慶應義塾に学び、或は中学校に長たり、或は自由党に加はりて政界に尽す所あり、或は新聞事業に従ひて秀才の聞えありしが、後ち志を宗教の事業に転じ、日本基督教會の爲めに貢献せらるる所多し。

▼万国史を読んで信仰を起す。

余の基督信者となつたのは明治十八年二月十日で、新橋教会に於て安川亨氏より受洗した。信仰を起すに至つた由来を語れば、先ず明治五年慶應義塾に學んで居た頃、パアレイの万国史を読み、人類の始祖としてアダム、イブの造られた記事を始め、旧約書中の歴史が掲げられて居るので、之が余の頭腦に自然にしみ込み、信仰を起す助けとなつた。特に其頃築地のカロゾルス氏の許に基督教を研究して居た瀬谷鐵太郎といふ人からウェストミンスター信仰問答を素読的に教へられたことも、余の信仰の地盤となつた一つである。余は当時耶穌が処女より生れたと言ふ一事を解し得なかつたのであるが、一日友人と宗教の事を談した折、耶穌は処女の子にあらず、マリヤにはヨセフといふ良人があつたとの友人の言を聞き大いに安心したことを記憶する。併しまだ基督教を信奉するの熱心は起らなかつたのである。

▼政治家たらんことを志す。

其の翌年帰省することとなり、一年余も郷里に遊んで居た。明治七年親族の者の英国より帰朝せるに逢ひ、余は再び携へられて東京に上つた。其の頃余の志を問はれたけれど、余は未だ定まつた

所が無い。親族の者は余に勧め、僧侶に爲つては如何、日本の坊主の意ではない、英語のクラブ、マンのことだが其の意はないかと言ふ。余は其の生活の趣味が十分に解せられず、特に政治家たらんとの大望が胸に燃えて居たので其の由を答へた。再び慶應義塾に入り、三年間在學した。業を卒ふる前年、余は伊予国宇和島の南予中学校に聘せられ、其の校長として赴任することとなつた。併し其の翌明治十年西南の役起るに当り郷里に歸つた。時恰かも板垣退助氏等が自由民権を唱ふる最中なので余も遂に其の渦中に入り、其の驪尾に附して盛んに政治演説を試みた。

▲新聞記者と爲る。

曩きに余を世話せる者、余の現在の有様を見て将来の爲めに益なればとて上京を催がす。余も其の意を諒して上京した。すると従来とは全く反対の方向なる東京日々新聞に入社することとなり、茲に福地源一郎氏の薰陶を受けた。当時余の靈性の状態は、宗教には益す遠ざかり、罪惡の潮流に押し流されて居たのである。新聞社に在ること三年、官海に乗り出で、文部省の官吏となつた。恰かも北海道私下事件沸騰するに際し、余は島田三郎氏などと共に之を退かざるを得なくなつた次第である。

▲条約改正と基督教國。

明治十七年の末頃まで自由党の末班に列して地方に遊説した。十六年の春、東京に自由党の會議あり、当時余は神奈川県の田舎に於て地方人士の教育を担当して居たが、其の會議に臨んで見ると、時事問題たる条約改正に関する黨議が凝されたのである。条約改正の衝に當つた井上外務

大臣の政策は、条約の改正と共に内地雜居を許す暁は仮令司法權を恢復する能はざるも租税の權は恢復せしめんといふにあつた。

併し自由党は之に反対し、其の權利の半を得る位では満足が出来ぬと主張した。其の頃幹部の人達の意見では宗教の異なるは國を開くに困難である、外國人は我々を異教徒として根本的に輕蔑する、其の上彼等は學問あり金權ありと来て居るから之と雜居するは我が國民に取りて甚だ不利益である。宜しく先づ日本國民を基督教に改宗せしむるが策の得たるものであると言ふ訳であつた。

余は自ら此の宗教を奉ずる意は無かつたけれど、政治上早く基督教國たらしめたいとの希望を懷き、田舎に復つて後も始終此の問題を論じて居た。

▲老母の勧誘。

斯の如く余は一方に於て政治上の見地から基督教の必要を感じ、且つ之を人にも説いて居た。所が他方に於て余の宗教心を頻りに動かすべく骨折つて呉れたものがある。

余の姉が明治十六七年のりバイバルの頃大阪に於て信者になつた。恰かも懐妊をして居たので母が之を看護に往つた。すると姉は非常に信仰の燃えて居た最中であるから、盛んに母に伝道し偶像を棄て活ける神を信せしめようと試みた。四十日ほどの滞在中天満教會に出席し、特に祈禱会の席上信者の信仰の活発なるに感じて遂に活ける神の力を信するに至り、牧師古木虎三郎氏より受洗して帰省した。郷里には只だ聖公會の信者で寺尾と言へる老婦人あるのみであつた。母の信仰は中々燃て居たので東京に居る余に屢々手紙を寄せて熱心に基督の教を信するやう勧めて呉れた。是れ

余をして信仰を起すに至らしめた動機の一つである。

▲自由党の解散、土佐の伝道。

明治十七年の秋東京に歸

り、『自由新聞』の末路を坂崎斌氏と共に引き受けることとなつた。併し自由党の形勢は日に非にして、遂に大坂に於て解散するの已むなきに至り、隨て新聞も維持することが出来なくなつた。

此の時に當つて故郷の土佐に伝道が開始せられた。此は板垣伯始め、故植木枝盛西山志澄などの諸氏が政治上の考へより土佐に基督教を傳播せんと企てたるに起因する。而して其の懸け橋となつた人は安川享氏で遂に故フルベッキ、植村正久、ナックス、ミロルの諸氏が県下に伝道せられる。東京に於ても安川氏は自由党に縁故あるものに伝道して居た。余が神奈川より伴なひ來れる青年

平岡佳吉なるものの、先ず新橋瀧川町の講義所に入らせしが端緒となり、余も安川氏と交りて結ひ教を受くるに至り、ナックス、ミロル諸氏の宅へも出かけ、植村氏にも道を聞いた。かくて遂に自ら信仰を起して受洗した次第である。余の信念を明かにせしめたものは、ナックス博士の演説で、余が初めて教会に赴いた日、同博士は有神論を説かれた。原因論、終局論、道德論など実に條理明白にして、今日も尚ほ之を記憶し居る位である。當時他の人々の説教とは大いに其の撰を異にして居つた。

▲何を生涯の事業と為さん。受洗後間もなき頃、植村氏より己が生涯の事業を撰び、神の使命を知るの要なることを説かれた。此は今に至るまで深く余が脳裡に刻み込まれて居る。當時余は熱心に己が生涯の事業として何を撰むべきか、余の使命は何である

かと言ふ問題を考へた。併し未だ決定せぬ。一先づ家族を携へて郷里に帰った。熟々考へた末遂に伝道者たらんと志を起して九月上京し、東京一致神学校に入學し、十九年には神田に講義所をも設けて伝道して居ったが、病を得て高知に静養し、二十二年再び上京し明治学院に学び、翌年帰省して県下の伝道に与つて居た。二十五年紀州和歌山に開かれし中會にて教師の試験を受け、按手礼を領した。

▲牧師の生涯。二十六年の春、名古屋教会の招きに応じて牧師となり、二十八年まで其の任に在り、其れより軍隊慰勞會の爲めに慰問師として武田芳三郎、吉川龜の二氏と共に台湾に赴き、間もなく横浜海岸教会に聘せられて二十九年一月牧師となる。後ち之を辞して直接間接伝道の事に従つて居ったが、三十五年十二月伝道局の命を奉じて渡台し、今日に至るまで其の葡萄園に働いて居る。

▲信仰の生命。余は幸にして健全なる教導者を有して居つた爲め、信仰上の激しき動揺なく今日に至れるを感謝して居る。余の信仰の生命は、基督の死である。之が安心立命の源泉である。近来比較宗教の議論盛んに行はれ、基督教以外にも宗教あり神学ありと唱へらる。併し基督を措いて何所にも神の子が死なれたことを見ぬ。基督教と他の宗教とを大同小異と見做すことは余の甚だ好まぬ所である。基督教は天下に比類なき宗教である。而して其の中心点は基督の死である。之なくば吾等の信仰は其の活力を失ふに至るのである。(六四七号・明治四十年十一月二十一日)

明治四十一年

(四—M41—1) 高輪教会大挙伝道と学院生

◎高輪日本基督教會 大挙伝道開かれ一月十七日の來會者は二二一名ありたり。十八日には一五九名。十九日の日曜日夜には九十四名。二十日及び二十一日のは明治学院の爲めの説教會にして聴衆は前夜一七二名翌夜一一六名ありき。是等の内求道の決心をなせし者は男三十人女十二人にして、洗礼を志願せし者は男八人女三人なり。其後の集會は未だ模様明らかならざれども、必ず都合よかるべしと思はる。洗礼志願者は試験の上二月二日に受洗せしむる見込なり。(教會書記報) (六五七号・明治四十一年一月三十日)

(四—M41—2) 普通学部第二三回卒業式

◎明治学院普通学部第二三回卒業式

三月二十八日午後三時より、同学院新講堂に於て開かる。同日は開刻間近となるや、幾輛の馬車、人力車等々と押し寄せ、さしも宏壯なる講堂も、内外の淑女紳士、卒業生、在校生を以て満たされたり。式場の正面高き所には大國旗を交叉し、一面に緑葉の水々しき数株の鉢を並べ、單純なる裝飾の中に、清爽の氣頗る掬すべかりき。

式はミス・モルトンのピアノ独奏を以て、井深総理司式の下に開かれたり。斯くてランデス教授の聖書朗読、熊野幹事の祈祷、林貞子嬢の独吟及びミス・ゴースのピアノ伴奏ありたる後、普通、

『福音新報』明治学院関係記事

高等両学部成績優等者に賞品及び褒状を授与し、又寄宿舎モニトル三名に夫れ夫れ功賞する処ありき。

聽て井深総理は、厳かに卒業生一同に向ひ、学院に播かれし宗教心の、他日社会に出でて確固たる根底となり、未だ神を信ぜざる者をも信仰に入らしめ、以て神の心に適ふ人物とならん事を切望すとの意味の告辞ありて、一同に卒業証書を授与せられ、卒業生総代瀬戸高浜氏は感恩の答辞を朗読されたり。

再び奏樂あり。島田三郎氏は、近來知識學術のみ進歩し、精神的に欠陥ある今日、諸君は此の学院に在りて、幸に知識以外、學術以外の靈的能力を与へられたれば、之を以て凡ての方面に於ける深き根底として活動せられん事を希望すてふ、極めて切實なる演説を為され、ミス・モルトンのピアノ伴奏にて、林貞子嬢、ミス・ブースの合唱あり、タムソン博士の祝詞を以て式を終り、後サンダム館樓上の大広間に於て、來会者一同に茶菓の饗応ありたり。新旧時代の卒業生、此処に一同彼処に一同と談り合ひ、和氣藹々の中に全く散ぜしは六時過なりき。因に云ふ今回の普通学部卒業生は、総數七十一名にして、中二名は神学予科に入るべく、又同院高等学部に進むもの外は、^(マ)外く高等学校其他の専門學校入学志願者なりと云ふ。(六六六号・明治四十一年四月二日)

(四—M41—3) 安川亨逝去

△安川亨氏 三月三十日死去、四月一日青山に埋葬せられし由。

(六六七号・明治四十一年四月九日)

(四—M41—4) 国家的儀式と神道の問題

『国家的儀式と神道』

此は元田作之進氏が前週の基督教週報社説に於て論ぜられしところなり。多くの基督教者の頭脳に往来せしところの問題に關す。或る事情の爲めに久しく不問に附せられしものなるが、今元田氏に由りて其の議論の端緒を開かれたるは、道の爲めに深く喜ぶべきことなり。元田氏の所論を略記すれば、曰く

『憲法に於て宗教の自由を保証する國家は、其國家的行動をなすに當りて、特殊の宗教に準拠するが如き嫌ある可らざるなり。一方に於て國民に宗教の自由を許し、一方に於て特殊の宗教を強ゆるが如きは國家として矛盾の措置をなすものと云ふべきなり。

我國に於て國家が執行する所の儀式は概して神道の慣例に依るもの如し。若し神道をして一の宗教ならしめば、國家の政權を以て國民に特殊の宗教を強ゆるものなり。

仮りに國家が神道を以て國家の宗教なりとし、凡ての國家的儀式には神道の宗教的儀式を用ゆるものとすれば、之に參列すべき義務を有する他宗教の者は如何にすべきや。是れ實際問題にし、基督教徒の如き真面目に宗教を信奉するものに取りては、屢々其処置に迷ふことあり。

吾人が最も希望する所は、政府が神道を以て宗教にあらず、神職を以て宗教宣布者にあらざることを明白にし、國家が皇室の祖先に敬意を表し、國家に功勞ありし者を追憶する等の場合に用ゆる一定の儀式なることを公示し、以て宗教自由の特權を有する國

民をして、惑ふ所なく喜んで其式に参列するを得せしめんことなり。

吾人は国家の秩序と安寧を重んずるものなるを以て、吾人は基督教徒として国家の執行する神道的儀式に参列すべし。嘗て参列するのみならず、国家が制定したる参拝者の動作法に従て動作すべし。

然れども吾人が参拝するの意味は宗教的礼拝にあらずして、倫理的敬礼なり。国家は吾人に倫理的敬礼を強ゆるの権能あれど宗教的礼拝を強ゆるの権能なし。社会が吾人の心意を誤解せざらんことを希望す。云々。』

所謂神道なるものは宗教なりや。如何に弁解するも今日の神道に宗教的儀式を包含するは疑ひを容るべからず。宮廷の儀式、其の他所謂招魂祭なるものを始め、市町村に行はるる祭典等に至るまで、純然たる宗教と見紛へらるべきもの少なからず。基督教者が之に与るは恰かも神ならぬものを礼拝する如く感ぜらるるより、遂に多くの難題を惹き起し、甚だしきは宗教上の迫害に少なくとも類似せる奇禍に罹りしものさへありき。今日に至るまで基督教者は此等のことにつきて沈黙し居ることあるが、何時まで斯くであるべきにあらず。早晚大いに論ずるの必要を生ずべし。元田氏は『吾人が最も希望するところは政府が神道を以て宗教とせず、神職を以て宗教宣布者と見做すにあらざるを明白にせられれば、基督教者も喜んで其儀式に参列すべしと論ぜられたり。然れども仮令ひ宗教にあらずと法律若くは訓示によりて明示せらるること

ありとも、若し其の儀式が実際に於て宗教的ならば如何、宗教的にあらずと人の云ふに任かせて、正しく異宗教的なることに参列するは、基督教者の良心に安んぜざるところなるべし。故に余輩は元田氏の提議に一步を進めて、国家の儀式及び国民の参列するを余儀なくせらるべき礼典より、凡て宗教的分子を取り去りて憲法に示めされたる信仰自由の主義を明白にせんことを図らざるべからず。故に曰く皇室に関係ある礼典、其の他国民として吾人の与るべき儀式の宗教的ならざるを公示せんことを求むるは可なり。然れども此等の礼典儀式より宗教類似の分子を一掃せんことを求むるは精神上更に必要なるを認む、宗教の名なくも、宗教の実あらば、之を強ゆるは憲法の精神に背戾せるものと云はざる可らざるなり。(六七一号・明治四十一年五月七日)

(四—M41—5) 神学部卒業式

◎明治学院神学部卒業式 去る六日午後二時より同学院神学部卒業式舉行せられたり。来会者五十名ばかりにて、指路教会牧師毛利官治氏の演説あり、井深総理は卒業生に告別の辞を述べ、卒業證書を授与せられたり。卒業生は本科生一名、別科生三名なりき。(六七六号・明治四十一年六月十一日)

(四—M41—6) 長崎大挙伝道と東山学院

◎長崎に於ける大挙伝道 当地大挙伝道は季節入梅に近づき暑氣日を逐ふて加はる頃なりしを以て集会の成功如何あらんかと氣遣

ひしも愈々之を実行するに当り此等のことは全くの杞憂に属し三夜とも天気快晴にて其の集会には毎夜満堂立錫の地なきを以て今回の運動を終りしは偏へに神の恩寵に由るものとして吾等一同感謝に堪へざるところなり。今其の概況を記さんに协会会员は何れも今回の伝道に対して非常なる希望を属し之れが為め時に神の祝福を祈るの必要を認め一週間前より教会に於て連夜の祈祷会を催ふし一夜は一夜より伝道に対する會員の熱情を増すと共に一致協力の精神を盛んにし得たるところへ星野光多、桑田繁太郎両氏予報の如く六月六日夕鹿兒島より来着あり此夜東山学院新講堂に於て歓迎会親睦会を開き会する者百数十名席上星野氏の適切なる奨励の辞あり後親睦の筵に移りて幾多の余興などあり歓談笑語の間大に神の祝福を受け会衆心を合せて感謝の歌を歌ひつつ散会したるは同夜十時を過ぐる頃なりしが、此時吾等の心には未だ開始せざる大挙伝道の成功決して微小なるものにあらざるを予想し得たり。明くれば六月七日予て気遣ひ居りし天気も忽ち快晴となり午後八時演説会開会の時刻に先ちて会堂内座席の八分通りは已に來聴者の占むるところとなり開会頃には満堂立錫の地もなく後れて来る者は席を得ずして佇立するの止むなきに至りぬ。第一席桑田氏（宗教的信念）第二席星野氏（基督教徒の三大実験其一）各得意の雄弁を揮ひ熱切をこめて宗教生活の尊貴と其の興味とを語られ会衆に大なる感動を与へたり。翌八日夜も前夜に劣らぬ盛況を呈し人々が道を開かうとするの心層一層熱し来りつつあるを認めたり当夜は桑田氏先づ「新人格」と題して興味津々たる演説を為し

次に星野氏「基督教徒の三大実験」其二を説明せられ話説益佳境に入る演説終りて後星野氏衆中より求道の志望ある者を募りしに起て其の意志を表明したる男女七十余名中六十二名は住所氏名を記して今後真実なる求道者たらんことを誓ひたり。六月九日は今回の大挙伝道最後の集会を為すべき夜なり定刻前より詰掛けたる聴衆は会堂に満ちて堂内一の空席を余さず壁に凭りて立ちたる者も多く一種靈活の気堂内に充ちたり第一席桑田氏（基督の与ふる平安）第二席星野氏（基督教徒の三大実験其三）満腔の熱誠を披瀝して前兩夜にも勝りたる雄弁快舌を揮はれ会衆何れも靈感に打たれざるなく初夜以來引續きて來聴し、前夜求道者たるを誓ひし者の外新たに求道の意志を表明したる者二十三名を得たり。之を前夜の求道者に合すれば總計八十六名となる。今回の大挙伝道は当初より万事都合好く行はれ予想以上の大成功を以て終了するを得たり协会会员の祈祷周旋及び派遣弁士雄弁の力甚だ大なりしは論を俟たずと雖も神の恩寵著るしく現はれし為め初めて今回の如き成功ある伝道を為し得たること吾等の最も感謝に堪へざる所以なり。右は十余名の求道者に対しては今後諸種の方法を尽して研究の便宜を与へ信仰の修養を得せしめんと目下計画中に属す又右の中に已に洗礼を志願する者も出ある故本月下旬には多少の受洗者を出すべし。今回の伝道中星野桑田の二氏は婦人会及青年会の催に係る特別の集会に臨み又た東山学院講堂に於て講演を為す等各種の方面に対して大なる利益を与へられたり吾等は今回の伝道に就て神の恩寵を感謝すると共に斯る運動に最も適当なる弁士

星野桑田両氏の労を多とするなり。(教会通信) (六七七号・明治四十一年六月十八日)

(四—M41—7) 神戸神学校終業式

◎神戸神学校は十日午後三時より終業式をマヤス氏宅に挙げたり。職員生徒の外皆田、内藤の両牧師列席し、校長フルトン博士の演舌、内藤牧師の祈祷、マヤス、皆田二氏の有益なる勸話あり、茶菓の饗を享けて午後五時過ぎ散会せり。神学生富田満氏は岡崎に、山岡氏は中津に、飯島氏は布引講義所に、小野氏は神戸教会に聘せられて夏期伝道をなすに決す。讃州善通寺に伝道せられし伝道師富田源吉氏は来学期より神戸神学校に入学する目的を以て来神せられ、夏期中は専ら同講義所の為めに尽力せらるる善なり。

(六七七号・明治四十一年六月十八日)

(四—M41—8) 神学部卒業生任地

△明治学院神学部卒業生本科は佐々木謙三氏のみにて盛岡に伝道せらるべし。別科卒業生杉本登喜三氏は麻布四ノ橋に、諏訪取治氏は東北地方に、平田吉五郎氏は同地方に、松岡宗太郎氏は木更津に赴かるべし。(六七七号・明治四十一年十八日)

(四—M41—9) 内外協力問題

日本基督教会の内外協力問題

日本基督教会は前年内外協力の性質を明かにし、其の健全と認め

『福音新報』明治学院関係記事

たる方針に拠るにあらざれば、協力の成立すべからざるを宣言し、同時に従来関係ありし外国諸教会ミッションと公式上の盟約を断絶したり。而うして其の後の大会に於て旧来の情誼を重んずるの精神より、若し外国諸教会ミッションにして日本基督教会の方針と一致し、進んで協力の申込みをなすものあらば、飲んで之を迎へ伝道局をして之を審議し、且つ実行せしむべき旨を決議したり。此は日本基督教会が外国宣教師に好意を表し、彼等の為めに一方の活路を開きたるものなり。

聞くところに拠れば、米国北派長老教会の在日本西部ミッションは逸早く協力の案を作りて、日本基督教会伝道局の同意を求めたり。其の方法は遺憾の点なきにあらざれど、遂に伝道局の同意を得て去ぬる四月より所謂協力ミッションたるの資格を具ふことを得るに至れり。

余輩をして腹藏なく之を評せしむれば、西部ミッションと締結せられたる協力の約束は、恐らくは其れだけの効力なかるべきなり。

ダッチ、リフォルムド教会の在日本ミッションは所属宣教師のうち、協力の方針につきて意見区々に別れ、其の多数と本国当局者との考へも齟齬するなど、事の経過頗る面倒にて、交渉また交渉今尚ほ行き悩みの情態なり。

米国南長老教会の在日本ミッションは、所属宣教師中、協力に関する日本基督教会宣言の趣意と最も隔離せる態度を執るもの多きこととて、未だ協力を申込みをなさざるのみか、将来の去就につ

きて煩悶しつつありと云ふ。

東北学院を中心とせる外国宣教師の一体は、米国ゼルマン、リフォルムド教会に属するものなるが、彼等は北派長老教会在日本西部ミッションの其れよりも大会の方針に遠き協力案を作りて、之を伝道局に提出せり。伝道局は之に対し二三訂正を加ふべき必要を認め、其の旨を彼等の本国の伝道局員に照会するところありき。米国ゼルマン、リフォルムド教会の伝道局が斯く要求せられたる訂正に同意するや否やを知らずと雖も、其の所屬なる在日本宣教師が之につきて懊惱煩悶するところあるは疑ひもなき事実なり。彼等の去就如何。此は東北伝道に取りて関係頗る大いなる問題なるべし。

日本基督教会の内外協力問題の實際に於ける解決は、今回尙ほ落着するに至らず、彼所此所に混雜の種となりて紛議最中なるが如し。

而うして今や日本基督教会に關連せる内外交渉の問題は、更に一步を転すべき新时期に到達したるもの如し。日本基督教会は大会の決議せる儘の程度に万事を抛棄し、如何なる混雜を生ずるも之を顧みず、此の上外国宣教師の爲めには何等の勞をも執ることなく、超然高踏すべきものなりや。將た外国宣教師、之に關連せる日本伝道者及び伝道地の爲に、何等かの方法を立てて之を其の窮境より救ひ出さんとすべきか。既に外国ミッションとの關係に断絶せりと宣言せる大会が、其の後新たに協力の申込みを受くべき門戸を開きたるは、其老婆心感すべきものなきにあらずと雖

も、毛を吹いて傷を求めたるの疑ひを免れ難きのみならず、遂に西部ミッションと締結せる如き不完全なる協力の約束を爲すに至れり。之より以上尚ほ手を尽さんと欲するは余り弥縫的にて、古き酒囊に新しき酒を盛ると一般、或は其の弊害の底止するところを知るべからずと云ふなど、異論百出、目下此の問題に苦慮するもの少なからざるべし。右につき余輩は此の問題に最後の最も健全なる解決を与ふべき方法は、次の如きものなるべしと信ずるなり。

一、日本基督教会の信仰及び教会政治の主義に満足し、其の發達に貢献せんと欲する他教会の宣教師は、之を派遣せる当局者の依頼に由り、日本基督教会と伝道上友誼的關係を厚うして、多くの便益を与へらるることを得べし。此等宣教師は中会若くは大会隨時の決議により客員の席に列することを得。

二、斯の如き關係の宣教師若くは其の団体の経営に係る伝道機關を特に日本基督教会附属講義所若くは、附属伝道教会と称す。

三、日本基督教会附属講義所若くは附属伝道教会は、日本基督教会の政治機關に与ることを得ず。

四、日本基督教会附属講義所若くは附属伝道教会の爲め統計上特に一項目を設け、明白に區別するを要す。

五、日本基督教会附属講義所若くは附属伝道教会に勤務する伝道者は、日本基督教会の監督及び制裁の下にあるものとす。而うして此等の伝道者は中会及び大会に投票權を有せず。

六、附属講義所及び附属伝道教会は獨立するを待って、日本基督

教会の一個教会となるを得。

七、斯の如き親交を結べる宣教師、其の経営する伝道機関、及び其の任用する伝道者にして日本基督教会の信仰若くは伝道方針と反対なる精神を現はすときは、日本基督教会附属宣教師及び団体の名簿より之を取り除くべし。

八、日本基督教会附属講義所若くは附属伝道教会に従事する宣教師及び伝道者は少なくとも一回中会に其の事業につき明細なる報告書を出すべし。

日本基督教会と外国宣教師との關係をして円滑ならしめんと欲せば、政治的の交渉を成るべく少なくし、友誼的關係を成るべく厚くするを勉めざる可らず。此の点よりすれば協力案の如き、會議其の他政治的の交渉頻繁なるの恐れある方法は、平和を保つ所以の道にあらざるべし。且つ外国宣教師をして成るべく自由に其の為すところを為さしめ、彼等自身をして自己の事業を支配せしむるを最も自然にして正当なる方法と認むべし。然れども日本基督教会の爲めにするを標榜し、多くの点に於て之に利益を及ぼすべき性質の事業なるが故に、必要なる程度に於て之を監督し、之を制裁するは、日本基督教会の権利、否な其の義務なりと云はざる可らず。此れ内外の關係を支配すべき原則なり。上記八ヶ条に分載せる内外教會關係の規定は、少しも此等の原則と抵触するところなし。若し具体的の実例を求むれば、文部省と私立学校の關係の如し。教育は國家の重大なる事業なれば、文部省は私立学校を監督し、必要に於て其の檢閲をも為すなり。然れども其の出

『福音新報』明治學院關係記事

納及び任命等は私立学校自身之を為す。日本基督教会と外国ミッションとの關係もまた幾分か斯の如くなるべし。斯の案の如くせば現在の協力に優ること数等なるべしと信す。既に北派長老教会在日本西部ミッションと締結せる協力の約束の如きをも、此に説ける趣意と一致するやうに之を改めなば、彼我の便利なるべしと信す。況んや斯くの如くなすときは何も喜んで日本基督教会に附属して伝道するを得べきに於てをや。外国宣教師の日本に大いに有力なるべき時代は、己に過ぎ去りたり。然れども新たに外国宣教師と關係を結ぶことあらばいざ知らず、従來の行き懸りを整理し、彼我の關係を平らかにするは望ましきことなり。而うして從來提出されたる諸案一利一害なるに比較すれば、此の案の健全にして無害なるに如くものあるべからず。(六二八号・明治四十一年六月二十五日)

(四—M41—10) 内外協力に関する井深、熊野等の意見

開書

福音新報記者足下、生等茲に貴新報の余白を借りて我が教会の教師及び長老諸君の注意を促さんと欲する一問題あり、之を許容せらるれば大幸なり。

さて生等が茲に諸君の注意を促さんと欲する問題は數年來大会の議題たる我が教会と諸ミッションとの關係なり、前大会の決議に従ひ大会は本年九月末日を期して協力ミッションの伝道事業と不協力ミッションの伝道事業とを判然と區別し然して前者の全然我

が教会に關係なき事を明白にすべきなり（大会記録七十二頁）生等の知る所に依れば大会の決議に従つて既に協力しつゝある所のミッション一、今方に協力の方法に關して伝道局と交渉中の者一、然して其他の者に至りては今尚夫々その部内に於て又は所屬外国伝道局との間に於て評議中なりと云ふ、察するに來九月末日迄には各ミッション共に夫々去就を決定するならん、然かして若しも諸ミッション悉く大会の定義を受容れて協力するに至らば数十年來の懸案たる協力問題も茲に解決せられて遺憾なからん、然れども不幸にして諸ミッション中に大会の定義を承認せざる者ある場合には如何、固より大会はその決議の如く不協力ミッションの伝道事業は將來教会政治上我に無關係なる事を明白にすることを得ん、然れども不協力ミッションは我が教会と關係を断ちたるの故を以て日本を引揚ぐべきか、此の如き事は万々之なかるべし、若しも此の如きミッションが尚日本に踏留りて伝道に従事するとせば彼等は我に類似の教会を設立せんか、此の如きは前途我が国基督教の爲に有利たるべきか、教派分立の弊や既に業に明瞭にして我等須らく之を矯正すべきなり、然るに尚此上に我が国に一個の新教派を増加するが如きは我等の願ふ所に非るなり、然らば則ち我等は單に協力ミッションと不協力ミッションの區別を明白にしたるを以て未だ能く此問題を解決したりと云ふこと能はざるなり。是故に生等は本年の大会に於て左の如き一決議案を提出せんと欲す。

従来日本基督教会ニ対シ協力「ミッション」トシテ知ラレタル

者ニシテ大会ノ決議ニ從ヒ協力ミッショナルコト能ハザル者ハ關係（又ハ連絡）ミッショナルトシテ承認セラレントコトヲ大会ニ請求スルコトヲ得。

關係「ミッショナル」ト日本基督教会トノ關係ハ左ノ如キモノトス。

一、關係「ミッショナル」ハ日本基督教会信條憲法規則ヲ誠美ニ受容レ然シテ之ニ遵ツテ其信徒ヲ教導ス。

二、關係ミッショナルニ屬シテ伝道ニ従事セント欲スル者ハ中会ニ対シテ伝道ノ准允及ビ教師ノ就職式ヲ請求スルコトヲ得、此ノ如クシテ准允又ハ就職式ヲ受領シタル者ハ当該中会ノ戒規ニ服ス但中会ノ議員又ハ員外議員タルノ資格ヲ有セズ。

三、關係ミッショナルニ屬スル伝道教会及ビ講義所ハ日本基督教会ト教会政治上ノ關係ナシ、但教会統計表ニハ關係ミッショナルニ屬スルモノトシテ別ニ之ヲ掲載スベシ。

四、關係ミッショナルハ教会ヲ建設セズ然レドモ之ニ屬スル伝道教会又ハ講義所ガ教会ニ建設セラレント欲スル時ハ便宜ノ中会ニ申請スベシ、而シテ教会ニ建設セララルル時ハ即チ日本基督教会ニ加盟セルモノトス。

生等が此の如き決議案を提出せんとする趣意に就て尚一言を加へんと欲す。或は問はん、此の如き決議は大会が主張する所の協力ミッショナルの定義を無効に帰せしめんとするものに非ずやと、答て曰く否生等は之に因りて協力の定義を無視せんとするものに非ず、大会が議決したる所の協力の定義とその中に包含する所の主

義とを維持するに於ては何の淪る所なきなり、生等は飽までも此定義の至当なる事を確信するものなり、生等は決して此決議を以て協力案に代んと為すに非ず、但大会の定義に従って協力する能はざるも尚我が教会と關係を保たんと欲する所のシッションの為に更に特別法を設けんと欲するのみ。

今や教派分立の弊害を予防するの要ある事は既に言明したるが如し、生等は既往を回顧して我が日本基督教会が諸ミッション及び彼等が代表する諸教会に負ふ所勦からざるを覚ゆ、亦将来を慮りて他日再び既往を顧みる時に当り悔ながらん事を願はざるを得ず、是故に生等は教会の為に主張すべきは飽までも主張すると同時に人と和睦せんことを追求めんと欲するのみ、而して我が教会は關係ミッションの伝道事業に対して常に喜んで応分の援助を与ふべきは生等の確信して疑はざる所なり 敬具

四十一年六月二十五日

井深梶之助 星野 光多

熊野 雄七 有馬 純清

日本基督教会教師及長老諸君

(六七九号・明治四十一年七月二日)

(四一M41—11) 内外協力問題再論

内外協力問題

日本基督教会多年の懸案たる内外協力問題に最後の解決を下すべき時期漸く迫り来り、事の成行きと其の結果に焦心苦慮する内外

『福音新報』明治学院關係記事

人少なからざるが如し。此時に当り福音新報記者の論文と井深氏他三氏の開書の世に公にせられたるは、頗る時宜に適應するものなりと謂ふべし。両者の所説を比較するに、福音新報記者の言へる如く『形に於て略相似たり』とは云へ、又大に異なる所のものなしとせず。井深氏等の開書は『協力』と『關係』の二種のミッションを造らんとするにあれども、福音新報記者の所論は斯る區別を存せず、総て内外の交渉關係を一方の方針を以て統一せんとするにあり。前者は協力不成立後の成行きを憂へて活路を与へんとするにありて、其の老婆心は左ることながら、余りに過慮に失せりと謂はざるべからず。之を後者の一貫せる主義方針を以て、二つながら条理と情誼を全ふせんとするに比して其形に於てこそ似たれ、其の動機と精神に於て頗る逕庭する所ありと謂ふべし。さりながら、よしや形に於てなりとも其の意見の一致せるは喜ぶべきことにして、更に一步を進めて全然同一の態度を取ること難からざるべし。福音新報記者が「政治的の交渉を成るべく少なくし、友誼的の關係を厚くするを勉むべき」を、内外交渉の第一義とすべしとの説は、洵に我等の意を得たる所にして、斯くてこそ兩者の關係円滑にして能く紛擾を避くることを得べし。我等は内外協力の意義を福音新報記者の意見によって定め、之に準じて其の協定を進めんことを当局者に希望して己まざるなり。

福音新報記者が成るべく外国宣教師に自由の余地を与へ、彼等自身をして自己の事業を支配せしむるの方針を取りながら、必要な程度に於て之を監督し、之を制裁するの權利を主張せるは、両

者の關係を円満に維持して其の目的を全ふすべき賢明なる主張なりと謂ふべし。其の任用する人物は其の事業の性質を定むる唯一の要素にして、其の監督と制裁を嚴にするは、彼等の事業を監督する所以の要道なり。開書の提案中に「關係ミッションに属して伝道に従事せんとする者は、中会に對して伝道の准允及び教師の就職を請求することを得」とあるは、蓋し意を茲に致したるものなるべし。されどこは唯日本基督教教会所属の伝道者又教師たることを得るの道を開きたるに過ぎずして、必ずしも然るを要せざるが如し。斯くては其の監督制裁の権利、否な其の義務を全ふすること能はざるべし。我等は外国ミッションが日本基督教教会と提携する以上は、其の任用する伝道者が日本基督教教会の伝道者たるべきは当然にして又緊要なる事たるを思ふなり。

内外協力問題に關して従来二種の意見あり。強硬なる態度を取り來れる一派の人々に對して、内外人の間に一種の僻見行はれ、之を目して攘夷論なりとなす者ありしは、我等が久しく遺憾に思ふ所なりしが、今や斯る意見は教会の發達と其の勢力及責任の自覺に伴れて当然起り來るべきものにして、淺蘊なる感情より生ぜざるものにあらざること明になり、冷靜なる頭腦を以て公平なる判断を之に下すことを得るに至れるは、甚だ賀すべきことなり。外国ミッションが我國民の救の爲めに尽さんとする誠意は我等の夙に諒とする所にして、我等は彼等が虚心坦懷我が國識者の言に聞き、流言に惑はされて其の方針を誤ること無からんことを祈るものなり。而して内外交渉の問題の楔子が、如何にして彼等が我國伝道

の爲めに尽さんとする誠意を全ふせしむべきかにあるは、蓋し言を俟たざる所なり。(大谷生) (六八一号・明治四十一年七月十六日)

(四—M41—12) 山本秀煌の内外協力論

協力問題に就て

山本 秀煌

我教会の教師及び長老諸君。諸君は福音新報第六百七十九号に掲載せられたる協力問題に關する開書を読みて如何なる感想を喚起せられしや吾人は之を一読して奇訝に堪へず再読して不快の念禁ずる能はざるなり始め吾人が植村氏の提案を一読するや氏は何故斯る意見を發表せられしや不審に堪へず或は内外協力の問題に關し事予期に反し交渉頗る面倒なるに厭き厭きして協力を廢棄せんとするの案の外交辭令を装ふてあらはれしものならんと揣摩し氏が平常の持論と併せ考ふれば同情の念なきにあらざりしも大会は今更斯る意見を採用するとも思はざりしが之が協力問題の前途に勘からぬ障礙を与ふるものと思惟し痛心に堪へざりしに井深氏等の開書の出るに至り謹厚なる諸氏も亦略同一の意見を懐かるるを見て一度は驚き一度は哀みその關係する所至大なるを思ふて転た慨嘆に堪へざるなり。

植村案と井深案とは其形式に於て相似たるもその精神に於て大に異なるは福音新報記者の説の如し前者は協力問題が到底想像通り進行する能はざると看破し憤慨の余り協力を廢せんとするの意に出で後者は或るミッションが協力問題に關して行き悩みつつか

るを見るに忍びずその結果分離の不幸を見るに至らんかとの杞憂より数歩を譲りて協力以外に一種の關係をつながんとするもの如し即ち一は積極的にして他は消極的と評すべきか然れどもたとへ其精神に於て氷炭相容れざるの差あるも其形式に於て相同じき以上は其影響を及ぼすことも亦同じく是為大会が数年に亘りて審議したる決議を翻して反覆常なきを表しその威嚴を損し今後大会の決議を軽視するの弊に陥らんことを恐れ且つ不充分にもせよ切角目下進行しつつある協力問題に一大障碍を与ふるは吾人の最も遺憾とする所なり。

諸君の知らるる如く明治三十一年の大会は各ミツションと協力に關し意見の相一致し難きを認め公式に於て協同ミツションなきものとし爾後互に友誼を厚くし出来得丈相助くるの義を相守るべきを公言したりき爾來幾星霜兩者の關係毫も改まることなく又互に相衝突することもなかりしが明治三十八年の大会は何事に徹せしか頗る強硬の態度を以て協力断絶を内外に宣告し意氣衝天の勢を示したり然るに翌年の大会は翻て再び協力の主義方針を確定して門戸を開放したり是大会が殊にミツションに対する情誼を重じて外国宣教師に好意を表したるより出たるは既に植村氏の論ぜられしが如し而して爾來其方針に従ひ不完全ながらも伝道局の同意を得て協力を実行しつつある者は米國北派長老教会の在日本西部ミツションのみとす而して他は協力の申込をなすも其案に大会の方針を去ること遠くして伝道局の承認する所とならず或は未だ一回だも申込をなさず躊躇決せず將來の去就に關して苦慮焦心しつつ

ありと聞く斯くて昨年の大会が決定せし議決に従ひ最後の断案を下すべき時期切迫の今日に至りぬ。

協力問題に關する來歴右の如しとせば今後大会の此に關し採るべき方針如何そは極て明瞭なり則ち從來の決議を実行するの外なし若し幸に各ミツションが期日まで大会の決議したる定議を遵奉して協力の申込をなさば大会は之と協力すべし若し之に反し期日に至るも尚申込をなさざるミツションあらんか大会は之に對し断々乎としてこの無關係なるを宣告するのみ又何ぞ狐疑躊躇する処あらんやその善後策に關しては事頗る面倒なることあらんも大会は始より之を処置するの覚悟あるべき筈なり否あらざる可らざるなり。

今回提出せられたる井深案や植村氏の意見が第拾九回大会の議場にあらはれしならば最も妙にして多年の懸案たりし協力問題を円満に解決せしならん或は第貳拾回の大会に提出せられ現今の協力の代りに之を採用せしならば或は時機を得たる者なりしならん何となれば前大会は協力を否定したれども未だ全く無關係なりと断言せざればなり然れども一定の時日を期して無關係を宣告すべしと決議したる今日に至りては時機既に遅したとひその提議は名案たりとも吾人は之を採用する能はざるなり諸君試に思へ始め協力問題が議場に再現せしときミツションと一応協議すべしとの頗る理由ありし動議を否決して頗る強硬に協力に断絶を宣告したる大会が僅に一ケ年の後友誼を重ぜしより出でしとはいへ協力の門戸を開きし事さへ人をして奇怪の感を懐かしめしに既に協力案を

決定して一方には早や之を実行しつゝあり他方には時日を期して賛同を促しつゝある今日未だその日に至らざる前に前議を覆す如き提案を出してミッシヨンの賛同を求むるの準備をなすを得るか一箇人と雖へども之を為すを憚る況んや日本基督教會を代表する堂々たる大会に於てをや若し之を敢てせば人あり大会の挙動は恰も一旦既に離別を宣告したる妻に對して未讎を残せし夫が或は刃物三昧を以て之を威嚇し或は温言以て再縁を迫るもの如しと冷評するも吾人は之が弁解に辞なきを苦む若し万一来る大会が友誼に偏し分立を恐れ心ならずも諸氏の意見を採用して之をミッシヨンへ交渉するとするも彼之に応ぜざらば如何ミッシヨン従來の態度を以てせば再び臂鉄砲を食はされずとも限らず事是に至らば大会は何の面目ありて天下に立たんや賢明なる諸氏にして之を悟らず斯る決議を提出せられしは吾人その何の意たるを知る能はざるなり。

井深氏等の憂とせらるる所は不協力ミッシヨンが我と類似の教會を設立せば教派分裂の弊に陥るの恐あるが故なり吾人も亦之を悲むものなり然れども時と場合によりては分立も亦止を得ざるに非ずや大会が協力の方針を決定してミッシヨンへ交渉したる以来既に二ヶ年に垂とすその間ミッシヨンが此問題に關して苦慮煩悶しつゝあるは吾人の察知するところなり然れども大会が手を尽し品を換へて賛同を求むるに何故ミッシヨンは大会の方針に同意する能はざるか或者は殊更に誤解して反対の態度を取り或者は殊更に大会の方針を疑ひ然らざるも誤解又誤解その結果伝道局を畏るる

こと虎の如く詮し来れば何等適當の理由あるなく彼等の不明と私心の然らしむる所なり嗚呼宣教師諸君にして日本基督教會創立當時気概あらんか協力問題の解決何かあらんたとへ如何なる情実あるにせよ大会の協力案に賛同するを欲せざるミッシヨンあらば分立して我と類似の教會を立るも亦可ならむや吾人豈ミッシヨンの功勞を認めざるものならんや又好て彼等を遠けんとするものならんや不幸にして不協力となるミッシヨンあらばその恩義は永く感謝するも強く之と關係を結ぶことを好まざるなり然れどもミッシヨンにも人あり吾人の聞く処によれば協力に最も困難なりし南部プレスビテリアン教會さへも賛同に傾きしと云ふに非ずやさらば分立云々は眞に杞憂たるなり。

終に臨み新議案公表の時期に關して一言教を乞はざる可らざることあり諸氏はたとひ又協力の場合にもかくすべしとの腹案を懐かれしにもせよ何故之を發表することを大会まで猶予せざりしか又何故輕井沢に於るミッシヨン會議の前に之を發表せられしや聞く処によれば各ミッシヨンの時期の切迫するに随ひ大に考慮を費し協力に賛成するの傾向ありと果して然らば輕井沢會議は勝敗を決する天王山なりしなり若し諸氏の案にして發表せらるるなくば協力説の勝利となりしやも知る可らず然れども既に諸氏が斯る意見を懐かるるを知らば賛成の宣教師も躊躇せざる可らざる羽目となるべし然らばたとへ大会が之を採用せざるまでも協力問題解決の期を誤りしは惜みても尚余りありと云ふべし謹て井深植村の両先輩並に教師長老諸君の教を乞ふ。(六八二二号・明治四十一年七

月二十三日)

(四—M41—13) 高輪教会近況と岡見辰五郎の逝去

◎高輪日本基督教会 八月には諸学校休暇なりしため、礼拝出席者の数減少し、又牧師田島氏休養の爲め房州地方へ避暑に赴かれたれば、留守中は松永、秦の諸氏代りて説教せられたり。夜の伝道説教は例年の如く八月中休会せり。

日曜学校は久しく休業中なりしが、九月に入りてより開校せり。従来日曜学校は生徒数非常に増加し教場狭隘なりしかば、七月中約六百元を以て会堂の裏に集会場を建築せり。是れより日曜学校は勿論其他の集会の爲めにも非常の便利を得る事と楽み且つ感謝し居れり。此費用は兼て醗集せし誕生費寄付金及び会員の臨時寄附金を以て充てしなり。

八月七日会員岡見辰五郎氏死去せられたり。氏は教会最初時代よりの信者にして明治十五年頃には伝道せられたる事もありき。九月十三日男女二名受洗せり。男子は久しく支那に在りて支那語通訳官たりし人なり。日曜日午前の礼拝には百名内外の出席者あり。同日の夜は四十名ばかりの集会にて、牧師は『求道者に告ぐ』と題し、詩第五十一篇ダビデの懺悔の詩によりて罪と赦とを説かれたり。秋季は是までの如き大挙伝道風の伝道法によらず、しんみりせる方法によりて結果好き伝道を試みんと計画中なりといふ。(六九〇号・明治四十一年九月十七日)

(四—M41—14) 井深の内外協力再論
再び内外協力問題に就て

明治学院に於て 井深樞之助

福音新報記者足下 曩に熊野星野有馬氏等と共に貴紙上に於て内外協力問題に關して卑見を開陳し我が教会の教師長老諸氏の注意を促し申候処其後間もなく山本秀煌皆田篤実の二氏は同く貴紙上に於て各之に反対の意見を發表被致候或は其他にも反対論の顯はる事あらんかと窃に待居候得共今日迄之れ有るを不見且大会の期日も切迫致候に付右両氏の議論に對して簡約に答弁可致候

楮山本氏の議論は随分長文なれども要するに反対の理由は左の二点に帰着致候様存候

一、『大会が数年に亘りて審議したる決議を翻して反覆常なきを表しその威厳を損する』の恐れある事

二、『折角目下進行しつつある協力問題に一大障礙を与ふ』る事されば此二点に於て可成簡約に弁明可致候第一若しも山本氏の論ぜらるる如く我等の提案が果して大会の決議を翻して協力の定義を放棄し若くは既定の協力案を廢棄せんとする者ならば実に朝令暮改の議は免れざるべく従って大会の威厳を毀損するの恐も可有之候然れども我等の提案は既に開書中にも弁明したる如く決して此の如き性質の者に無之候我等は毫末も大会が議決したる協力の定義及び其中に包含せらるる主義を放棄せんと欲する者に無之候否、之を維持するに於ては敢へて他に譲らざる覚悟に候唯大会の議決したる定義に従って協力する能はざるミッシヨンある場合に

於ては之が為に特別法を設んと欲するのみに候そは固よりミッシン
 ヨンに対する善意に出るに候乍然其れが為に我が教会の権利又は
 名誉を毀損する事は無之と確信致候

山本氏は万一来る大会が生等の意見を採用し之をミッシンへ交
 渉するとするも彼之に応ぜざらば如何、従来の態度を以てせば再
 び臂鉄砲を食はされずとも限らず事はに至らば大会は何の面目あ
 りて天下に立たんやと被申候

是は如何にも急所を突れたる様に見え候得共全然誤解の結果にて
 一片の杞憂に不過候何となれば我等の提案は大会より何事もミッ
 ションに対して要請談判するを必要とする者には無之候大会若し
 之を採用せば単に其趣をミッシンに通知すべきのみに候、され
 ば「再び臂鉄砲を食はさる」と云ふ事は万々有得べからざる事
 に候故に此点に就ては全く安心せられて可なりと存候

第二に氏は生等の提案は協力問題の進行に一大障碍を与へたりと
 被申候そは何故か甚だ明瞭ならざれども推察するに折角奮発して
 協力仕懸けたるミッシンも此の如き議あるを見ては二の足を踏
 み協力を見合はずに至らんとの意味ならん乎、多数の外国宣教師
 中には或は此の如き感想を惹起したる者ある哉も難計候然れども
 生等の所信に依れば協力せんと欲するミッシンは此の如き議案
 の有無に拘らず協力致すべく又或ミッシンは到底大会の定義に
 従つて協力せざる決心なる事をも確知致候此の如きミッシンに
 對しては大会は断然その決議を實行すべきのみ何も之に對して遂
 巡躊躇するの必要は無之と有候但「その善後の策に關しては事頗

る面倒なる事あらん」とは山本氏も認めらるる処なるが氏は之を
 如何に処置せらるる御考案なる哉生等の承知致度はその「事面
 倒」と認めらるる所の善後の処置に候「大会は始より之を処置す
 るの覚悟あるべき善なり」と申され候得共善後策には単にその覚
 悟のみにては役に立不申、適當の処分法を要し申候、生等が曩に
 卑見を公けにして諸君の教を乞ひたるは其必要を感じたるが為に
 外ならず候生等の懸念する所は大会が単に無關係の決議を為しそ
 の決議を為放ちたるのみにては表面上には無關係なれども實際は
 従来ミッシンが經營する所の伝道事業即ち未だ自給独立する能
 ざる伝道教会講義所及びミッシン監督の下に伝道しつつある幾
 多の教役者と日本基督教会との間には種々の關係ありて直ちに其
 關係を断絶するは容易の事に非ざる可くその結果三十一年の大会
 が我が教会と各ミッシンの間に協力なしと宣言しながら其後依
 然として旧態を改めず数年後に至りて再び協力問題を議決するの
 必要を實驗したると同轍を踏ん事に候それよりも寧ろ此際協力ミ
 ションと不協力ミッシンの區別を明白にすると同時に不協力
 ミッシンにして尚今後も我が教会と關係を維持せんと欲する者
 あらば既往を顧み将来を考へ之が為に特に門戸を開きその關係を
 判然と定め置く方得策と思考致候然して数年の後は協力ミッシ
 ヨンと關係ミッシンとその成績熟れが最も佳なる乎その得喪は
 實際上に於て自ら頭はれ遂には熟れか一方に歸し或は亦教会と伝
 道事業の發展次第にては内外協力は全然過去の問題となる哉も難
 計候

山本氏は又何故に大会を待ちて後に此案を発表せざりし哉と尋問被致候得共此は格段に深き理由ある次第には無之候申す迄も無く内外協力問題は我が大会に於るの一の重要問題故突然之を大会の議場に提出して軽忽に議決して去るが如き事なく可成丁寧に可成靜平に之を研究するの余地あらしめんが爲に大会開期に先ちて之を発表したる次第に候

又何故に輕井沢のミッション會議前に之を発表したるか、若し之を発表せざりしならば或は協力説の勝利となりしやも知るべからずと被申候然れども元來協力談判は氏も熟知せらるる如く大会対ミッション會議の交渉には無之、伝道局と各ミッションとの個別談判に有之候夫れ故協力問題は輕井沢會議に於て決定せらるべき(縦令その議論ありとも)者には無之候實際聞く所に拠れば本年の輕井沢會議には内外協力の事は議題とは成らざりし由に候山本氏は生等の提案と貴新報の提案とを一束にして議論被致候乍然同氏自身にも認めらるる如く其間に多少相違の点も有之候然して小生の茲に弁じたるは単に生等自身の立場に有之候間此段御記憶被下度候

皆田氏の御論も熟読致候得共その要点は山本氏の夫れと大差なき様に感じ申候但同氏は終に臨みて生等が「突然斯る提案を為すことの利害の上より考へ徳義の上より考へ日本基督教会を思ふ所以の道に非ず又外国ミッションに對する道にもあらざる事を断ずる者なり」と断言被致候得共利益上の意見は既に弁明致たる如くに候然して生等が果して日本基督教会に對し又外国ミッションに對

して徳義、上道を失したる哉否哉に就ては敢へて自ら弁ずるを好まざ計して教会一般の公平なる判断に任せ可申候敬具(四十一年九月二十四日)(六九二号・明治四十一年十月一日)

(四—M41—15) 鉄道青年会の成立

◎鉄道青年会 青年会同盟中央委員長井深梶之助氏、東京青年会々々江原素六氏を始め、帝國鐵道庁、東京電気鐵道の重なる人々によりて發起せられたる鉄道青年会なるものを設けられたり。同会は獨立經營にて日本の青年会事業中全く外国に資金を仰がずして成立せるもの第一なりといふ。

其の目的は鐵道其の他之に關係ある事務に従事する青年の間に基督教の主義精神を以て其の風紀道徳智識身体の各方面に亘りて改善發達を図るにあり。其の事業は講演會、研究會、讀書會、慰勞會等を開き、尚ほ種々の計画もある由。本部は神田区美土代町三丁目三番地なり。而して益富政輔氏は其の専務幹事兼講師となられたる由。(六九二号・明治四十一年十月一日)

(四—M41—16) 山本秀煌の内外協力再論

再び内外協力問題に就て

山本 秀煌

我教会の教師及び長老諸君生が井深氏の協力問題に関する高説を掲載したる福音新報を手にしは実に十月二日の夕刻なりき是より先き井深氏の通信中に氏の協力問題に関する説の再び紙上に載

せらるべしとの報ありし故直に該新報を閲読して氏の意見ある処を了知するを得たりしが之と同時に小生の疑惑を益深からしむるに至りしは誠に遺憾に存候就ては直に稿を草して井深氏及び諸兄の教を乞はんと思ひしが公私の業務に妨げられて意の如くならず遷延以て今日に至り空く時機を失し候或は恐る是稿の紙上に掲載せらるる日は既に大会が適當なる解決をなしたるの後にして十日の菊たらんことを然れども問題は重大なり之が為め焦慮せらるる諸君渺ならずと思惟候につき大会に出席せられざる諸君の高覽に供せんとて敢て是稿を草し候

井深氏の高説に関し生の疑惑する処の第一は大会が議決したる定義に従つて協力せざるミッションある場合には井深案の如き特別法を設くることは果して大会の決議に矛盾しその威嚴を毀損するの恐なきかに有之候特別法の可否は暫く措き昨年の大会が本年九月末日に至るも尚協力せざるミッションの全然我が教会に無関係なるを明白にすと決議しながら今更特別法を設けて関係(又は連絡)ミッションを承認するを得るか井深氏はその提案の決して協力の定義及び其中に包含せらるる主義に戻るものに非ずして果して然るや否やは頗る疑問に候よし数歩を譲りて井深氏の説に同意するも協力案に賛同せざるミッションを無関係なりとせし昨年の大会の決議に反することは明白なりと存候生等も亦ミッションの功勞を感謝するものなりミッションに好意を有するものなり出来得べくば何とかして関係を存し度思ふこと切なり然れど事今日に至り不幸にして大会はその関係を維持するの道なきを如何にせん、

若しミッション方より大会に対しその決議の主義に従ひ我に従ひ協力し能はざる事情を陳述して大会に再考を請求するか或は井深案の如きものを提出せられれば大会は慎重に之を審議するの余地あり然れども如何に好意を有するも我より進で別法を提議するの余地は無之と存候

その第二は井深氏の提案は大会若し之を採用せば単に其趣をミッションに通知するに止まるとの御説に御座候単に通知するのみとするもミッション皆之を承諾すれば兎も角も各ミッションが一同に或はその中の二三ミッションが之に不同意を唱ふることなしとは井深氏も断言し能はざるべし斯る場合には又更に特別の特別法を提出するや或はその時に至り全く関係を断絶するや今日協力し得ざる或るミッションはたとへ特別法が大会にて採用せらるるものに賛せずして自然分離するの止を得ざるに至り候かと存候若し然らば今年分離するか昨年分離するか単に遅速の差あるのみと相成候生は今井深氏提案の内容を議するを好まざるも勢其中の或るケ条に触れざるを得ざることと相成候則ち該提案の骨子たるケ条によれば我等の同勞者にしてミッションの下に働かるる諸君の地位の極めて憫れなるものとなることに候夫の諸君は中会に属することを得るも斯くせば義務ありて権利なく又或は中会に属せずしてミッションに専属し得るが故に勢我教会に対する同情も薄くなり知らず知らず種々の弊害を生じ果⁽³⁾とは分離の発案は宣教師より出ずして我同胞たる教師伝道者の口より出るの奇觀を呈せんことを恐る要するに井深氏の提議は単に通知するのみに止まらば版鉄砲を

食はさるるの恐れはなからんも空中に向て発砲するが如く何の手
応へなき場合もあらんかと存候

その第三は井深氏提案発表の時機に關することに有之候成程輕井
沢會議には内外協力の事は議題とは成らざりし由に候議題とする
こと能はざるも互に相談することあらざりしは訝しき事に存せら
れ候そは兎も角も實際その事なかりしとせば此は生の杞憂なりし
とするも井深氏の提案が九月三十日より數ヶ月前に発表せられし
は確に協力の進行上一大障礙となりしと相信じ候數ケのミッショ
ンの中には此の如き議案の有無にかかはらず到底大会の定義に従
つて協力せざる決心のものもありしならんされど之が為め協力の
申出を見合せたるミションあるも事実なりと承り候凡そ物事にし
て少しく面倒なる事は所謂危機一髪と云ふきはどき場合に至らざ
れば決せざるものに有之候且つ人の氣合と云ふものは実に不思議
のものにして擊劍ならばヤツと掛声を挙るとき勝敗を決するが如
く断呼たる決心を以て協力を促しヤツと掛声を発する氣合ありし
ならば存外容易に成功したるやも知る可らず成べく丁寧に研究す
るの余地あらしめん為めとの御説は御最なれど協力進行上の障害
となりしは甚だ残念に存候殊に之が為め教会及び教役者の意氣を
挫折せしことは少なからぬ損害(ごうがい)として我浪花中会には著しく其
微候相見え候

善後策に關し如何なる名案あるかとの質問には少なからぬ当惑を
感じ候さりながら他の中会はいざ知らず我浪花中会は之が良法を
案出せんとて当局者は頗る苦心し之が為め教役者及び教会の意氣

も頗る振ひ来り期日の迫るに至り伝道局の通知次第処決するの寛
悟なりき若し伝道局員を始め我教会の教役者及び長老諸氏が相一
致して之が善後策を為すに熱心ならば必ず得るところあるべしと
信じ候斯ることは慎重にせねばならぬは勿論の事ながら余り慎重
に過ぎ大事をとり金棒にて石橋をつついて渡るが如き態度にては
到底物にならぬと相考へ候出来難く見ゆることも熱心を以て勢に
乗ずれば不思議の成功を見るものに候教会の独立及びその維持も
全く此の氣合にありと存候

終に終に臨み一言し度は明治三十一年の決議は大会とミッショ
ンとは直接に協力の実なしと決議せしも同時に中会とミッショ
ンと協力することを勧告するの意を表し殊にミッションに對しどこま
でも好意的關係を維持することを切望したる頗る穩当なる決議に
して今回の如き無關係云々の決議等をなせしことなく隨而協力な
きものと認めざりし故別に善後策を議せしこともなく時機を見て
協力の実を挙げんとの意なりしが如しその決議の異なるところ明
なり謹而諸君の高論を乞ふ

(六九四号・明治四十一年十月十五日)

(四一M41-17) 内外協力問題の日基大会における決議

◎日本基督教會第二十二回大会(中略)

△十三日午前九時聖餐式を守る。貴山幸次郎氏の司會にて井深氏
の祈祷あり。多田素氏説教せられ、一同聖餐を守れり。式後三四
名の祈祷ありたり。

十一時より議事に移る。(中略)
決議の重なるものは左の如し。

(中略)

一、伝道局より協力問題の経過につき『北長老派西部ミッシンより提出せる協力案は伝道局にて承認し已に去る四月より浪花山陽両中会にては協力委員会を開き協力伝道を実行せり。其の他のミッシンは尚ほ手続中にて未だ何れも実行の運びに至らず』との報告ありたり。

右につき協力問題解決延期の提議出で、議論の末『協力の件につきミッシン側よりの書翰に本国との交渉未だ結了せず暫らく延期せられたしとあり、右の理由に依り、諸種の事情を参酌したる上、大会は協力せざるミッシンの伝道事業に関して採用したる決議の実施を來る明治四十二年三月末まで延期すること』となれり。

(後略)

(六九五号・明治四十一年十月二十二日)

(四—M41—18) 神学教育の独立を論ず

伝道者の欠乏と其の養成

パウロの如く天幕を造りつつ伝道に従事する場合は自から別問題に属す。俸給を以て支へらるる伝道者と金銭を以て維持せらるる伝道機関とを用ひて伝道を經營するものにして自己の資力を量らず、漫りに伝道に従事せば其の弊害百出、甚だしきは罪惡に陥ることなきを保せず。然れども之よりも更に悪しきは、之を托すべ

き人物なくして伝道を開始し、必要に迫られて已むことを得ず主の事業を品性、学識ともに其の人にあらざるものに托することなり。伝道は人物の選択を重しとす。適當なる人を得ずんば、着手せざるに如かず。已に着手したるも之を廃止するを躊躇すべからず。苟くも一時の急を補はんとして、人を伝道に濫用するは主の事業を害し、良き伝道者の出づべき路を杜絶するの結果あるを免れ難し。今日伝道の急務、良き伝道者を養成するより甚だしきものなし。日本基督教会に就いて之を見るに、按手札を受けて伝道するもの百十六人。日本基督教会は男女老幼打混じて會員百六七十人毎に一人の堂々たる教師を有す。教師、伝道者を合算すれば會員七八十人毎に一人の主任教職者を有する割合なり。而うして無牧の教会少なからず、主任者を得ざる伝道地多し。故に見るべし、伝道者の数少きにあらす。伝道者其の人を得ざるなり。伝道界は実を結ばざる無花果樹を以て空しく地を塞がれたり。之が爲めに力ある人、伝道に身を委ぬることを躊躇するに至る。多くの弥次馬入口に充滿せるが故に、非常なる方法を採り、『屋蓋を取り除』かざれば、伝道に身を寄すること能はざるなり。不適當なる人を濫用するの弊害斯の如し。良き伝道者を養成するの必要甚だ切迫せること以て見るべきなり。

日本の基督教徒は教会の独立を重んじ多くの教会をして外国宣教師の手を離れ得るの地位にまで進ましめんと焦慮りつつあり。然れども教会及び之に従事する伝道者が日本人の資力によりて維持せられ基督の指導の下に自由に發展することを得せしむること必

要なるとともに、否な必要の其れよりも更に甚だしく切迫せるは伝道者の養成と之を養成する機関との独立なるべし。教会の独立を図りて、神学校経営の独立なるべきを忘るるは解す可らざることなり。日本に於ける基督教の独立にして健全なる発達は、良き伝道者を養成するに適當なる神学教育の機関を設立するにあり。

伝道者養成の設備独立することを得ず、教会を培養するの根本事業たる神学教育独立せずして、僅かに教会の維持にのみ目を着け、其れさへ独立せば可なりと云ふが如き態度は、識者の笑を招くべし。組合教会は独立を標榜して誇となすものなり。然れども其の伝道養成の機関は果して健全に独立しつつありや。日本基督教会は其の年来腐心せる協力問題につきて略ぼ解決したるが如く揚言すれども、實際に於ては其伝道者養成機関なりと目せらるる二三の有益なる学校は全く外国ミッションに依頼しつつあり。彼等は外国人教授の給料と学生の資金との外辛うじて自身の経営によりて維持せらるると聞多たる同志社の神学校に比すれば、少なくとも此の点に於て劣れりと云はざる可らず。

日本の基督教界の神学教育に於ける唯一の独立機関たる東京神学社の如きも未だ教会の独立に熱中する人たちの同情を得ること多からざるは、如何なる故ぞ。神学教育の独立は教会の其れに次ぎて起るべき大いなる問題にあらずや。(六九六号・明治四十一年十月二十九日)

(四—M41—19) 横田貞治の帰国

『福音新報』明治学院関係記事

△横田貞治氏明治学院の出身にて多年米國に勉学し本年ユニオン神学(校)を卒業して帰朝せられたり。尚ほ同氏は此程より東京神学社の助教授となられたり。(六九八号・明治四十一年十一月十二日)

(四—M41—20) 熊野雄七氏の懐旧談

余の書生時代(上)

△余は肥前大村藩のもので、藩命を受けて漢学を研究する為め、明治元年上京した。若年ではあったが戊辰の役にも参加して諸所に戦つたことである。乱取つて郷里に帰り、後間もなく旧藩の数名の青年とともに出かけたのだ。其のうちには今函館の裁判所長をして居る一瀬君なども居た。彼は仏学を修める為めに藩から撰ばれたのである。余は中尾大一郎君(内務省などに出て重用されて居たが今は故人となつた)と共に安井息軒先生の塾に入つて漢籍を修めて居た。

△然かしつづく時勢の発展して行く有様を見るに、歐洲の文物は日に月に輸入せられ、藩なども何時まで継続するか解らなくなつた。そこで漢学などを修めて居るのは何んだか時勢に後れてつまたぬことのやうに感ぜられた。余は寧ろ慶応義塾に入った方が後の為めに好からうと考へた。然かし中尾君は藩命に背いてはいかぬと始めは躊躇したが、遂に説き伏せて二人は安井先生のもとに行き、藩命によって廃学せねばならぬやうになつたと自ら白らしく嘯言をいった。すると先生は余の父が曾て先生の門に学び、

其の塾長までもして居たものだから、特に余に目をかけて居られたので余程惜まれた。然かし斯うなれば何うあつても志を貫かねばならぬと、二人は先生の方を辞つて、当時新銭座にあつた慶応義塾に入學した。

△所が安井の塾には余等の外にも同藩のものが居つたので、其の連中が余等のことを藩に密告した。藩の方では余等と呼び出して叱りつけ、安井の塾に復へらねば學資を差止めると云ふ。余等は何うあつても帰ることは出来ぬと剛情を張る。遂に學資は停止せられた。中尾君の家は資産家であつたが其の親爺と云ふは余程頑固な人であつたので、内に學資を願つても聞き容れぬ。そこで二人の學資は全く絶えた。三ヶ月の間は自分の持つて居た衣類や書籍などを売つて僅かに支へて居た。塾に居る余力がないので藩の屋敷の長屋に居た。然かし其のうちに藩の処置も余程緩かになり、余等は改めて英學を研究せよとの命を受けることとなつた。恰度其の頃義塾も三田に移つたので、余等も一緒に其所に移つた。ところが當時の慶応義塾の教育は只だ英書の訳読をするといふに過ぎなかつた。本當に英學を修めやうとするに甚だ不十分である。そこで余等は何うかもつと正則に研究したいとの慾望が起つて、大学南校に入らうかとも思つたが、更に直接外人に就いて學ぶに優つたことはなからうと考へ、横浜に出かけるやうになつた。中尾君は藩からは許されたが、親が許さなかつたので、大變心配し遂に肺病に罹り一時帰省し、後ち再び上京して仕官した。

△余は江頭其の他三四人の同藩の青年を伴れて横浜に行った。当

時外国人の通弁か何かして居た八雲井雲八と云ふ老人の周旋で、或る外国婦人につきて英學を學び始めた。それでは何うも物足らぬところから、又八雲井老人の周旋で山手二百十二番の學校（公立女學校の前身）のピヤソン女史に就いて教はることとなつた。

△慶応義塾に居た頃瀬谷と云ふ男が聖書を持つて居て、皆なで珍らしがうたつたこともあるが、まだ読んで見たことはなかつた。然るにピヤソン女史のもとに行つてから、之を読み始め女史は又之を解してくれる。或るとき日曜の夜説教があるから來ぬかと招かれる。其所で始めて基督教の説教を聞いた。当夜の説教者はジェムス・バラ氏であつた。今でも忘れないが、同氏は善きサマリヤ人の話を妙な日本語で説いた。其の説教によりて基督教の道德の一端を知つて多少感服した。然かし一向真面目に之を聴くと云ふに至らなかつた。其の頃まだ洗禮は受けて居なかつたが、其の準備をして居た人々のうちには小川、奥野両氏を始め、篠崎、押川、吉田、竹尾、櫛部、佐藤（一雄、今は秀顕）戸波（兼男）などと云ふ人々が居て、説教後皆なが祈りをする。余は其れが可笑しくて堪らぬ。慶応義塾に居た頃歴史を學んで、宗教の何ものかといふことは幾等か解り、基督教に対しても昔のやうな偏見は持つて居なかつた。然かし之を信ずると云ふ氣にはなれない。然るに皆なの祈つた後で、バラ氏が熱心に祈つた。其のうちに今此の席に教のことが解らないで笑つて居るものがあると云ひかけた。さあ余等のことを祈るのだな、恰度余等の上に神の罰でも祈るだろうと思ひ設けて居ると、豈に囃らんや、バラ氏は彼等は為す所を知

らないから笑ふのです、神よ何うぞ彼等を赦したまへと祈った。敵を赦す。余は大に驚いた。一体仏教の高僧などでも皆な教に反対するものに対しては其の罰を願ふが常であるのに、基督教では却って其の敵を赦す。之が深く余の心を刺激した。此の動機に馳られて余は遂に心を潜めて基督教を研究するやうになった。

△其から余はブラインといふ温厚な婦人がバイブル・クラスを開いて居たので之に列なる。またビヤソン女史、バラ氏等の宅にも出かけて教を聞いた。当時はまだ基督教の用語が一定して居なかつた。聖書の翻訳は勿論、信仰告白などを翻訳する適當の語が見付らぬ。余は漢学を修めて居た書生であつたから、漢訳の聖書を読んで、其の翻訳を助けて居た。余は直接に聖書の翻訳に従事したのではない、只助言したまでであるが、其の爲めに余程聖書を勉強した。明治五年正月の初週祈祷会が当時道を学んで居たものどもの心に非常な信仰を起し、日本に於ける最初の教会（今日の海岸教会）を設立する基となった。之が所謂リバイバルとでも云ふものであらう、其の祈祷会は実に非常な精神に満ちたものであつた。余は其時にはまだ洗礼は受けなかつたが、教会が設立せられて二ヶ月ばかり後には受洗した。

△バラ氏の所には色んな人物が出入した其の中には僧侶も少なからず姿を変へて入り込んで居た。真宗の或る管長もあつた。現に教会の執事にまでなつた二村と云ふ男は、仏教徒の探偵であつた。西尾藩の殿様の御附きをして居た室賀といふ人は、実に立派な祈りをした。余はバラ氏に対して今も矢張り恩人と思つて居る。氏

の祈りが余の信仰を起す動力になつた。其の説教は秩序もなく、説教から云へばなつて居なかつたであらうけれど、兎も角火があつた。人を引き着ける力は豪いものであつた。予言者的ところがあつた。後には余も進歩したから、随分バラ氏の遣り口についても、其の思想に就いても感服せぬところがあるが、尚ほ當時のことを憶ひ起せば懐しい愉快な心持がする。（七〇〇号・明治四十一年十一月二十六日）

余が書生時代（下）（熊野雄七氏懐旧談）

△余は基督信者になつたため個人としては、種々の艱難に出逢つた。前にも言つた如く余は藩の命によつて横浜に行つたので、日々の学資も豊かであつた。藩から毎月十円送つて来た。当時の書生で十円の学資を貰ふといふのは贅沢な方であつた。其のうちに廢藩となり、親の許から学資を送つて来た。其の外に外国人に日本語を教へて居たから、生活上の艱難はなかつた。然かし陸奥陽之助（宗光）氏が神奈川県令であつた頃、基督教徒に対する迫害が起つた。固より同氏が基督教徒に対して悪感情を持つて居たと云ふのではなかつたやうである。當時また所々で天主教徒が召捕られた。然かし英国公使バックス氏が之に就いて八かましく抗議を申込んだので、囚人を放免した。外交上己むを得ずして此に出たので、内実は矢張り信者を苦しめて居た。かの渡辺昇氏が台長となつて居た弾正台で、中々厳しく糾問して居た。かの二川一騰氏なども此の方で捕へられたのだ。横浜にも近頃は耶穌信者が

出来たといふので諸方面に探偵が這入る。取り調べの上投獄せよとの命も出たとのことだが、外交上の關係で其れは遣れなかつた。△廢藩後ではあるが余は以前から藩と深い關係があつたので、時々呼び出されることもある。或る日問ひ合はしたいことがあるから来いとの命があつた。其の頃余は同藩の學生を世話して居たから或は其の様なこと知らんと榮觀して出かけて見ると、麴町区永田町の楠本正隆氏の宅に行くと云ふことである。何事だらうと思つて行つて見ると、藩のものが集つて居る。そして余に向つてお前は耶穌を信ずるかと審問する。もう其の筋では調べ上つて居るが、よく考へて見よ、お前は藩命を受けて遊学して居る身ではないか。大村藩には成るほど以前耶穌の信徒もあつたけれど、内亂後改宗せられた君公は長崎総取締りまでして居られるではないか。其の上お前の家は耶穌教徒を退治した功勞のあつたもので、お前の親たちも此の事を聞かれたら狂氣せられるであらう。お前は家柄でもあるから行く行くは出世させてやらうと思つて居るのだ。此の信仰を全く廃めよと迫まられる。余はほとほと困つて了つたが、然うなると妙なもので意地になり、何うあつても此の信仰は抛てない、諸君の御世話は受けぬと云つて、忽々辞して帰つたことがある。其の後余は同藩のものから蛇蝎の如くに憎まれた。△其の頃妻の兄が国に帰るといふので、手紙を托して其の顛末を詳しく親の許に報じた。すると非常に之を悲んださうだ。余は折々基督教の書物を送りなどして、あまり直接に伝道はしなかつた。或るときバラ、プラインの諸氏が長崎に行つたことがあるので、

親に何うぞ余の先生に逢つて呉れと云つて遣ると、矢張り自分の子が世話になる先生だと思ふと逢つて見たくなつたのであらう、態々長崎に出かけて尋ねた。すると丁度出帆せられた後であつてバラ氏などには逢われなかつたが、其の宿がスタウト氏の家であつたため、同氏と近づきになり、其から瀬川氏などにも逢つて教を聴いた。明治八年余は親たちをも横浜に迎へたが、中々信者にならなかつた。明治十八年に及んで到頭受洗した。

△大村藩には天主教徒が随分抜つた。田舎までも行はれて居た。大村家のうちにも熱心な信者多く、君公の弟で羅馬に行つたものもある。又羅馬に骨を埋めて居る同藩のものもある。徳川氏は嚴重に此宗門を禁制する方針であつたから、其爲に大村藩は邑を刪られたこともある。然かし代が替つて今度は反対になつたけれど、其の領内には矢張り耶穌教徒が多いと云ふので、幕府では之を快からずと思ひ、動もすれば大村の領をも没取せんとする有様である。それで愈よ江戸から宗門に關する奉行を長崎に遣はされた。恰度其の時に余の家の数代前の人で、福田十郎左衛門といふものがあつた。十歳のときに家老になつたといふほどの家のものであつたから、進み出でて何うか私に托せて下さい、教徒を退治し、其の功によつて嘆願し、大村家を安泰にし奉ると申した。そして若し長崎に来て居る奉行から言質を取つたときは、大村城下の時津の港から音楽を奏して帰ると約束して出かけた。随分亂暴なことをして基督教徒を迫害したらしい。其の上で奉行の許に赴き、嘆願に及んだ。すると奉行の方では已に幕府から命が下つて居る

ので動かされぬといふ。十郎左衛門は役人が立ち去らんとする袴の裾を掴んでじっと睨んだ。身の丈高く相貌中々にいかめしいものであったから、役人も恐れをなしそれでは必ず其の様に取計らうであらうと約束した。それで十郎左衛門は時津から音楽を奏して帰って来た。君公痛く之を喜ばれ、手を取って其の功を賞せられ、且つ小松を根引し、扇に乗せて与へられた。其れから余の家の定紋は扇に松の形を用ひることとなった。是れが余の家は耶蘇教征伐に功勞があると云はれた所以である。

△明治五年三月十日横浜に始めて基督の教会が設立せられた。余は其の時まで会員ではなかったが、相談には与つて居た。之を日本公会と名づけたのは、小川義綏氏の発言であつた。我々は外国のものでなく、又宗派にも属せぬことを標榜する為め日本公会と名付けたがよいとの主張であつた。それで色々の宗派の人が来て居たが之に遊説を試み、合同せんことを勧めたことである。グリフヒス博士などは大いに此の主張を賛成し力を添へてくれた。當時已に信者は外国人の助けを受けぬと力んで居た。学生などが學資の補助を受けるにも、宗派的のものなら受けぬ、基督の名なれば受けようとして居た。押川君と余とは聖公会の宣教師に遊説に出かけた。ウキリアムス氏(老監督)は貴方がたの教会は間違つて居る、真正の教会ではない、天皇の御紋は菊だ、外のものを付けてはならぬ、基督の教会も其の通りだと中々頑固に反対せられた。長老派でもカロゾルス氏の如きは随分頑固では非長老教会を建てねばならぬと云つて居た。ヘボン氏の宅で宣教師会が開か

れたときの如きも、カロゾルス氏が極力反対したので、日本の基督教にも色々の宗派が出来るやうになった。明治七年にルウミス氏が長老教会を設立した。余等は其の教会員に向つて其の非を論じた為め、ルウミス氏から叱られたこともある。

△新島襄氏を日本公会の牧師に聘せんとして、どう間違つたか其れが同氏の手許に達せなかつたさうだ。帰朝せられたとき余等は其の英語演説を聴いた。また余等が下宿して居た牛の乳屋と云ふところに同氏を招待して、教会の合同のことを説いた。其の後押川、篠崎二君と余とが出かけて東京の馬喰町で同氏に手詰の談判をした。其のとき同氏は已に米国の友人と約束して居るから出来ぬと云ひ、また学校を設立することを漏らされた。其の後日本基督教会と組合教会との合同の話が九分九厘まで纏り、日本基督教会は新教会で大会を開き満場一致で之を決議し、神戸に開かれた組合教会總會の決議の電報せらるるのを待つて居た。要領を得ぬので井深、植村、イムブリーの三氏を遣はしたけれど已に總會閉会後であつた。それから其の委員の許に行つて話し合つたが、遂に纏らなかつた。新島氏は之に反対した重なる一人であつた。然かし両教会合同の議が斯うなつたのが果して幸であつたか、不幸であつたか、其れは何んとも云へぬ。兎に角日本基督教会は最初から教会の合同と独立自給の精神を以て成り立つて居る。

(七〇一号・明治四十一年十二月三日)

(四一M41—21) 京城での井深梶之助

『福音新報』明治学院関係記事

◎京城に於ける井深梶之助氏 同氏は別項記載の如く韓国青年会献堂式に臨まれしが、六日の日曜日には午前東大門街なる韓人の教会に赴かれ、渡辺暢氏とともに説教せられたり。同教会当日の来会者は一千人ばかりにて、男子稍少数なりしといふ。椅子の設けなく、何れも孤席の上に座す。中央に幕を垂れて男女の席を分つ。午後同氏は竜山の鉄道青年会のために演説し、夕刻京城日本人青年会が日本人倶楽部に催はせる宴会に臨まれ、同夜は日本基督教会にて説教せられたり。来会者は三十名足らずなりし由なれど、石原保太郎氏赴任以来漸次好況なりといふ。

五土曜日の夜は青年会の催しにて日本人商業会議所の二階にて集会を開き百名ばかりの来会者なりしが、渡辺暢氏司会し、丹羽、井深両氏演説せられし由。井深氏は七日朝京城を出発し、草梁にて鉄道青年会のために演説せられ、翌日帰途に就かれ、十日帰京せられたり。(七〇三号・明治四十一年十二月十七日)

明治学院理事会記録(つづき)

自大正七年二月 至大正八年十一月

一、門衛家屋及ヒ南方ノ煉瓦塀修繕委員ノ一人ランチス氏病氣ニ付ライク氏ヲ代リテ委員ニ挙グ

一、神学部寄宿舎ノ敷地及運動場ニ適當ナル地所ヲ搜索スル委員
ニ井深、ライク、ライシヤワルノ三氏ヲ挙ゲ理事会ニ報告スル
コト

大正七年二月二十一日午後二時常務理事会ヲ開ク

井深、オートマンズ、ライシヤワル、石川、ライク、熊野出席

熊野開会ノ祈祷ヲナス

一、前会ノ記録ヲ読ム正確ト認ム

一、門衛ノ家屋修繕ハ委員ノ提出案ヲ採用スルコトトナレリ費用

金六十二円三十銭

一、塀ノコトハ尚研究スルコトトナレリ

一、雨中体操場ニ板床ヲ設クルコト

右ノ費用ハ久原氏寄附金ノ内ヨリ支出スルコト此委員ニランヂ

ス、ホフソンマー、熊野ノ三氏ヲ挙グ
スプリングボール 約三十五円ノ予算
マツト 約三十五円ノ予算

一、高等部生ノタメ撃剣道具五組ヲ購求スルコト約六十円ニテ
一、高等学部南面ノ諸教室ニ窓掛ヲ設備スルガ為メニ又高等学部
教授及学生ノタメ図書館及読書室等ヲ更ニ一層有効便利ニスル
方法ヲ講ズルタメニ委員ヲ定メ案ヲ立テ理事会ニ報告セシムル
コト井深、ホフソンマルニ氏ヲ委員トス

一、中学部教員室狭隘ニ付来学年ヨリ理事室ニ変更スルコト

一、熊野中学部長中学部ノ教員数ヲ増加シ現任教員ノ俸給ヲ増額
スル必要アルコトヲ開陳シ且ツ其表ヲ提出セリ仍テ之ヲ理事会
ニ稟申スルコトトセリ

一、熊野部長前条開陳セル計画ヲ実行スルニハ中学部ノ聖書科教
授ヲ担当スベキ人ヲ選定スルノ必要アリ而シテ其授業時間八十
二時限(後十三時限トナル)ナリ乃チ村田四郎氏ヲ招聘シ此任

明治学院理事會記録(つづき)

ニ当ラシメ且ツ学院教師ノ任務ヲ執ルコトヲ希望スト述ブ仍テ此提議ヲ採用シ村田氏ヲ四月ヨリ招聘シ月俸七十五円(内五十五円ハ中学部ヨリ)ヲ給与スルコトトス

一、学院教会ヲ設立スベキ希望ハ前會ニ於テ次ノ例會ニテ決定スベキト決セラレタリ

大正七年三月十四日常務理事會ヲ開ク

井深、オートマンス、石川、ライシャワル及熊野、ライクノ諸氏出席

オートマンス氏開會ノ祈禱ヲナス

一、前會ノ記録ヲ讀ム 正確ト認ム

一、井深氏報告シテ曰ク前會ノ決議ニ基キ村田氏ニ招聘書ヲ送リシニ之ヲ快諾シ学院教師及中学部聖書教師トシテ來任ストノ返答アリシト

一、村田氏ノ移転費用トシテ金七十五円ヲ支給スルコトトス

一、井深氏報告シテ曰ク瀨川氏ハ医師ノ勸告ニ因リ來四月帰任セスト決定セリトノ通知アリタリト而シテ瀨川氏ノ書翰ニ依リテハ髓カニ神学部助教ノ職ヲ全ク辞スル意味ナルカ不明瞭ノ点アルヲ以テ井深氏ニ尙其真相ヲ確カムルコトヲ委嘱ス尙神学部教授會ハ瀨川氏担任科目ノ処理ヲナスコト

一、井深氏中学部英語教師中山安衛氏ノ契約期ハ本月末日ヲ以テ滿了セリ且ツ理化教師永江正直氏ハ本月限り辞任セリト報告ス仍テ此後任者ノ事ハ総理ト中学部長ニ委任スルコトトス

大正七年三月二十日午後二時常務理事會ヲ開ク

井深、オートマンス、ライシャワ、熊野ノ諸氏出席

一、井深氏報告シテ曰ク瀨川氏ノ返翰ニ病氣ノ故ヲ以テ神学部助教ノ職ヲ辞スルコトヲ確答セリト仍テ遺憾ナガラ其辞任ヲ許容スルコトトス而シテ理事會ニ於テ最後ノ決議ヲナスコトトス

一、高等学部ニ窓掛ヲ七十五円以下ニテ設クルコト

一、執務時間及生徒監督ノ件ニ付内規ヲ設クルコト熊野、ホフソシムルコトトス

大正七年三月二十五日午前九時四十分常務理事會ヲ開ク

井深、オートマンス、ライシャワ、熊野出席

一、田中記念賞品ニ関シ中学部教員會ヨリ建議セル通り三学年級中最優等者一人若クハ二人ニ授与スルコトト改ム

一、建築委員ヨリ中学部教室ヲ約五十二円五十錢ノ費用ヲ以テ修繕スルノ必要ノ稟申ヲ承認シテ委任スルコトトセリ

大正七年四月一日午後一時常務理事會ヲ開ク

井深、オートマンス、ライシャワ、熊野出席

一、都留氏健康勝レザルヲ以テ高等学部主簿ノ辞任ヲ申出テタリ仍テ遺憾ナガラ之ヲ許容ス

- 一、水戸氏高等学部ノ主簿ニ選定セラレ
- 一、熊野氏ヨリ本年ハ新入生徒従来ニナキ増加ヲナセルヲ以テ一学年級ニ四組ヲ造ラザルベカラズ故ニ算術ノ教員ヲ十六時限三十五円ニテ招聘シ体操教師ヲ三十円(後五円ヲ増ス)ニテ招聘スルコトヲ請求ス。尚且ツ規程外ノ十三時限ヲ現任教員若干名ニ分附セザルベカラズ故ニ一週一時限ニ対シ金約二円ノ特別手当ヲナスコトスレバ前ノ予算ニヨリ九十一円ノ増額トナルモ授業料ノ増加ニヨリ収入支出ノ不権衡ヲ来タスコトナシト附言ス常務理事会ハ之ヲ容ルルコトトセリ
- 一、神学部及ビ高等学部ニ電話ヲ設クルコトトス
- 一、吉田氏ヲ神学部生徒ニ一週二時限体操ヲ教授セシムルコトトス但シ五円ノ増給ヲナシ総計三十五円ノ月俸トス

第三十四回

- 大正七年四月二十五日午前九時理事例会ヲ神学部総理室ニ開ク
- 井深、イムブリー、オルトマンズ、モーレー、ヒートルズ、磯辺、石川、パンストリン、ライシヤワー及熊野、ライク、ジョンバラ、ランデス、ホフソナル、デットウエイラルノ諸氏出席
- モーレー氏開會ノ祈祷ヲナス
- 一、書記前會ノ記録(理事例会及ビ常務理事会ノ記録)ヲ朗読シ正確ト認メラル
 - 一、ライク氏神学教育ニ関シ理事会ニ提出スベキ事項ヲ協議スルガ為メニ三十分間ノ時ヲ割与セラレンコトヲ請フトノ緊急動議

明治学院理事會記録(一〇〇〇)

- ヲナス仍テ午後ノ期間中三十分間即三時ヨリ三時三十分マデヲ特ニ其協議ニ充ツベシト決ス
- 一、井深總理前年度ニ於ケル三学部ノ報告ヲナシ是認セララル
 - 一、會計ライク氏前年度三学部ノ會計報告ヲナシ是認セララル
 - 一、ライク氏恩給俸資金ニ関スル報告ヲナシ検査委員ニ附スルコトトシテ受容セララル
 - 一、特別図書館及ビ読書室委員ヨリ進行上ノ事項ヲ報告ス
 - 一、土木委員長ノ口頭報告アリ
 - 一、英語一覽編成委員ヨリ委員等ハ協議ノ上目下英語一覽ヲ發行スルコトハ其時期ニアラズトノ意見ニ一致セリトノ報告アリシニ之ヲ受容レ委員ノ任ヲ解クコトトナレリ
 - 一、学院教会ニ関スル特別委員ノ報告アリシニ理事会ハ其進行シ來レルコトヲ是認シ尚進ンデ実行スベキコトヲ委任セリ
 - 一、四月始業後日曜毎ニ講堂ニ於テ教職員並ニ中学部生高等学部生集會シ礼拝ヲナシ村田氏説教ノ任ニ当リツツアリテ頗ル有望ナリトノ報告アリ又時機ヲ見テ東京中會へ伝道教会建設願書ヲ提出スル筈ナリト云フ
 - 一、井深總理過般同窓會ノ組織ハ既ニ成立シタレバ今後学院ノ基本金ヲ募集スル事等物質的扶助ニモ頗ル有効ナルベシト報告ス
 - 一、現行規程ニ関スル特別委員ヨリ一部分ノ報告ヲナシタルモ尚理事会ニ此規程ヲ完成スル稟トセンガタメニ主要ノ事項ニ関シ非公式ニ意見ヲ述ヘンコトヲ需メタリ而シテ理事会ハ同委員ニ尚進ンデ勞ヲ取り学院ノ憲法及職制トヲ合セ学院ノ組織及現行

明治学院理事會記録(つづき)

規定トシテ一文書ニ編成スベキコトヲ委任スルコトトス

一、理事會ハ三十分間ノ時ヲ割キ兩「ミツシヨ」ニテ選定シタル神學教育ニ関スル共同委員ノ非公式報告ヲ聴聞セリ

一、中學部及高等學部ニ於ケル英語教授法調査委員ノ報告アリ此報告受容セラレ而シテ總理ニ此報告ニ注意ヲ払ヒ其推薦ト提議トヲ查察シ次回ノ理事會ニ報告スルコトヲ要求スルコトト決ス

一、寄宿舎及運動場ノ敷地ニ関スル特別委員ノ報告アリ尚常務理事會ニセベレンス館ノ敷地及其周圍ノ地所約四百坪余ヲ売却シ且ツ先キニ記録ニ載セラレタル條件ニ隨ヒ新敷地ヲ得ルコトヲ久原氏ニ交渉スルコトヲ委任ス又常務理事會ニ寄宿舎ト連絡シテ監督者ノ住宅ヲ新敷地中ニ建築スルコトヲ委託ス而シテ其費用ハ一萬円ヨリ超過スベカラズトシ其内五千円ハゼームス基金ノ殘金及ビ築地十七番地売却ヨリ得タル資金中ヨリ支出スルコトトス

一、理事會ハ北米合衆國プレスビテリアンミッシヨング明治學院構内ニ番館地域ニ於ケル住居權ヲ亞米利加「ダツチリフオームドミッシヨ」ニ移スコトヲ是認スト決ス

一、理事會ハ「ダツチリフオームドミッシヨ」ニ構内一番館ト二番館トノ間ニ在ル地域ノ後方ニ住宅ヲ常務理事會ノ是認セル設計ニ從ヒ建築スルコトヲ許容ス但シ理事會ノ許諾アルニアザレバ売却及ビ貸附又ハ學院ト關係ナキ人ニ占有セシムルコトヲ得ス

一、學院構内ニ於ケル外國教師ノ住宅ニ學院ト關係ナキ者ハ何人

ヲ問ハズ占居スルヲ得ズトノ決議ハ常務理事會ヲシテ尚巨細ニ研究シテ之ヲ次回ノ理事會例會ニ報告セシムルコトトス

時已ニ黄昏ニ近ケルヲ以テ明二十六日午前九時再會スルコトトシテ散會セリ

四月二十六日午前九時昨日ニ續テ開會

井深、イムブリー、オートマンス、ピータルス、笹倉、里見、パンストリー、ライシャワー及ビ熊野、ジョンバラ、ホフソナル、テットウエイラルノ諸氏出席

オートマンス氏開會ノ祈禱ヲナス

一、神學部教授瀨川氏ノ辭職ニ對シテ常務理事會ガ之ヲ許容ストノ決議ヲ是認シ且ツ同氏ハ病氣ノタメ殆ト一年間欠勤セシモ其俸給ハ本年四月分マデ支給セリトノ陳述ヲモ可トシ書記ヲシテ同氏ノ辭職セザル可ラザルニ至ル事情ニ對シ理事會ノ深キ同情ト痛恨トヲ傳達セシムルコトトス

一、築地十七番ノ地所家屋売却ヨリ得タル資金ハ特ニ神學部ノ基金トシ取り除ケ置クコトト決ス

一、來大正八年一月ヨリ理事會ノ數ハ十二名ヨリ十六名ニ變更シ協同兩ミッシヨハ従前ヨリ各一名ヲ増シ選出スルコトト決ス

一、前々會記録ニ示サレタル寄附行為修正ノ件ヲ講究スルガタメニ臨時理事會ヲ召集スベキコトヲ決ス

一、ライク氏ノ辭表ニ附言シタル事項ヲ除キ單ニ其辭任ヲ許容スルコトトス

一、会計事務ノ組織ニ関シテハ常務理事ニ適當ト認ムル所ノモノヲ制定シ之ヲ明治学院ノ組織及ビ現行規程ナル文書中ニ連載スルノ權ヲ委任スルコトト決ス

一、ホフソナル氏ヲライク氏ノ後任トシテ會計ニ選舉ス

一、ランヂス、都留、ホフソナルノ三氏ヲ図書館委員ニ挙グ

一、金庫室ニ耐火戸ヲ設クルコトヲ常務理事会ニ委任シ其費用ハゼームス基金ノ利子ヨリ支弁スルコトトス

一、ゼームス基金ノ中ヨリ金一万五千円ヲ支出シテ中学部生徒扣所兼体操場及ビ教場ヲ新築スル「但シ其構造ハ幅六間縦十二間ノ二階ニシテ一階ヲ扣所兼体操場トシ二階ヲ教場トスルコト」

一、本年度ノ予算案ハ多少ノ修正ヲ以テ採用スルコトトナレリ

一、金式百円ヲ公用ノタメ支弁スルコトヲ得ル様總理ニ一任スルコト

一、ライク氏ヲ其帰省中米国ニ於テ学院ノ代表者トスルコト而シテ書記ハ米国ノ両伝道局へ通牒シテ同氏ガ学院ノ利益ヲ計リ朋友等ノ興味ヲ促スコトヲ尽力スルガタメニ便利ヲ与ヘンコトヲ依頼スルコトトス

一、川添万寿得氏ヲ神学部教授ニ聘シ月俸金百円ヲ支給スルコトヲ決ス

一、両「ミッシヨン」へ日本語ニ熟達セル宣教師ヲ三年若クハ四年ノ期限ヲ以テ中学部ノ英語及ビ宗教々育ノタメニ交ル交ル選定センコトヲ要求スルコトニ決ス

一、予算案ニ頭ハレタル俸給額ハ当四月一日ヨリ実施スルコトト

シ總理ヨリ此増額ノ事ヲ各教員ニ通達スルコトト決ス
一、米国ノ両伝道局本部へ両ミッシヨンヲ通ジテ左ノ補助金ヲ要求スルコトトス

神学部ニ対シテ両伝道局ヨリ各金參千円高等学部及中学部ニ對シテ同ジク各金四千円

但シ高等学部及中学部ノ英語教師ニ對スル特別補助金三千五百円ハ当四月ヨリ三年間継続スルモノニシテ其他ノ要求ハナサザルコトトス

一、書記ハ兩ミッシヨンヨリ学院年報ヲ作成スルコトヲ要求セラシテ散會

右議了シテ散會

大正七年五月七日午後四時半常務理事会ヲ神田青年會同盟本部ニ開ク

井深、オートマンス、石川、ライシャワー及熊野ノ諸氏出席

熊野氏開會ノ祈祷ヲナス

一、熊野氏過日ノ理事例会ニ提出セラレタル予算案中、中学部教員二人分ノ俸給金七百二十円ノ項ヲ遺漏セルコトヲ述フ仍テ審議ノ上其遺漏セル七百二十円ヲ予算中ニ補填スルコトト決議ス蓋シ先ノ予算ハ授業料ヲ余程内輪ニ見積リタルモノナルガ故ニ七百二十円ヲ増入スルモ優ニ補フコトヲ得ルヲ以テ先ノ予算案授業料金壹万七千五百円トアルヲ金壹万八千二百円ニ修正スルコトトセリ

明治学院理事會記録(つづき)

一、従来理事室ニ用ヒタル卓子ヲ図書館ニ用ユルコトトセリ
右議シテ散會

大正七年五月七日特別臨時理事會ヲ神田青年會同盟本部ニ開ク

井深、イムブリー、オートマンス、長尾、磯辺、笹倉、里見、石川、ライシャワー及熊野、ホフソンマルノ諸氏出席

一、明治学院財団法人寄附行為中理事ノ半数トアルヲ其半数ノ二人ハ明治学院同窓會ヨリ選出シ他ハ理事會一団トナリテ選挙スルコトト修正スルコトニ満場一致ヲ以テ決議セリ
此被選挙資格ハ本邦人ニ限ルコトトス

大正七年六月六日午後三時半常務理事會ヲ開ク

井深、オートマンス、ライシャワー及ビホフソンマル、熊野ノ諸氏出席

一、井深氏ヨリセベレンス館ヲ移転スベキ地所ニ付報告アリ詳細ハ英語記録ニアリ

一、中学部英語教員パーカー氏ハ此学期限り其約束任期満ツルヲ以テ其後任ニハテリーオートマンスヲ採用スルコトトス

一、井深氏ヨリ其妣八代子ノ遺志ニヨリ金貳百円ヲ明治学院奨學基金トシテ寄贈アリ依テ理事會ハ之ヲ受納シ書記ヨリ謝状ヲ送ルコトトス

大正七年七月四日午後一時常務理事會ヲ開ク

井深、石川、ライシャワー及ビ熊野、ホフソンマル、イムブリーノ諸氏出席
石川氏開會ノ祈祷ヲナス

一、高等学部ノ漢文教員坂井氏辞任シタルヲ以テ中学部専任ノ島津氏ヲ後任トシ月俸ハ高等学部ヨリ金四十円中学部ヨリ三十円ヲ支給スルコトトス

一、高等学部ノ書記吉田浜吉氏ヲ中学部ノ生徒監兼体操教員トシテ中学部ヨリ月俸金三十円ヲ支給シ高等学部ヨリ体操教授ノタメ金十円神学部ヨリ同金五円ヲ給与スルコトトス

一、高等学部講師寺尾氏公務上ノ都合ニヨリ欠席多カリシガ今後尚統テ出勤スルコトヲ得ルヤ総理及ビ高等学部長ニ適宜ノ処理ヲナスコトヲ委任スルコトトス

一、同窓會ヨリ熊野氏二十五年勤続ノ祝賀記念トシテ熊野氏ノ希望ニヨリ学院ヘエツキス光線ノ器械ヲ寄贈セリ仍テ書記ヨリ謝状ヲ送ルコトトス

一、中学部ニ漢文ノ専任教員ヲ招聘スルコトヲ総理及ビ中学部長ニ委任スルコトトス但シ月俸ハ約金五十円トス

一、日本基督教會大会ヨリ委員長星野光多氏ノ名ヲ以テ神學教育ニ関シテ照會アリ審議ノ末之ヲ次ノ理事會ヘ提出スルコトトス
一、井深氏曰ク過日田川大吉郎氏來訪セバレンス館ノ敷地ノコト

ニ関シ久原氏ニ交渉シ同氏ヨリ相当ノ寄附金ヲナスベキコトヲ勸諭シ置ケリトノ話アリ云々此件ハ総理ト會計ホフソンマル氏ニ委任スルコトトス

一、久野氏ニ依頼セル中学部ノ扣所兼体操場及ビ教場ノ新築設計
図ヲ稍変更修正シ久野氏ヲシテ其任様見積ヲナサシメ然ル後建
築請負師三名ニ投票セシメ其正確ト認ムル者ニ命ズルコトトス
此委員ニハ井深、石川、ホフソソナルノ三氏ヲ挙グ
一、高等学部及ビ中学部ノ黒壁ボールド不完全ノ所アリ休暇中然
ルベキ人ニ命シテ塗変ヘシムルコトトス
右議了シテ散會

大正七年九月十九日午後二時三十分常務理事会ヲ開ク

井深、オートマンス、ライシヤワト、石川、ホフソソナル、熊野
ノ諸氏出席

一、石川氏開會ノ祈禱ヲナス

(1)井深総理ヨリ渡辺勇助氏図書館助手兼書記トシテ來任スルコト
トナリ月給三十円ト約セリトノ報告アリ

(2)井深総理尚報告シテ曰ク高等学部ニ於テ寺尾講師公務ノ都合ニ
ヨリ辭任シ其後任ヲ中学部講師平瀬氏ニ委嘱セリ又石原講師モ
都合上辭任シタルヲ以テ文学士高橋穰氏ヲ其後任ニ委嘱セリ又
書記吉田氏ノ後任ニハ小川久次郎氏ヲ任定セリト

(3)熊野中学部長ヨリ国漢文教員新原俊秀氏去七月限り辭任シタル
ヲ以テ法学士落合太郎氏ヲ月俸五十円ニテ招聘セリ又体操教員
兼生徒監工藤正士氏辭任シタルガ故ニ其後任ニハ吉田演吉氏ヲ
任用セリトノ報告ヲナス

(4)中学部卒業生桜田親光氏ヨリ高等学部商科ノ為ニ奨学金貳百四

拾円ヲ寄贈セリトノ報告アリ

(5)ホソ館寄宿舎費ハ一人前月額金二円三十錢ト決セルモ本年
ハ二円ツツヲ徵集スルコトトス又セベレンス館ノ舎費ハ本月ヨ
リ一人各金一元五十錢ニ増額スルコトト決ス

(6)目下諸物価騰貴シ薄給ノ使丁等頗ル生活ニ困ミ居ルヲ以テ本月
ヨリ一時の手当トシテ各自ニ二円ツツ増額スルコトトシ大工佐
藤ニハ四円ヲ増給スルコトトセリ

書記三輪太郎氏ノ月俸三十円ヲ本月ヨリ五円増額スルコトヲ決
ス

(7)セベレンス館敷地委員ヨリセベレンス館ノ敷地四百坪ヲ久原氏
ニ四万円ニテ売却セリトノ報告アリ而シテ此敷地売却ニ関シテ
最初田川大吉郎氏相互ノ間ニ立子斡旋ノ勞ヲ取り為メニ円満ナ
ル売却ヲ畢リタルヲ以テ理事会ハ其勞ヲ多トシ約百円ノ商券ヲ
同氏ニ贈リ謝意ヲ表スルコトヲ決ス又同委員ヨリ旧火薬庫後方
ニ八百四十坪ノ地所ヲ金參万八千三百五十九円二十五錢ニテ購
買セリ且ツ其登記料其他ノ費用ニ約金八百九十五円ヲ要ストノ
報告アリ尚同委員ニ此新購入地ニ接近セル約五十九坪ノ地面ヲ
一坪金五十円ヨリ超過セザル程度ニテ購入スルコトヲ委任スル
コトト決ス

(8)体操場建築委員ヨリ三建築請負組ヨリ左ノ見積投票ヲ落掘セリ
即チ

戸田組 28,600.80 山田組 25,300.00 竹田組 19,933.10 ナリ此
見積価格ハ三組トモ理事会ヨリ委任サレタル標準価格ヨリ遙カ

- ニ過超シ到底着手不可能ナルヲ以テ委員ハ現在ノ雨中体操場ヲ
 教場ニ改造シ単純ナル雨中体操場兼扣所ヲ設計スルコトヲ建議
 ス仍テ委員ハ約百二十坪ノ一階造トシテ其設計ヲナシ請負師ヨ
 リ見積価格ヲ徴シ之ヲ理事會ヘ提出スルコトヲ委任サレタリ
- (9) セベレンス館移転築造委員トシテ井深、オートマンス、ホフソ
 ンマル、及ライシヤノ四氏ヲ挙ゲ位地其他ノ事ヲ研究シ最良
 ノ法ニ関シ方案ヲ立テ提出セシムルコトトセリ

大正七年十月五日午前十時常務理事會ヲ開ク

井深、オートマンス、ライシヤ、石川、ホフソンマル、熊野ノ

諸氏出席

オートマンス氏ノ祈祷ヲ以テ開會

一、書記前會ノ記録ヲ讀ム 正確ト認ム

(1) 井深氏前會ノ決議ニ從ヒ田川氏ヘ三越ノ百円商券ヲ持參シ謝辞
 ヲ述ヘタリト報告セリ

(2) 井深氏ヨリ理化学教諭上野友助氏急病ニテ突然死去ニ付学院ヨ
 リ金五十円ノ弔慰金ヲ贈リタリ其後任ニハ早稲田理工科出身ノ
 百瀬計馬氏ヲ聘シ俸給ハ故上野氏ト同格トスルコトトセリトノ
 報告アリ

(3) 高等学部ニ石橋近三氏ヲ聘シ理財学ノ講師トス月俸三十円ナリ
 (4) セベレンス館移転ニ付寄宿生ハ他ニ仮寓セザル可ラズ故ニ落成
 マテ約四ヶ月間各生ニ金二円五十錢ツツ与へ自由ニ下宿セシ
 ムルコトトス

(5) a セベレンス移転費 2,129.30

b 食堂料理場及炊事者住所 2,545.40

c 浴室及ビ煙突 1,327.80

d 教師宅 4,433.00

但シ a 及 b ハ予算通りトス

(6) 中学部扣所及ビ現在ノ雨中体操場ヲ教室ニ変更ノ儀ハ廻章ヲ以
 テ各理事ニ送附シ其贊否ヲ待チ何レニカ速クニ解決スルコトト
 シ書記ヨリ直ニ其手續ヲナスコトト決セリ

右議了シテ閉會

第三十五回

大正七年十一月一日午前九時神学部總理室ニ於テ理事例会ヲ開カ
 ントセシニ理事ノ出席者定数ニ満たザルヲ以テ午後五時マテ延會
 シ其間非公式ニ會議シ決議ノ事項ハ五時開會ノ理事定数ニ満た
 ル上ニテ事後承諾ヲ求ムルコトトス此時出席者ハ井深、イムブリ
 一、オートマンス、ピータルス、バンストリン及會計ホフソンマ
 ル、書記熊野、客員ランヂス、ピークノ諸氏ナリ

一、ホフソンマル氏開會ノ祈祷ヲナス

一、書記ライシヤ氏病氣欠席ニ付オートマンス氏選バレテ仮書

記トナル

一、書記前會及常務理事會ノ記録ヲ讀ム正確ト認ム

一、總理学院全般ニ関スル報告ヲナシ且ツホフソンマル氏ガ英語
 教授ニ関シ調査講究シタル特別報告書ヲ朗読ス

一、総理ガ中学部ニ適當ナル英語主任ヲ置クトノ意見ヲ賛成シ總理ニ其主任教師ノ事務章程ヲ考案シ之ヲ常務理事会ニ提出シ常務理事ヲシテ審議ノ上決行セシムルコトトス

一、図書館委員ランヂス氏ノ報告アリ理事會ハ此報告ヲ受容ス
一、午後零時半散會シ午後二時再ビ開會スルコトトス

一、午後二時開會熊野氏祈禱ス
一、熊野氏去四日学院内ニ於テ東京中會ノ許可ヲ得テ明治学院伝道教會ヲ設立セル願末ヲ報告ス

一、井深氏神學教育ニ関スル日本基督教會大會ノ委員長星野光多氏ヨリノ通告書ヲ朗誦ス理事會ハ審議ノ上此問題ハ甚ダ重要ナルコトヲ深く感得シ日本基督教會ニ於ケル神學教育ノ統一ト進展トニ對スル計畫ヲ講究シテ協力スルコトニ躊躇セズト雖モ現在ノ科程ノ上ニ二年程度ノ研究科ヲ設置スル計畫ニ對シテハ今直チニ賛成シ又ハ協力ノ約ヲナスニ困難ノ事情アリ然レドモ此問題ニ對シ尙大會ノ交渉ニ応ゼンガタメ(若シ大會ニテ望マバ)井深、ライシャ、笹倉ノ三氏ヲ委員トセリ此件ヲ總理ヨリ大會ニ返答センコトヲ委任ス

一、「ダッチリフオームドミッシン」書記ヨリ学院中学部英語教授ニハ第二期宣教師(七年以上在留者)ヲ任用スルコトニ關シ通告アリ理事會ハ之ヲ受容シ実行スルコトトス
右ノ件ニ關連シテムブリー氏ハプレスビテリアンミッシンノ議事録中ニ在ル反對ノ決議ヲ朗誦セリ

一、二ツノ協力ミッシン書記ヨリ左ノ報告來ル即チプレスビテ

リアンミッシンニ於テ選出シ來大正八年一月一日ヨリ就任ノ理事ハモーレー、ライシャ二氏(一年間ノ任期)イムブリー(ハナフホルド)(三年間ノ任期)ダッチリフオームドミッシンニ於テハビートルス、パンストリン二氏(一年間ノ任期)ブーリス、ワルボルド(二年間任期)ナリトス

一、理事會ハ總理ノ授業時間數ヲ大ニ減少スルコトヲ希望シ常務理事會ニ之ヲ處理決行スルコトヲ委任ス

時既ニ黄昏暫ク休憩シ夕飯ヲ共ニシテ後再ビ開會此時井深、イムブリー、オートマンズ、石川、里見、笹倉、ビートルス、パンストリンノ諸理事及ビホフソソマル、熊野、ピーク、ランヂスノ諸氏出席理事ノ定數ニ滿チタルヲ以テ正式ノ例会トナル
一、現行法案委員會ノ進行ニ關シテノ報告アリ此委員ニ尚井深、ビートルス二氏加ヘラル

一、會計ホフソソマル氏會計報告ヲナス其ノ詳細ノ事項ハ常務理事會ニ於テ處理スルコトトス

一、會計年度ノ初ヨリ次年度ノ予算案ガ決定サレタル時マデノ間ニ於ケル支出ハ凡テ前年度ノ予算ニ基キ從フベキコトトス

一、次回ノ理事會ハ來ル大正八年二月第三ノ週開クベキコトトシ其開會日ハ常務理事會ニ委任スルコトトス

一、中学部生徒控所及ビ体操場建築等ニ關シ審議ノ末左ノ事項ヲ決議ス

(1)セベレンス館移轉費用トシテゼームス基金ノ内ヨリ供弁サレタル金五千円ハ其目的ヨリ除却シ之ヲ返却シゼームス基金ニ入

明治学院理事會記録(つづき)

ルルコト

(2)セベレンス館移転ノ全費用ハ築地基金ヨリ支弁スルコトトス
(3)久原氏へ売却シタル四百坪ノ外ニ尚約百坪ノ地所ヲ売却スル
場合ニハ築地基金ヨリ引出セル金五千円ニ超過シタルモノヲ元
ノ築地基金ニ返済スルコト

一、控所及体操場建築ノ設計及予算案ハ承認サレ常務理事會ニ於
テ金貳万円ヨリ超過セザル金額ヲ以テ進行スルコトトシテ其資
金ハゼームス基金ヨリ支弁スルコトトス

一、理事井深、石川、磯辺三氏ノ任期ハ來十二月三十一日ヲ以テ
満了スルヲ以テ改選ノ投票ヲナセシニ川添万寿得、岡本敏行、
石川林四郎ノ三氏當選セリ

一、理事會役員ノ改選投票アリシニ左ノ如ク當選セリ

理事長 イムブリー氏

書記 ライシャワー氏

同 熊野氏

會計 ホフソンマル氏

一、來大正八年一月一日ヨリ常務理事トシテ左ノ諸氏當選セリ。

井深、里見、ライシャワー、石川、オルトマンズノ五氏ナリ

一、高等学部内ノ管理法ニ関シテ同学部教授會ヨリ提案アリ審議

ノ末総理ニ於テ之ヲ適當ト認メバ次ノ理事會ニ提出スルコトト

ス

一、書記議事録ヲ朗読ス正確ト認メラル

一、井深氏ノ祈祷ヲ以テ閉會ス時ニ午後九時四十五分ナリ

大正七年十一月九日午後六時神田多賀羅亭ニ於テ常務理事會ヲ開
ク

井深、オルトマンズ、里見ノ三氏出席

一、去十一月一日開催理事會ニ於テ議決セル當十一月ヨリ來大
正八年三月末マテ特別手當トシテ三学部教員ニ支給スベキ金額
ヲ討議シ左ノ如ク決定ス

A年俸千円以下ノ専任教員ニハ其月給額ノ二割ヲ増給スルコト

B年俸千円以上ノ専任教員ニハ月給ノ一割五分ヲ増給スルコトト

ス

C非専任教員ニハ月給ノ一割ヲ増給スルコトトス

一、使丁ニハ少額ノ増給ヲナスコトト決ス

一、控所及体操場建築ニ対スル見積書ヲ受負師山口組及竹田組ヨ

リ提出ス其見積額左ノ如シ

山口組ノ分 一坪金壹百八十円建坪一百十二坪ニテ總計金貳万

壹千六十円ナリ

竹田組 一坪金壹百六十八円七十五錢建坪一百十二坪ニテ總計

金壹万八千九百円而シテ床板ヲオレゴン松ニスル時ハ金

百六十円ノ増額トナル

審議ノ後竹田組ニ此工事ヲ受負ハシムルコトトス 但シ其ノ提

出ノ見積額ニ換ルベシトス

一、右ノ工事監督ニハ井深、ライシャワー、ホフソンマルノ三氏

ヲ委嘱ス

一、久原氏ノ代理人ニ学院内ノ地所購売ニ関シ交渉スルコトトス

右議了シテ閉会

第三十六回

大正八年二月二十日午後七時三十分理事會ヲ明治学院ニ於テ開ク
出席者ハイムブリー、ピーター、里見、石川、ヴァンストリン、
ワルヴォード、ライシャーンノ諸理事及ビ井深、熊野、ホフソナ
ー、ジェー・シー・バラノ諸氏ナリ
議長イムブリー氏ノ祈禱ヲ以テ開会

一、書記前會ノ記録及ビ常務理事會ノ記録ヲ朗読ス正確ト認メラ
ル

二、R・C・A伝道会社ヨリ照会アリ。曰ク明治学院ノ教職員ト
ナレル同ミツシヨノ代表員一週ノ授業ハ十五時間以内ナルベ
シト云フ一千九百十三年ノ規定ヲ廃止セリト

三、井深氏ハ前ノ理事會ニ於テ理事ニ選挙サレタル川添、岡本兩
氏共已ムヲ得ザル事情ヲ以テ辞退セリトノ事ヲ報告ス

四、同窓會委員ヨリ書面朗読セラル。其書面ニヨレバワイコフ博
士及ビマッコレー博士ニ於テ学ベル学生等ノ贖金六百八十円ア
リ而博士ヲ記念セントメ此金員ヲ本学院ニ寄附シ其利子ヲ以テ
賞金ニ宛テントス而シテ其ノ一半ハ賞金トシテ高等学部或ハ神
学部ノ最優等生ニ与ヘ他ノ一半ハ中学部ノ優等生二名ニ用ヒン
トス總理ハ理事會ノ謝意ヲ贈与者ニ表明センコトヲ托サル

五、總理ハ以下ノ諸項ニ就テ非公式ニ報告ス
(a) 中学部教職員ノ小更迭

明治学院理事會記録(つづき)

(b) ランデス氏ハ特別賜暇ニヨリ帰國セリ

(c) セベレンス館ハ新敷地ヘ移転

(d) 久原氏ヘ百坪ヲ一万円ニテ讓渡セル件

(e) 三光町ニ於テ地所六十三坪ヲ三千六百円ニテ購入セル件其敷
地ヨリ三軒ノ家屋移転料千五百円、謝儀百二十七円五拾錢ト
ナレル件

(f) 控所建築延期ノ件

(g) 電車線路ガ正面道路ヲ通過スルコトナルベク恐クハ道路拓
張ノタメ学院ノ敷地ハ幾分削リ取ララルコトナルベシ

六、總理ハ川添氏が専任教授タラントスル本院ノ招聘ニハ応ゼザ
リシモ一週六時間以内ヲ受持ツ講師タルベシトノ意ヲ洩ラセ
リト報告ス茲ニ於テ左ノ事項ヲ決議セリ

川添氏ヲ六十五円ニテ招聘ス此ノ任用ハ本年二月一日ヨリ有
効

七、熊野氏中学部長辞任ノ意ヲ簡単ニ述ブ之ニ対シ井深、石川、
ホフサンマーノ三氏ヲ特別委員トシテ考查セシムルコトナレ
リ此ノ特別委員ハ暫クシテ次ノ報告ヲナシ其ノ報告ハ是認セラ
レタリ

中学部長熊野氏ガ大正八年四月一日限り辞表ヲ提出セラレタル
ニヨリ以下ノ条項ヲ決定ス

(一) 理事會ハ其ノ辞表ヲ受クルコトトス。氏ガ令ヲ重ネ健康勝レ
ザル今日コハ最善ノ方法ナリト思惟スルガ故ナリ。サレド吾
人多クノ遺憾ナキ能ハズ過去二十年ニ余ル歲月ヲ致々

明治学院理事会記録(つづき)

トシテ学院ノ為メニ努メラレタル熊野氏ノ特別ナル忠実、献身のニシテ且ツ慈愛ニ満テル劳作ヲ思ヘバ今日ノ事ハ極メテ遺憾ナリ

(二)学院ノ恩給規定ニヨリテ受クベキ恩給ヲ別トシテ熊野氏ニ生

涯毎月金五拾円宛ノ手当ヲ贈与スルコトトス

八、中学部長後任者決定マデハホフソソンマー氏ヲ部長心得ニ宮地

氏ヲ部長補佐ニ任命スルコトニ決定ス

九、会計ヨリ簡單ナル会計報告アリ

十、ライシャー氏ハ常務理事会書記トシテ井深総理ノ授業時間數

ヲ理事会ノ要求ニヨリ減セル旨ヲ報告セリ

二月二十一日午前九時ニ再会ヲ期シテ散会ス

第三十六回ノ継続会

大正八年二月二十一日午前九時理事会ヲ明治学院ニ於テ再会ス

出席者イムブリー、モレー、ヴァンストリン、ピーターズ、ワ

ルヴォルド、ブース及ビライシャーノ諸理事

ヴァンストリン氏ノ祈祷ヲ以テ開会ス出席者ハ定數ニ滿タザルタ

メ會議ハ非公式ノモノトナサレ兼ネテ提出サレタル現行規定ヲ討

議ス午後三時再会ヲ期シテ午散会

午後三時ブース氏ノ祈祷ヲ以テ開会ス

出席者ハ今朝出席セル總ベテノ理事及石川理事及ビ井深、熊野、

オルトマンズ、ジョンバラ、ホフソソンマー並ニピークノ諸氏

一、理事 規定ハ特別起草委員ニヨリテ提出サレ數個所変更アリ

テ大正八年四月一日ヨリ施行スルコトニ決定ス

二、内規ノ草稿モ提出セラル是ハ学校評議員ニ謀リテ四月一日ヨリ試ミニ実行セシムルコトニ決定シ理事会ノ承認ハ五月ノ会マ

デ延期セラル

三、現行法施行ノ場合ニハ「憲法及ビ職務規定」ト名ツケラレタ

ル法文ハ廃棄スルコトニ決定ス

四、現行法及ビ内規ヲ日本文ニ翻訳スルコトヲ井深氏ニ要求スル

コトトシテ可決ス

五、現任常務理事ハ三月末マデ任期延長ノコトトシテ可決ス

六、建築委員ニハ控所建築ヲ進捗スル様指令スルノ件可決

一時間夕食ノタメ休憩、夜ノ會議ハ午後七時開カル

七、神学教育ニ関スル特別委員ヨリ簡單ナル報告アリ

八、授業料ヲ左ノ如ク増額スルコト可決

高等学部 参円六拾錢ヨリ四円ニ

中学部四五年 参円五拾錢ヨリ四円ニ

〃 二三年 参円ヨリ 四円ニ

〃 一年 参円ヨリ 参円五拾錢ニ

九、総理ヨリ高等学校へ入学ノ志望ヲ有スル中学部四五年生ニ特

別教育ヲ施スベキコトヲ提言ス

十、以下ノ卒業候補者ガ総理ヨリ推挙セラル

一、神学部 五名

一、高等学部 七名

一、中学部 六十二名

是等ノ候補者ハ最後ノ試験ニ及第セバ其推挙ヲ承認スルコトトス

十一、二ツノ協力ミツシヨング三人ノ委員会ニ各々一人ノ委員ヲ任命シ井深氏ガ三人目ノ委員トシテ夫レニ加ハリ合同盟ノ基礎ヲ整理スル様決定セラル之レ学校ニ対シ又ハ理事会ニ対シ夫等二ツノミツシヨング互ニ有スル關係ヲ整頓センガタメナリ即チ理事会及ビ二關係ミツシヨン及ビ協力委員会ナドニヨリテ承認セラルベキ合同ノ基礎ヲ設定センガタメナリ

十二、五名ノ委員ヲ挙ゲテ特ニ高等学部發展ノ為メニ調査ヲ遂ゲ五月ノ会ニ報告スル様決定

其委員ハ 井深、長尾、ホフソンマー、ライシャ、ワルヴォルド

十三、ランヂス氏帰國ノタメニ生ジタル欠員ヲ補ハントタメチャブマン氏カ又ハ他ノ青年ヲ教師トシテ派出センコトヲブレスピテリアン・ミツシヨンニ要求スルノ件可決確定

十四、ライク氏出発ノタメニ生ジタル空席ヲ満タスニピーク博士ヲ以テセンコトヲR・C・Aノ日本ミツシヨンニ要求スルノ件可決セラル。而シテピーク博士ノ業務ハ主トシテ英語ト音楽ト宗教トノ系統ニ属スルモノトス

修正、右ノ要求ヲミツシヨング容レザル場合ハ中学部英語ノ為メニ適當ナル年令ト人格トヲ有スル婦人又ハ他ノ青年ヲ任用センコトヲ要求スルコト

十五、図書館係ノ任用ハ常務理事会ニ一任サル閉会

現行委員

會計 ビーク、井深、イムブリー

財産 オルトマンズ、ホフソンマー、井深、石川、ライシャ

邦文公告 水声

英語公告 ライシャ

図書 ホフソンマー、村田、都留

用度 都留、宮地、水声

年報 イムブリー

右ハ通信ニヨリテ承認ヲ受ケタリ

第三十七回

大正八年五月七日午後三時本財団事務所ニ於テ理事会ヲ開ク

出席理事氏名ウキルリアム・イムブリー、エ・ケ・ライシャワー、
・デイ・エ・モリ、イ・エス・ブリス、デイ・パンストリオン、エ
・ワルボールド、笹倉弥吉

立合人氏名

書記 都留仙次

會計 グブリーユ・イ・ホフソンマー

列席者氏名

ハナフォード、ビータルズ、井深梶之助、熊野雄七、ジョン
・バラ、オルトマンズ、ビーク、水蘆幾次郎

注ハナフォード氏、ビータルズ氏ハ登記未済ノ事、松井安三郎氏、

明治学院理事會記録(つづき)

水蘆幾次郎氏、同窓會選出トシテ本會ニ就任、井深梶之助氏

ニ於テ 選シタル理事ナリ

一、ウキルリアム・イムブリー氏議長席ニツキ祈禱ノ後開會ヲ宣

二、熊野書記邦文記録ヲライシャワー書記英文記録ヲ読ミ、三ノ修正ヲ以テ全文是認セラレ

三、ライシャワー氏在日本アメリカ・リホームド宣教師社団ヨリ

四、在日本プレスピテリアン宣教師社団ハ右委員トシテライシャ

ワー氏ヲ拳グル事ニ決定シタル旨ライシャワー氏口頭ヲ以テ報

告ス

五、熊野雄七氏書記辭任ノ件 承認可決

六、都留仙次氏ヲ新規定ニヨル書記ニ拳グル事、可決

七、ライシャワー氏ヲ副書記ニ拳グル事可決

八、井深總理左ノ通り学務ヲ報告ス

大正八年四月現在

(一) 中学部

一、在學生徒數 五七四

二、教員辭職者數 六

三、同新任者數 十

(二) 高等学部

一、在學生徒數 八一

二、教員辭職者數 二

三、同新任者數 五

(三) 神学部

一、在學生徒數 二五(外ニ予科生二三)

二、新任講師數 二

(四) 卒業生、神学部五、高等学部七、中学部五五

(五) 文部大臣ノ許可ヲ受ケテ中学部及高等学部ノ授業料増額ヲ行

ヘリ

(六) 植木万里氏ヨリ学院基金ニ金貳百円寄贈アリ

(七) 古田第三郎氏ヲ図書館係ニ聘セリ

九、井深總理基督大學ノ件ニ関スルシュネダー博士ヨリノ書翰及

スビヤ博士ヨリノ書翰ヲ朗読ス

十、井深總理左ノ二件ヲ報告ス

(一) 理事會規定ノ仮訳ヲナセル事

(二) 学院内規ヲ評議會ニ諮リシモ何等ノ決定ニ至ラザリシ事

十一、財政委員ビーク氏学院諸種寄託基金總計七四、九一四円八

三錢アル旨報告ス

十二、會計狀態ニ関スル會計ノ報告左ノ如シ自大正七年至大正八

年(円単位ノ事)

(一) 收入 四一、七五九円

内訳 神学部 五七

高等学部 一、四〇二

中学部 一九、四七五

プレスビテリアン 一〇、五〇〇
リホームド 一〇、三二五
(二)支出 四〇、七五二

内訳

神学部 六、四四二
高等学部 六、九二〇
中学部 二七、三九〇

(三)残額 一、〇〇七

十三、井深総理セベレンス館ノ移転及ビ新雨天体操場建築進行ニ
関スル左ノ報告ヲナス

一、セベレンス館移転及食堂新築ノ工事ハ殆ンド落成シ学生ハ
去ル四月上旬ヨリ入舎シタリ但シ会計明細書ハ全部支払済ノ
上改メテ報告スベシ

一、新生徒控所ハ目下工事中ニシテ来ル六月中ニハ落成ノ見込
ナリ

十四、両宣教師社団提携基礎規約文案左記ノモノヲ可決ス

提携ノ基礎

在日本プレスビテリアン宣教師社団並ニ在日本アメリカ リホ
ームド宣教師社団連合企業トシテノ明治学院管理提携ノ基礎ヲ
左ノ如ク定ム

(一)目的

基督教主義普通併ニ高等教育施行及ビ特ニ其神学部ニ於テハ基
督教教職者養成ノ為メノ明治学院管理維持ヲ本提携ノ目的トス

(二)方法

此提携ノ目的ハ明治三十八年三月九日文部大臣ニヨリテ認可セ
ラレタル明治学院財団法人寄附行為ニ随ヒ同法人ニヨリテ実施
セラルベキモノトス

(三)維持

明治学院ノ維持ノ為メ両社団ハ左ノ事ヲ執行ス

一、經常費ハ毎年可及の同額出資ノ事

二、学院ノ恒久的設備及發展ノ為メ事情ノ許ス限り又必要ア
ル限り寄附スル事

三、各社団ハ少クとも学院専任教師トシテ三名宛ヲ提供スル

事 右教師ノ任命ハ社団ヨリノ公式の通知ヲ得タル上理事

会ニ於テ行フ事而シテ理事会ハ何時ニテモ之レガ解任ヲナ

ス事ヲ得 右教師任免ニ関スル発議ハ理事会或ハ社団ノ何

レヨリ出ヅルモ差支ナキ事而シテ彼等ハ職務上社団員ナラ

ザル他ノ教師同様総理部長及理事会ノ指揮下ニアル事

社団書記ハ右教師ノ任務ニ係ハル社団ノ決議アル場合迅速

ニ之ヲ理事会書記ニ通報スル事

若シ社団ニ於テ専任教師提供ニ差支アル場合ハ理事会ノ承

認ヲ得テ其ノ社団之レガ補充ノ策ヲ講スル事 此場合専任

教師ノ担任時間數ハ神学部ニ於テハ十二時間、高等学部ニ

於テハ十八時間、中学部ニ於テハ二十二時間トス

(四)変更

社団本局ノ承諾ニヨリ社団ハ何時ニテモ本提携ノ基礎ノ交
更ヲ行フ事ヲ得

明治学院理事会記録(つづき)

尚ホ構内ニ在リテ社團ノ所有タル五ノ教師館使用ニ関シテハ別ニ公式的申請ニヨリ理事会ノ承諾ヲ受ケタル場合ノ外学院事業ニ直接携ハル者ト其ノ家族ノ居住ニ限ル事

ト時正ニ午後六時

議長午後七時三十分迄休会ヲ宣ス

今日午後七時三十分オルトマンス氏ノ祈祷ヲ以テ再会ス出席者ハ前記ノ外ニ長尾半平、石川林四郎ノ二理事及比松井安三郎、ホルドロフト、チャブマンノ諸氏ナリ

十五、学院拡張ノ件ニ関シ調査委員井深梶之助氏文科単科大学案

ニツキ左ノ報告ヲナス

過日文部大臣ニヨリテ發布セラレタル高等教育法案ニヨレバ我高等学部及神学部ノ發展策ニツキ左ノ二方法ノ外ナキガ如シ

一、高等学部ヲ大学予科トシテノ高等学校トスル事然レトモ此

ハ基督教大学ノ設立ヲ見ザル限り成功寛束無キニ似タリ

二、現今ノ高等学部文芸科及神学部ヲ拡張シテ単科大学トシ英語師範科及商業科ヲ之ニ随行セシムル事

委員等ハ第二案ヲ可トシ之ガ為ニ次掲ノ土地及建物ノ必要ヲ認ム

1 土地 学院構内ハ現状ノママニシテモ狭キニ似タリ然ルニ

学院ノ東側及南側ハ早晚其数百坪ヲ市ニ収容セラルベキ形勢

ナレバ之ヲ補ハンガ為

a セベレンス館近傍ノ地所ヲ購入シ神学部ヲ之ニ移転セシ

メ現今ノ神学部校舎ハ高等学部ノ使用ニ供スル事

b ヘボン館ヲセベレンス館所在地ニ移シ其跡ニ三階建ノ高等学部校舎ヲ設立スル事又図書館ノ為ニハ教師館ノ或ルモノヲ他ニ移転スルノ要アルベシ。然レトモ運動場トシテ他ニ充分ナル広サアルモノヲ要スベケレバ仮令第二案トスルモ構外ニ土地ヲ得ルノ必要アリ

即チ本委員等ハ左記二種ノ土地購入ヲ提議ス

イ、高等学部寄宿舎、神学部校舎及図書館ノ為ニ約二千坪
ロ、運動場ノ為ニ約五千坪

2 建物

a 高等学部学生約四百名ノ為ノ教室

b 三個ノ寄宿舎

c 図書館

3 内外国ニ於ケル教師養成資金

4 基本金

英語師範科及商業科ヲ件フ単科大学設立ノ為ニハ約九拾万円ノ基本金ヲ入用トス此内三分ノ一ハ内地ニテ募集スベク此ガ為ニ理事会ハ同窓会ノ協力ヲ乞フ事、他ノ三分ノ二及地所購入併ニ校舎新築等ノ費用ハ米國方面ニ仰グ事

此外來ルベキ三年間ノ高等学部費用トシテ金參万九千円ヲ要

スベシ

右報告ス

委員 井深梶之助

ライシャワー

ホフソソマル

右提案ニツキライシヤワー氏説明ス

長尾氏賛成演説ヲナス

松井、石川ノ両氏意見ヲ述ブ

井深氏「此案ヲ卓上ニ置キ直ニ神学校合併問題ニ入ル事」ヲ動議ス

議ス 可決

十六、神学校合併問題ノ由来ニツキ井深氏報告ス ビータルス、

長尾、笹倉ノ諸氏意見ヲ述ブ

十七、インブリー氏次ノ動議ヲ提出ス

「在日本プレスビテリアン宣教師社団ガ過ル年会ニ於テ神学教育ニ関シ提起シタル意見ニツキ明治学院理事会ハ充分ナル審議

ノ後左ノ決議ヲナセリ

「本理事会ハ明治学院神学部ヲ今ノ処廃止スベキ方途ニ出ツル事ノ時宜ニ適セザルヲ認ム」

議長右動議ノ可否ニツキ採決ス

時正ニ午後十一時

十八、ライシヤワー氏「明朝九時三十分迄休会スル事」ヲ動議ス

可決

即チ前採決ノ結果ハ報告ニ至ラズシテ散会ス

第三十七回ノ継続

大正八年五月八日午前九時三十分山本秀煌氏ノ祈禱ヲ以テ再会ス

出席理事氏名 ウキルリアム・イムブリー、エ・ケ・ライシヤワ

山本秀煌

列席者氏名 ハナフオード、ビータルス、井深梶之助、水菅幾次郎、オルトマンズ、ピーク、ジョン・バラ、フルトン、エアルス、山本秀煌

十九、書記前日ノ記録ヲ読ミ確定ス

二十、昨夜ノ採決ノ結果ハ多数ニテ原案可決ノ旨議長宣ス

二十一、前ニ決議ニナリタルイムブリー氏動議ヲ再考スルノ件

ライシヤワー氏動議 井深氏賛成 可決

二十、書記前日ノ記録ヲ読ミ確定ス

二十一、前ニ決議ニナリタルイムブリー氏動議ヲ再考スルノ件

ライシヤワー氏動議 井深氏賛成 可決

二十、書記前日ノ記録ヲ読ミ確定ス

二十、昨夜ノ採決ノ結果ハ多数ニテ原案可決ノ旨議長宣ス

二十一、前ニ決議ニナリタルイムブリー氏動議ヲ再考スルノ件

ライシヤワー氏動議 井深氏賛成 可決

二十、書記前日ノ記録ヲ読ミ確定ス

二十、昨夜ノ採決ノ結果ハ多数ニテ原案可決ノ旨議長宣ス

二十一、前ニ決議ニナリタルイムブリー氏動議ヲ再考スルノ件

ライシヤワー氏動議 井深氏賛成 可決

二十、書記前日ノ記録ヲ読ミ確定ス

二十、昨夜ノ採決ノ結果ハ多数ニテ原案可決ノ旨議長宣ス

二十一、前ニ決議ニナリタルイムブリー氏動議ヲ再考スルノ件

ライシヤワー氏動議 井深氏賛成 可決

二十、書記前日ノ記録ヲ読ミ確定ス

二十、昨夜ノ採決ノ結果ハ多数ニテ原案可決ノ旨議長宣ス

二十一、前ニ決議ニナリタルイムブリー氏動議ヲ再考スルノ件

ライシヤワー氏動議 井深氏賛成 可決

二十、書記前日ノ記録ヲ読ミ確定ス

二十、昨夜ノ採決ノ結果ハ多数ニテ原案可決ノ旨議長宣ス

二十一、前ニ決議ニナリタルイムブリー氏動議ヲ再考スルノ件

ライシヤワー氏動議 井深氏賛成 可決

二十、書記前日ノ記録ヲ読ミ確定ス

二十、昨夜ノ採決ノ結果ハ多数ニテ原案可決ノ旨議長宣ス

為本理事會ハ他ノ団体ニ於ケル已存或ハ将来任命セラルベキ

同種ノ委員ト協議スベキ三名ノ委員ヲ理事中ヨリ任命ス

右ニツキ水芦、ピータルス、山本、都留ノ諸氏意見ヲ述ブ

決ノ結果多数ニテ 可決

二十三、学院擴張案ノ討議ニ入りライシヤワー、水芦ノ二氏意見ヲ述ベ次テ井深氏左ノ動議ヲ提出ス

「理事會ハ大体ニ於テ擴張案調査委員ノ報告ヲ採用シ同委員ヲシテ更ニ其ノ細目ヲ研究一定セシムル事委員ハ自ラノ数ヲ増ス事ヲ得」可決

二十四、ピータルス氏動議

「右委員ヲシテ左ノ二件ヲ行ハシムル事

一、此ノ擴張案ヲ可能的詳細ニ記述シ兩宣教師社團年会ニ提出シ大体的承認ヲ得且ツ本理事會ト兩社團本局トノ直接的交渉ノ承認ヲ得ル事

二、次理事會ニ其ノ經過ヲ報告スル事」可決

二十五、バンストリン氏「今(午後〇時三十分)ヨリ午後一時

三十分迄ノ休会」ヲ動議ス 可決 散会

今日(大正八年五月八日)午後一時三十分議長ノ祈禱ヲ以テ再会ス

出席理事前回ニ同シ

二十六、ピータルス氏「午後三時迄議事ヲ続ケ同時刻ヨリ午後七

時三十分迄ノ休会」ヲ動議ス。 可決

二十七、財産委員オルトマンズ氏「大正八年四月一日以降修繕費

支出額金百拾円五拾毫錢也」ニ上リタル旨報告ス

二十八、邦文公告委員水芦氏「別ニ報告スベキ事項ナシ」ト報告ス

二十九、英文公告委員ライシヤワー氏「別ニ報告スベキ事項ナシ」ト報告ス

三十、図書館委員ホフソソナー氏報告

本委員會ハホフソソナー氏ヲ委員長ニ挙ゲ同氏ニ執行權ヲ委ネ村田、都留兩氏ハ之方顧問タリ

本委員會ハ理事會ニ左ノ数件ノ採用ヲ望ム

一、適當ナル俸給ヲ以テ司書ヲ聘シ図書館ヲ監理セシムル事

二、図書館委員ヲ諮問委員トスル事

三、図書館改修費金五百円ノ殘額ハ本年モ同目的ノ為メ支給セラルベキ事

四、図書館予算ヲ毎年金八百円乃至金壹千円トスル事

右承認ト決ス

三十一、設備品委員都留氏「今期ハ三学部ヲ通シテ設備上大ナル

異動ナシ」ト報告ス

三十二、年報委員インブリー氏「別ニ報告スベキ事項ナシ」ト報告ス

三十三、ピータルス氏「各常任委員長全部ヲ以テ兩宣教師社團ヘ

ノ年報ヲ作製スベキ委員會ヲ組織スル事」ヲ動議ス 可決
時正ニ午後三時決議ニヨリ午後七時三十分迄休会ス

同日午後三十分水芦氏ノ祈禱ヲ以テ再会ス

出席理事前回二同シ

三十四、井深総理左ノ予算案ヲ提出シ之ヲ説明ス

収入金四万八千〇貳拾參円也

内訳金貳万四千〇四拾八円也

金貳千五百円也

金四百七拾五円也

金壹万〇五百円也

金壹万〇五百円也

支出金五万四千六百四拾五円也

内訳金貳万七千〇五円也

金八千四百貳拾七円也

金五千八百六拾五円也

金壹万貳千七百七拾參円也

金壹千〇七拾五円也

差引不足金六千六百貳拾貳円也

三十五、ピータルズ氏左ノ二動議ヲ提出ス

「理事会ハ学院教師ノ俸給増額ヲ全体ニテ金貳千五百円ノ範圍ニテ行フ事」

「自大正十年四月一日至大正十一年三月三十一日ノ會計年度ノ

為メ各金壹万貳千円ノ授与方ヲ兩社団ニ請求スル事

書記ヲシテ社団ヲ通ジテ社団本局ニ提出スベキ学院會計状態ノ

説明書ヲ作製セシメ而シテ前年通り特別授与金參千五百円ヲ本

年モ継続スルノミナラス總額ヲ金壹万貳千円ニ増加スル事ヲ請

求セシムル事」 可決

三十六、ワルボールド氏動議

「予算ヲ全体トシテ承認シ之ガ細目ハホフソンマー、オルトマ
ンス二氏及財政委員ヨリ成ル委員ニ一任スル事」 可決

三十七、井深氏動議

「水荻幾次郎氏ヲ学院高等学部副部長ニ任命スル事」 可決

三十八、井深氏動議

「中学部英語教員文学士石本音彦氏ハ別紙願書ノ通り本年八月
ヨリ向フ約壹ケ年間米國留学ノ為メ休暇ヲ願出デラレタリ依テ
理事会ハ教員養成ノ趣意ヲ以テ右ノ願ヲ許可シ而シテ壹ケ年間
留学中ハ俸給半額ヲ支給スベキ事」 可決

三十九、学院中学部長後任者選定委員ハ議長指名ニ決シ井深、石

川、ホフソンマーノ三氏挙ゲラル

四十、神学校問題ニツキ外部トノ交渉ヲナスベキ委員ハ議長指名
ニ決シ井深、ライシャワー、オルトマンスノ三氏挙ゲラル

時正ニ午後十二時議事全ク終リ モリー氏祈祷ヲ以テ閉会ス

書記 都留仙次

第三十八回

大正八年十一月五日午前九時本財團事務所ニ於テ理事會ヲ開ク

出席理事氏名 笹倉弥吉氏、ウキリヤム・インブリー氏、デイ・

エ・ムーレー氏、エ・ケ・ライシャアー氏、イ・エス・ブリス氏、

デー・パンストリーン氏以上登記済理事 井深樞之助氏、ハワル

明治学院理事會記録(つづき)

ド・テ・ハナフォード氏、ウキリス・チ・ホキエ氏、エ・オルトマ
ンス氏、水蘆幾次郎氏以上登記未済理事

立会人 書記都留仙次氏、會計ダブリュ・イ・ホフソソマ氏 列
席者 中學校長村田四郎氏

一、ウキリヤム・インブリー氏議長席ニツキハナフォード氏ノ開會
祈祷ノ後議長開會ヲ宣ス

二、書記前回議事録ヲ読ミ之ヲ確定ス

三、ライシャール氏在日本アメリカホームド宣教師社團及在日本
プレスビテリアン宣教師社團ヨリノ書信ヲ朗読ス

四、在日本アメリカホームド宣教師社團ハ去ル大正八年七月十
六日長崎県温泉ニ於テ其ノ年會ヲ開キ左ノ決議ヲナセル旨同社
團書記シェファ氏ヨリ報告アリ本理事會ハ之ヲ請クル事トス

一、明治學院財団法人理事會デ・パンストリン氏ハ來ル大正
八年十二月三十一日其任期満了ヲ退任スベク

一、エ・オルトマンス氏ハ同理事トシテ來ル大正九年一月一日
ヨリ就任スベク當選シ其任期自大正九年一月一日至大正十年
十二月三十一日ノ事

一、エッチ・ヴィ・エス・ピーク氏ハ去ル大正七年六月二十一
日附文部大臣ノ許可ノ下ニナサレタル明治學院財団法人寄附

行為變更ニヨリ同法人日本人理事増員ニ對当スル為メ來ル大
正九年一月一日就任スベキ同理事ニ當選シ其任期自大正九年
一月一日至大正十年十二月ノ事

五、在日本プレスビテリアン宣教師社團ハ去ル大正八年七月十七

日長野昇輕井沢ニ於テ其ノ年會ヲ開キ左ノ決議ヲナセル旨同社
團書記プロカ氏ヨリ報告アリ本理事會ハ之ヲ請クル事トス

一、明治學院財団法人理事會エ・ケ・ライシャール氏、同デイ・エ
・ムーレー氏ハ何レモ來ル大正八年十二月三十一日其任期満
了ニ付キ改選ヲ行ヘルニ両氏共同理事トシテ來ル大正九年一
月一日ヨリ重任スベク夫レ夫レ當選シニ氏共ニ其任期自大正
九年一月一日至大正十年十二月三十一日ノ事

一、ハワルド・デ・ハナフォード氏ハ去ル大正七年六月二十一日
附文部大臣ノ許可ノ下ニナサレタル明治學院財団法人寄附行
為變更ニヨリテ同法人日本人理事増員ニ對当スル為メ來ル大
正九年一月一日就任スベキ同理事ニ當選シ其任期自大正九年
一月一日至大正九年十二月三十一日ノ事

六、理事エ・ワルポールド氏去ル大正八年九月十六日長崎ニ於テ
死去シ而シテ去ル大正八年九月二十二日下ノ関ニ於テ開カレタ
ル在日本アメリカホームド宣教師社團臨時會議ニ於テウキリ
ス・ヂ・ホキエ氏之ヲ補欠トシテ當選シ其任期大正八年十一月
五日ニ始マリ大正九年十二月三十一日ニ終ル旨ノ報告ヲ同社團
書記ウキリス・ヂ・ホキエ氏ヨリ受ケタリ本理事會ハ右報告ヲ
請クル事トス

七、明治學院同窓會ハ去ル大正八年十月二十三日明治學院ニ於テ
開キタル其ノ評議員會特別委員會ニ於テ去ル大正七年六月二十
一日付文部大臣ノ許可ノ下ニナサレタル明治學院財団法人寄附
行為變更ニヨリテ与ヘラレタル權能ニ基ツキ同財団法人理事ヲ

左ノ通り選挙シタル旨同窓会幹事宮地謙吉氏ヨリ報告アリ本理
事会ハ之ヲ請クル事トス

同窓会選出理事

当选

松井安三郎氏

其任期自大正九年一月一日至大正九年十二月三十一日ノ事

当选

水蘆幾次郎氏

其任期大正九年一月一日至大正十年十二月三十一日ノ事

八、欠員中ナル理事二名ノ補欠選挙ヲ行ヘル事左ノ如シ

当选

井深梶之助氏

其任期自大正八年十一月五日至大正九年十二月三十一日ノ

事

当选

田川大吉郎氏

其任期自大正 年 月 日至大正九年十二月三十一日ノ事

但シ田川大吉郎氏ハ目下海外漫遊中ナルニ付キ帰朝後其ノ
承認ヲ得タル上理事ノ登記申請ヲナシ且ツ就任スル事トス

九、理事長尾半平氏、同里見純吉氏、同笹倉弥吉氏ハ来ル大正八
年十二月三十一日其任期満了ニ付キ改選ヲ行ヘル事左ノ如シ

当选

長尾半平氏

其任期自大正九年一月一日至大正十年十二月三十一日ノ事

当选

笹倉弥吉氏

其任期同前

当选

里見純吉氏

其任期同前

即チ三氏共重任ニ決ス
十、井深総理左ノ如ク学事報告ヲナス

一、教職員移動

高等学部

辞任者

山口 治義氏

佐藤貞次郎氏

山下 祥輔氏

チャブマン氏

山下 信吉氏

後藤 末雄氏

原田 長松氏

新任者

漢文

仏語

応用

化学

地理

商業

英語

英語

英語

英語

英語

英語

英語

中学部

辞任者

三浦 太郎氏

工藤 久雄氏

小林 秀雄氏

山下 祥輔氏

山口 治義氏

聖書
西洋歴史書

聖書

英語

英語

英語

英語

英語

英語

英語

明治学院理事會記録(つづき)

	チャプマン氏
	テオドル
	オルトマンズ氏
休暇	石本 音彦氏
新任者	日本史 福島 重義氏
物理化学	原田 長松氏
課外実験	
国語、漢文	山田 無名氏
作文	
鉱物、地理	金屋 宗平氏
英文法	石幡 五郎氏
英語	河野 保氏
同前	
聖書、修身	中山 昌樹氏
西洋史	
生徒監	森 徳太郎氏
英語	古田第三郎氏
會話	ミス・マコーズランド史
音読	
同前	デイ・エ・ムーレー氏
英作文	ゼ・ヂ・ダンロップ氏
會話	
音読	ダンロップ夫人

一、教員數

中学部 二十九名

高等学部 二十三名

神学部 十一名

一、在学生徒數

中学部 五六七名

高等学部 七四名

神学部 二五名(外ニ予科生二名)

一、村田四郎氏ハ本年八月指名委員ニヨリテ指名セラレ理事一致ノ投票ヲ以テ中学部長ニ選挙セラレ本学期ノ始ヨリ就任セラレタリ村田氏ガ中学部長トシテ就職シテ以来中学部ノ規律面目ヲ一新シタル事ハ蓋シ付目ノ覩ル所ナルベシ同氏ノ如キハ実ニ適所ニ適材ヲ得タルモノト謂フベシ

十一、財政委員ビーク氏左ノ報告ヲナス

兩中体操場新築費金二万〇四百九十九円〇九銭也ハゼームス基金ヨリ支払ヘリ
 セベレンス館移転改築及食堂新築費金五万九千六百四十五円七十三銭也其内金五万〇四百四十九円七十銭也ハ旧セベレンス館敷地及湯殿売却金及其ノ利子ヲ以テ又金二千六百六十五円八十七銭也ハゼームス基金ヨリ(ゼームス基金ハ之レニテ全部終了)金五千円也ハ築地基金ヨリ支払ヘリ而シテ残りノ不足金ハ築地基金ノ残額金三万五千六百〇四円七十二銭也ノ内ヨリ支払フ事ヲ建議ス其ノ不足額ハ即チ金一千五百三十円〇六銭也

本会計年度ノ終リニ於テ經常費ニテ金七百円ノ不足ヲ生ズル見込ナリ本委員等ハ昨年度高等学部剰余金四千四百三十七円二十八銭ノ内ヨリ之ヲ支払ヒ又校舎塗リ更ヘ見積金額三千円ハ来年年度予算計上スベク次回ノ理事会ニ提議スベシ

十二、パンストリーン氏左ノ動議ヲ提出ス

財政委員ノ報告ヲ請ケ入ルル事、但シ築地基金中三万五千元ヲ預金トシセベレンス館不足額ハ之レガ利子ヲ以テ当ツル事可決

十三、特別委員井深氏左ノ三件ノ報告ヲナス

一、セベレンス館移転改築及附属食堂新築ハ本年五月落成シタリ經費ハ財務委員ノ報告ニ於ケル如シ

一、雨中体操場兼中学部生徒控所ハ本年七月落成シ九月十一日

開館式ヲ挙行シタリ經費ハ財務委員ノ報告ニ於ケル如シ

一、神学校合同問題ニ就テハ其後他ヨリ何等ノ交渉ヲモ受ケズ十四、日本基督教會第三十三回大会ノ決議ニ基ツキ同大会常置委員都留仙次氏大会ノ好意ヲ伝ヘ挨拶ヲナス

時正ニ正午議長午後一時三十分迄ノ休会ヲ宣ス

同日午後一時三十分ホキエ氏ノ祈祷ヲ以テ再会ス

出席理事同前

十五、学院拡張案ニツキライシャー氏説明ス

十六、パンストリーン氏左ノ動議ヲ提出ス

学院拡張ノ件ニツキプレスビテリアン宣教師社団本局トノ交渉

委員ヲライシャー氏トスル事

可決

十七、井深氏左ノ動議ヲ提出ス

日本内地ニテ学院拡張費募集ノ件ニツキ議長指名ニテ実行委員五名ヲ挙グル事 可決

右委員ノ指名報告ハ後刻ニ譲ル事トス

十八、財産委員オルトマンズ氏修繕費ニツキ左ノ報告ヲナス

準備金一千〇八十円也

支出金七百六十八円七十三銭也

残金三百一十一円二十七銭也

十九、邦文公告委員水蘆氏「別ニ報告スベキ事項ナシ」ト報告ス

二十、英文公告委員ライシャー氏「学院拡張計画ニツキ諸方面ニ交渉ヲナシ且ツ学院ノ絵ハガキヲ印刷發行セル」旨ヲ報告ス

二十一、図書館委員ホフソンマ氏左ノ報告ヲナス

本年度図書館支用金六百円也

図書館ハ夜間閉鎖スル事ニ決セリ

次年度用諸雜誌ノ注文ヲ發セリ

不要書籍ハ売却ヲナセリ

インブリー氏及其ノ夫人ヨリ書籍約一百冊ノ寄贈ヲ受ケタリ

図書館ガ中学部教員ヲ兼ヌル為メ図書館ノ業務ニ差支アリ之ヲ

適當ニ処置セラレン事ヲ望ム

二十二、設備品委員宮地氏「中学部ニ於テ数十箇ノ机及腰掛ヲ増

加シタル外設備品ニ異動ナシ」ト報告ス

時ニ午後三時三十分 議長午後七時迄休会ヲ宣ス

明治学院理事會記録(つづき)

同日午後七時水蘆氏ノ祈禱ヲ以テ再會ス

出席理事前回同様ノ諸氏及ビ里見純吉、石川林四郎ノ二理事

二十三、インブリー氏「老令且ツ不健康ノ故ヲ以テ神学部教授ノ職ヲ辞任シタキ旨」口頭ヲ以テ申出ス

二十四、井深氏左ノ動議ヲ提出ス

インブリー氏辭職ハ実ニ遺憾ノ事ナレドモ事情已ムヲ得ザルニ付キ之ヲ承認シ其ノ多年ノ功績ニ酬ユル為メ同氏ヲ明治学院神学部名譽教授ニ推薦スル事 可決

二十五、井深氏左ノ動議ヲ提出ス

インブリー氏後任ノ神学部系統神学教授トシテライシアード氏ヲ任命スル事但シ神学部教授ノ任命ハ学院財団法人寄附行為ノ明文ニ照シ理事三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルノ必要アレドモ本タハ右人員ニ違セズ依テ右ハ通信投票ニヨリ全理事ノ贊否ヲ問ヒ然ル後決定スル事 可決

二十六、ライシアード氏「高等学部部長職辭任ノ旨」ヲ申出スホキエ氏動議「之ヲ請クル事」 可決

二十七、後任高等学部部長トシテ水蘆幾次郎氏當選ス

二十八、学院評議會提議
教職員優遇及ビ經費増額ノ必要上本学院中学位及高等学部ノ授業料並ニ校納金ヲ左ノ通り第三期ヨリ増額ノ事

現行授業料	四円〇〇	同上二年及至五年	高等学部	四円三〇
並ニ校納金	一、〇〇		中学位	四円五〇
増額	一、〇〇			五〇
				一、〇〇

第三学期以後ノ授業料及校納金 五、〇〇 五、〇〇 五、三〇

井深氏「之ヲ採用シ文部大臣ニ許可ヲ申請スル事ヲ動議ス」 可決

二十九、ホキエ氏左ノ動議ヲ提出ス
次會計年度ヨリ学院經常費トシテノ両ミツションノ支給額ヲ各金一万五千円宛ニ増額スル事ヲ其ノ本局ニ申請セラレタキ旨兩社団ニ提議スル事 可決

三十、井深氏左ノ動議ヲ提出ス
前二件遂行ノ上財務委員ノ計ラヒテ教職員ノ増俸ヲ行フ事 可決

三十一、バンストリーン氏左ノ動議ヲ提出ス
財務委員ノ計ラヒテ中学位教職員ニ金五百円高等学部及神学部教職員ニハ之ニ比例シタル額ニヨリクリスマス賞与ヲ給スル事 可決

三十二、井深氏左ノ動議ヲ提出ス
高等学部英語師範科生徒奨学金増額ノ件ハ高等学部部長及財務委員協議ノ上適宜ニ執行スル事 可決

三十三、次年度理事會役員ノ改選ヲ行ヘル事左ノ如シ

議長	エ・オルトマンズ氏
書記	都留 仙次氏
副書記	ゼ・ヂ・ダンロップ氏
會計	ダブリュー・イ・ホフソマ氏

三十四、理事会常任委員ハ後日議長指名スル事トス
三十五、日本内地ニ於ケル学院擴張費募集実行委員五名ヲ左ノ通
リ議長指名ス

里見 純吉氏

長尾 半平氏

井深梶之助氏

水蘆幾次郎氏

都留 仙次氏

時ニ午後十時三十分議事全ク終リ井深氏祈祷ノ後議長閉会ヲ宣シ
テ散会ス

書記 都留 仙次

執筆者紹介(掲載順)

工藤 英 一(本学経済学部教授)

秋山 繁 雄(本学史料室)

昭和五十一年三月十五日 印刷
昭和五十一年三月二十日 発行

明治学院百年史資料集【第三集】

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
編集代表 徳 永 清

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
発行者 金 井 信 一 郎

東京都港区白金台一ノ二ノ三七
発行所 明治学院百年史委員会

電話(四四三)八二三一 内線二九二

東京都墨田区文花三ノ一八ノ一四

印刷所 育英印刷興業株式会社

電話(六一七)二八四六・九二三六
